

国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第 35 号(通巻 68 号)

令和3年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

——2022——

巻頭言

令和3年度の精神保健研究の業績年報をお届け致します。

令和3年度はCovid-19の流行が継続し、社会生活は大きな制約を受けました。通常の疾患と同じように、症状、治療や入院、生命のリスク、後遺症などが本人や家族に大きな苦痛をもたらすだけではなく、感染拡大防止のためにとられた社会的対策のために行動が制限され、在宅勤務や授業の増加による対人交流からの切り離し、生活習慣の変化などが一部の人々に精神的な負担をもたらしてきました。こうした状況を受けて、精神保健研究所でもいくつかの研究部がコロナ対策やその影響の解明に取り組んでおります。

こうした状況は研究活動にも影響を与えてきました。実験系を除き、在宅勤務の割合を70%に高めるという方針が取られ、上記のコロナ下での生活の制限は、そのまま研究者自身にも生じております。その中で、インターネットによる対話や会議などを活用し、研究部の一体感、部員相互の連携を保ちながら、研究の継続、発展に努力がなされてきました。研究業績については、コロナ以前と遜色のない成果を出しております。また人材の活性化も進展しており、5名の研究者が大学教授職に選出されて転出し、その後に中堅若手の研究者が選出されております。

各部の研究成果につきましては本文をご参照頂くとともに、是非、国立精神・神経医療研究センターの中にある当研究所のホームページをご参照頂ければと存じます。またこの年報とは別に精神保健研究所のパンフレットを発刊し、研究部の生き生きとした姿を伝えております。こちらもホームページからどうかご笑覧ください。

年度末にはウクライナ侵攻が勃発し、日本にもウクライナ国民が移住されています。戦争、紛争に伴うメンタルヘルスの問題も今後は重要な課題になることが予感されます。

精神保健研究所はこれからも社会の負託に応え、心の苦しみを科学と実践で解き明かし、有効な支援を実現する活動に取り組んで参りたいと存じます。皆様のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

2022年3月

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所 所長 金 吉晴

目 次

I. 精神保健研究所の概要	1
1. 創立の趣旨及び沿革	1
2. 内部組織改正の経緯	9
3. 国立精神・神経医療研究センター組織図	12
4. 職員配置	13
5. 精神保健研究所構成員	14
 II. 研究活動状況	17
1. 今年度の活動概要	17
2. 公共精神健康医療研究部	19
3. 薬物依存研究部	26
4. 行動医学研究部	47
5. 児童・予防精神医学研究部	60
6. 精神薬理研究部	71
7. 精神疾患病態研究部	78
8. 睡眠・覚醒障害研究部	100
9. 知的・発達障害研究部	114
10. 地域・司法精神医療研究部	128
11. ストレス・災害時こころの情報支援センター	149
 III. 研修実績	154
 IV. ランチョンセミナー開催実績および研究報告会抄録集	176
1. ランチョンセミナー開催実績	176
2. 研究報告会抄録集プログラム・抄録集	177
 V. 令和3年度委託および受託研究課題	203

I．精神保健研究所の概要

1. 創立の趣旨及び沿革

I. 創立の趣旨

本研究所は、精神衛生に関する諸問題について、精神医学、心理学、社会学、社会福祉学、保健学等各分野の専門家による学際的立場からの総合的、包括的な研究を行うとともに、国、地方公共団体、病院等において精神衛生業務に従事する者に対する精神衛生全般にわたる知識、技術に関する研修を行い、その資質の向上を図ることを目的として、昭和27年1月、アメリカのNIMHをモデルに厚生省の付属機関として設立された。

II. 精神衛生研究所の沿革

昭和25年に精神衛生法が制定された際、国立精神衛生研究所を設立すべき旨の国会の附帯決議が採択された。これを踏まえ、厚生省設置法及び厚生省組織規程の一部が改正され、昭和27年1月、千葉県市川市に国立精神衛生研究所が設置された。

研究所の規模について、当初、厚生省は、1課8部60名程度の組織を構想していたが、財政事情等により、総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部30名の体制で発足した。また、附属病院をもつことの重要性は、当時から認識されていたが、病院の新設は困難な情勢であったため、隣接する国立国府台病院と連携、協力することとされた。

その後、知的障害に対する対策の確立が社会的に求められるようになったことを受け、昭和35年10月1日、新たに精神薄弱部を設置するとともに既存の各部の再編と名称変更が行われた。この結果、研究所の組織は、総務課、精神衛生部、児童精神衛生部、社会精神衛生部、精神身体病理部、精神薄弱部及び優生部の1課6部となった。

昭和36年には、国立精神衛生研究所組織細則が制定され、部課長のもとに心理研究室、生理研究室、精神衛生相談室及び精神衛生研修室の4室が置かれた。それとともに、昭和35年1月から事実上行われていた精神衛生技術者に対する研修業務が厚生省設置法上の業務として加えられて医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修が開始されることとなり、研修業務が調査研究と並ぶ研究所の重要な柱として正式に位置づけられることとなった。

昭和40年には、地域精神医療、社会復帰対策の充実等を内容とする精神衛生法の大改正に伴い、社会復帰部が新設されるとともに、新たに精神発達研究室及び主任研究官(3名)が置かれた。また、昭和46年6月には、社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室が設置された。さらに、昭和48年には、人口の高齢化に伴って、痴呆性老人等いわゆる「恍惚の人」が社会問題化したのを背景に、老人精神衛生部が、翌昭和49年には、同部に老化度研究室が新設された。

昭和50年には、精神衛生に関する相談が精神障害者の社会復帰と深く関連することから、社会復帰部を社会復帰相談部に改組、精神衛生相談室を同部に移管した。また、昭和53年12月には、社会復帰相談庁舎が完成し、精神衛生相談をはじめとする精神障害者の社会復帰に関する研究体制が強化された。昭和54年には、研修各科の名称が医学課程、心理学課程、社会福祉学課程及び精神衛生

指導課程に改称されるとともに、新たに精神科デイ・ケア課程が新設された。翌昭和55年には、研修庁舎が完成し研修業務の一層の充実が図られた。

Ⅲ. 国立精神・神経センター精神保健研究所の設立

国立精神衛生研究所は、このような着実な歩みをたどった後、昭和61年10月、国立武蔵療養所及び同神経センターとともに国立高度専門医療センターとして発足した国立精神・神経センターに発展的に統合された。ここに、国立精神・神経センター精神保健研究所は、国立高度専門医療センターの一研究部門として、精神保健に関する研究及び研修を担うこととなった。その際組織改正により、総務課が庶務課とされ、精神身体病理部と優生部が統合されて精神生理部とされたほか、精神保健計画部及び薬物依存研究部が新設された。その結果、統合前の1課8部8室は、1課9部19室となり、研究・研修機能の強化が図られた。

半年後の昭和62年4月には、国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合され、二病院二研究所を擁する国立高度専門医療センターが本格的に活動を開始した。これに伴い、庶務課は廃止され、精神・神経センター運営部（国府台地区）に研究所の事務部門（主幹、研究所事務係）が置かれた。また、同年10月には、心身医学研究部の新設と精神保健計画部システム開発研究室の増設が認められ、平成元年10月には、社会復帰相談部に援助技術研究室が設置された。

さらに、平成11年4月には、精神薄弱部が知的障害部に名称変更されるとともに、薬物依存研究部が組織改正により、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成となった。

平成14年1月に精神保健研究所が創立50周年を迎え、創立50周年パーティの開催、記念誌の発行、公開市民シンポジウムを行った。

平成15年10月には司法精神医学研究部が新設され、3室体制で、研究員の増員も認められ、研究所の組織は、11部27室体制（精神保健研修室を含む）となった。

平成17年4月には精神保健研究所は小平（武蔵）地区に移転し研究活動を開始した。

平成18年10月には自殺予防総合対策センターの新設により、自殺実態分析室・適応障害研究室・自殺予防対策支援研究室の3室と、成人精神保健部に犯罪被害者等支援研究室・災害時等支援研究室の2室の増設が認められた。

平成21年6月に精神保健に関する技術研修の事務担当が政策医療企画課から研究所事務係へと移管され、また10月に精神生理部に臨床病態生理研究室が設置され3室編成となり、研究所の組織は11部33室（精神保健研修室含）となった。

Ⅳ. 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所へ改組

国民の健康に重大な影響のある特定の疾患等に係る医療に関し、調査、研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修等を行う独立行政法人の名称、目的、業務の範囲等に関する事項を定めることを目的とした、「高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律」の施行により、それまでのナショナルセンター6組織が平成22年4月1日に独立行政法人化された。

我が国立精神・神経センターは「精神疾患、神経疾患、筋疾患及び知的障害その他の発達の障害に係る医療並びに精神保健」を担当する「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター」となり、精神保健研究所も内部の組織が改正された。

自殺予防総合対策センターは、自殺実態分析室、適応障害研究室、自殺予防対策支援研究室の3室編成。

精神保健計画部は、精神保健計画研究部へ名称変更され、統計解析研究室、システム開発研究室の2室編成。

薬物依存研究部は、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成。

心身医学研究部は、ストレス研究室、心身症研究室の2室編成。

児童・思春期精神保健部は児童・思春期精神保健研究部へ名称変更され、精神発達研究室、児童期精神保健研究室、思春期精神保健研究室の3室編成。

成人精神保健部は、成人精神保健研究部へ名称変更され、精神機能研究室、診断技術研究室、認知機能研究室、犯罪被害者等支援研究室、災害等支援研究室の5室編成。

老人精神保健部は、精神薬理研究部へ名称変更され、精神薬理研究室、気分障害研究室の2室編成。

社会精神保健部は、社会精神保健研究部へ名称変更され、社会福祉研究室、社会文化研究室、家族・地域研究室の3室編成。

精神生理部は、精神生理研究部へ名称変更され、精神生理機能研究室、臨床病態生理研究室の2室編成。

知的障害部は、知的障害研究部へ名称変更され、診断研究室、治療研究室、発達障害支援研究室の3室編成。

社会復帰相談部は、社会復帰研究部へ名称変更され、精神保健相談研究室、援助技術研究室の2室編成。

司法精神医学研究部は、制度運用研究室、専門医療・社会復帰研究室、精神鑑定研究室の3室編成。

以上、自殺予防総合対策センター及び11部、計33室となった。

また、研究所の事務部門は、主幹が研究所事務室長となり、研究所事務係とともに、研究所の所属となった。

平成23年4月、事務部門の組織変更が行われ、研究所事務室は総務部の所属となった。

平成23年12月には災害時こころの情報支援センターの新設により、情報支援研究室の1室が認められた。

以上、自殺予防総合対策センター、災害時こころの情報支援センター及び11部、計34室となった。

平成24年1月、千葉縣市川市の地に国立精神衛生研究所が設置されてから、創立60周年を迎え、記念祝賀会を開催し、創立60周年記念誌を発行した。

平成27年4月1日、独立行政法人から国立研究開発法人へ改組。

V. 国立研究開発法人後の編成等

平成28年4月1日、自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設、自殺実態・統計分析室、自殺総合対策研究室、自殺未遂者・遺族支援等推進室、地域連携推進室の4室編成。

以上、自殺総合対策推進センター、災害時こころの情報支援センター及び11部、計35室となった。

平成29年10月1日、社会精神保健研究部（1部3室）を廃止し、その機能の一部を精神保健計画研究部へ移管（1室）、併せて精神疾患病態研究部（1部2室）を増設。

平成30年4月1日、精神保健研究所の組織改編を行った。

社会復帰研究部（1部2室）と司法精神医学研究室（1部3室）を地域・司法精神医療研究部として統合、臨床援助技術研究室、精神保健サービス評価研究室、司法精神保健研究室、制度運用研究部の3室編成。

心身医学研究部（1部2室）と成人精神保健研究部（1部5室）を行動医学研究部として統合、精神機能研究室、診断技術研究室、認知機能研究室、災害等支援研究室、ストレス研究室、心身症研究部の6室編成。

災害時こころの情報支援センター（1室）をストレス・災害時こころの情報支援センターへ改名、情報支援研究室、犯罪被害者等支援研究部の2室編成。

精神保健計画研究室（1部3室）を精神医療政策研究部へ改名、保健福祉連携研究室、政策評価研究室、精神医療体制研究室、NDB集計企画担当室の4室編成。

児童・思春期精神保健研究部（1部3室）を児童・予防精神医学研究部へ改名、児童・青年期保健研究室、精神疾患早期支援・予防研究部の2室編成。

精神薬理研究部（1部2室）2室を改名、分子精神薬理研究室、向精神薬研究開発室の2室編成。

知的障害研究部（1部3室）を知的・発達障害研究部へ改名、発達機能研究室、知的障害研究部の2室編成。

精神生理研究部（1部2室）を睡眠・覚醒障害研究部へ改名。

以上、自殺総合対策推進センター、ストレス・災害時こころの情報支援センター及び9部、計33室となった。

令和2年4月1日、自殺総合対策推進センターを廃止、厚生労働大臣指定（調査研究等）法人のち支える自殺対策推進センターに業務を継承。

令和2年11月1日、精神医療政策研究部を公共精神健康医療研究部（1室（NDB集計企画担当室）を廃止）に名称変更。

以上、ストレス・災害時こころの情報支援センター及び9部、計28室となった。

沿革

事項 年次	所 長	組 織 等 経 過
昭和25年5月		精神衛生法国会通過（精神衛生研究所設置の附帯決議採択）
26年3月		厚生省公衆衛生局庶務課が設置の衝にあたる
27年1月	黒沢 良臣 (国立国府台 病院長兼任)	厚生省設置法並びに組織規程の一部改正により精神衛生に関する調査研究を行う附属機関として、千葉県市川市に国立精神衛生研究所設置総務課，心理学部，生理学形態学部，優生学部，児童精神衛生部及び社会学部の1課5部により業務開始
35年10月		心理学部を精神衛生部に，社会学部を社会精神衛生部に，生理学形態学部を精神身体病理部に，優生学部を優生部に名称変更し，精神薄弱部を新設
36年4月		精神衛生研修室，心理研究室，精神衛生相談室及び生理研究室を新設
36年6月		厚生省設置法の一部改正により精神衛生技術者の研修業務が追加され，医学科，心理学科，社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修開始
36年10月	内村 祐之	
37年4月	尾村 偉久 (公衆衛生局長 が所長事務取扱)	
38年7月	若松 栄一 (公衆衛生局長 が所長事務取扱)	
39年4月	村松 常雄	主任研究官を置く
40年7月		社会復帰部及び精神発達研究室を新設
41年7月		本館改築完成（5カ年計画）
44年4月		総務課長補佐を置く
46年4月	笠松 章	
46年6月		社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室を新設
48年7月		老人精神衛生部を新設

49年7月		老人精神衛生部に老化度研究室を新設
50年7月		社会復帰部を社会復帰相談部に名称変更 精神衛生相談室を精神衛生部から社会復帰相談部の所属に改正
52年3月	加藤 正明	
53年12月		社会復帰相談庁舎完成（2カ年計画）
54年4月		研修課程の名称を医学課程，心理学課程，社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に名称変更し，精神科デイ・ケア課程を新設
55年4月		研修庁舎完成（講義室・図書室・研修生宿舎）
58年1月	土居 健郎	
58年10月		老人精神衛生部に老人保健研究室を新設
60年4月	高臣 武史	
61年5月		厚生省設置法の一部改正により，国立高度専門医療センターの設置を決定
61年9月		厚生省組織令の一部改正により，国立高度専門医療センターの名称と所掌事務が決定
61年10月		国立高度専門医療センターの一つとして，国立武蔵療養所，同神経センターと国立精神衛生研究所を統合し，国立精神・神経センター設置 ナショナルセンターの1研究所として精神保健研究所に改組，精神身体病理部と優生部を統合し精神生理部としたほか，精神保健計画部及び薬物依存研究部を新設，1課9部19室となる
62年4月	島藺 安雄 (総長が所長事務取扱)	厚生省組織規程の一部改正により，国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合し，2病院，2研究所となる 庶務課廃止，研究所に主幹を置く
62年6月	藤縄 昭	
62年10月		心身医学研究部（ストレス研究室，心身症研究室）と精神保健計画部システム開発研究室を新設
平成元年10月		社会復帰相談部に援助技術研究室を新設
6年4月	大塚 俊男	
9年4月	吉川 武彦	
11年4月		薬物依存研究部で研究室の改組があり，心理社会研究室と依存性薬物研究室となり，診断治療開発研究室を新設

		精神薄弱部を知的障害部に名称変更
13年1月	堺 宣道	
14年1月		精神保健研究所創立50周年
14年6月	高橋 清久 (総長が所長事務取扱)	
14年8月	今田 寛睦	
15年10月		司法精神医学研究部を新設（制度運用研究室，専門医療・社会復帰研究室，精神鑑定研究室）
16年4月	金澤 一郎 (総長が所長事務取扱)	
16年7月	上田 茂	
17年4月		市川市（国府台）から小平市（武蔵地区）に移転
17年8月	北井 暁子	
18年10月		自殺予防総合対策センターの新設（自殺実態分析室，適応障害研究室，自殺予防対策支援研究室），成人精神保健部の増設（犯罪被害者等支援研究室，災害時等支援研究室）
19年6月	加我 牧子	
21年10月		精神生理部に臨床病態生理研究室を新設
22年4月		独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所となる 8つの研究部の名称を変更（精神保健計画研究部，児童・思春期精神保健研究部，成人精神保健研究部，精神薬理研究部，社会精神保健研究部，精神生理研究部，知的障害研究部，社会復帰研究部）し，知的障害研究部に発達障害支援研究室を新設，11部33室（室長定数29）となる 所長補佐及び自殺予防総合対策センター副センター長を置く
23年12月		災害時こころの情報支援センターの新設（情報支援研究室）
25年4月	野田 広	
25年7月	福田 祐典	

27年4月		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所となる
27年9月	富澤 一郎	
27年12月	中込 和幸	
28年4月		自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設（自殺実態・統計分析室，自殺総合対策研究室，自殺未遂者・遺族支援等推進室，地域連携推進室）
29年10月		社会精神保健研究部を廃止 精神疾患病態研究部を新設（基盤整備研究室，病態解析研究室），精神保健計画研究部精神医療体制研究室を増設
30年4月		4つの部を2つの部へ統合，また部名及び室名変更等再編し結果，2センター，11部35室から9部33室となる
31年1月	金 吉晴	
令和2年4月		自殺総合対策推進センター（4室）を廃止、厚生労働大臣指定（調査研究等）法人いのち支える自殺対策推進センターに業務を継承
2年11月		精神医療政策研究部を公共精神健康医療研究部（1室を廃止）に名称変更し、現在の1センター9部28室となる

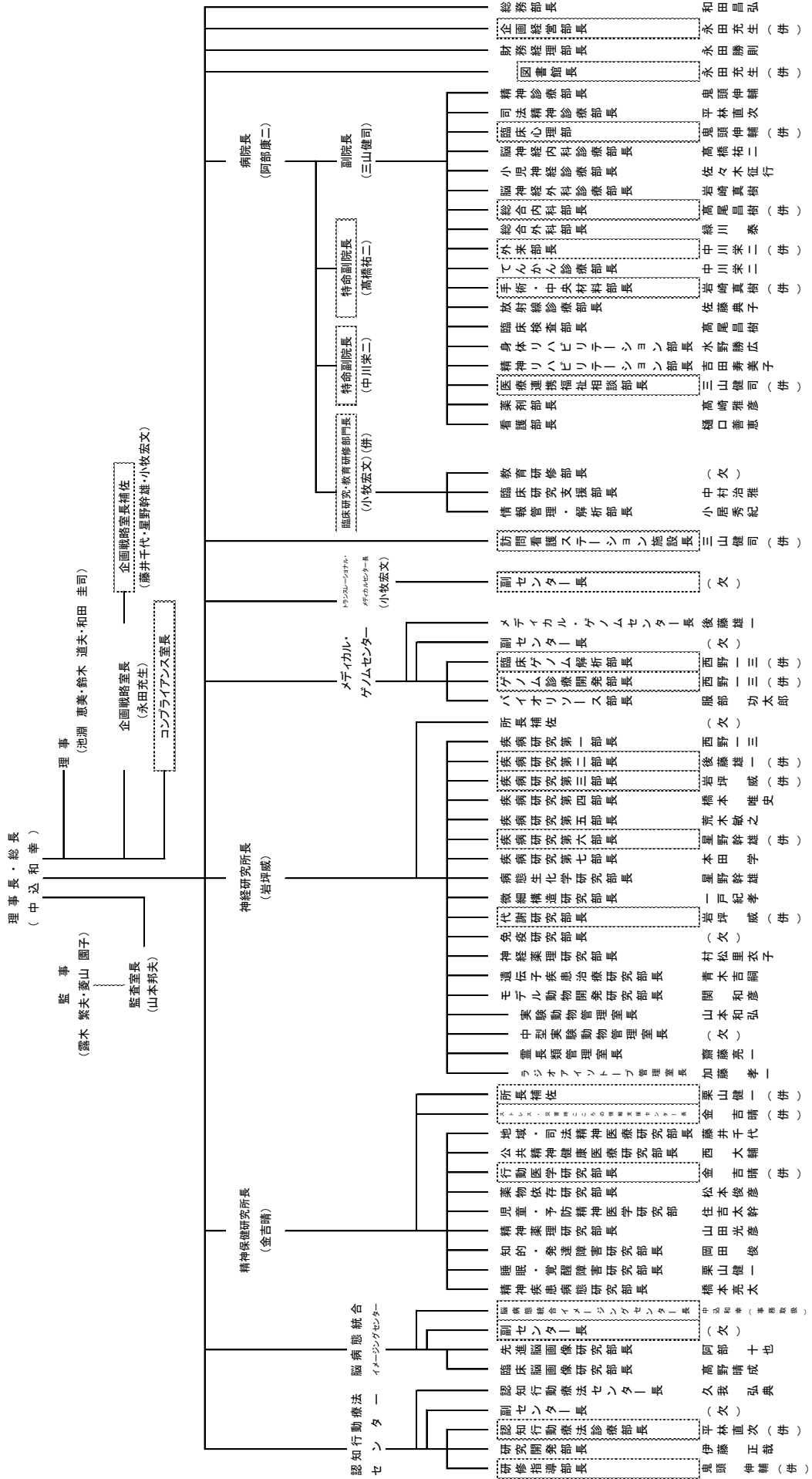
国立精神・神経センター精神保健研究所									独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所	
62年4月	62年10月	元年10月	11年4月	13年4月	15年10月	18年10月	20年6月	21年10月	平成22年4月	平成23年12月
運営部庶務第二課 精神保健研修室	運営部庶務第二課 運営部企画室 精神保健研修室			運営部政策医療 企画課 精神保健研修室		運営局 政策医療企画課 精神保健研修室	運営局 政策医療企画課 精神保健研修室 庶務課 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係	
						自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室			自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室	
										災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室
	精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室					精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室			精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室	
	薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	
	心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室					心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室			心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	
	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室					成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室			成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	
	老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室					老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室			精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	
	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室					児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室			児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	
	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室					社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室			社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室	
	精神生理部 精神機能研究室					精神生理部 精神機能研究室		精神生理部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室	精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	
	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	
	社会復帰相談部 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室				社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室			社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	
					司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室			司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	

I 精神保健研究所の概要

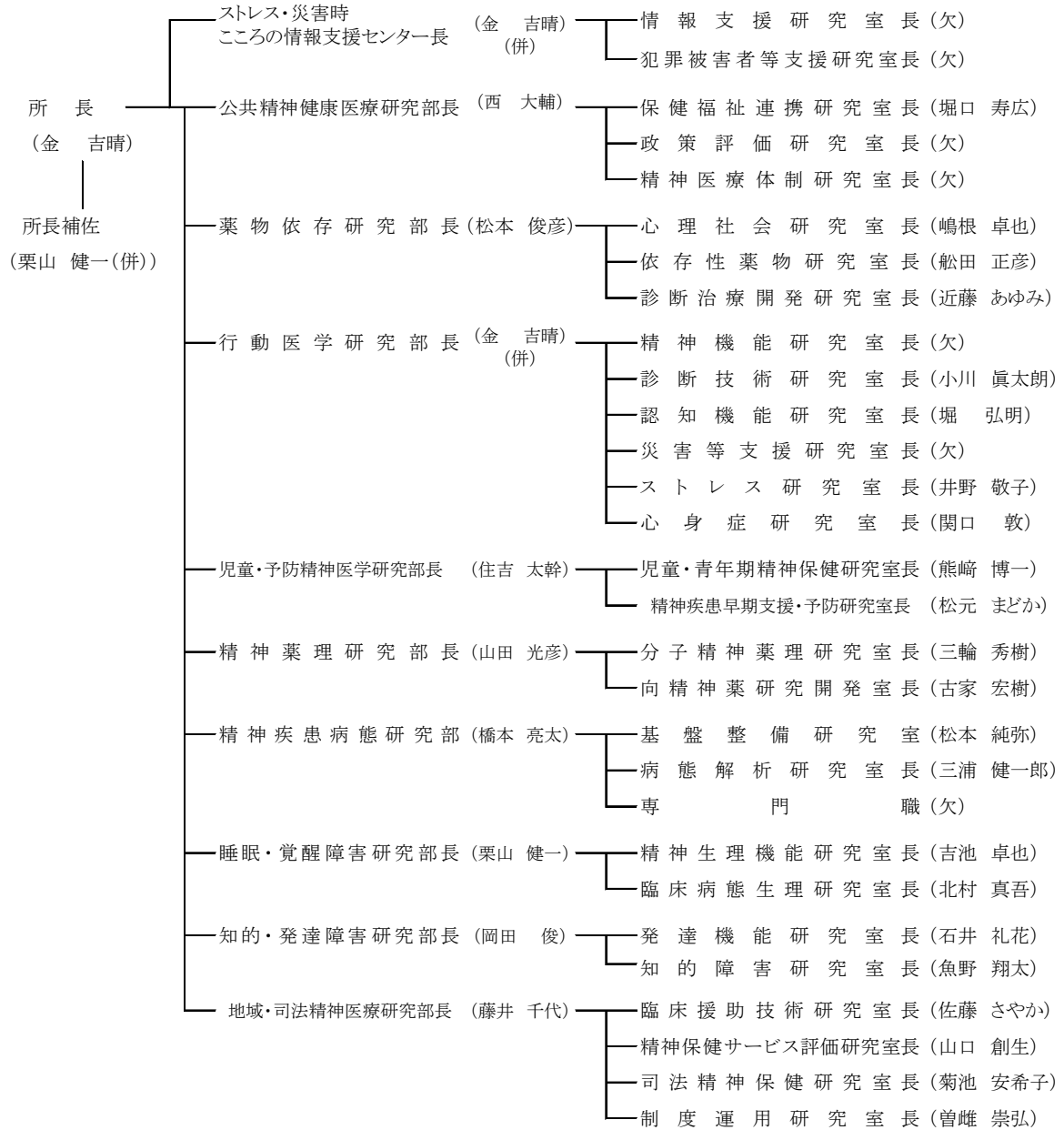
国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所					
平成27年4月	平成28年4月	平成29年10月	平成30年4月	令和2年4月	令和2年11月
研究所事務室 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係
自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室		
災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室			ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室
精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室		精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室 精神医療体制研究室	精神医療政策研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室	精神医療政策研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室	公共精神健康医療研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室
薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室
心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室
成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室	災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室	災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室
精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室		精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室
児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室
社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室					
精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室		精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室
知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室		知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室
社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室
司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室			
		精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室

3. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター組織図
(令和4年3月31日現在)

は兼任ポスト



4. 職員配置(令和4年3月31日現在)



5. 精神保健研究所構成員 (令和3年度)

所長		金 吉晴		秘書室		木船 妙子	
部名	部長	研究員	室長	研究員	リサーチ・フェロー ○学術的・学術的・学術的 ○研究費の付与・研究費	研究員	研究員
ストレス・災害時 こころの情報支援センター	金 吉晴(併任)						
公共精神健康医療研究部	金 吉晴(併任) (～3.4.30) 西 大輔 (3.5.1～)	堀口 寿広 羽澄 恵 白田 謙太郎	堀口 寿広	堀口 寿広	三宅 美智 片岡 真由美 (3.9.1～) ○古野 考志	岡崎 絵美 橋本 聖 小倉 加奈子 (3.8.1～) ○櫻庭 亜希子 (3.10.1～) ○穴澤 恵美子 (3.10.1～)	岡崎 絵美 橋本 聖 小倉 加奈子 (3.8.1～) ○櫻庭 亜希子 (3.10.1～) ○穴澤 恵美子 (3.10.1～)
薬物依存研究部	松本 俊彦	松田 正彦 嶋根 卓也 近藤 あゆみ	松田 正彦 嶋根 卓也 近藤 あゆみ	加藤 隆 瓜生 恵理子 (～3.12.31) 新田 慎一郎 喜多村 真紀 金澤 由佳 (～3.6.30) 古市 亘 堤 史織 (3.9.1～) 長島 努 (3.12.1～) ○宮 悠貴 (3.9.1～) ○山口 裕貴 (3.11.1～) ○新藤 美穂子 (～3.4.14) ○庄司 淑子 ○堀田 百合子 ○三輪 奈都子 ○松本 裕美 ○清水 悦子	加藤 隆 瓜生 恵理子 (～3.12.31) 新田 慎一郎 喜多村 真紀 金澤 由佳 (～3.6.30) 古市 亘 堤 史織 (3.9.1～) 長島 努 (3.12.1～) ○宮 悠貴 (3.9.1～) ○山口 裕貴 (3.11.1～) ○新藤 美穂子 (～3.4.14) ○庄司 淑子 ○堀田 百合子 ○三輪 奈都子 ○松本 裕美 ○清水 悦子	加藤 隆 瓜生 恵理子 (～3.12.31) 新田 慎一郎 喜多村 真紀 金澤 由佳 (～3.6.30) 古市 亘 堤 史織 (3.9.1～) 長島 努 (3.12.1～) ○宮 悠貴 (3.9.1～) ○山口 裕貴 (3.11.1～) ○新藤 美穂子 (～3.4.14) ○庄司 淑子 ○堀田 百合子 ○三輪 奈都子 ○松本 裕美 ○清水 悦子	加藤 隆 瓜生 恵理子 (～3.12.31) 新田 慎一郎 喜多村 真紀 金澤 由佳 (～3.6.30) 古市 亘 堤 史織 (3.9.1～) 長島 努 (3.12.1～) ○宮 悠貴 (3.9.1～) ○山口 裕貴 (3.11.1～) ○新藤 美穂子 (～3.4.14) ○庄司 淑子 ○堀田 百合子 ○三輪 奈都子 ○松本 裕美 ○清水 悦子
行動医学研究部	金 吉晴(併任)	堀 弘明 関口 敦 小川 寛太郎 井野 敬子	堀 弘明 関口 敦 小川 寛太郎 井野 敬子	上田 奈津貴 大塚 豪士 成田 瑞 林 明明 (3.5.1～8.31) ○成田 恵 ○中野 稚子 (3.10.18～)	吉武 美穂 (3.6.1～) ○石塚 結子 ○宮田 ともみ ○兼山 桃子 ○原田 かおる (～3.6.30, 3.12.1～) ○沼尾 聖子 (3.7.1～)	吉武 美穂 (3.6.1～) ○石塚 結子 ○宮田 ともみ ○兼山 桃子 ○原田 かおる (～3.6.30, 3.12.1～) ○沼尾 聖子 (3.7.1～)	吉武 美穂 (3.6.1～) ○石塚 結子 ○宮田 ともみ ○兼山 桃子 ○原田 かおる (～3.6.30, 3.12.1～) ○沼尾 聖子 (3.7.1～)

[illegible]

[illegible]

Ⅱ．研究活動状況

1. 今年度の活動概要

I. 概要

1) 人事

令和 3 年度の精神保健研究所所長は前年度に引き続き金 吉晴が所長を務めた（行動医学研究部長、ストレス・災害時こころの情報支援センター長、4 月 30 日まで公共精神健康医療研究部長を併任）。

本年度の常勤研究員人事は、下記のとおりである。

4 月 1 日に、行動医学研究部ストレス研究室長 井野敬子、知的・発達障害研究部発達機能研究室長 石井礼花が採用された。5 月 1 日に、公共精神健康医療研究部長 西 大輔が採用となった。

令和 3 年度退職者は、薬物依存研究部依存性薬物研究室長 舩田正彦（3 月 31 日付）、児童・予防精神医学研究部児童・青年期精神保健研究室 熊崎 博一（同日付）、地域・司法精神医療研究部司法精神保健研究室長 菊池安希子（同日付）、地域・司法精神医療研究部制度運用研究室長 曾雌崇弘（同日付）であった。

2) 概況

精神保健研究所は、患者さんやご家族、国民に役立つ研究を実践し、国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を担う一方で、研究発表分野でも精力的な活動を行っている。令和 3 年度には英文原著 179 編、和文原著 10 編、英文総説 5 編、和文総説 130 編、英文著書 3 編、和文著書 55 編を報告した（分担執筆含む）。また、学会発表としては国際学会で 33 件、国内学会で 282 件の発表を果たした。主要学会等では、若手研究者を中心に優秀賞や奨励賞等の学会賞を計 15 件受賞した。詳細は各研究部の活動状況を参照されたい。

第 33 回精神保健研究所研究報告会を令和 4 年 3 月 28 日にオンライン開催し、優秀発表賞（青申賞）に古家宏樹（精神薬理研究部）、若手奨励賞に小林桃子（精神薬理研究部）が選ばれた。

精神保健研究所は、専門家を対象とした各分野の研修（精神保健福祉、薬物依存、摂食障害、発達障害、災害時心理対応等）を行っている。令和 3 年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴い対面形式での研修実施が困難なため、オンライン開催の研修、計 8 課程（計 16 回）を実施し合計 1,969 名が受講した。詳細は後述した。

Ⅱ. 精神保健研究所プレスリリース一覧

日付	件名	担当	
2021年8月26日	ラグビー選手における、こころの不調への対処行動の特徴 ～ジャパンラグビートップリーグ選手(当時)におけるメンタル フィットネスの調査からの報告～	地域・司法精神医療研究部	研究員 小塩 靖崇
2021年9月6日	援助付き雇用プログラム(個別就労支援)の忠実な再現が、 良好な就労成果を予測	地域・司法精神医療研究部	室長 山口 創生
2021年10月26日	新型コロナウイルス感染症感染拡大下における 発達障害児の生活の質低下に関連する精神状態を特定	知的・発達障害研究部	部長 岡田 俊、 上田 理誉
2021年11月11日	精神疾患の新たなリスク要因(砂糖の過剰摂取)と表現型 (脳毛細血管障害)を発見	精神薬理研究部	室長 三輪 秀樹
2021年11月26日	治療抵抗性統合失調症の診断により 治療抵抗性統合失調症薬クロザピンの処方率が向上 ～精神科医への教育がよりよい医療の実践に大きく前進～	精神疾病病態研究部	部長 橋本 亮太
2021年12月24日	早稲田大学人間科学学術院と国立精神・神経医療研究セン ターが連携協力に関する協定を締結しました	所長	金 吉晴
2022年1月18日	COVID-19 感染拡大中のラグビー選手におけるメンタルヘル スの実態 ～ジャパンラグビートップリーグ選手におけるメンタルフィット ネスの調査からの報告～	地域・司法精神医療研究部	研究員 小塩 靖崇
2022年2月8日	摂食障害全国支援センター:「相談ほっとライン」が開設され ました	行動医学研究部	室長 関口 敦
2022年2月24日	睡眠休養感がカギを握る:健康維持・増進に役立つ新規睡 眠指標の開発	睡眠・覚醒障害研究部	部長 栗山 健一、 室長 吉池 卓也
2022年3月2日	小児期の虐待体験が免疫システムに関連することを発見 ～概日リズム平坦化がその鍵を握る可能性～	行動医学研究部	室長 堀 弘明
2022年3月15日	新型コロナウイルス感染症拡大下で、 発達障害を持つ子どもと親の生活の質はどのように変化し たか	知的・発達障害研究部	部長 岡田 俊、 上田 理誉、 請園 正敏、 高田 美希

2. 公共精神健康医療研究部

I. 研究部の概要

当研究部の英語標記である **Public Mental Health** が示すように、精神疾患の予防や精神疾患からの回復、精神健康の維持と向上を目的とし、幅広い研究・実践活動を発展させることを目指している。今年度は従来から行っているモニタリング研究に加えて、①厚労省の事業で **NCNP** が受託した「心のサポーター養成事業」を事務局として運営・実施し、②COVID-19 感染後の心身への中長期的影響を検討する疫学研究を立ち上げ、③精神医療を提供する支援者の質の向上という観点から、精神科医療機関の看護師を対象としたトラウマインフォームドケア研修の効果を検討する研究を行った。これらの活動は、他研究部や全国の精神病床をもつ医療機関、行政機関等との幅広い協働によって行われており、公共の精神健康・精神保健や精神医療に資する研究部としてのミッションに沿ったものと考えている。

研究部の構成

部長：金 吉晴(併任～4/30)、西 大輔 (5/1～)、室長：堀口寿広、研究員：臼田謙太郎、羽澄 恵、客員研究員：西 大輔 (～4/30)、竹島 正、末安民生、野口正行、安西信雄、今井健二郎、杉山雄大、東 尚弘、長瀬幸弘、久保田明子、中村江里、後藤基行、本屋敷美奈 (8/1～)、テクニカルフェロー：古野考志、リサーチフェロー：三宅美智、片岡真由美 (9/1～)、科研費研究員：橋本 壘、岡崎絵美、小倉加奈子 (8/1～)、研究生：北村真紀子、辻田あづさ、月江ゆかり (6/1～)、研究補助員：穴澤恵美子、櫻庭亜希子 (10/1～)

Ⅱ. 研究活動

1) 心のサポーター養成研修の効果評価に関する調査

厚生労働省より委託された「心のサポーター養成事業」の一環として開発された研修の有効性を明らかにすることを目的とした研究を行った。心のサポーター養成研修の受講者、研修を実施する自治体の担当者、研修講師に対して自己記入式質問紙を実施し、受講による受講者の知識や態度の変化、ならびに自治体担当者や研修講師の研修への満足度を検討した。本研究を行うことで、今後全国に事業を普及していくために必要となる、研修効果の科学的裏付を得ることができる。(西、臼田、羽澄、岡崎、小倉、片岡)

2) 精神医療政策への萌芽的取組と行政効果検証に関する研究（精神・神経疾患研究開発費）

実効性をもって精神医療政策が実装されていく方法論の確立を目指し 3 つの課題を推進した。

課題 1 レセプト病名等の情報から臨床診断を推定するアルゴリズムの開発に関する研究

大規模レセプトデータベースでの活用を目指し、退院時の診断と入院中の診療行為の関連を検討した。いくつかの診療行為が統合失調症の診断の患者において多く行われていることが示唆された。

課題 2 医療記録を用いた医療観察法病棟入院患者の入院長期化予測に関する研究

診療記録のテキストデータを用いて長期入院を予測するため、自然言語処理技術の開発を行った。5 種類の自然言語処理方法を試行したところ、BERT と呼ばれる手法が入院初日のカルテ記述から長期入院を予測するために最適である可能性がこれまでに見出された。

課題 3 COVID-19 感染後の心身への中長期的影響に関する研究

わが国の COVID-19 感染者数は 2022 年 3 月上旬までに 500 万人を超える。COVID-19 では感染後に後遺症がしばしば散見され問題視されている。とくに、抑うつ等の精神神経症状は他の感染症よりも残遺することが多く、COVID-19 では一層注目されている。しかし、こうした症状に関する知見はいまだ検討の余地が残る。検討にあたっては、精神科医療機関を受診しない人も多

くいる可能性を踏まえるとレセプト情報等の病院ベースのデータのみで実態把握するには限界があり、地域住民を対象とした疫学研究を行う必要性が考えられる。そこで、COVID-19 感染経験を有する地域住民を対象にオンライン横断調査を実施し、COVID-19 感染者のなかでも精神症状が残遺しやすい層や、精神症状の重症度に関連する要因の同定を行った。本研究は、COVID-19 感染者における、後遺症としての精神症状の予防や改善策を構築するための一助になると考えられる。

(西, 堀口, 羽澄, 臼田, 古野, 橋本, 岡崎, 片岡)

3) 精神保健医療福祉施設におけるトラウマ（心的外傷）への対応の実態把握と指針開発のための研究

地域精神保健福祉分野でのトラウマインフォームドケア（TIC）実装の可能性を明らかにすることを目的として、調査 1～3 を実施した。調査 1 では、精神保健福祉センターを対象としたヒアリングと研修を行い、TIC の普及・実装に関する現状と課題を明らかにした。調査 2 と調査 3 は同じ医療機関を対象として実施し、調査 2 では、用いる予定の既存データベースの利用可能性について検証を行った。調査 3 では、現在実施している非無作為化比較試験において、動画を用いた TIC 研修を介入群に実施し、その前後の質問紙調査が終了したところである。これらの研究結果から、地域精神保健福祉分野において TIC を普及・実装に向けた示唆を得ることが期待できる。

(西, 臼田, 三宅, 羽澄)

4) 6NC 連携による医療政策研究

当センターを含む 6 つの国立高度専門医療研究センター（6NC）の研究者が協力し、匿名レセプト情報・匿名特定健診等情報データベース（NDB）を用いて、NC が担う重要疾患等に関するエビデンスを創出し、政策調査・提言に関わる基盤情報を提供することで、「根拠に基づいた政策立案」や政策評価に貢献することを目指す課題である。

令和 3 年度は、昨年度構築した研究体制に基づき、定期的な合同の担当者会議を行い情報交換や各分野の解析手法などについての議論を行った。また各 NC が所掌する主要疾患を対象としたレセプトデータ研究について 6NC 合同でのスコーピングレビューを行った。NCNP として NDB 取り扱いに関する内部規定案の作成に参加し、今後の体制構築に努めた。（臼田, 古野）

5) 医療的ケア児のインクルーシブ保育を実施

人工呼吸器や胃ろう等により医療的なケアを必要とする児童いわゆる「医療的ケア児」をもつ家族のレスパイト（休息）を確保しワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）を実現する目的で、東京都三鷹市および武蔵野市の参加を得て設置された協議会に参加して、身近な地域の医療機関が中心となり子どもの状態をよく知る職員が付き添い一般の保育所を利用する「インクルーシブ保育」の実施に協力した。（堀口）

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 武蔵野大学 非常勤講師（臼田）
- ・ 立教大学 非常勤講師（羽澄）
- ・ 小石川東京病院 臨床心理学的研究および実践指導（羽澄）
- ・ 駒沢女子大学 精神看護学実習助手（三宅）
- ・ 東京情報大学 講義担当（三宅）
- ・ 目白大学 人間学部 心理カウンセリング学科 助教（橋本）

- ・ 成仁病院 臨床心理学的研究および実践指導（小倉）

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

- ・ 国土交通省 総合政策局 安心生活政策課：移動円滑化のために必要な旅客施設又は車両等の構造及び整備に関する基準等検討会 構成員（堀口）
- ・ 全国精神保健福祉センター長会 倫理審査委員会 委員（堀口）

(5) センター内における臨床的活動

- ・ NCNP 病院睡眠障害センターの外来にて不眠症の認知行動療法の提供を行った（羽澄）。

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Takano A, Fukasawa M, Watanabe K, Nishi D, Kawakami N: Adolescent work values and drug use in adulthood: a longitudinal prospective cohort study. *Subst Use Misuse* 14: 1-10, 2021.
- 2) Stein DJ, Kazdin AE, Ruscio AM, Chiu WT, Sampson NA, Ziobrowski HN, Aguilar-Gaxiola S, Al-Hamzawi A, Alonso J, Altwaijri Y, Bruffaerts R, Bunting B, de Girolamo G, de Jonge P, Degenhardt L, Gureje O, Haro JM, Harris MG, Karam A, Karam EG, Kovess-Masfety V, Lee S, Medina-Mora ME, Moskalewicz J, Navarro-Mateu F, Nishi D, Posada-Villa J, Scott KM, Viana MC, Vigo DV, Xavier M, Zarkov Z, Kessler RC: WHO World Mental Health Survey collaborators. perceived helpfulness of treatment for generalized anxiety disorder: a World Mental Health Surveys report. *BMC Psychiatry* 21(1):392, 2021.
- 3) Yasuma N, Nishi D, Watanabe K, Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T, Umeda M, Kawakami N: Association between urban upbringing and compulsive internet use in Japan: a cross-sectional, multilevel study with retrospective recall. *Int J Environ Res Public Health* 20(18):9890, 2021.
- 4) Asaoka H, Koido Y, Kawashima Y, Ikeda M, Miyamoto Y, Nishi D: Longitudinal change in depressive symptoms among healthcare professionals with and without COVID-19 vaccine hesitancy from October 2020 to June 2021 in Japan. *Industrial Health* 2021.
- 5) Asaoka H, Koido Y, Kawashima Y, Ikeda M, Miyamoto Y, Nishi D: Longitudinal change of psychological distress among healthcare professionals with and without psychological first aid training experience during the COVID-19 pandemic. *International Journal of Environmental Research and Public Health* 18(23):12474, 2021.
- 6) Sasaki N, Akiyama H, Kawakami N, Nishi D: Preconception menstrual cycle disorder and antenatal depression: a cross-sectional study with pre-recorded information. *Journal of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology* 1-8 2021.
- 7) Sasaki N, Tabuchi T, Okubo R, Ishimaru T, Kataoka M, Nishi D: Temporary employment and suicidal ideation in COVID-19 pandemic in Japan: a cross-sectional nationwide survey. *Journal of Occupational Health* 64(1): e12319. 2022.
- 8) Horiguchi T, Takanashi K, Sato S, Sone N. An assessment of abuse of children with disabilities at Japanese nursery schools: reports by commissioned pediatricians. *Journal of*

Intellectual Disability -Diagnosis and Treatment 10(1): 31-36, 2022.

- 9) Usuda K, Okazaki E, Tsukie Y, Yamanouchi Y. The impact of COVID-19 on inpatient wards at psychiatric hospitals in Japan. Asian J Psychiatr. 2021.

(2) 総説

- 1) 浅岡紘季, 小井土雄一, 河嶌 譲, 池田美樹, 宮本有紀, 西 大輔: 所属病院外において COVID-19 に対応した医療従事者の心的外傷後ストレス症状. 産業衛生学雑誌 63(臨増): 229-229, 2021.
- 2) 小井土雄一, 久保達彦, 西 大輔, 大場次郎: 災害産業保健 DMAT 隊員と健康管理. 産業衛生学雑誌 63(臨増): 229-229, 2021.
- 3) 西 大輔:【精神医療に関する疫学のトピック-記述疫学, リスク研究からコホート研究まで】周産期うつ病の疫学. 精神医学 63(4): 489-494, 2021.

(3) 著書

(4) 研究報告書

- 1) 国立精神・神経医療研究センター (中込和幸, 金 吉晴, 西 大輔, 藤井千代, 久我弘典, 臼田謙太郎, 羽澄 恵, 岡崎絵美, 小倉加奈子, 片岡真由美, 小塩靖崇, 松長麻美, 梅本育恵, 牧野みゆき): 心のサポーター養成研修の効果評価に関する調査. 心のサポーター養成に係る調査・分析業務等一式 事業報告書. 2022.
- 2) 臼田謙太郎: 精神医療政策への萌芽的取組と行政効果検証に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費. 令和 3 年度 総括研究報告書. 2022
- 3) 堀口寿広: レセプト病名等情報から臨床診断を推定するアルゴリズムの開発に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費. 令和 3 年度 分担研究報告書. 2022.
- 4) 羽澄 恵: COVID-19 陽性後の心身への中長期的影響に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費. 令和 3 年度 分担研究報告書. 2022.
- 5) 臼田謙太郎: 医療記録から長期入院患者を予測する自然言語処理を用いたモデル開発に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費. 令和 3 年度 分担研究報告書. 2022.
- 6) 臼田謙太郎: トラウマインフォームドケアの精神科入院患者処遇改善に対する有効性の検討. 厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業). 令和 3 年度 分担研究報告書. 2022.
- 7) 羽澄 恵: 眠気に伴う精神的苦痛が中枢性過眠症の治療経過に与える影響. 科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金 (若手研究)) 令和 3 年度 総括研究報告書. 2022.
- 8) 三宅美智: 精神障害当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果と検証. 科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金 (基盤研究 C)) 令和 3 年度 総括研究報告書. 2022.
- 9) 三宅美智: BPSD 緩和を目的とした生活リズムの調整に着目した看護-介護共同介入モデルの作成 (学術研究助成基金助成金 (基盤研究 C)) 令和 3 年度 分担研究報告書. 2022.

(5) 翻訳

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
 - 1) 西 大輔: 院外で COVID-19 に対応した医療救援者のメンタルヘルス. シンポジウム「本邦の COVID-19 にまつわる不安」. 第 13 回日本不安症学会, 札幌 (オンライン), 2021.5.22-6.21

- 2) 西 大輔：交通外傷後の精神健康に関するコホート研究. シンポジウム「疫学・調査研究からみえるもの」. 第 20 回日本トラウマティック・ストレス学会, 福島 (オンライン), 2021.7.17-18
- 3) 西 大輔：精神科医療機関における TIC の展開. シンポジウム「トラウマインフォームドケア～わが国における実践と展開～」. 第 20 回日本トラウマティック・ストレス学会, 福島 (オンライン), 2021.7.17-18.
- 4) 羽澄 恵：過眠症における心理的特徴とその評価. 第 46 回日本睡眠学会学術大会. 福岡, 2021.9.23-24.

(2) 一般演題

- 1) 浅岡紘季, 小井土雄一, 河嶌 譲, 池田美樹, 宮本有紀, 西 大輔：所属病院外において COVID-19 に対応した医療従事者の心的外傷後ストレス症状. 第 94 回産業衛生学会, 長野 (オンライン), 2021.5.18-21.
- 2) 小倉加奈子：ADHD 児を対象とした通所型グループプログラムと訪問看護・学校訪問の連携－好ましい変化が地域でも見られた 2 事例を通じた検討. 第 125 回日本小児精神神経学会, オンライン, 2021.6.26-27.
- 3) 羽澄 恵, 伊東若子, 和田真孝, 成澤元, 本多真：治療中の特発性過眠症患者の抑うつ症状に関連する要因の検討. 第 46 回日本睡眠学会学術大会, 福岡, 2021.9.23-24.
- 4) 羽澄 恵, 吉池卓也, 松井健太郎, 長尾賢太郎, 都留あゆみ, 大槻 怜, 綾部直子, 内海智博, 河村 葵, 伊豆原宗人, 栗山健一：COVID-19 パンデミックと不眠障害における不眠症状と不安症状の関係性の変化. 第 46 回日本睡眠学会学術大会, 福岡, 2021.9.23-24.

(3) 研究報告会

(4) その他

- 1) 三宅美智：理想と現実の折り合いは可能かー隔離身体拘束をめぐる最高裁判決ー. 第 29 回精神科看護管理研究会, 北海道 (オンライン), 2022.2.11.

C. 講演

- 1) 西 大輔：第 2 回 山縣班・上原班合同班会議. 山梨大学大学院総合研究部医学域社会医学講座, オンライン, 2021.6.4.
- 2) 堀口寿広：クリティカルパス. 日本精神科病院協会通信教育第 7 回 SENIOR コース, 東京, 2021.6.8.
- 3) 岡崎絵美：あなたにとって「働く」とは？産業メンタルヘルス. 心の健康, 立教大学全学部共通カリキュラム, 2021.12.16.
- 4) 片岡真由美：トラウマインフォームドケアについて. 世田谷区子ども・若者支援協議会第 2 回代表者会議, 2022.1.27.
- 5) 羽澄 恵：睡眠は私たちに本当に必要なのか. 学校訪問型睡眠講座, 水戸第二中学校, 2022.2.1.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 西 大輔：日本行動医学会 理事
- 2) 西 大輔：日本周産期メンタルヘルス学会 評議員
- 3) 堀口寿広：公益社団法人 日本小児保健協会 代議員
- 4) 堀口寿広：公益社団法人 日本小児保健協会 小児保健奨励賞研究助成選考委員

5) 堀口寿広：公益社団法人 日本小児科学会 小児科サブスペシャリティ連絡協議会 第三者委員

(3) 座長

1) 堀口寿広：多職種のための投稿論文書き方セミナー．第 68 回日本小児保健協会学術集会，沖縄，2021.6.18-20.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 西 大輔：日本精神神経学会 PCN 編集委員
- 2) 西 大輔：日本トラウマティック・ストレス学会
- 3) 堀口寿広：公益社団法人 日本小児保健協会「小児保健研究」誌 編集委員長
- 4) 堀口寿広：「チャイルド・ヘルス」誌 編集協力者
- 5) 三宅美智：日本精神科看護協会 査読委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 1 回こころサポーター指導者養成研修．オンライン，2021.9.16.
- 2) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 2 回こころサポーター指導者養成研修．オンライン，2021.9.26.
- 3) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 1 回こころサポーター養成研修．京都およびオンライン，2021.11.29.
- 4) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 2 回こころサポーター養成研修．京都およびオンライン，2022.1.12.
- 5) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 3 回こころサポーター養成研修．オンライン，2022.1.17.
- 6) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 4 回こころサポーター養成研修．オンライン，2022.1.18.
- 7) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 5 回こころサポーター養成研修．オンライン，2022.1.19.
- 8) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 6 回こころサポーター養成研修．福岡，2022.1.24.
- 9) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 7 回こころサポーター養成研修．オンライン，2022.1.25.
- 10) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 8 回こころサポーター養成研修．オンライン，2022.1.26.
- 11) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 9 回こころサポーター養成研修．オンライン，2022.2.1.
- 12) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 10 回こころサポーター養成研修．オンライン，2022.2.1.
- 13) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 11 回こころサポーター養成研修．オンライン，2022.2.2.
- 14) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 12 回こころサポーター養成研修．オンライン，2022.2.5.
- 15) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 13 回こころサポーター養成研修．オンライン，2022.2.8.
- 16) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 14 回こころサポーター養成研修．オンライン，

2022.2.14.

- 17) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 15 回ころサポーター養成研修．オンライン，2022.2.15.
- 18) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 16 回ころサポーター養成研修．オンライン，2022.2.16.
- 19) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 17 回ころサポーター養成研修．オンライン，2022.2.17.
- 20) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 18 回ころサポーター養成研修．オンライン，2022.2.19.
- 21) 心のサポーター養成事業，令和 3 年度 第 19 回ころサポーター養成研修．オンライン，2022.2.22.

(2) 研修会講師

- 1) 三宅美智：行動制限最小化看護 2 行動制限最小化の方略．日本精神科看護協会主催，オンライン，2021.6.17.
- 2) 西 大輔：埼玉県看護協会第 2 支部主催令和 3 年度看護研修会，オンライン，2021.7.10.
- 3) 三宅美智：行動制限．日本精神科看護宮城県支部主催，オンライン，2021.7.10.
- 4) 西 大輔：トラウマと PTSD の理解とケア研修会，横浜市健康福祉局こころの健康相談センター主催，オンライン，2021.9.3.
- 5) 西 大輔：令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース 1，オンライン，2021.10.25.
- 6) 西 大輔：浜松市精神保健福祉センター主催研修会，静岡県（オンライン），2021.11.5.
- 7) 西 大輔：令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース 2，オンライン，2021.11.19.
- 8) 臼田謙太郎：多様な精神疾患に対応できる医療連携体制の構築支援のための研修会．厚生労働省 日本能率協会共催，オンライン（事前収録），2021.11.26.
- 9) 小倉加奈子：心理・医療的な側面から見た発達障がい生徒の支援．特別支援教室西新井北ブロック研修会，東京，2021.12.21.
- 10) 西 大輔：一般社団法人 TICC 主催 第一回トラウマインフォームドケア企画研修，オンライン，2022.2.25.
- 11) 臼田謙太郎：第一回トラウマインフォームドケア企画研修．一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会 兵庫県立尼崎総合医療センターこども家族支援室 TICC 共催，オンライン，2022.2.25.
- 12) 臼田謙太郎：精神保健福祉のモニタリングに関する研修会 厚生労働行政推進調査事業費補助金「持続可能で良質かつ適切な精神医療とモニタリング体制の確保に関する研究班」主催，オンライン，2022.3.4.

F. その他

3. 薬物依存研究部

I. 研究部の概要

薬物依存研究部は、「麻薬・覚せい剤等に関する実態調査結果に基づく勧告」(総務庁, 平成 10 年 5 月)により, 機能強化が要請され, 平成 21 年度より研究室の改組及び 1 研究室の新設がなされ, 下記のように 3 研究室体制となっている。

心理社会研究室

- (1) 薬物乱用・依存及び中毒性精神障害の実態調査研究に関すること。
- (2) 薬物依存の発生要因に係わる心理学的及び社会学的調査研究に関すること。
- (3) 薬物依存の予防及びその指導, 研修の方法の研究に関すること。

依存性薬物研究室

- (1) 薬物依存の発生要因に係わる精神薬理学的調査研究に関すること。
- (2) 依存性薬物の薬効に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。
- (3) 中毒性精神障害に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。

診断治療開発研究室

- (1) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の開発の研究に関すること。
- (2) 薬物依存及び中毒性精神障害の治療システムの開発の研究に関すること。
- (3) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の研修に関すること。

人員構成は, 次のとおりである。

部長: 松本俊彦, 心理社会研究室長: 嶋根卓也, 依存性薬物研究室長: 船田正彦, 診断治療開発研究室長: 近藤あゆみ, リサーチフェロー: 富山健一, 猪浦智史, 客員研究員: 浅沼幹人 (岡山大学脳神経機構学分野), 尾崎 茂 (東京都保健医療公社豊島病院), 宮永 耕 (東海大学健康科学部), 和田 清 (埼玉県立精神医療センター), 成瀬暢也 (埼玉県立精神医療センター), 森田展彰 (筑波大学医学医療系), 谷渕由布子 (同和会千葉病院), 三島健一 (福岡大学薬学部), 境 泉洋 (徳島大学大学院), 山田正夫 (神奈川県立精神保健福祉センター), 池田朋広 (高崎健康福祉大学健康福祉学部), 平田豊明 (千葉県精神科医療センター), 高野 歩 (東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科), 大嶋栄子 (NPO 法人リカバリー), 池田和隆 (東京医学総合研究所), 三好美浩 (岐阜大学医学部看護学科), 高岸百合子 (駿河台大学心理学部), 鈴木秀人 (東京都監察医務院), 奥村泰之 (東京都医学総合研究所), 引土絵未 (日本女子大学人間社会学部), 古田島浩子 (東京医学総合研究所), 山口重樹 (獨協医科大学医学部), 宮地尚子 (一橋大学大学院社会学研究科), 高橋 哲 (お茶の水女子大学生生活科学部), 村瀬華子 (北里大学医療衛生学部), 川口貴子 (福岡市精神保健福祉センター, 8 月～), 新海浩之 (府中刑務所, 10 月～), 蛭川 立 (明治大学情報コミュニケーション学部, 1 月～) 科研費研究員: 米澤雅子, 喜多村真紀, 伴恵理子 (～12 月), 金澤由佳 (～6 月) 加藤 隆, 瓜生美智子, 古市 亘 (4 月～), 堤史織 (9 月～), 長島 努 (12 月～) 併任研究員: 今村扶美, 川地 拓, 山田美紗子 (以上, 病院臨床心理室), 船田大輔, 宇佐美貴士, 村上真紀, 沖田恭治 (以上, 病院第二精神科), 研究生: 青尾直也, 今井航平, 加藤重城, 橋本美保, 花岡晋平, 福森崇之, 大澤美佳, 高木のり子, 田中紀子, 邱 冬梅, 山田理沙, 山本泰輔, 熊倉陽介, 大宮宗一郎, 青木彩香, 阿久根陽子, 菊池美名子, 池上大悟, 江島智子, 水野有紀, 安武 正 (6 月～), 金澤由佳 (7 月～), アティジュ・セリムギョクチャ (11 月～)

II. 研究活動

A. 疫学的研究

1) 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究

本研究は, 保護観察所と精神保健福祉センターなどの地域支援機関との橋渡しをしながら, 保護観察の対象となった薬物事犯者の長期転帰を調査する, 「Voice Bridges Project」である。平成 29 年 3

月から令和3年12月末までに、20の精神保健福祉センターから計642名の保護観察対象者が調査に参加した。1年後追跡完了者は253名、2年後の追跡完了者は127名、3年後の追跡完了者は63名であった（追跡率は1年後80.1%、2年後76.5%、3年後70.8%）。累積断薬継続率は、約1年経過時点で約90%、約2年経過時点で約90%、約3年経過時点で約80%と、その低下は緩徐であった。カプランマイヤー解析を実施したところ、約1年経過後の累積断薬継続率は約90%、2年経過後の累積断薬継続率も約90%であり、3年経過後の累積断薬継続率は約80%であった。（厚労科研：障害者政策総合研究事業。松本俊彦）

2) 薬物使用に関する全国住民調査（2021年）

本研究は、わが国で唯一の全国の一般住民を対象とする薬物使用に関する疫学研究である。新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中、第14回目の全国住民調査が実施された。2019年から2021年にかけて一般住民の飲酒、喫煙、医薬品、違法薬物の使用状況に様々な変化がみられ、経年的な変化において新型コロナウイルス感染症が影響している可能性が示唆された。例えば、大麻の過去1年経験者数（推計値）は、約9万人（2019年）から約13万人（2021年）に増加していた。今年度の新たな試みとして、医薬品（解熱鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬）の乱用経験、および大麻の使用場所、使用形状に関する実態を明らかにすることができた。（令和2年度厚生労働行政推進調査事業費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。嶋根卓也、猪浦智史、山口裕貴、邱冬梅、和田 清）

3) 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究（ダルク追っかけ調査2021）

本研究の目的は、民間支援団体利用者の予後と支援の課題を明らかにすることである。本プロジェクトは、2016年に開始され、5年間に渡って民間支援団体ダルクの利用者693名（うち薬物依存症者491名）を追跡した。薬物依存症者を対象とするコホート調査としては、わが国では最大規模かつ最長の追跡期間を伴うプロジェクトであった。ダルク利用者の断酒や断薬の背景には、「回復のモデルとなる仲間」の存在が大きく関与しており、依存症という同じ課題を抱えた「先行く仲間」との出会いが、ダルクの回復支援活動の本質と言える。追跡期間中、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起これ、自助グループや施設外の活動が制限されるなど新たな課題が浮上したが、オンラインミーティングの導入などの新たな取り組みを加えて、回復支援活動が続けられていることが明らかになった。（厚労科学研究：障害者政策総合研究事業。嶋根卓也、猪浦智史、喜多村真紀、米澤雅子、引土絵未、近藤あゆみ、新田慎一郎、高岸百合子、松本俊彦）

4) 大麻を乱用する少年における新たな大麻関連製品、危険ドラッグの乱用実態に関する研究

国内の大麻の取り締まりに関する傾向として、高濃度に抽出されたTHCを含有するワックスやリキッドタイプの大麻製品が押収される事件が相次いでいる。これらの大麻製品は、電子タバコを用いたベイパーと呼ばれる方法（Vaping Marijuana:以下、大麻ベイプと表記）で使用される場合が多いが、その使用実態は十分に研究されていない。そこで本研究では、10代の大麻使用少年を対象に大麻ベイプを含む大麻の使用実態および危険ドラッグを含む大麻以外の違法薬物の使用実態を明らかにすることを目的とした。令和3年度は、研究計画書を作成し、NCNPの倫理審査を申請し、承認が得られた。（厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。嶋根卓也、船田正彦）

5) 覚せい剤事犯者の理解とサポートに関する研究

全国の刑務所で収容されている覚せい剤事犯者に関する実態を明らかにすることを目的とした。令和3年度は、これまでの研究成果を関係者向けに解説したパンフレット「覚せい剤事犯者の理解とサポート2021」を作成した。これは2018年に発刊した「覚せい剤事犯者の理解とサポート2018」をベースに新たな知見を追加し、バージョンアップしたものである。グラフを効果的に使いながら、平易な言葉で解説することを心がけた。全国の刑務所、保護観察所、少年院、少年鑑別所、検察庁、依存症拠点医療機関、精神保健福祉センター、警察庁、裁判所などに配布するとともに、薬物依存研究部のホームページで公開した。（厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。嶋根卓也、近藤あゆみ、高

岸百合子, 喜多村真紀, 松本俊彦)

6) 薬物使用と生活に関する全国高校生調査

本研究の目的は、全国の高校生における飲酒、喫煙、薬物乱用の実態を把握することである。2021年度は、2018年度に引き続き、2回目の全国調査を実施した。調査対象は無作為に選ばれた全国202校の全日制高等学校の生徒である。計80校より調査協力が得られた。今年度の新たな試みとして、一般用医薬品（鎮咳去痰薬・総合感冒薬、解熱鎮痛薬）の乱用経験、使用した大麻の形状（乾燥大麻、大麻樹脂、ワックス・リキッドタイプ、大麻食品）、コロナ禍で自粛生活が続いていることに対するストレスなどの質問を追加した。現在、集計を進めている。（厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。嶋根卓也, 猪浦智史, 山口裕貴, 松本俊彦）

7) HIV感染症を伴う薬物使用障害の臨床的特徴と治療・回復支に関する研究

民間支援団体ダルク利用者を対象とするコホート研究で得られたデータベースから、薬物およびアルコール依存症の男性608名を抽出し、物質使用とHIV感染リスクの高い性行動に関する分析を行った。薬物依存症回復支援施設を利用する男性において、覚醒剤やアルコールの使用は物質使用下でのコンドームを使用しない性行為に影響を与えることが示された。覚醒剤やアルコール使用者には重点的にHIV感染リスクの高い性行動の予防に関する情報を提供する必要がある。（精神・神経疾患研究開発費。嶋根卓也, 近藤あゆみ, 米澤雅子, 松本俊彦）

B. 臨床研究

1) 薬物使用障害に対する多様な治療法の開発

本研究の目的は、すでに我々が開発した薬物依存症集団療法（SMARPP）ではカバーできない様々な問題——すなわち、併存精神障害や感染症、性差などの個別的要因、および、治療セッティングを含めた多様なニーズ——を抱える薬物使用障害患者に対する治療法を開発することである。

今年度の本研究では、従来の治療法では十分な効果が得られず、個別性への配慮を要する集団が同定されるとともに、既存の薬物依存症集団療法に代わる治療法として、精神科急性期病棟における短期入院治療プログラム（FARPP）、作業療法プログラム（リアル生活プログラム）の開発が行われた。

（精神・神経疾患研究開発費, 松本俊彦, 嶋根卓也, 近藤あゆみ, 船田大輔, 村上真紀, 今村扶美）

2) 薬物使用障害の治療転帰に関する個別的要因の影響に関する研究

2017.1月~2020.4月にNCNP病院薬物外来を受診した新規患者のうち1年後に治療を継続していた72名を分析対象とし、本研究を実施した結果、対象者の薬物問題重篤度に有意な改善が認められ、SMARPPを主軸に据えた薬物依存症の外来治療の有効性が示された。一方で、初診時の物質使用障害以外の診断結果が神経発達症群/神経発達障害群、統合失調症スペクトラム障害および他の精神病的障害群、双極性障害および関連障害群、解離症群/解離性障害群である患者は、薬物問題重篤度が改善しにくいなど課題も示唆された。（令和3年度精神・神経疾患研究開発費。近藤あゆみ）

3) 女性薬物依存症者の回復支援に関する研究

医療機関で薬物依存症治療を受けている女性患者（約50名）および覚醒剤取締法違反により刑事施設に収容されている女性（約150名）を対象に、薬物問題を抱えた女性の生活実態および支援ニーズを把握することを目的としたアンケート調査を実施した。次年度はデータ分析を行い、研究結果に基づいて女性に対する治療支援モデル構築に関する提言を行うとともに、女性に特化した治療や支援モデル構築の意義を社会に伝える。（厚生労働省依存症に関する調査研究事業。近藤あゆみ, 嶋根卓也）

4) 物質使用障害を抱える女性に対する治療プログラムの開発と有効性評価に関する研究

物質使用障害を抱える女性に対する治療プログラムのワークブックを作成した。作成にあたっては、「Seeking Safety A Treatment Manual for PTSD and Substance Abuse」と「Recovery from Trauma, Addiction, or Both Strategies for Finding Your Best Self」を参考とし、安全かつ総合的に改善を目指す独自の包括的プログラムを開発した。今年度は、ワークブックとセラピスト・マニュアルを完成し、2つの医療機関で介入が終了し、現在はその結果をとりまとめ、論文を準備中である。（日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業。松本俊彦, 近藤あゆみ）

5) 様々な依存症に対する個人認知行動療法プログラムの開発と効果検証に関する研究

本研究は、物質依存とギャンブルなどの行動嗜癖に対する個人認知行動療法プログラムを開発し、その有効性を検証することを目的としている。今年度はワークブックとセラピスト・マニュアルを刊行し、ランダム化対照試験を実施する NCNP 病院（薬物依存症担当）、ならびに、国立病院機構久里浜医療センターおよび国立病院機構肥前精神医療センター（アルコール依存症・ギャンブル障害担当）において介入を実施中である（日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業、近藤あゆみ、松本俊彦、船田大輔、今村扶美、高岸百合子）

C. 基礎研究

1) カチノン系化合物の中樞作用とドパミン取り込み阻害作用の関連性

本研究では、カチノン系化合物の行動薬理学的特性と作用点であるモノアミントランスポーター [ドパミン(DAT)、セロトニン(SERT)、ノルエピネフリン(NET)] 機能調節との関連性について検討した。行動薬理学的解析として、ICR 系雄性マウスを使用して、カチノン系化合物投与による運動活性に対する影響を検討した。モノアミントランスポーター機能調節に関する研究としては、DAT、SERT、NET 発現細胞を用いてモノアミン取り込み阻害作用について検討した。麻薬に指定されている 8 種類のカチノン系化合物の投与によって運動促進作用が発現し、中枢興奮作用を有することが明らかになった。また、すべてのカチノン系化合物は DAT、SERT、NET 取り込み阻害作用を示した。カチノン系化合物による運動促進作用とモノアミントランスポーター阻害作用強度の相関性について検討したところ、DAT 阻害作用において有意な相関性が認められた。本研究結果から、DAT 発現細胞による機能解析から、カチノン系化合物の中枢興奮作用などの有害作用を推測できる可能性が示唆された。本研究で確認された動物実験と細胞による総合的な有害作用評価システムは、カチノン系化合物包括指定範囲の拡大のために貢献できる解析手法であると考えられる。（厚生科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業、船田正彦、富山健一）

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・市民向け講演会：(Ⅳ. 研究業績 C. 講演 参照) ・報道：(Ⅳ. 研究業績 F. その他 参照)

(2) 専門教育面における貢献

- ・研究会・研究会

第 11 回薬物依存症に対する認知行動療法研究会、2020 年度厚生労働省依存症治療拠点機関設置運営事業（薬物依存症回復施設職員研修、依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物））

- ・各種教育研修会等への講師派遣（Ⅳ. 研究業績 C. 講演 参照）

- ・大学

早稲田大学人間科学学術院非常勤講師（松本俊彦）、国立大学法人東京医科歯科大学非常勤講師（松本俊彦）、国立大学法人東京大学非常勤講師（松本俊彦）、国立大学法人岡山大学大学院医歯薬学総合研究科非常勤講師（嶋根卓也）、東京薬科大学薬学部非常勤講師（嶋根卓也）、津田塾大学非常勤講師（嶋根卓也）

- ・その他

日本アルコール・薬物医学会雑誌査読者（近藤あゆみ、嶋根卓也）

日本薬剤師会雑誌査読者（嶋根卓也）

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・政府委員会

厚生労働省医薬・生活衛生局「薬事・食品衛生審議会」臨時委員（松本俊彦）、厚生労働省医薬・生活衛生局「依存性薬物検討会」構成員（松本俊彦）、文部科学省生涯学習政策局「青少年を取り巻く有害環境対策の推進（依存症予防教育推進事業）」技術審査委員（松本俊彦）、厚生労働

省精神・障害保健課「依存症の理解を深めるための普及啓発」に係る企画委員会委員（松本俊彦）、文部科学省初等中等教育局「児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議」（松本俊彦）、厚生労働省医薬・生活衛生局「大麻等の薬物対策のあり方検討会」検討委員（松本俊彦、舩田正彦、嶋根卓也）、厚生労働省「依存症に関する調査研究部会」副部会長（嶋根卓也）、文部科学省補助金（健康教育振興事業費補助金）「喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育に関する指導参考資料改訂委員会」委員（嶋根卓也）、厚生労働省「令和3年度依存症の理解を深めるための普及啓発事業」企画委員（嶋根卓也）、厚生労働省薬物乱用防止啓発訪問事業「効果検証」（嶋根卓也）、法務省矯正研修所効果検証センターにおける効果検証業務に関する助言（嶋根卓也）・その他公的委員会

東京地方裁判所登録精神保健判定医（松本俊彦）、独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員（松本俊彦）、東京都危険ドラッグ専門調査委員会専門委員（舩田正彦）、福岡県特定危険薬物指定専門委員（舩田正彦）、埼玉県地方薬事審議会薬物指定審査委員会（富山健一）

・研究成果の行政貢献

警視庁組織犯罪対策部組織犯罪対策第五課による「薬物乱用防止対策啓発映像 大麻の誘惑」の中で、「飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査」に関する研究成果を報告した（警視庁）

福岡県医療介護部薬務課による「大麻乱用防止啓発リーフレット」の中で、「薬物使用に関する全国住民調査」に関する研究成果を提供した（福岡県）

(5) センター内における臨床的活動

毎週月・木曜日に薬物依存症外来での診療を行うとともに、デイケアにて薬物再乱用防止のための集団認知行動療法プログラムを実施している（松本俊彦、近藤あゆみ、嶋根卓也）。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Matsumoto T, Usami T, Yamamoto T, Funada D, Murakami M, Okita K, Shimane T: Impact of COVID-19-related stress on methamphetamine users in Japan. Psychiatry Clin Neurosci. 2021 Apr 19. doi: 10.1111/pcn.13220.
- 2) Shimane T, Takahashi M, Kobayashi M, Takagishi Y, Takeshita Y, Kondo A, Omiya S, Takano Y, Yamaki M, Matsumoto T: Gender Differences in the Relationship between Methamphetamine Use and High-risk Sexual Behavior among Prisoners: A Nationwide, Cross-sectional Survey in Japan. Journal of Psychoactive Drugs 54(1): 9-17, 2022.
- 3) Yamada C, Siste K, Hanafi E, Ophinni Y, Beatrice E, Rafelia V, Alison P, Limawan A, Shinozaki T, Matsumoto T, Sakamoto R. (2021). Relapse prevention group therapy via video-conferencing for substance use disorder: protocol for a multicentre randomised controlled trial in Indonesia. BMJ Open 11, e050259. <https://doi.org/10.1136/bmjopen-2021-050259>.
- 4) Okita K, Kato K, Shigemoto Y, Sato N, Matsumoto T, Matsuda H: Effects of an Adenosine A2A Receptor Antagonist on Striatal Dopamine D2-type Receptor Availability: A Randomized Control Study using Positron Emission Tomography. Front. Neurosci., 13 September 2021 | <https://doi.org/10.3389/fnins.2021.729153>.
- 5) Yamamoto T, Kimura T, Tamakoshi A, Matsumoto T: Variables associated with methamphetamine use within the past year and sex differences among patients with methamphetamine use disorder: a cross-sectional study in Japan. Am J Addict. 2022;1-8. doi:

- 10.1111/ajad.13262.
 - 6) Kotajima-Murakami H, Takano A, Hirakawa S, Ogai Y, Funada D, Tanibuchi Y, Ban E, Kikuchi M, Tachimori H, Maruo K, Kawashima T, Tomo Y, Sasaki T, Oi, H Matsumoto T, Ikeda K: Ifenprodil for the treatment of methamphetamine use disorder: An exploratory, randomized, double-blind, placebo-controlled trial. *Neuropsychopharmacol Rep*. 2022;00:1–13.<https://doi.org/10.1002/npr2.12232>.
 - 7) Takeshima M, Otsubo T, Funada D, Murakami M, Usami T, Maeda Y, Yamamoto T, Matsumoto T, Shimane T, Aoki Y, Otowa T, Tani M, Yamanaka G, Sakai Y, Murao T, Inada K, Yamada H, Kikuchi T, Sasaki T, Watanabe N, Mishima K, Takaesu Y: Does cognitive behavioral therapy for anxiety disorders assist the discontinuation of benzodiazepines among patients with anxiety disorders? A systematic review and meta-analysis. *Psychiatry and clinical neurosciences* 75(4): 119-127, 2021.
 - 8) 正高佑志, 杉山岳史, 赤星栄志, 松本俊彦: SNS を活用した市中大麻使用者における大麻関連健康被害に関する実態調査ー第1報ー. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 56(4) : 128-141, 2021.
 - 9) 猪浦智史, 嶋根卓也, 加藤 隆: 物質使用障害者に対する生活習慣病予防プログラムに関する予備的研究. *日本アルコール・薬物医学会雑誌*, 56(5) 151-166, 2021.
 - 10) 喜多村真紀, 小島秀吾: DV 加害者における自己主張抑制の特徴について. *犯罪学雑誌* 87(3) : 64-76, 2021.
- (2) 総説
- 1) 松本俊彦: カフェイン中毒. *内科* 127(4) : 870-872, 2021.
 - 2) 松本俊彦: 10 代の薬物乱用・依存. *こころの科学* 217 : 43-49, 2021.
 - 3) 松本俊彦: COVID-19 と社会的孤立, 依存症の臨床を中心に. *日本社会精神医学会雑誌* 30(2) : 167-173, 2021.
 - 4) 松本俊彦: 精神科救急で違法薬物が検出されたときの対処. *精神科 Resident* 2(2) : 13-14, 2021.
 - 5) 松本俊彦: アルコール関連問題への対応. *産業精神保健* 29 特別号 : 104-107, 2021.
 - 6) 松本俊彦: 薬物依存症の今ー乱用薬物の動向と今後の課題ー. *Animus* 107 : 32-37, 2021.
 - 7) 松本俊彦: 保護観察所ー保護観察所と精神保健福祉センターが連携した新しい薬物依存症地域支援システムー. *精神科治療学* 36(7) : 825-829, 2021.
 - 8) 松本俊彦: アディクションと複雑性 PTSD. *精神療法* 47(4) : 475-477, 2021.
 - 9) 松本俊彦: 依存症は「孤立の病」ーアディクションの対義語はコネクションー. *月刊福祉* 104(11) : 42-45, 2021.
 - 10) 松本俊彦: 特集 ハームリダクションとは何か?ーその理念と意義, わが国での実施. *週刊 日本医事新報* 5081 : 18-30, 2021.
 - 11) 松本俊彦: 「故意の自傷」の現在. *精神科治療学* 36(9) : 1015-1020, 2021.
 - 12) 松本俊彦: その後の自殺対策の展望. *精神科治療学* 36(9) : 1085-1089, 2021.
 - 13) 松本俊彦: 自傷行為. 子どものコモンな徴候・微症状, *小児科* 9 月臨時増刊号 62(10) : 1230-1234, 2021.
 - 14) Shimane T, Inoura S, and Matsumoto T : Proposed indicators for Sustainable Development Goals(SDGs) in drug abuse fields based on national data in japan. *Journal of the National Institute of Public Health*70(3):252-261, 2021.8.
 - 15) 松本俊彦: ひとはなぜ「ドラッグ」を恐れ, 嫌悪するのか. *こころの科学* 220 : 58-64, 2021.
 - 16) 宇佐美貴士, 松本俊彦: 3. 鎮静薬, 睡眠薬または抗不安薬使用症群. *精神科治療学 今日*の精神科治療ハンドブック 36 増刊号 : 164-165, 2021.
 - 17) 松本俊彦: カフェイン中毒. *健* 50(9) : 61-65, 2021.

- 18) 松本俊彦：COVID-19 の依存症への影響～薬物依存症外来から見た風景を中心に～．医療の広場 61(11)：4-7, 2021.
- 19) 松本俊彦：わが国において薬物依存症に対する薬物療法の導入を妨げているものは何か？．臨床精神薬理 24：1191-1199, 2021.
- 20) 松本俊彦：依存症．精神医学 63(11)：1683-1690, 2021.
- 21) 松本俊彦：わが国におけるハームリダクション政策の可能性と課題．精神科臨床 Legato 7(3)：60-62, 2021.
- 22) 松本俊彦：人はなぜ薬物依存症になるのか～コネクションの対義語としてのアディクション～．學鐙 118(4)：30-33, 2021
- 23) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか～コネクションの対義語としてのアディクション～．心と社会 52(4)：82-88, 2021.
- 24) 松本俊彦：[総論]人はなぜ依存症になるのか．大阪作業療法ジャーナル 35(2)：82-86, 2022.
- 25) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない子どもたち「見える」傷の背後にある「見えない傷」の理解と支援．障害者問題研究 49(4)：306-312, 2022.
- 26) 松本俊彦：職域で見られる物質使用障害．産業精神保健 30(1)：6-10, 2022.
- 27) 松本俊彦：物質使用障害治療と QOL．精神医学 64(3)：341-348, 2022.
- 28) 船田正彦，富山健一：大麻規制の現状と課題．都薬雑誌, 43: 4-7, 2021.
- 29) 湯本洋介，嶋根卓也：ジェネラリストのための LGBT 講座 第 16 回物質使用障害と LGBT．治療 103(7)：2-6, 2021.
- 30) 嶋根卓也：新型コロナウイルス禍の薬物依存への影響．Frontiers in Alcoholism 9(2)：52-56, 2021.
- 31) 嶋根卓也：依存性薬物に関する教育の今とこれから．保健の科学 63(8)：513-518, 2021.
- 32) 嶋根卓也：違法薬物に限らない薬物依存の現状：処方薬と市販薬の乱用・依存．刑政 132(10)：12-21, 2021.
- 33) 嶋根卓也：市販薬乱用・依存の実態とその課題．臨床精神薬理 24(12)：75-84, 2021.

(3) 著書

- 1) 松本俊彦：誰がために医師はいる クスリとヒトの現代論．みすず書房，東京，pp1-232, 2021.
- 2) 松本俊彦：世界一やさしい依存症入門 やめられないのは誰かのせい？．河出書房新社，東京，pp1-226, 2021.
- 3) 松本俊彦：薬物依存症から回復しやすい社会づくり・地域づくり．格差時代の医療と社会的処方ー病院の入り口に立てない人々を支える SDH（健康の社会的決定要因）の視点，日本看護協会出版会，東京，pp170-181, 2021.
- 4) 宮地尚子，松本俊彦：トラウマと依存症臨床の未来．感情島へようこそ ト라우マのポリフォニー，日本評論社，東京，pp207-227, 2021.
- 5) 松本俊彦：大麻の取り締まりは健康問題であり，政治問題．日本人のための大麻教科書「古くて新しい農作物」の再発見，イースト・プレス，東京，pp122-127, 2021.
- 6) 松本俊彦：物質使用症と接触症群．講座 精神疾患の臨床 4 身体的苦痛症群 解離症群 心身症 食行動症または摂食症群，中山書店，東京，pp303-308, 2021.
- 7) 松本俊彦：乱用薬物の実態と診断．やってみたくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで．文光堂，東京，pp172-180, 2021.
- 8) 松本俊彦：覚せい剤．やってみたくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで．文光堂，東京，pp181-184, 2021.
- 9) 松本俊彦：薬物依存症と併存精神障害ー自己治療仮説に基づく理解ー．やってみたくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで．文光堂，東京，

- pp195-200, 2021.
- 10) 松本俊彦: 覚醒剤依存の治療上の留意点. やってみたいくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで. 文光堂, 東京, pp215-219, 2021.
 - 11) 松本俊彦: 患者の違法薬物使用を知った場合の司法的対応. やってみたいくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで. 文光堂, 東京, pp305-308, 2021.
 - 12) 松本俊彦: 依存症・自傷「やめられない・止まらない」の臨床. 精神症状の診かた・聴きかた はじめてまなぶ精神病理学, 金剛出版, 東京, pp161-188, 2021.
 - 13) 松本俊彦: 逸脱行動への認知行動療法(薬物依存症を中心に). 更生保護学辞典, 成文堂, 東京, pp46-47, 2021.
 - 14) 石塚伸一, 加藤武士, 長吉秀夫, 正高佑志, 松本俊彦 編著: 「大麻等の薬物対策のありかた検討会」とは何か? 検討会を通じて考えたこと. 大麻使用は犯罪か? 大麻政策とダイバーシティ, 現代人文社, 東京, pp132-146, 2022.
 - 15) 松本俊彦: 第1章 アディクション 精神医学の「鬼っ子」. アディクションの地平線 越境し交差するケア, 金剛出版, 東京 pp3-18, 2022.
 - 16) 松本俊彦, 鶴身孝介 監修: Newton 別冊 精神の病気 依存症編. ニュートンプレス, 東京, pp1-139, 2020.
 - 17) 松本俊彦 監修: 依存症がわかる本 防ぐ, 回復を促すためにできること. 講談社, 東京, pp1-98, 2021.
 - 18) 松本俊彦 (監修), 新田慎一郎 (訳者), 嶋根卓也, 喜多村真紀: クリスタルメタンフェタミンプロジェクト. 東京, pp1-31, 2021.
 - 19) 監修 松本俊彦, 坂井泉洋 監訳 佐藤彩有里, 山本彩 訳 白石英才: CRAFT 物質依存がある人の家族への臨床モジュール. 金剛出版, 東京, pp1-107, 2021.
 - 20) 編集 松本俊彦, 佐久間寛之, 蒲生裕司: やってみたいくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで. 文光堂, 東京, pp1-435, 2021.
 - 21) 松本俊彦 監修: Newton 別冊 脳とは何か 改訂第2版 最前線の研究で解明された脳の仕組みや知能, 身近な病気. 株式会社ニュートンプレス, 東京, pp124-125, 2021.
 - 22) 松本俊彦, 今村扶美, 近藤あゆみ (監修): SMARPP-24 物質使用障害治療プログラム[改訂版]. 金剛出版, 東京, pp1-218, 2022.
 - 23) 監修 松本俊彦, 編著 小原圭司, 佐藤寛志: ギャンブル障害回復トレーニングプログラム (SAT-G) 活用ガイドブック. 中央法規, 東京, pp1-131, 2022.
 - 24) 石塚伸一, 加藤武士, 長吉秀夫, 正高佑志, 松本俊彦 編著: 大麻使用は犯罪か? 大麻政策とダイバーシティ. 現代人文社, 東京, pp1-275, 2022.
 - 25) 松本俊彦 編: アディクションの地平線 越境し交差するケア. 金剛出版, 東京, pp1-207, 2022.
 - 26) 嶋根卓也: 第2章-4 性的マイノリティと薬物依存症および感染症. やってみたいくなるアディクション診療・支援ガイド～アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで, 松本俊彦, 佐久間寛之, 蒲生裕司 編, 文光堂, 東京, pp300-304, 2021.
 - 27) 近藤あゆみ: 第2章2 治療③集団療法 女性を対象とした薬物依存症治療. 第2章3 回復支援② 地域連携 薬物依存症者を持つ家族に対する支援. 依存症のリハビリテーション. やってみたいくなるアディクション診療・支援ガイド～アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで, 松本俊彦, 佐久間寛之, 蒲生裕司 編, 文光堂, 東京, pp248-252, pp288-292, 2021.
 - 28) 近藤あゆみ: 5 家族へのアプローチ. 心理学からみたアディクション (シリーズ〈公認心理師の向き合う精神障害〉3), 横田正夫 監修, 津川律子, 信田さよ子 編, 朝倉書店, 東京, pp220-231, 2021.

(4) 研究報告書

- 1) 松本俊彦, 宇佐美貴士, 熊倉陽介, 高野 歩, 金澤由佳, 堤 史織, 窪田和巳: 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究. 令和3年度厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業(精神障害分野) 再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究(研究代表者 松本俊彦) 総括・分担研究報告書: pp15-86, 2022.
- 2) 松本俊彦, 嶋根卓也, 猪浦智史: SDGs3.5: 日本における物質使用障害の治療介入カバレッジの試算. 令和3年度厚生労働科学研究費補助金(地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業) 国連の持続可能な開発目標 3 (SDG3) - 保健関連指標における日本の達成状況の評価および国際発信のためのエビデンス構築に関する研究(研究代表者: 児玉知子) 令和3年度 分担研究報告書.
- 3) 船田正彦: 危険ドラッグの検出技術開発に関する研究. 令和3年度精神・神経疾患研究開発費「危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究(主任研究者: 船田正彦)」令和3年度実績報告書. 2022.
- 4) 船田正彦: 危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究. 令和3年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグと関連代謝産物の有害作用評価と乱用実態把握に関する研究(研究代表者: 船田正彦)」令和3年度総括・分担研究報告書. pp1-13, 2022.
- 5) 船田正彦: カチノン系化合物の中樞作用とドパミン取り込み阻害作用の関連性. 令和3年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究(研究代表者: 船田正彦)」令和3年度分担研究報告書. pp14-22, 2022.
- 6) 船田正彦: 精神活性物質の迅速検出法ならびに有害作用評価法開発に関する研究. 令和3年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究(研究代表者: 船田正彦)」令和元年度総括・分担研究報告書. pp1-8, 2022.
- 7) 船田正彦: 細胞を利用した有害作用検出法に関する研究. 令和3年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「精神活性物質の迅速検出法ならびに有害作用評価法開発に関する研究(研究代表者: 船田正彦)」令和3年度分担研究報告書. pp 8-14, 2022.
- 8) 嶋根卓也, 猪浦智史, 山口裕貴, 邱 冬梅, 和田 清: 薬物使用に関する全国住民調査(2021年). 令和3年度厚生労働行政推進調査事業費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究(研究代表者: 嶋根卓也)」総括・分担研究報告書. 2022.
- 9) 嶋根卓也, 喜多村真紀, 猪浦智史, 米澤雅子, 引土絵未, 近藤あゆみ, 新田慎一郎, 高岸百合子, : 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究(ダルク追っかけ調査 2021). 厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業) 再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究(研究代表者: 松本俊彦) 令和3年度総括・分担研究報告書. Pp87-126, 2022.
- 10) 嶋根卓也, 猪浦智史: 大麻を乱用する少年における新たな大麻関連製品, 危険ドラッグの乱用実態に関する研究. 令和3年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「危険ドラッグ及び関連代謝産物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究(研究代表者: 船田正彦)」研究報告書. Pp74-93, 2022.
- 11) 近藤あゆみ, 今村扶美, 船田大輔, 米澤雅子, 若林朝子, 嶋根卓也, 常岡俊昭, 松本俊彦: 薬物使用障害の治療転帰に関する個別的要因の影響に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費「薬物使用

障害に対する多様な治療法の開発」(主任研究者:松本俊彦), 令和 3 年度最終実績報告書, 2022.

(5) 翻訳

- 1) 新田慎一郎, 嶋根卓也, 喜多村真紀, 松本俊彦: クリスタルメタンフェタミンプロジェクト (翻訳・編集). 令和 3 年度厚生労働省「依存症に関する調査研究事業」内「ゲイ・バイセクシャル男性の薬物依存症者に対する回復支援に関する研究」2021.

(6) その他

- 1) 松本俊彦, 佐久間寛之: 特集 1 対談 依存症の今. Animus 107 : 3-10, 2021.
- 2) 松本俊彦: 現代社会とメンタルヘルスー包摂と排除—BOOK REVIEW.. 自由と正義 72(7) : 115, 2021.
- 3) 武田裕子, 山中 修, 松本俊彦: 特別企画 座談会「格差時代の医療者の役割とは」. 看護 73(11) : 3-7, 2021.
- 4) 松本俊彦: コロナ禍での覚せい剤依存からの回復—NCNP の調査 再発を招く危険因子は何か?. Be ! 37(3) : 87, 2021.
- 5) 松本俊彦: 待つのが苦手なアディクトたち. Be ! 37(3) : 16-18, 2021
- 6) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか. 翠会ヘルスケアグループ精神医学研究所紀要 7 : 7-12, 2021.
- 7) 松本俊彦: 薬と暴力の世界に引き戻される女たちのリアル. 週刊金曜日 29(33) : 54, 2021.
- 8) 松本俊彦: 【書評】あなたの苦しみを誰も知らない ト라우マと依存症からのリカバリーガイド. 精神療法 47(5) : 677, 2021.
- 9) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. こころの健康だより 132 : 2-3, 2021.
- 10) 松本俊彦: ブックファースト新宿店開店 13 周年記念 名著百選 2021 私が今年, 出会った一冊. ブックファースト新宿店 : 54, 2021.
- 11) 松本俊彦: 【書評】あなたの苦しみを誰も知らない ト라우マと依存症からのリカバリーガイド. ト라우マティック・ストレス 19(2) : 100, 2021.
- 12) 北垣邦彦, 嶋根卓也, 原田 進, 小出彰宏, 中野真衣子: 保護者向け薬物乱用防止パンフレット「ただ一度の過ちが子どもの未来を奪います」一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会, 2022.
- 13) 西岡伸紀, 青山茉衣, 板橋美季, 北垣邦彦, 嶋根卓也, 長谷川弘和, 増田和史: 喫煙, 飲酒, 薬物乱用防止教育に関する指導参考資料 高等学校編, 日本学校保健会, 2022.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 松本俊彦: 【特別講演】アルコールとうつ, 自殺〜「死のトライアングル」を防ぐために. 第 19 回日本旅行医学界大会, オンライン, 2021.4.11.
- 2) 松本俊彦: 【実行委員会特別企画: 先輩に聞く】自殺と自傷. 日本心理臨床学会第 40 回大会, オンライン, 2021.9.5.
- 3) 松本俊彦: 【教育講演 2】最近の薬物関連精神障害の傾向と対策. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.8.19.
- 4) 松本俊彦: 【シンポジウム 23】依存症臨床からみたハームリダクションの必要性. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.8.19.
- 5) 松本俊彦: 【シンポジウム 52】自己破壊的で嗜癖な問題行動とどう向き合うか? —自殺の保護的因子にして危険因子としてのアディクション. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, Web, 2021.8.20.

- 6) 松本俊彦：【委員会シンポジウム 22 (医療倫理委員会)】日本社会精神医学会相模原事件特別委員会の問題意識と活動. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.8.21.
- 7) 松本俊彦：【シンポジウム 3】児童思春期における精神科救急の役割を考える～精神科救急に期待されることはなにか～ 児童・思春期と薬物乱用. 第 29 回日本精神科救急学会学術総会, Web, 2021.10.24.
- 8) 松本俊彦：【シンポジウム】発達障害と薬物依存症. 第 8 回成人発達障害支援学会滋賀大会, 滋賀, 2021.11.7.
- 9) 松本俊彦：【シンポジウム 19】救急医療施設に搬送される市販薬中毒患者の依存・乱用について－他施設共同調査の中間報告－. 第 34 回日本総合病院精神医学界総会, Web, 2021.11.20.
- 10) 松本俊彦：【市民公開講座 I】死のトライアングル－アルコールとうつと自殺. 2021 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.
- 11) 松本俊彦：【共催シンポジウム 10】薬物依存症臨床における最近のトピック. 2021 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.19.
- 12) 松本俊彦：【ランチョンセミナー1】2021 年度版 SMARPP における改訂のポイント～HCV 治療も含めて～. 2021 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.
- 13) 松本俊彦：【相模原事件特別委員会企画シンポジウム】相模原事件を考える～事件を風化させないため. 日本社会精神科学会フォーラム, オンライン, 2022.2.26.
- 14) 松本俊彦：【教育講演 2】薬物依存症臨床における ADHD. 日本 ADHD 学会第 13 回総会, オンライン (動画), 2022.3.6.
- 15) 富山健一, 船田正彦：【シンポジウム】北米における嗜好用大麻の使用実態について. 第 56 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, (オンライン), 2021.12.18.
- 16) 嶋根卓也：【シンポジウム】薬物依存と「選択」のストーリー. シンポジウム 4「薬物の与えるインパクト：選択」. 2021 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.

(2) 一般演題

- 1) Shimane T, Kobayashi M, Takagishi Y, Takahashi M, Takeshita Y, Kondo A, Omiya S, Takano Y, Yamaki M, Matsumoto T: Relationship between drug recidivism and the severity of problems related to drug use among male and female prisoners: A nationwide, cross-sectional survey in Japan. Asian Criminology Society 12th Annual Conference, web, 18-21 June 2021.
- 2) Shimane T: Understanding and support for marijuana using youth in Japan. 2021 International symposium on prevention and counseling of drug abuse for juveniles, Ministry of education, Republic of China (Taiwan), November 11-12 2021.
- 3) Shimane T, Kodama T: SDG3.5 Indicators for prevention and treatment of substance abuse in Japan. The 80th Annual Meeting of Japanese Society of Public Health, Tokyo (web), December 21-23 2021.
- 4) 引土絵未, 嶋根卓也, 小高真美, 秋元恵一朗, 加藤 隆, 栗栖次郎, 栗坪千明, 山村りつ, 吉野美樹, 松本俊彦: 依存症者の就労支援に関する研究: 就労支援機関を対象とした依存症者の就労に関する実態および意識調査. 2021 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.
- 5) 猪浦智史, 嶋根卓也, 近藤あゆみ, 米澤雅子, 松本俊彦: 回復支援施設におけるアルコール依存症者の予後に関する研究. 2021 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.
- 6) 高野 歩, 大野昂紀, 野沢恭介, 松本俊彦, 松下幸生, 湯本洋介, 小貫真希, 妙圓園香苗, 佐藤牧人, 瀬々 潤: モバイルデバイスを用いたアルコール・薬物使用リアルタイムデータ収集と介入プ

- プログラムの開発. 21 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.
- 7) 喜多村真紀, 嶋根卓也, 服部真人, 高橋 哲, 竹下賀子, 小林美智子, 松本俊彦: 薬物使用のトリガーとしての月経前症状と薬物関連問題重症度の関係について. 21 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.19.
 - 8) 嶋根卓也, 高橋 哲, 小林美智子, 高岸百合子, 竹下賀子, 近藤あゆみ, 大宮宗一郎, 高野洋一, 山木麻由子, 服部真人, 松本俊彦: 覚醒剤事犯者の危険な性行動および覚醒剤の使用動機. 第 35 回日本エイズ学会学術集会, オンライン, 2021.11.21-12.20.
 - 9) 喜多村真紀, 平間さゆり, 山田早苗, 小島秀吾: 刑務所出所者の職場定着に関する心理面接について—Good Lives Model による考察の試み. 第 58 回日本犯罪学会総会, オンライン, 2021.11.27
 - 10) 喜多村真紀, 森田展彰: 更生保護施設に入所する薬物関連問題を持つ女性の回復プロセス. 第 58 回日本犯罪学会総会, オンライン, 2021.11.27
 - 11) 森田展彰, 喜多村真紀: 更生保護施設の薬物事犯者における入所時から退所時の回復状況—刑の一部執行猶予制度の対象者と非対象者の違いを中心に. 第 58 回日本犯罪学会総会, オンライン開催, 2021.11.27

(3) 研究報告会

- 1) 松本俊彦: 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究. 令和 3 年度厚生労働科学研究費補助金 (松本班) 研究成果報告会, Web, 2022.3.11.
- 2) 嶋根卓也: 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究. 令和 3 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) 「再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究」研究成果報告会 (オンライン), 東京, 2022.3.11.
- 3) 嶋根卓也: 薬物使用に関する全国住民調査 (2021 年). 「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」令和 3 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 研究成果報告会 (オンライン), 東京, 2022.3.11.
- 4) 嶋根卓也, 高橋 哲, 小林美智子, 高岸百合子, 竹下賀子, 近藤あゆみ, 大宮宗一郎, 高野洋一, 山木麻由子, 服部真人, 松本俊彦: 覚醒剤事犯者の理解とサポート—法務総合研究所との共同研究. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 3 年度 研究報告会, 東京, 2022.3.28.
- 5) 喜多村真紀, 嶋根卓也, 近藤あゆみ, 服部真人, 高橋 哲, 竹下賀子, 小林美智子, 松本俊彦: 月経前症状が薬物依存のトリガーとなる女性の特徴について—全国の刑務所における「薬物事犯者に関する研究」より. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 3 年度 研究報告会, 東京, 2022.3.28.

C. 講演

- 1) 松本俊彦: オピオイド治療における諸問題とその対策. 久光製薬株式会社主催 慢性疼痛オンラインパネルディスカッション, オンライン, 2021.4.16.
- 2) 松本俊彦: 薬物乱用防止について. 昭島市立昭和中学校主催 薬物乱用防止教室, 東京, 2021.5.19.
- 3) 松本俊彦: STEP12 「メッセージ」. 特定非営利活動法人 ジャパンマック PD デイケアセンター主催 第 19 回 RD デイケアセンターオンラインセミナー, Web, 2021.5.22.
- 4) 松本俊彦: 薬物依存と支援を理解するために. ソーシャルワークを「学ぶ会」ネットワーク福山主催 市民の為の精神保健福祉講座・薬物依存を知り希望がもてる対応を考える講演会, オンライン, 2021.5.30.
- 5) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか〜コネクションの対義語としてのアディクション〜. 公益社団法人日本医療ソーシャルワーカー協会主催 第 69 回公益社団法人日本医療ソーシャルワーカー協会全国大会, Web, 2021.6.6.

- 6) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺～死のトライアングルを避けるために～．大塚製薬株式会社主催 Otsuka Web Seminar, Web, 2021.6.7.
- 7) 山中修, 松本俊彦：格差時代の医療者の役割. 株式会社日本看護協会出版社主催 「格差社会の医療と社会的処方」刊行記念鼎談, 東京, 2021.6.9.
- 8) 松本俊彦：薬物依存症からの回復に必要なもの うつ・自殺. 大塚製薬株式会社主催 第3会千葉 young psychiatrist conference, 千葉, 2021.6.18.
- 9) 松本俊彦：薬物乱用の現状について. 株式会社笑下村塾主催 笑下村塾オンラインサロン, Web, 2021.6.21.
- 10) 松本俊彦：トラウマを抱える女性依存症の治療. 大塚製薬株式会社主催 第9回 Soul Joy MarmaLade Meeting, Web, 2021.6.24.
- 11) 松本俊彦：アルコールとうつ, 自殺～死のトライアングルを防ぐために. NPO 法人メンタルレスキュー協会主催 公開講座, 東京, 2021.7.3.
- 12) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか～回復のために必要なもの. 長野県公認心理師・臨床心理士協会主催 第3回大会, Web, 2021.7.4.
- 13) 松本俊彦：自傷行為を行う子どもへの支援. 静岡教職員組合駿東支部主催 養護教員部学習会, Web, 2021.7.7.
- 14) 松本俊彦：思春期の飲酒・喫煙・薬物の使用・依存の疫学・思春期の実態と思春期での調査実態に配慮すべき調査設計や倫理的事項について. 国立研究開発法人国立成育医療研究センター主催 勉強会, Web, 2021.7.9.
- 15) 松本俊彦：自傷行為とその対応について. 文部科学省初等中等教育局主催 児童生徒の自殺予防に関する普及啓発協議会, Web, 2021.7.16.
- 16) 松本俊彦：向精神薬乱用・依存を防ぐために精神科医にできること. 大塚製薬株式会社主催 アディクションからの回復を考える会, 京都, 2021.7.31.
- 17) 松本俊彦：自分を傷つけずにいられない子どもたちー自傷行為の理解と対応ー. 特定非営利活動法人OVA主催 若年者の自傷にかかる講演会, Web, 2021.8.17.
- 18) 松本俊彦：薬物依存発症を避けるためのポイント. 塩野義製薬株式会社主催 シオノギ Web カンファレンス, Web, 2021.8.22.
- 19) 松本俊彦：重複障害を伴う物質使用障害の理解と援助. 大塚製薬株式会社広島支店主催 大塚製薬 Web セミナー, Web, 2021.8.24.
- 20) 松本俊彦：学生の自殺予防について. 日本大学工学部主催 FD・SD 講演会, Web, 2021.8.27.
- 21) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか～薬物依存症を抱える女性の回復に必要なもの. 一般社団法人日本フォレンジック看護学会, Web, 2021.8.28.
- 22) 松本俊彦：自傷と自殺. 特定非営利活動法人よこはまチャイルドライン主催 子ども支援者連続講座, オンライン, 2021.9.11.
- 23) 繆英長, 岸英光, 松本俊彦：弱さがあっても怖さがいない社会をつくる. コミュニケーショントレーニングネットワーク主催 CTN スペシャル対談, オンライン, 2021.9.23.
- 24) 松本俊彦：アディクション：人はなぜ依存症になるのか～医療者の内なるスティグマと向き合う～. 一般社団法人日本精神科看護協会主催 一般講演会, Web, 2021.9.26.
- 25) 松本俊彦：もしも「死にたい」と言われたら～自殺企図・自殺未遂者の受けとめと対応～. 多摩市立関戸公民館主催 現代課題講座, 東京, 2021.10.3.
- 26) 松本俊彦：もしも「死にたい」と言われたら～人はなぜ自殺を考えるのか？そのとき、私たちにできることは？. 三鷹市三鷹駅周辺地域包括支援センター主催 三鷹駅周辺地区高齢者地域支援連絡会, オンライン, 2021.10.6.
- 27) 松本俊彦：自傷・自殺する子どもたち. 児童養護施設星美ホーム主催 講演会, オンライン, 2021.10.8.

- 28) 松本俊彦：思春期と自傷・自殺．一般社団法人日本家族計画協会主催 第 60 回思春期保健セミナー，オンライン，2021.10.13.
- 29) 松本俊彦：不安・不調からアディクション 診療や処方薬，これだけは知っておきたい～精神医療のゴン攻め 松本に聞く．日本アノレキシア・ブリアミア協会主催 NABA オンラインセミナー，オンライン，2021.10.17.
- 30) 松本俊彦：近年の精神科医療における依存症の動向～コロナ禍でおきた依存症全般の変化～．一般社団法人創精会松山記念病院主催 依存症治療拠点機関における講演会，Web，2021.10.22.
- 31) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか？．大塚製薬株式会社主催 西北五地区精神医会，Web，2021.10.22.
- 32) 松本俊彦：アルコールとうつ，自殺～死のトライアングルを避けるために～．大塚製薬株式会社主催 Kyushu Special Lecture Online，福岡，2021.10.26.
- 33) 松本俊彦：「孤立の病」としての薬物依存症．津田塾大学主催 総合 2021，オンライン，2021.10.28.
- 34) 松本俊彦，石戸諭，川端裕人：「世界一やさしい依存症入門」について．合同会社ゲンロンカフェ主催 トークイベント，東京，2021.10.29.
- 35) 松本俊彦：著書「誰がために医師はいる」に込めた思い．NPO 法人さざなみ会 KP 神奈川精神医療人権センター主催 講演会，神奈川，2021.10.31.
- 36) 松本俊彦：薬物依存症予防のために心に留めておくこと．順天堂大学ペインクリニック主催 ペインカンファレンス，Web，2021.11.1.
- 37) 松本俊彦：「ダメ。ゼッタイ。」ではダメ～薬物乱用防止教育に求められるもの．公益社団法人茨城県薬剤師会主催 令和 3 年度茨城県学校薬剤師講演会，Web，2021.11.2.
- 38) 松本俊彦：孤立の病としての依存症．株式会社エムアンドエムドットコー主催 アルコール健康障害と薬物依存症を考えるフォーラム in 鳥取，Web，2021.11.3.
- 39) 松本俊彦：生徒が「死にたい」という時～子どもの「死にたい」気持ちを考える．神奈川県私立中学高等学校協会主催 協会研究部教育相談部会講演会，神奈川，2021.11.5.
- 40) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺～死のトライアングルを避けるために～．大塚製薬株式会社主催 Otsuka CNS Conference．神奈川，2021.11.10.
- 41) 松本俊彦：人はなぜ薬物依存症になるのか？．MeijiSeika ファルマ主催 第 26 回コンサルテーションリエゾン精神薬学研究会，オンライン，2021.11.12.
- 42) 松本俊彦：児童生徒のメンタルヘルスと，学校・家庭・地域の役割について．帯広市教育委員会学校教育部学校教育室学校教育課主催 第 68 回北海道学校保健・安全研究大会，Web，2021.11.14.
- 43) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～虐待・暴力が子どもに与える影響～．特定非営利活動法人おきなわ CAP センター主催 令和 3 年度沖縄県子ども虐待防止推進事業による啓発講演会，Web，2021.11.23.
- 44) 松本俊彦：患者のうつ状態といかに向き合うか 薬物乱用・依存を作らない診療を目指して．持田製薬株式会社主催 メンタルヘルスセミナー，Web，2021.11.25.
- 45) 松本俊彦：心の病気について．特定非営利活動法人東京ソテリア主催 精神疾患を持つ親とその子どもの家族まるごと支援事業シンポジウム，Web，2021.11.28.
- 46) 松本俊彦：悩みを抱えつつより良く生きるには～自分を傷つけるのは悪いこと？～．青山学院大学学生相談センター主催 講演会，東京，2021.12.1.
- 47) 松本俊彦：薬物乱用防止教育で伝えたいこと「ダメ。ゼッタイ。」ではダメ．東海大学経営学部・基盤工学部主催 2021 年度東海大学経営学部・基盤工学部合同 FD 研究会，オンライン，2021.12.3.
- 48) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない．一般社団法人宮崎県助産師会主催 健やか妊娠サポート事業第 2 回講演会，オンライン，2021.12.12.
- 49) 松本俊彦：死にたいと考えたことがある君へ，かかわるあなたへ～コロナ禍の日常の中で贈る言葉．こころのフェスティバル実行委員会主催 第 41 回こころのフェスティバル，オンライン，

2021.12.15.

- 50) 松本俊彦：クリニック外来で薬物依存、違法薬物使用の疑いのある患者を診た時の対応。日本医事新報社主催 Web 医事新報チャンネル、オンライン、2022.1.12.
- 51) 松本俊彦：自傷・自殺する子どもたち。東大阪市教育委員会主催 第55回東大阪市学校園保健会講演会、Web（動画）、2022.1.21.
- 52) 松本俊彦：思春期の心の問題・特に薬物依存について。滋賀小児科医会主催 令和3年度滋賀小児科医会・定期学術講演会、オンライン、2022.1.30.
- 53) 松本俊彦：LGBTQ と依存症。カラフル@ハート主催 オンライン講演会、オンライン、2022.2.6.
- 54) 松本俊彦：社会の問題としての依存症。特定非営利活動法人 東京ソテリア主催 新しい社会的企業（ソーシャルファーム）の実現に向けて日本で働く外国人のメンタルヘルスについて考える(1) 社会の問題としての依存症について、オンライン、2022.2.8.
- 55) 松本俊彦：自傷行為の理解と対応、自殺ハイリスク者の理解と対応。社会福祉法人はりまいのちの電話主催 講演会、オンライン、2022.2.11.
- 56) 松本俊彦：薬物依存症をもつ人を地域で支える。東京大学医学附属病院精神神経科主催 東京大学職域・地域架橋型価値に基づく支援者育成 C コース、オンライン、2022.2.19.
- 57) 松本俊彦：誰もが自分らしくいられる優しい社会を目指して 自傷行為や摂食障害、希死念慮等がある若者とどのようにかわるか。一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト主催 設立10周年記念講演会、オンライン（動画）、2022.2.23.
- 58) 松本俊彦：孤立の病としての依存症。特定非営利活動法人いちごの会主催 講演会 生きづらさを抱える子どもたち、オンライン、2022.2.27.
- 59) 松本俊彦：市販薬や処方薬への依存・乱用の実態と対処～治療者側の意識変革に向けて～。大塚製薬株式会社広島支店主催 アディクションからの回復を考える会、オンライン、2022.3.2.
- 60) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか～コロナ禍でみえてきたもの～。吉富薬品株式会社主催 愛知県女性精神科医の会 Web セミナー、オンライン、2022.3.4.
- 61) 松本俊彦：援助希求力が低下している人の理解と、そのアプローチについて。山梨県立大学看護学部主催 ポスト医ゼミ in 山梨、オンライン、2022.3.6.
- 62) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺～死のトライアングルを避けるために～。大塚製薬株式会社主催 Otsuka CNS Conference、東京、2022.3.8.
- 63) 松本俊彦：依存症について。特定非営利活動法人とかちダルク主催 とかちダルク法人設立10周年記念フォーラム、北海道、2022.3.12.
- 64) 松本俊彦：自傷・依存症の理解と援助。チャイルドライン中野子ども電話主催 公開講演会、オンライン、2022.3.15.
- 65) 松本俊彦：臨床からみた TJ。成城大学治療的司法研究センター主催 学生サポーター懇談会、オンライン、2022.3.17.
- 66) 松本俊彦：コロナ禍における子どもメンタルヘルス問題について～自傷・自殺を中心に。日本学校メンタルヘルス学会主催 第49回セミナー講演会、オンライン、2022.3.21.
- 67) 松本俊彦：薬物依存症と ADHD。武田薬品工業株式会社主催 ND Symposium～「依存症」を Keyword に、東京、2022.3.24.
- 68) 松本俊彦：コロナ禍における子どもの自傷・自殺。武田薬品工業株式会社主催 孤立・孤独・自殺対策についての地域連携を考える 講演会、オンライン、2022.3.26.
- 69) 嶋根卓也：薬物乱用防止のお話：あなたとあなたの大切な人を守るために。横須賀市立衣笠中学校、オンライン、2021.6.24.
- 70) 嶋根卓也：薬物乱用防止のお話：あなたとあなたの大切な人を守るために。横須賀市立大津中学校、オンライン、2021.6.24.
- 71) 嶋根卓也：薬物乱用防止のお話：あなたとあなたの大切な人を守るために。横須賀市立不入斗中

学校，オンライン，2021.6.30.

- 72) 嶋根卓也：薬物乱用防止のお話：あなたとあなたの大切な人を守るために．横須賀市立鴨居中学校，オンライン，2021.6.30.
- 73) 嶋根卓也：思春期の飲酒・喫煙・薬物の使用・依存の疫学・思春期の実態と思春期の調査実施に向けて配慮すべき調査設計や倫理的事項について．国立成育医療研究センターエコチル調査研究会，オンライン，2021.7.9.
- 74) 嶋根卓也：薬物依存症の理解と支援．日本橋医師会学術講演会，オンライン，2021.7.14.
- 75) 嶋根卓也：薬物防止教育．白梅学園大学保健センター講演会，東京，2021.9.21.
- 76) 嶋根卓也：薬物依存症の理解とサポート：ゲートキーパーとしての薬剤師．日本緩和医療薬学会第25回教育セミナー，オンライン，2021.10.6.
- 77) 嶋根卓也：薬物依存症のエキスパートが語る依存症治療の最前線．日本教育財団2021年度医療スペシャルゼミ（特別講義），東京，2021.10.8.
- 78) 嶋根卓也：青少年の薬物乱用事案の現状と学校における薬物乱用防止教室の在り方について．滋賀県健康医療福祉部 滋賀県教育委員会主催 滋賀県薬物乱用防止教育指導者講習（オンデマンド配信），2021.10.26-11.30.
- 79) 嶋根卓也：依存症からの回復．多文化・国際協力の実践（3），津田塾大学学芸学部多文化・国際協力学科，オンライン，2021.11.1.
- 80) 嶋根卓也：薬物問題を抱えた人の理解とサポート．大阪府健康医療部主催 令和3年度大阪府麻薬覚醒剤等対策本部啓発対策部会，大阪，2021.12.14.
- 81) 嶋根卓也：医薬品乱用・依存の理解とサポート．愛媛大学医学部附属病院における医療安全に関する講演会，オンライン，2022.1.6.
- 82) 嶋根卓也：コロナ渦における薬物依存．令和3年度都道府県等依存症専門医療機関・相談員等合同全国会議，オンライン，2022.1.28.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 松本俊彦：日本社会精神医学会 評議員
- 2) 松本俊彦：日本精神科救急学会 理事
- 3) 松本俊彦：日本青年期精神療学会 理事
- 4) 松本俊彦：日本司法精神医学会 評議員
- 5) 船田正彦：日本アルコール・アディクション医学会 評議員
- 6) 船田正彦：日本神経精神薬理学会 評議員
- 7) 船田正彦：日本薬理学会 評議員
- 8) 嶋根卓也：日本アルコール・アディクション医学会 評議員
- 9) 近藤あゆみ：日本アルコール・アディクション医学会 理事

(3) 座長

- 1) 松本俊彦：【座長】シンポジウム23 ハームリダクションの理念とわが国における可能性と課題～HIV/AIDS 支援と薬物依存症臨床から考える～．第117回日本精神神経学会学術総会，京都，2021.8.19.
- 2) 松本俊彦：【座長】シンポジウム3 児童思春期における精神科救急の役割を考える～精神科救急に期待されることはなにか～．第29回日本精神科救急学会学術総会，Web，2021.10.24.
- 3) 松本俊彦：【相模原事件特別委員会企画シンポジウム座長】相模原事件を考える～事件を風化さ

せないため、日本社会精神科学会フォーラム、オンライン、2022.2.26.

- 4) 嶋根卓也：【座長】シンポジウム 19「救急医療施設に搬送される市販薬中毒患者の依存・乱用について—多施設共同調査の中間報告—」. 第 34 回日本総合病院精神医学界総会, Web, 2021.11.19-20.
- 5) 嶋根卓也：【座長】シンポジウム 4「薬物の与えるインパクト：選択」. 2021 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.
- 6) 嶋根卓也：【座長】一般演題（口演）5「行動嗜癖をめぐって」. 2021 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 松本俊彦：日本青年期精神療学会 編集委員
- 2) 嶋根卓也：日本アルコール・アディクション医学会 編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 松本俊彦：薬物依存症と重複障害. 令和 3 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物）, オンライン, 2021.7.20.
- 2) 松本俊彦：薬物問題に関連する法律. 令和 3 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物）, オンライン, 2021.7.20.
- 3) 松本俊彦：薬物依存症臨床総論. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 34 回薬物依存臨床医師研修および第 22 回薬物依存臨床看護等研修会, オンライン, 2021.9.8.
- 4) 松本俊彦：SMARPP の理念と意義. 国立精神・神経医療研究センター主催 第 13 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修, オンライン, 2021.11.15.
- 5) 松本俊彦：SMARPP の実際. 国立精神・神経医療研究センター主催 第 13 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修, オンライン, 2021.11.15.
- 6) 松本俊彦：薬物依存症臨床における司法的問題への対応. 国立精神・神経医療研究センター主催 第 13 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修, オンライン, 2021.11.16..
- 7) 松本俊彦：自傷・自殺のリスク評価と対応. 2021 年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 依存症回復支援職員研修・薬物依存症回復施設職員研修, オンライン, 2022.2.22.

(2) 研修会講師

- 1) 松本俊彦：アルコールとうつ、自殺（労働者を対象に）～死のトライアングルを防ぐために. 一般社団法人世田谷区医師会主催 産業医研修会, 東京, 2021.4.13.
- 2) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか. 三重県臨床心理士会主催 公開研修会, オンライン, 2021.6.13.
- 3) 松本俊彦：依存症とうつ・自殺, コロナ禍のメンタルヘルスについて. 熊本県精神科協会学術委員会主催 熊本県精神科協会学術院委員コ・メディカル部会研修会, オンライン, 2021.6.15.
- 4) 松本俊彦：東京ソテリアの支援事業について. 特定非営利活動法人東京ソテリア主催 支援職向け研修会, 東京, 2021.7.13.
- 5) 松本俊彦：自傷・自殺する子どもたち. NPO 法人チャイルドライン支援センター中国・四国エリア主催 研修会, オンライン, 2021.7.19.
- 6) 松本俊彦：「助けて」が言えない～自傷・自殺する子どもたち～. 神奈川県教育委員会教育局中教育事務所主催 令和 3 年度第 2 回中地区社会教育人権教育研修会, オンライン, 2021.7.28.

- 7) 松本俊彦: 生きることとアディクション～トラウマ, 自傷, 薬物依存～. 一般社団法人日本臨床心理師会主催 第9回アディクション心理臨床研修会, オンライン, 2021.8.1.
- 8) 松本俊彦: 覚せい剤依存症と医療. 法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第53回研修(通信研修), 東京, 2021.8.13.
- 9) 松本俊彦: 矯正施設における自殺・自傷への対応. 法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第53回研修(通信研修), 東京, 2021.8.13.
- 10) 松本俊彦: 「死にたい」にあなたはどうか向き合うか～それでも「生きる道」を選べるように～. 長野県精神保健福祉センター主催 令和3年度自殺企図者支援関係者オンライン研修会, オンライン, 2021.8.24.
- 11) 松本俊彦: SMARPPの理念と意義. 法務省矯正局主催 薬物依存対策研修, オンライン(動画), 2021.8.31.
- 12) 松本俊彦: SMARPPの実際・ビデオ学習. 法務省矯正局主催 薬物依存対策研修, オンライン(動画), 2021.8.31.
- 13) 松本俊彦: 自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助. 三重県こころの健康センター主催 令和3年度自殺未遂者支援研修会, オンライン, 2021.9.14.
- 14) 松本俊彦: 薬物依存症からの回復とはーアディクションからコネクションへの転換ー. 滋賀県立精神保健福祉センター主催 令和3年度アディクション関連問題従事者研修会, オンライン, 2021.9.15.
- 15) 松本俊彦: 大学生に見られるアディクション問題の理解と対応. 日本学生相談学会主催 第59回全国学生相談研修会, オンライン, 2021.11.21.
- 16) 松本俊彦: 依存症を知る～人はなぜ依存症になるのか・回復への道を考える～. 福島県相双保健福祉事務所主催 令和3年度相双保健福祉事務所精神障がい者地域生活移行理解促進研修会, オンライン, 2021.12.8.
- 17) 松本俊彦: 社会問題としての依存症～コロナの影響と解決への糸口～. 中・西播磨地区精神保健福祉連絡協議会主催 中・西播磨地区精神保健福祉連絡協議会研修会, オンライン, 2021.12.8.
- 18) 松本俊彦: 自殺・自傷の理解. 法務省矯正研修所主催 令和3年度専門研修課程調査鑑別科(特別課程)研修, 東京, 2021.12.10.
- 19) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 一般社団法人日本いのちの電話連盟主催 いのちの電話自死遺族支援合同研修会, オンライン, 2021.12.26.
- 20) 松本俊彦: 自傷行為等への対応～医療との連携の仕方やケースや家族への関わり～. 東京都児童相談センター主催 令和3年度中上級児童心理司研修, オンライン, 2022.1.14.
- 21) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 公益社団法人富山県医師会主催 DV被害者対応のための医療機関向け研修会, オンライン, 2022.1.14.
- 22) 松本俊彦: 孤立の病としての依存症～アディクションの対義語はコネクション. 一般社団法人東京都医療ソーシャルワーカー協会主催 医療ソーシャルワーカー養成のための研修, オンライン, 2022.1.16.
- 23) 松本俊彦: 認知行動療法を用いた薬物依存症に対する集団療法の理念と意義. 肥前精神医療センター主催 令和3年度依存症に対する集団療法に係る研修, オンライン, 2022.1.19.
- 24) 松本俊彦: 自殺・事故とMDT対応. 独立行政法人肥前精神医療センター主催 北海道大学病院医療観察法病棟開棟に伴う研修, オンライン, 2022.1.21.
- 25) 松本俊彦: 自傷・自殺する子どもたち. 特定非営利活動法人チャイルドライン支援センター主催 子どもの自死予防のための研修, オンライン, 2022.1.23.
- 26) 松本俊彦: 「ダメ。ゼッタイ。」で終わらない薬物乱用防止教育のあり方. 公益社団法人広島県薬剤師会主催 令和3年度広島県学校薬剤師研修会及び広島県薬剤師会薬事衛生指導員講習会, Web, 2022.1.30.

- 27) 松本俊彦：薬物依存者の治療および支援。法務総合研究所主催 第 56 回保護局関係職員高等科研修，オンライン，2022.2.1.
- 28) 松本俊彦：コロナ禍における現代の若者の生きづらさ～自傷・自殺を中心に～。浄土真宗本願寺派東京教区教務所主催 東京教区冬季僧侶寺族研修会，オンライン，2022.2.9.
- 29) 松本俊彦：青少年の自傷・自殺と薬物乱用・依存。日本臨床発達心理士会兵庫支部主催 第 3 回研修会，オンライン，2022.2.13.
- 30) 松本俊彦：孤立と依存。国立病院ソーシャルワーカー協議会主催 第 11 回国立病院ソーシャルワーカー協議会九州支部研修会，オンライン，2022.2.20.
- 31) 松本俊彦：グループ研修スーパーバイザー。特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 東京自殺相談ダイヤル・夜間こころの電話相談相談員グループ研修，東京，2022.3.13.
- 32) 松本俊彦：薬物依存と自傷。公益社団法人東京社会福祉士会主催 自殺予防ソーシャルワーク研修，オンライン，2022.3.20.
- 33) 松本俊彦：自傷行為の理解と対応。一般社団法人福岡県ソーシャルワーカー協会主催 研修，オンライン，2022.3.23.
- 34) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助。高知県臨床心理士会主催 令和 4 年度新人研修会，オンライン，2022.3.27.
- 35) 嶋根卓也：人間と薬学。東京薬科大学薬学部講義，東京，2021.5.17.
- 36) 嶋根卓也：薬物使用と感染症（HIV・肝炎）。令和 3 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），オンライン，2021.7.19-20.
- 37) 嶋根卓也：大麻乱用少年の理解とサポート。福岡県医療介護部薬務課主催 令和 3 年度少年用大麻乱用防止プログラム研修会，オンライン 2021.8.2.
- 38) 嶋根卓也：薬物乱用・依存の疫学。2021 年度薬物依存臨床医師研修・薬物依存臨床看護等研修，オンライン，2021.9.8-10.
- 39) 嶋根卓也：民間回復支援施設の活動と課題。2021 年度薬物依存臨床医師研修・薬物依存臨床看護等研修，オンライン，2021.9.8-10.
- 40) 嶋根卓也：臨床研究・予防医学実践論。岡山大学大学院医歯薬総合研究科講義，オンライン，2021.9.18.
- 41) 嶋根卓也：現代の健康課題である薬物依存について。児童・生徒の健康課題とその理解。東京都教職員研修センター主催 専門性向上研修，東京，2021.10.15.
- 42) 嶋根卓也：薬物問題を抱えた子どもたちの理解と支援。令和 3 年度長野県薬物乱用防止教育研修会，オンライン，2021.10.18.
- 43) 嶋根卓也：医療プロフェッショナルリズム。東京薬科大学薬学部講義，東京，2021.11.15.
- 44) 嶋根卓也：薬物乱用・依存の疫学。国立精神・神経医療研究センター主催令和 3 年度認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2021.11.15-16.
- 45) 嶋根卓也：薬物問題を抱えた子どもたちの理解とサポート：大麻と市販薬。令和 3 年度日本薬剤師会主催 学校薬剤師部会 くすり教育研修会「学校におけるくすり教育の現状と課題」，オンライン，2022.2.6.
- 46) 嶋根卓也：薬物関連問題にまつわる諸課題について。日本女子大学主催 薬物依存症者の就労支援研修，オンライン，2022.2.18.
- 47) 嶋根卓也：薬物依存症と性的マイノリティ・HIV 感染症。令和 3 年度薬物依存症回復施設職員研修，オンライン，2022.2.22-23.
- 48) 嶋根卓也：薬物依存と自殺リスク 薬剤師による気づき・関わり・つながり。兵庫県薬剤師会主催 第 4 回薬剤師のための自殺ハイリスク者対応力向上研修，オンライン，2022.3.13.
- 49) 嶋根卓也：医薬品に依存する人たちの理解とサポート ゲートキーパーとしての薬剤師。長崎県薬剤師会主催 うつ病支援体制強化薬剤師研修事業研修会，オンライン，2022.3.15.

- 50) 嶋根卓也：薬物依存症に関する近年の傾向：医薬品の乱用・依存. 福岡県医療介護部薬務課主催 令和3年度少年用大麻乱用防止プログラム研修会（第2回），オンライン，2022.3.22.

F. その他

- 1) 松本俊彦：アルコール依存とストロング問題について. TBS ラジオ「森本毅郎スタンバイ」，2021.5.12.
- 2) 松本俊彦：もしかして予備軍 ギャンブル依存症になる前に. NHK ラジオ第一「NHK ジャーナル」，2021.5.13.
- 3) 松本俊彦：コロナ禍での子どもたちの精神的リスクや市販薬乱用について. NHK「おはよう首都圏」，2021.5.31.
- 4) 松本俊彦：子どもの自殺過去最多 夏休み明けコロナ禍でどう防ぐ？. NHK ニュース，2021.8.26.
- 5) 松本俊彦：【特集】子ども不登校 自殺過去最多. NHK「まるっと！」，2021.10.13.
- 6) 松本俊彦：SDGs 全ての人に健康と福祉を 薬物依存. NHK「きょうの健康」，2021.11.10.
- 7) 松本俊彦：若者の自殺防止の現状とその対策. NHK ラジオ国際放送「悩める若者たちへの応援歌 6～自殺の問題，考えてみませんか」，2021.12.29.
- 8) 松本俊彦：なぜ，精神科医となったのか. TBS ラジオ「萩上チキ・Session」，2022.1.12.
- 9) 松本俊彦：若者に広がるオーバードーズの実態について. NHK「おはよう日本」，2022.1.13.
- 10) 松本俊彦：若者に広がる批判訳の過剰摂取. NHK ラジオ第1「三宅民夫のマイあさ！」，2022.2.22.
- 11) 松本俊彦：コロナ化で増加する若者のオーバードーズ. テレビ朝日インターネット番組「ABEMA Prime」，2022.2.24.
- 12) 香山リカ，松本俊彦：この1年間の女性の自殺増加にどんな背景があるのか. 三浦春馬 死を超えて生きる人. 下巻「創」編集部，2021.4.5.
- 13) 松本俊彦：コロナ禍の”連休明けがつらい”子どもたち周囲の大人ができること. NHKWeb リポート，2021.5.4.
- 14) 松本俊彦：人間賛歌と鋭い問い掛け 「誰がために医師はいる」. 熊本日日新聞，2021.5.31.
- 15) 松本俊彦：薬物依存症の家族支える 自助の会2年 回復へ孤立防ぐ. 朝日新聞，2021.6.4.
- 16) 松本俊彦：真の薬物対策とは痛みを抱えた人の支援. 週刊エコノミスト，2021.6.29.
- 17) 嶋根卓也，舩田正彦，松本俊彦：厚労省 大麻等薬物対策のあり方検討会 大麻から製造の医薬品の施用が可能に 具体化に向けて法改正へ. (週刊) 病院新聞，2021.7.1.
- 18) 松本俊彦：心の苦痛逃れたくて 居場所見つけ，孤立感軽減. 新潟日報，2021.7.7.
- 19) 松本俊彦：「アプリ制限」「あえて放置」 依存者会 第1部 スマホ. 読売新聞，2021.7.14.
- 20) 松本俊彦：「ダメ。ゼッタイ。」はダメなのか？薬物乱用防止の標語で意見対立，反対派・擁護派に聞く. JIJI.COM，2021.7.13.
- 21) 松本俊彦：依存社会 息子の暴言・暴力疲れ果て. 読売新聞，2021.8.6.
- 22) 松本俊彦：依存社会 現実に居場所 回復へ一歩. 読売新聞，2021.8.12.
- 23) 松本俊彦：夏休み明け子どものサイン 「TALKの原則」で対応を. 東京新聞，2021.8.22.
- 24) 松本俊彦：命絶つ子ども増 夏休み明けは特に注意，異変のサインを見逃さないで#今つらいあな. 不登校新聞，2021.8.29.
- 25) 松本俊彦：「生きるのがつらい」10代へ コロナ禍のもと行き場を失う若者たち出口はきっとあるよ. しんぶん赤旗，2021.9.12.
- 26) 松本俊彦：必要なのは「ダメ。ゼッタイ。」ではなく、「やっちゃった」と打ち明けられる社会. 薬物依存症治療のパイオニアが，患者たちに教えられた多くのこと. 週刊プレイボーイ，2021.9.13.
- 27) 松本俊彦：「よわいはつよい」大人も子どもも“助けて”が言えますように. NHK News web，2021.9.14.

- 28) 松本俊彦：<法廷の窓> 魔手に引きずり込まれた半生，ある「ロクデナシ」の決意．中日新聞，2021.9.24.
- 29) 松本俊彦：依存症治療のオーソリティー松本俊彦医師が語る 芸能人もハマる薬物依存の偏見．日刊ゲンダイ，2021.10.2.
- 30) 松本俊彦：SDGs 全ての人に健康と福祉を 薬物依存症．NHK きょうの健康 11月号 404：50-53，2021.10.21.
- 31) 松本俊彦：「世界一やさしい依存症入門 やめられないのは誰のせい？」治療の現場にいる医師が伝えたいこと．婦人公論，2021.10.26.
- 32) 松本俊彦：死にたい・・・お酒で息抜きのつもりが地獄の入り口でした．週刊女性，2021.11.16.
- 33) 松本俊彦：救いを求め "TikTok 動画の聖地" 歌舞伎町に集うも・・・市販薬乱用で「パキる」10代が急増中 「トー横キッズ」を包む闇．Weekly プレイボーイ，2021.11.15.
- 34) 松本俊彦：なぜネズミは依存症から抜け出せたのか？ 薬物よりも魅力的なもの．日本公演新聞，2021.11.15.
- 35) 松本俊彦：押さえられぬ飲酒欲求「アルコール依存症」犯罪誘発．佐賀新聞，2021.11.21.
- 36) 松本俊彦：断薬ありきの治療 転換 服薬責めず寄り添う．読売新聞，2021.11.25.
- 37) 松本俊彦：市販薬乱用 若者で深刻 ネットで広がり依存症も．中日新聞，2021.12.21.
- 38) 松本俊彦：市販薬乱用 若者で深刻 ネットで広がり依存症も．東京新聞，2021.12.21.
- 39) 松本俊彦：救いの依存症と救いからの脱皮．コトノネ 47：24-29，2022.2.20.
- 40) 松本俊彦：エナジードリンク飲みすぎに注意．読売新聞夕刊，2022.2.5.
- 41) 松本俊彦，田中紀子，今成知美：座談会 知らなかった？SDGsはこんなに依存症支援とつながってる！．Be！，2022.3.10.
- 42) 嶋根卓也：一般用医薬品による薬物依存の実態．週刊医学界新聞，2021.2.15.
- 43) 嶋根卓也：厚労省 大麻等薬物対策のあり方検討会「大麻から製造の医薬品の施用が可能に」病院新聞，2021.7.1.
- 44) 嶋根卓也：東大和発の実践型予防プログラム．東京都薬物乱用防止推進東大和地区協議会 20周年記念誌，2021.
- 45) 嶋根卓也：「市販薬依存症 若者襲う コロナ渦 孤独感紛らわそうと・・・」産経新聞（社会面），2021.9.12.
- 46) 嶋根卓也，松本俊彦：依存社会第3部「オーバードーズ」上・中・下．読売新聞，2021.11.24, 25, 26.
- 47) 嶋根卓也：（情報提供）薬物使用に関する全国住民調査（2019）．福岡県インターネット広報番組「ふかぼりっ！」 <http://webtv.pref.fukuoka.lg.jp/ja/movies/ch19>，2021.12.
- 48) 嶋根卓也：偏見減らす地元と連携．依存社会第4部「ダルク」上・下．読売新聞，2022.1.19, 20.
- 49) 嶋根卓也：薬物乱用防止対策啓発映像「大麻の誘惑」DVD 解説パート．企画・制作 警視庁組織犯罪対策部組織犯罪対策第五課，2022.
- 50) 嶋根卓也：薬物乱用防止啓発リーフレット．大麻乱用防止啓発リーフレット．福岡県医療介護部薬務課発行，2022.3.

4. 行動医学研究部

I. 研究部の概要

研究部及び研究室の研究目的

成人を主な対象とした様々な精神健康上の問題、特にトラウマ性疾患、悲嘆についての病態解明、治療研究に取り組むとともに、自然災害、犯罪被害、虐待等におけるストレスを緩和し、効果的な治療と支援の研究を進め、代表的な病態である PTSD の神経科学的・遺伝学的な解明と治療研究を推進している。各種震災、事故等に際しては専門家派遣などの現地支援に当たるとともに、効果的な行政・医療対応のシステム研究にも取り組んでいる。

また、ストレス関連疾患、特に心身症や摂食障害、生活習慣病を対象に、Biopsychosocial モデルに基づき、心身相関の観点から病因や発症のメカニズム、病態を臨床的、基礎的に研究し、効果的な治療法や予防法を開発し、摂食障害全国支援センターが当研究部内に設置されている。

臨床面では研究部のスタッフがセンター病院心療内科・精神科外来で診療・研究に携わっている。

令和3年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：金 吉晴（併任）。心身症研究室長：関口 敦。認知機能研究室長：堀 弘明。診断技術研究室長：小川真太郎。ストレス研究室長：井野敬子。常勤研究員は大沼麻実。リサーチフェローは上田奈津貴、大塚豪士、成田 瑞、林 明明。テクニカルフェローは成田 恵、中野稚子。科研費研究員は船場美佐子、菅原彩子、高村恒人、小原千郷、河西ひとみ、中島実穂、石田牧子、下村寛治。科研費研究補助員は吉田冬子、Amira Mohammed Ali Ali、國重寛子。併任研究員は富田吉敏、岡野宏紀、春口洗希。外来研究員は伊藤（丹羽）まどか、佐藤 啓、横田悠季。研究生は赤井利奈、國弘志保、菅原まゆみ、井上朋子、荒川和香子、大友理恵子、堀江美智子、松岡 潤、大滝涼子、今井理紗、小島汐里、藤内温美、大村靖子、勝沼り。客員研究員として兒玉直樹、西園マーハ文、藤井 靖、菊地裕絵、守口善也、寺澤悠理、森野百合子、加茂登志子、小西聖子、永岑光恵、井筒 節、堤 敦朗、福地 成、松本和紀、中島聡美、田中英三郎、宮本純子、寛 亮子、藤村朗子、茅野龍馬、櫻井 鼓、堀 有伸、岡崎純弥、牧田 潔、須賀楓介、袴田優子、宮本悦子、中山未知、鈴木麻佳、野間俊一、田中 聡、林 公輔、伊藤真利子、安藤哲也の各氏を迎えている。（順不同）

II. 研究活動

1) 複雑性 PTSD に関する認知行動療法の検討

複雑性PTSDに対する認知行動療法である、STAIR Narrative Therapyの日本での実施可能性、安全性、有効性を検討するために、オープン前後比較試験を実施中である。本年度までに完了した10例の解析結果について論文投稿中である。また日本語版の国際トラウマ面接（ITI）および国際トラウマ質問票（ITQ）の妥当性研究を進めている。（金、丹羽、大滝）

2) PTSD の病態解明と治療効果予測法開発に向けた、遺伝子・バイオマーカー・心理臨床指標による多層的検討

トラウマ体験者（PTSD 群、非発症群）と健常者を対象とし、遺伝子解析・発現解析、内分泌・免疫系マーカー測定、自律神経機能解析、脳 MRI 計測、認知機能測定、心理・臨床評価を行う。PTSD 群については、治療反応性との関連も検討する。PTSD の病因病態解明、生物学的指標に基づく客観的治療効果予測法の開発を目指す。現在までに 282 名のデータを収集し継続中。これまでに認知や炎症、その遺伝的基盤についての検討などを行い、多くの成果が得られ論文で発表されている。（堀、関口、伊藤、林、丹羽、金、大塚、成田 恵、河西、井野、吉田）

3) PTSD に対するメマンチンの有効性に関する臨床試験

PTSD 患者において、抗認知症薬メマンチンの有効性を検討する。本研究では、予備的検討としてオープン臨床試験を行い、効果サイズや安全性を検討することにより、RCT のプロトコルの作成を目的とする。2020 年度に発表した中間解析結果 (European Journal of Psychotraumatology)

では顕著な PTSD 症状改善効果が認められた。現在までに計 19 名を組み入れ、継続中。同時に、得られた結果をもとに RCT のプロトコルを作成し、NCNP 臨床研究審査委員会に承認されたため、被験者リクルートを開始予定。また、メマンチン治療前後で遺伝子発現解析や内分泌・免疫系測定、脳 MRI 計測を行い、治療効果機序の解明および治療効果サロゲートマーカーの開発を目指す。(堀, 小川, 井野, 成田瑞, 関口, 伊藤, 成田 恵, 金)

4) 血液検査による統合失調症・気分障害の診断法の開発に関する研究

患者・健常者から血液を採取し、タンパク・mRNA・代謝物などを定量し、統合失調症や気分障害の診断法や分類、経過判定指標に役立つ分子の同定を目的とする。神経研究所疾病研究第三部との共同研究として実施し、すでに約 3,000 名の被験者のサンプルが集積されている。これらの血液サンプルを用いて上記の測定を行い、精神疾患のバイオマーカー候補を探索している。(堀, 小川, 吉田)

5) ヒト毛髪を用いた精神疾患バイオマーカーの探索

気分障害、精神病性障害、PTSD 等の精神疾患を対象として、毛髪中のステロイドホルモンなどの濃度を測定し、バイオマーカーの同定を目的とする。神経研究所疾病研究第三部、センター病院、MGC バイオリソース部との共同研究として実施しており、被験者リクルート中である。(堀, 吉田)

6) 災害時精神保健医療のデータベース作成

WHO の研究プロジェクトとして Curtin 大学等と共同で災害後の精神保健に関する継続的文献レビューを実施中。災害時精神保健医療に関し、過去 10 年以内に英語、中国語(北京語)、または日本語で発表された査読文献に焦点を当て、とくに災害後のうつ、不安障害、PTSD に関して長期的な追跡調査を行った文献を中心に収集しその内容を要約・精査した。(金, 石田, 下村)

7) 一過性ストレスが記憶へ及ぼす効果に関する研究

一過的なストレスを経験した際に、ストレスが記憶パフォーマンスへ与える影響および、ストレスの生理的反応、さらに性格特性等との関連を調べ、ノイズストレス課題(ホワイトノイズ)または社会的ストレス課題(スピーチおよび暗算課題)をストレス負荷として使用した。健常大学生を対象に実験を行い、単語や画像による記憶への影響を検討した。(林, 金)

8) 情報処理バイアスを標的とした心理治療の有効性の検証とその神経生物学的機序の解明

ストレス関連精神障害に対するリスク保有者を対象として、記憶領域にも働きかける新しい CBM の有効性およびその神経作用機序について、北里大学、労働安全総合研究所等と共同で、fMRI や遺伝子(発現を含む)、内分泌・免疫炎症系指標を用いて包括的な観点から検証している。今年度は研究成果を Psychoneuroendocrinology 誌(2 報)、Brain Behavior and Immunity 誌に発表した。(袴田, 堀)

9) 摂食障害支援拠点病院における相談・支援事例の調査

摂食障害支援拠点病院での相談・支援事例を収集、集積し、内容を解析し、摂食障害の支援体制モデルの確立に資するための研究を実施した。令和 3 年度は、4 全国 4 カ所の支援拠点病院の 2021 年 4 月～2021 年 11 月末までの相談事例延べ 1512 件件を解析し報告書にまとめた。(小原, 中野, 成田恵, 井野, 関口)

10) 神経性過食症に対する認知行動療法の無作為比較試験

日本人の神経性過食症患者を対象に摂食障害の認知行動療法「改良版」(enhanced cognitive behavior therapy: CBT-E)の効果検証のため、東京大学、東北大学、九州大学、国立国際医療研究センター国府台病院、および当センターTMC との多施設共同無作為化比較試験を実施した。また、CBT-E の原著者によるケーススーパーヴィジョンにより介入実施者を養成した。(小川, 小原, 関口, 菅原彩子, 船場, 河西, 富田, 安藤)

11) 過敏性腸症候群に対するビデオ教材を併用した認知行動療法プログラムの実現可能性および有効性の検討

これまでに過敏性腸症候群(IRS)に対する内部感覚暴露を用いた CBT (CBT-IE) の日本語版を作成し、単群 17 例の前後比較によるフィージビリティ研究により、高い効果量をもって腹部症

状や QOL の改善が認められた。 CBT-IE プログラムのコストを軽減のため、対面セッションの前にビデオ教材を視聴するプログラムを開発し、センター病院心療内科、消化器内科と共同で 17 例の前後比較によるフィジビリティ研究を実施し、対面のみと同様に高い効果量をもって腹部症状と QOL の改善がみられた。以上の結果を英語論文として公表した。(船場、河西、藤井、富田、小原、関口、安藤)

12) 過敏性腸症候群に対するビデオ教材を併用した認知行動療法プログラムのランダム化比較研究

過敏性腸症候群 (IBS) に対するビデオ教材を併用した CBT プログラムの効果検証のため東京大学、東北大学、国立国際医療研究センター病院、同国府台病院および当センター病院、TMC との多施設共同無作為化比較試験を実施し、全施設で両群合計 31 例の IBS 患者を症例登録し、研究を継続している。(船場、河西、関口、藤井、小原、富田、安藤)

13) 機能性腸障害関連認知評価尺度および過敏性腸症候群関連行動反応評価尺度

IBS に特化した認知・行動的側面の評価尺度する機能性腸障害関連認知評価尺度および IBS 関連行動反応評価尺度の日本語版を標準化する研究を横浜市立大学健康社会医学ユニットの菅谷渚助教と実施し、20 例のデータを収集した(論文投稿中)。(船場、河西、小原、関口、富田、安藤)

14) ストレス関連疾患の疾患横断的なバイオマーカー検索のための脳 MRI 研究

トラウマ歴やストレス負荷などが脳内情報処理や脳神経回路ダイナミクスに与える影響を疾患横断的に検証し、多様な表現型を有するストレス関連疾患の新たな診断法の開発を目指している。PTSD 患者、IBS 患者及び健常群、延べ 93 名のデータを収集した。(関口、菅原彩子、上田、船場、勝沼、伊藤、林、丹羽、中野、成田 恵、堀、金)

15) 内受容知覚訓練の認知神経科学的効果の検証

バイオフィードバックの手法を用いた内受容感覚訓練を実施し、認知神経科学的な効果を検証している。慶應大学文学部の寺澤悠理准教授(客員研究員)との共同研究で、延べ 22 名の健常大学生を対象とした訓練介入データを収集した。内受容感覚の訓練により、不安と身体症状が軽減し前島皮質を基軸とする脳回路変化を来すことを明らかにした。(関口、菅原彩子、勝沼、寺澤)

16) 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出

摂食障害への認知行動療法 (CBT) 前後の縦断的観察研究を実施し、CBT 前後の脳 MRI、臨床データ、遺伝子発現データを収集し、摂食障害の早期発見・早期介入に資する CBT 効果の神経科学的エビデンスを創出することを目指す。東北大学、千葉大学、東京大学、京都大学、産業医科大学、九州大学との多施設共同研究としてデータ収集を開始し、摂食障害患者群及び健常群、延べ 99 例からデータを収集した共同研究施設で収集した既存の摂食障害患者および健常群の脳 MRI 画像延べ 411 例を集約して、データベースを構築し解析研究を実施している。(関口、井野、小川、安藤、堀、菅原彩子、高村、成田 恵、中野、船場、小原、守口、富田、金)

17) 医療機関を受診していない摂食障害患者と家族の支援ニーズに関する調査研究

病院を受診していない摂食障害患者や家族の支援ニーズを解明・整理するために、Web アンケート調査を実施し、患者・家族合わせて 379 名からデータを収集し、①患者の半数以上が通院していないこと、②未受診者は身近な医療機関の情報求めていること、③患者より家族の被援助志向性が高いことを明らかにした。(菅原彩子、関口、小原、西園)

18) 病院・気分障害センターおよびバイオバンクとの共同研究

NCNP 病院・気分障害センターおよび NCNP バイオバンクと連携した共同研究課題を実施している。うつ病など多くの精神疾患の発症リスクは幼少期トラウマ(小児期逆境体験)の経験率に伴い上昇することが報告されているが、本課題ではこれまで気分障害センター外来を受診し、バイオバンクでの研究参加の同意と登録を頂いた方々の試料と情報を対象として、小児期逆境体験とうつ病など精神症状の発現とに関連する生物学的マーカーを探索することを目的としている。(小川、堀、金)

19) オンライン調査・実験の信頼性に関する研究

Web 調査やインターネット上で実験を行う場合の手法の信頼性を検証することを目的とする。調査のための質問紙尺度や実験のための PC 課題の作成を行い、従来の紙面調査と実験室内実験の結果と比較した。(林, 金)

20) 保健所・精神保健センター職員のアンケート調査研究

保健所および精神保健センター職員の知識や経験にどのような因子が関与するかの検証することを目的とする。アンケート調査を行いどのような研修を受けた職員が主観的な知識や経験不足を感じにくいかに解析した。(成田 瑞, 金)

21) 児童期トラウマ尺度の妥当性に関する研究

児童期トラウマ尺度の信頼性・妥当性を検証することを目的とする。健常群 752 名と臨床群 111 名のデータを分析し、当該尺度の因子構造、内的信頼性、再検査信頼性、併存的妥当性を調べた。(中島, 堀, 金)

22) 摂食障害を抱える家族のピアサポーター研修プログラムの開発

摂食障害患者を抱える家族のピアサポーターを育成し、家族ピアサポーターによる家族相談会を開催する。相談会前後に質問紙調査及びインタビュー調査を行い、ピアサポーターおよび相談家族への効果を検証する。(関口, 菅原彩子, 森野, 小原)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 摂食障害情報ポータルサイト (一般向け <http://www.edportal.jp/>, 専門職向け <http://www.edportal.jp/pro/>) を運営し、市民および専門職への摂食障害の普及・啓発を行ったポータルサイトには 2021 年 1 月-2022 年 1 月の 1 年間に 1,744,528 ページビュー, 955,789 セッション, 764,362 ユーザー, 摂食障害全国支援センターHP に 47,669 ページビュー, 22,748 セッション, 17,355 ユーザー (google analytics) のアクセスがあった。(関口, 井野, 菅原彩子, 船場, 小原)

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 全国の行政職員向け研修会・各地の医師会、大学等の依頼を受け、災害精神保健、コロナ禍の心のケア、トラウマ対応、PTSD 治療、犯罪被害者対応、被災者・遺族対応に関する最新知見を提供している。(金)
- ・ 連携大学教授：東京大学大学院医学系研究科 (金)
- ・ 特別招聘教授：慶応義塾大学環境情報学部 (金)
- ・ 客員教授：山梨大学医学部・東北大学大学院医学系研究科・武蔵野大学 (金), 東北大学大学院医学系研究科 (関口)
- ・ 大学講師：筑波大学大学院人間総合科学学術院 (小川), 名古屋市立大学医学部・愛知学院大学心身科学部(井野)

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 2021 年度精神保健に関する技術研修. 第 18 回摂食障害治療研修会を開催した(オンライン). 2021.6.9-11 (関口, 井野, 船場, 小原)

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

① 公的委員会

- ・ 厚生労働省「健康増進総合支援システム (e—ヘルスネット)」情報専門委員 (金)

② 研究成果の行政貢献

- ・ 厚生労働省「みんなのメンタルヘルス総合サイト」PTSD の内容に関する助言 (金)

③ 摂食障害治療支援センター設置運営事業

平成 26～令和元年度に続き NCNP が摂食障害全国基幹センターに指定され、令和 3 年度より摂食障害全国支援センター (全国支援センター) に改称され、事務局実施責任者 (センター長) を関口が、実施担当者を井野, 菅原彩子, 船場, 小原が担当した。全国摂食障害対策連絡協議会開催及

び全国支援センターの設置運営を行い、摂食障害支援拠点病院を統括、ポータルサイトを運営および記事の更新をした。令和3年度の全国支援センターおよび宮城県、静岡県、福岡県、千葉県の摂食障害支援拠点病院の成果をまとめた報告書を作成した。医療従事者を対象にした「摂食障害治療研修～初心者を知っておくべき外来治療」を2回（2021年12月、2022年2月）ウェブ開催し、600名を超える受講者が参加した。また、新規支援拠点病院の設置のために、「摂食障害治療拠点病院設置準備研修会」をウェブ開催し、医療施設・自治体関係者など86名が参加した。全国支援センターHPの改訂、事業ロゴを作成し、事業の活動と成果物を公開した。令和3年度に実施した調査結果をもとに、全国の摂食障害治療施設リストを作成し、公開の準備を進めている。また、国立国際医療研究センター国府台病院に委託をして、全国の患者・家族・医療関係者を対象とした摂食障害の電話相談窓口『摂食障害「相談ほっとライン」』を開設した。（精神保健等国庫補助金：関口，井野，菅原彩子，船場，小原）

(5) センター内における臨床的活動

- ・ センター病院に併任し、毎週火曜日午後に再来患者を中心に外来診療を行っている。（堀）
- ・ センター病院に併任し、毎週木曜日午後に研究参加者を中心に外来診療を行っている。（井野）
- ・ 摂食障害患者の認知行動療法を実施している。（井野，成田 恵，船場，小原）
- ・ センター病院に併任し、心療内科の富田医師が主治医の再来患者に心理面接を行っている。（河西）

(6) その他

- ・ 行動医学研究部 HP に「自然災害に関するガイドライン」「薬物療法アルゴリズム」「犯罪被害者のメンタルヘルス情報ページ」を掲載し、専門家，一般に対し治療や対応についての啓発を行っている。（金）
- ・ OECD の傘下である NEA [Nuclear Energy Agency: 原子力機関（本部所在地：パリ）] の Expert Group on Non-radiological Public Health Aspects of Radiation Emergency Planning and Response (EGNR) の一員として、WHO と協働で原子力緊急時におけるメンタルヘルスならびに心理社会的支援について政策の枠組みを構築し、その枠組みをもとに、ステークホルダーらを対象とした実用的ツールの作成に参加している。（金，石田）

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Ali AM, Hori H, Kim Y, Kunugi H: Predictors of nutritional status, depression, internet addiction, Facebook addiction, and tobacco smoking among women with eating disorders in Spain. *Front Psychiatry* 12: 735109, 2021.
- 2) Ali AM, Alkhamees AA, Hori H, Kim Y, Kunugi H: The Depression Anxiety Stress Scale 21: Development and validation of the Depression Anxiety Stress Scale 8-Item in psychiatric patients and the general public for easier mental health measurement in a post COVID-19 world. *Int J Environ Res Public Health* 18: 10142, 2021.
- 3) Kamo T, Ito F, Monden Y, Bussing R, Niwa M, Kawasaki M, Matano M, Ujiie Y, Higaki Y, Oe Y, Morita N, Kim Y, Brestan Knight E, Eyberg S: Japanese version of the Eyberg Child Behavior Inventory: Translation and Validation. *Japanese Psychological Research* 38, 2021.
- 4) Hori H, Izawa S, Yoshida F, Kunugi H, Kim Y, Mizukami S, Inoue Y, Tagaya H, Hakamata Y: Association of childhood maltreatment history with salivary interleukin-6 diurnal patterns and C-reactive protein in healthy adults. *Brain Behav Immun*, 101: 377-382, 2022.
- 5) Ali AM, Hori H, Kim Y, Kunugi H: The Depression Anxiety Stress Scale 8-items

- expresses robust psychometric properties as an ideal shorter version of the Depression Anxiety Stress Scale 21 among healthy respondents from three continents. *Front Psychol* 13: 799769, 2022.
- 6) Narita Z, Yamanouchi Y, Mishima K, Kamio Y, Ayabe N, Kakei R, Kim Y: Training types associated with knowledge and experience in public health workers. *Arch Public Health*, 80(1): 44, 2022.
 - 7) Saito K, Hattori K, Hidese S, Sasayama D, Miyakawa T, Matsumura R, Tatsumi M, Yokota Y, Ota M, Hori H, Kunugi H: Profiling of cerebrospinal fluid lipids and their relationship with plasma lipids in healthy humans. *Metabolites* 11: 268, 2021.
 - 8) Hakamata Y, Mizukami S, Izawa S, Moriguchi Y, Hori H, Matsumoto N, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H: Childhood trauma affects autobiographical memory deficits through basal cortisol and prefrontal-extrastriate functional connectivity. *Psychoneuroendocrinology* 127: 105172, 2021.
 - 9) Matsuo J, Hori H, Ishida I, Hiraishi M, Ota M, Hidese S, Yomogida Y, Kunugi H: Performance on the Wechsler Adult Intelligence Scale (WAIS) in Japanese patients with bipolar and major depressive disorders in euthymic and depressed states. *Psychiatry Clin Neurosci* 75: 128-137, 2021.
 - 10) Hakamata Y, Mizukami S, Izawa S, Okamura H, Mihara K, Marusak H, Moriguchi Y, Hori H, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H: Implicit and explicit emotional memory recall in anxiety and depression: Role of basolateral amygdala and cortisol-norepinephrine interaction. *Psychoneuroendocrinology* 136: 105598, 2022.
 - 11) Takeuchi H, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Hanawa S, Araki T, Miyauchi C. M, Sakaki K, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Daniele M, Sassa Y, Kawashima R: Lead exposure is associated with functional and microstructural changes in the healthy human brain. *Commun Biol* 4: 912, 2021.
 - 12) Takeuchi H, Kimura R, Tomita H, Tak Y, Kikuchi Y, Ono C, Yu Z, Matsudaira I, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Hanawa S, Iizuka K, Sekiguchi A, Araki T, Miyauchi C. M, Ikeda S, Sakaki K, Dos S Kawata K H, Nozawa T, Yokota S, Magistro D, Imanishi T, Kawashima R: Polygenic risk score for bipolar disorder associates with divergent thinking and brain structures in the prefrontal cortex. *Hum Brain Mapp* 42: 6028-6037, 2021.
 - 13) Maeda C T, Takeuchi H, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Hanawa S, Araki T, Miyauchi C M, Sakaki K, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Magistro D, Sassa Y, Taki Y, Kawashima R: Brain microstructural properties related to subjective well-being: diffusion tensor imaging analysis. *Soc Cogn Affect Neurosci* 16: 1079-1090, 2021.
 - 14) Funaba M, Kawanishi H, Fujii Y, Higami K, Tomita Y, Maruo K, Sugawara N, Oe Y, Kura S, Horikoshi M, Ohara C, Kikuchi H, Ariga H, Fukudo S, Sekiguchi A, Ando T: Hybrid Cognitive Behavioral Therapy With Interoceptive Exposure for Irritable Bowel Syndrome: A Feasibility Study. *Front Psychiatry* 12: 673939, 2021.
 - 15) Sadeghi S, Takeuchi H, Shalani B, Taki Y, Nouchi R, Yokoyama R, Kotozaki Y, Nakagawa S, Sekiguchi A, Iizuka K, Hanawa S, Araki T, Miyauchi C M, Sakaki K, Nozawa T, Ikeda S, Yokota S, Magistro D, Sassa Y, Kawashima R: Brain structures and activity during a working memory task associated with internet addiction tendency in young adults: A large sample study. *PLoS One* 16: e0259259, 2021.

- 16) Narita Z, Yang K, Kuga H, Piancharoen P, Etyemez S, Faria F, Mihaljevic M, Longo L, Namkung H, Coughlin J, Nestadt G, Nucifora F, Sedlak T, Schaub R, Crawford J, Schretlen D, Miyata J, Ishizuka K, Sawa A: Face processing of social cognition in patients with first episode psychosis: Its deficits and association with the right subcallosal anterior cingulate cortex. *Schizophr Res* 238: 99-107, 2021.
- 17) Takayanagi Y, Ishizuka K, Laursen T, Yukitake H, Yang K, Cacella N, Ueda S, Sumitomo A, Narita Z, Horiuchi Y, Niwa M, Taguchi A, White M, Eaton W, Mortensen P, Sakurai T, Sawa A: From population to neuron: exploring common mediators for metabolic problems and mental illnesses. *Mol Psychiatry* 41(1): 2-13, 2021.
- 18) Narita Z, Banawa R, Zhou S, DeVlyder J, Koyanagi A, Oh H: Loneliness and psychotic experiences among the US university students : Findings from the Healthy Minds Study 2020. *Psychiatry Res* 308: 114362, 2022.
- 19) Yang K, Longo L, Narita Z, Cascella N, Nucifora F, Coughlin J, Nestadt G, Sedlak T, Mihaljevic M, Wang M, Kenkare A, Nagpal A, Sethi M, Kelly A, Di Carlo P, Kamath V, Faria A, Barker P, Sawa A: A multimodal study of a first episode psychosis cohort: potential markers of antipsychotic treatment resistance. *Mol Psychiatry* 27(2): 1184-1191, 2022.
- 20) Etyemez S, Narita Z, Mihaljevic M, Ishizuka K, Kamath V, Yang K, Sawa A: Olfactory dysfunction and face processing of social cognition in first-episode psychosis. *Neurosci Res* 176: 79-84, 2022.
- 21) Ueda N, Tanaka K, Maruo K, Roach N, Sumiyoshi T, Watanabe K, Hanakawa T: Perceptual inference, accuracy, and precision in temporal reproduction in schizophrenia. *Schizophr Res Cogn* 28: 100229, 2022.
- 22) Sakamoto S, Nakajima M, Yamakawa I, Muranaka M, Matsuura T: Developing a Scale for the New-Type Depression: Focusing on the Differences between Working Hours and Free Time. *Psychology* 12: 1384-1396, 2021.
- 23) 中島実穂, 丹野義彦: Interpersonal Regulation Questionnaire 日本語版の信頼性と妥当性. *パーソナリティ研究* 30 (3) : 134-143, 2021.

(2) 総説

- 1) 金 吉晴: 複雑性 PTSD を論じる異議について. *精神療法* 47(4) : 425-431, 2021.
- 2) 金 吉晴: ライフコースアプローチについてー診断前サポートの重要性. *臨床精神医学* 50(9) : 907-913, 2021.
- 3) 金 吉晴: 複雑性 PTSD の診断と対応. *精神療法* 47(5) : 556-562, 2021.
- 4) 堀 弘明, 金 吉晴: 認知と炎症に着目した PTSD の遺伝学的検討. *日本生物学的精神医学会誌* 33(1) : 10-15, 2022.
- 5) 丹羽まどか, 金 吉晴: 複雑性 PTSD の診断とスクリーニング尺度. *精神療法* 47(4) : 473-474, 2021.
- 6) 丹羽まどか, 金 吉晴: 複雑性 PTSD の集団 STAIR(感情と対人関係の調整スキルトレーニング). *精神療法* 47(5) : 629-631, 2021.
- 7) 堀 弘明: 複雑性 PTSD の神経生物学. *精神療法* 47(4) : 463-472, 2021.
- 8) 関口 敦: 災害ストレスと脳形態変化. 【災害メンタルヘルス】. *医学のあゆみ* 278 (2) : 149-153, 2021.
- 9) 船場美佐子, 河西ひとみ, 藤井 靖, 富田吉敏, 関口 敦, 安藤哲也: 過敏性腸症候群に対する認知行動療法の実践. *心身医学* 61(4) : 330-334, 2021.

- 10) 井野敬子：摂食障害の QOL. 精神医学 64(3)：327-332, 2022.
- 11) 小原千郷：摂食障害者の家族支援. 臨床栄養 139(5)：2021.

(3) 著書

(4) 研究報告書

- 1) Kim Y: Bio-genome markers of treatment responsiveness of severe-stress related mental disorders. 令和 3 年度精神・神経疾患研究開発費実績報告書英文概要. 2022.3.
- 2) 金 吉晴：ストレス関連疾患の認知行動療法の治療反応性と遺伝子・バイオマーカーの探索. 令和 3 年度精神・神経疾患研究開発費統括研究報告書. 2022.3.
- 3) 金 吉晴：統括, PTSD への CBT 指導. 令和 3 年度精神・神経疾患研究開発費分担研究報告書. 2022.3.
- 4) 金 吉晴, 堀 弘明, 河西ひとみ：災害・児童虐待等のトラウマ体験を有する人の心のケア支援の充実・改善に関する研究. 令和 3 年度 革新的自殺研究推進プログラム 委託研究成果報告書. 2022.3.
- 5) 関口 敦, 井野敬子, 菅原彩子, 中野稚子, 成田恵, 小原千郷, 船場美佐子, 國重寛子：令和 3 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」報告書. 2022.3.
- 6) 関口 敦：CBT 効果を予測する脳画像バイオマーカーの検証. 令和 3 年度精神・神経疾患研究開発費分担研究報告書. 2022.3.
- 7) 菅原彩子：医療機関を受診していない摂食障害患者と家族の支援ニーズに関する調査研究. やずや 食と健康研究所 研究助成 研究成果報告書. 2022.3.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 堀 弘明, 金 吉晴：不安症と心的外傷後ストレス障害 (PTSD) の相違点：何故, DSM-5 で PTSD は不安症から独立したのか？. 精神科 Resident 3(1)：46-48, 2022.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Nakagome K, Kuga H, Sumiyoshi T, Kim Y: National Survey of Mental Health after Covid-19 Pandemic. 5th ACONAMI 2021, Online, 2021.6.9.
- 2) Hori H, Kim Y: Symposium, A genetic study of PTSD focusing on cognition and inflammation, ISTSS 37th Annual Meeting, Online・Live, 2021.11.2-5.
- 3) 金 吉晴：回復された児童期のトラウマ記憶と PTSD からの回復 複雑性 PTSD の診断と臨床. 第 13 回日本不安症学会学術大会, オンライン, 2021.5.22-6-21.
- 4) 金 吉晴：恐怖記憶消去の分子メカニズムと PTSD 新規治療. シンポジウム 19, PTSD 病態の理解と新規治療方法の開発. 第 43 回日本生物学的精神医学会／第 51 回日本神経精神薬理学会合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 5) 金 吉晴：20 周年記念パネルディスカッション. 第 20 回日本トラウマティック・ストレス学会, オンライン, 2021.7.17-31.
- 6) 金 吉晴：メマンチンによる PTSD 治療効果—オープン試験結果より. 第 20 回日本トラウマティック・ストレス学会, オンライン, 2021.7.17-31.
- 7) 堀 弘明, 金 吉晴：認知と炎症に着目した PTSD の遺伝学的検討. シンポジウム 19, PTSD 病態の理解と新規治療方法の開発. 第 43 回日本生物学的精神医学会／第 51 回日本神経精神薬理学会合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.

- 8) 堀 弘明: うつ病の発症におけるストレスの役割. シンポジウム 8, うつ病の解明と新規治療標的の探索～基礎と臨床の双方向アプローチ～. 第 43 回日本生物学的精神医学会／第 51 回日本神経精神薬理学会合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 9) 堀 弘明: PTSD の統合的理解を目指した心理学的・生物学的研究. シンポジウム S-14, PTSD 病態の理解と新規治療方法の開発. 第 20 回日本トラウマティック・ストレス学会, オンライン・オンデマンド配信, 2021.7.17-18.
- 10) 関口 敦, 菅原彩子, 勝沼るり, 寺澤悠理: 「脳」と「身体」と「行動変容」. シンポジウム 3, 「こころ」と「身体」と「行動」の基礎と臨床. 第 62 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 香川, 2021.7.10-11.
- 11) 関口 敦, 菅原彩子, 高村恒人, 船場美佐子, 小原千郷, 成田 恵, 吉田冬子, 井野敬子, 堀 弘明, 小川眞太郎, 安藤哲也, 守口善也, 金 吉晴: 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出. シンポジウム 2, 心療内科における脳機能画像研究の最前線～本邦における摂食障害多施設共同研究を中心に. 第 25 回心療内科学会学術大会, 仙台 (オンライン), 2021.10.23-24.
- 12) 井野敬子, 船場美佐子, 小原千郷, 菅原彩子, 関口 敦, 金 吉晴, 安藤哲也, 佐藤康弘, 福土 審, 竹林淳和, 高倉 修, 須藤信行, 河合啓介: 摂食障害患者の若年化と当事者その家族の相談ニーズ-摂食障害支援拠点病院に寄せられる相談内容から読み解く-第 24 回日本摂食障害学会学術集会, オンライン・オンデマンド配信, 2021.10.30-31.
- 13) 関口 敦: 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出. シンポジウム Psycho-Metabolism -その基礎と臨床-(精神心理代謝連関). 第 42 回日本肥満学会・第 39 回日本肥満症治療学会学術集会, 横浜, 2022.3.26-27.
- 14) 成田 瑞: Psychological First Aid (心理的応急処置) の普及と実装. ワークショップ②, 第 7 回 RADISH 学術集会, オンライン, 2021.11.20.

(2)一般演題

- 1) Lin M, Kim Y: An attempt to develop the paper-and-pencil version of the IAT to assess the Big-Five personality. 32nd International Congress of Psychology, Online, 2021.7.18-23.
- 2) 堀 弘明, 伊藤真利子, 林 明明, 吉田冬子, 丹羽まどか, 袴田優子, 松井三枝, 功刀 浩, 金 吉晴: 健常成人女性における幼少期被虐待体験と注意バイアス変動性の関連: 炎症と BDNF 遺伝子多型の関与, 第 43 回日本生物学的精神医学会／第 51 回日本神経精神薬理学会合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 3) 小川眞太郎, 服部功太郎, 松村 亮, 宮川友子, 辰巳めぐみ, 藤澤あゆみ, 吉田寿美子, 山崎泰代, Dayan Goodenowe, 金 吉晴, 功刀 浩: 統合失調症患者における血漿中脂質関連分子の変化: 病態機序および症状との関連. 第 43 回日本生物学的精神医学会／第 51 回日本神経精神薬理学会合同年会, 京都, 2021.7.14-16.
- 4) 小川眞太郎, 服部功太郎, 秀瀬真輔, 篠山大明, 太田深秀, 宮川友子, 辰巳めぐみ, 松村 亮, 横田悠季, 吉田寿美子, 野田隆政, 金 吉晴, 功刀 浩: うつ病患者における脳脊髄液中エタノールアミンの変化: さらなるエビデンスの検証と治療効果検討の試み. 第 43 回日本生物学的精神医学会／第 51 回日本神経精神薬理学会合同年会, 京都, 2021.7.14-16.
- 5) 小川眞太郎, 服部功太郎, 松村 亮, 宮川友子, 辰巳めぐみ, 藤澤あゆみ, 吉田寿美子, 山崎泰代, Dayan Goodenowe, 金 吉晴, 功刀 浩: 健常者における血漿中脂質関連分子とホブキンス症状チェックリスト (HSCL) における身体・精神症状との関連: ミトコンドリア機能の観点から. 第 43 回日本生物学的精神医学会／第 51 回日本神経精神薬理学会合同年会, 京都, 2021.7.14-16.

- 6) 大塚 豪士, 堀 弘明, 吉田冬子, 伊藤真利子, 林 明明, 丹羽まどか, 井野敬子, 金 吉晴: PTSD 女性患者における CRP 遺伝的多型と症候学, 認知機能, 末梢血炎症マーカーとの関連, 第 43 回日本生物学的精神医学会/第 51 回日本神経精神薬理学会合同年会, 京都(オンライン) 2021.7.14-16.
- 7) 林 明明, 丹野義彦, 金 吉晴: 学習後の心理社会的ストレス負荷課題が虚記憶へ及ぼす影響. 日本心理学会第 85 回大会, オンライン, 2021.9.1-9.8.
- 8) 中島実穂, 堀弘明, 金 吉晴: Childhood Trauma Questionnaire 日本語版の信頼性と妥当性: コミュニティサンプルを対象としたオンライン調査. 日本心理学会第 85 回大会, オンライン, 2021.9.1-9.8.
- 9) 菅原彩子, 関口 敦, 小原千郷, 西園マーハ文, 鈴木真理: 医療機関を受診していない摂食障害患者の支援ニーズに関する研究. 第 62 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 香川, 2021.7.10-11.
- 10) 菅原彩子, 小原千郷, 関口 敦, 西園マーハ文, 鈴木真理: 摂食障害支援に向けた摂食障害患者・家族の被援助志向性の多角的検討. 第 24 回日本摂食障害学会学術集会, 大阪(オンライン), 2021.10.30-31.
- 11) 小原千郷, 西園マーハ文, 関口 敦, 菅原彩子, 鈴木真理: 摂食障害患者を抱える家族のピアサポートのニーズに関する調査. 第 24 回日本摂食障害学会学術集会, 大阪(オンライン), 2021.10.30-31.
- 12) 鈴木真理, 西園マーハ文, 小原千郷, 関口 敦, 森野百合子: 摂食障害患者を抱える家族のピアサポート研修プログラムの開発. 第 24 回日本摂食障害学会学術集会, 大阪(オンライン), 2021.10.30-31.
- 13) 小原千郷, 西園マーハ文, 関口 敦, 菅原彩子, 鈴木真理: 摂食障害患者を抱える家族のピアサポートのニーズに関する調査. 第 24 回日本摂食障害学会学術集会, オンライン・オンデマンド配信, 2021.10.30-31
- 14) 小原千郷, 西園マーハ文, 関口 敦, 森野百合子, 菅原彩子, 鈴木真理: 日本語版 Zarit 介護負担尺度短縮版の摂食障害への応用可能性の検討. 第 132 回日本心身医学会関東地方会, オンライン, 2022.2.5-6.

(3) 研究報告会

- 1) 金 吉晴: 災害・児童虐待等のトラウマ体験を有する人の心のケア支援の充実・改善に関する研究. 領域 3 新たな政策領域の開拓, 令和 3 年度革新的自殺研究推進プログラム 自殺対策推進レアル兼第 2 回研究代表者会議 中間報告, 東京, オンライン, 2021.11.30.
- 2) 関口 敦: 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出. 2021 年度 戦略的国際脳科学研究推進プログラム [国際脳] 分科会, オンライン, 2021.6.12.
- 3) 関口 敦: 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出. 2021 年度 戦略的国際脳科学研究推進プログラム [国際脳] 中間評価, オンライン, 2021.10.28.

(4) その他

- 1) 関口 敦: 令和 3 年度第 1 回全国摂食障害対策連絡協議会. 令和 2 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」, オンライン, 2021.7.30.
- 2) 関口 敦: 令和 3 年度第 2 回全国摂食障害対策連絡協議会. 令和 2 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」, オンライン, 2022.2.18.

C. 講演

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会 理事
- 2) 金 吉晴：自殺予防学会 理事
- 3) 金 吉晴：日本不安症学会 評議員
- 4) 堀 弘明：日本生物学的精神医学会 評議員
- 5) 関口 敦：日本心身医学会 代議員，幹事
- 6) 関口 敦：日本摂食障害学会 評議員，学術交流委員会

(3) 座長

- 1) Kim Y: Symposium 16- Pandemic, trauma and mental health: Humanities and social science perspectives. The 19th International Congress of the Pacific Rim College of Psychiatrists (PRCP 2021), Seoul, On-line, 2021.4.8-10.
- 2) 金 吉晴：一般演題 B 会場. D&I 科学研究会第 6 回学術集会，オンライン，2021.7.3.
- 3) 金 吉晴，喜田 聡：シンポジウム 19，PTSD 病態の理解と新規治療方法の開発. 第 43 回日本生物学的精神医学会／第 51 回日本神経精神薬理学会合同年会，京都（オンライン），2021.7.14-16.
- 4) 喜田 聡，金 吉晴：シンポジウム S-12，PTSD の生物学的理解と治療開発. 第 20 回日本トラウマティック・ストレス学会，オンライン，2021.7.17-31.
- 5) 堀 弘明，近藤 誠：シンポジウム 8，うつ病の解明と新規治療標的の探索～基礎と臨床の双方向アプローチ～. 第 43 回日本生物学的精神医学会／第 51 回日本神経精神薬理学会合同年会，京都（オンライン），2021.7.14-16.
- 6) 関口 敦，神原憲治：シンポジウム 8，心身医学におけるニューロサイエンスとナウ受容感覚システム. 第 62 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会，香川，2021.7.10-11.
- 7) 関口 敦，守口善也：シンポジウム 2，心療内科における脳機能画像研究の最前線～本邦における摂食障害多施設共同研究を中心に. 第 25 回心療内科学会学術大会，仙台（オンライン），2021.10.23-24.
- 8) 関口 敦，波多伴和：一般演題 3. 臨床・身体的. 第 24 回日本摂食障害学会学術集会，大阪（オンライン），2021.10.30-31.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board member
- 2) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会 編集委員長
- 3) Hori H: Frontiers in Psychiatry, review editor

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 関口 敦，井野敬子，小原千郷，船場美佐子：第 18 回摂食障害治療研修. オンライン，2021.6.9-11.
- 2) 関口 敦，井野敬子，船場美佐子：摂食障害支援拠点病院設置準備研修会. 令和 3 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業. オンライン，2021.11.3.
- 3) 関口 敦，井野敬子，小原千郷，船場美佐子：摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療～. 令和 3 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業. オンライン，2021.12.5. / 2022.2.27.
- 4) 佐藤康弘，井野敬子，小原千郷，関口 敦：摂食障害治療支援コーディネーター研修会. 令

和3年度摂食障害治療支援センター設置運営事業。オンライン，2022.2.21.

- 5) 関口 敦, 井野敬子, 船場美佐子: 摂食障がいへの治療支援に関する研修会。令和3年度摂食障害治療支援センター設置運営事業。オンライン，2022.3.25.

(2) 研修会講師

- 1) 金 吉晴: PTSD の病態と治療。東京大学医学部附属病院精神神経科における PTSD・PE 講演，オンライン，2021.6.28.
- 2) 金 吉晴: 予防的観点からの心のケア。令和3年度こころの健康づくり対策事業「心のケア相談研修（オンライン）」，オンライン，2021.10.28/2021.11.16.
- 3) 金 吉晴: CPTSD の病態理解，診断，心理療法。複雑性 PTSD に対する心理療法を学ぶ。オンライン，2021.12.3.
- 4) 金 吉晴, 丹羽まどか: Narrative therapy の治療内容 1, 2. 複雑性 PTSD に対する心理療法を学ぶ，オンライン，2021.12.3/2021.12.10.
- 5) 金 吉晴: STAIR の臨床への応用。複雑性 PTSD に対する心理療法を学ぶ，オンライン，2021.12.10.
- 6) 金 吉晴, 丹羽まどか, 大滝涼子: 全体の振り返り，質疑応答。複雑性 PTSD に対する心理療法を学ぶ，オンライン，2021.12.10.
- 7) 金 吉晴: コロナ禍の医療者トラウマケア。CareNet.TV. メディバンクス ナースの星 WEB セミナー，オンライン，2022.2.9-22.
- 8) 金 吉晴: PTSD の持続エクスポージャー療法。2021 年度 PTSD の持続エクスポージャー療法研修，オンライン，2022.3.3.
- 9) 井野敬子, 伊藤正哉, 金吉晴: PTSD の心理療法各論 2. 令和3年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース 2, オンライン，2021.12.16-17.
- 10) 井野敬子, 伊藤正哉, 金吉晴: PTSD の心理療法各論 2. 令和3年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース 2, オンライン，2022.1.13-14.
- 11) 丹羽まどか, 金 吉晴: 複雑性 PTSD. 令和3年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース 1, オンライン，2021.12.16-17.
- 12) 丹羽まどか, 金 吉晴: 複雑性 PTSD. 令和3年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース 2, オンライン，2022.1.13-14.
- 13) 堀 弘明: PTSD の神経科学と薬物療法。令和3年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース 1, オンライン，2021.12.16-17.
- 14) 堀 弘明: PTSD の神経科学と薬物療法。令和3年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース 2, オンライン，2022.1.13-14.
- 15) 関口 敦: 摂食障害治療支援センター設置運営事業について。摂食障がいへの治療支援に関する研修会，オンライン，2022.3.25.
- 16) 井野敬子: PTSD の治療。令和3年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース 1, オンライン，2021.10.29.
- 17) 井野敬子: PTSD の治療。令和3年度 PTSD 対策専門研修 A. 通常コース 2, オンライン，2021.11.19.
- 18) 丹羽まどか: STAIR 段階の治療内容: 対人関係 1, 2. 複雑性 PTSD に対する心理療法を学ぶ，オンライン，2021.12.3.
- 19) 丹羽まどか: STAIR Narrative Therapy の症例提示。複雑性 PTSD に対する心理療法を学ぶ，オンライン，2021.12.10.
- 20) 大滝涼子: STAIR 段階の治療内容: 感情調整。複雑性 PTSD に対する心理療法を学ぶ，オンライン，2021.12.10.
- 21) 大滝涼子: 災害時のメンタルヘルスケア～PFA（サイコロジカル・ファーストエイド: 心

理的応急処置)を学ぶ. 令和 3 年度精神保健福祉専門講座(災害時メンタルヘルスケア [PFA] 研修会), オンライン, 2022.1.7.

F. その他

- 1) 金 吉晴, 本橋 豊: 対談 コロナ禍の自殺問題 今こそ, 医療者に求められる視点とは. 週刊医学会新聞 3415, 2021.4.5.
- 2) 金 吉晴: コロナトラウマ, あなたは今大丈夫ですか?!. 韓国 obsW テレビ, 2021.11.
- 3) 金 吉晴, 堀 弘明: メマンチンによる PTSD 治療の有効性. ケアネット, 2021.5.4.
- 4) 堀 弘明, 袴田優子: 小児期の被虐待体験, 成人後の IL-6 濃度日内変動の平坦化に関連の可能性—NCNP ほか. QLifePro, 2022.3.3.
- 5) 堀 弘明, 袴田優子: 小児期の虐待体験が免疫システムに関連することを発見 ～概日リズム平坦化がその鍵を握る可能性～|日本の研究.com. アンドラ, 2022.3.7.

5. 児童・予防精神医学研究部

I. 研究部の概要

児童・予防精神医学研究部は、精神疾患の早期介入および予防、児童・青年期のメンタルヘルス、ならびに関連する領域に関する調査研究および情報発信を行っている。早期介入・予防に向けた活動としては、認知機能の標準的評価法の整備や経頭蓋直流刺激を用いた新たな治療法の開発に関する研究、およびマーマセットを用いた基礎研究など、トランスレーショナルな研究が展開している。児童・青年期の精神科的障害については、ロボットを用いた発達障害への新たな介入法の開発やコホート研究などを継続している。

人員構成は以下のとおりである。部長：住吉太幹、精神疾患早期支援・予防研究室室長：松元まどか、児童・青年期精神保健研究室室長：熊崎博一、リサーチフェロー（3名）：藤里紘子、白間 綾、飯島和樹、科研費研究員（9名）：Andrew M. Stickley, 末吉一貴、長谷川由美、山田理沙、金重有哉、高田圭二、稲垣里佳子、河村典枝、工藤あずさ、客員研究員（18名）：神尾陽子、池澤 聡、中村 亨、上野佳奈子、青木保典、石井良平、住吉チカ、樋口悠子、川崎康弘、鈴木道雄、高橋秀俊、数井 裕、小坂浩隆、菊知 充、松本吉央、上原 隆、信川 創、西田圭一郎、併任研究員（1名）研究生（11名）：荻野和雄、海老島 健、岡 琢哉、岩田 遼、山田悠至、稲川拓磨、齊藤 彩、原口英之、鉦田雅輝、吉田篤史、横田悠季他、科研費研究補助員1名、科研費事務助手1名、センター事務助手1名、科研費研究助手1名

II. 研究活動

1) 部長室より：住吉が代表研究者となり、精神疾患における認知機能障害の評価や治療介入に関する研究を、NCNP 内の他部署および国内外の医療機関や企業と協働し、以下を実施している。

A) ニューロモデレーションの精神疾患への応用に関する研究（住吉、白間、末吉、長谷川、和田、山田）経頭蓋直流刺激(tDCS)を用いた統合失調症など精神疾患の認知機能障害の治療研究を展開している。現在、統合失調症患者の日常生活技能に対する tDCS の改善効果に関する無作為化臨床試験(FEDICS)が、病院 CREP などから支援を受け進行中である。また、統合失調症患者の社会認知機能向上の tDCS の効果に関する本邦初の特定臨床研究 (SEDICS) について、研究生の山田悠至医師（司法精神診療部）らと共に行っている。2021 年度はプロトコル論文を専門誌に公表し、主解析論文を投稿中である。また、これらの活動の内容を英文著書として発信した。

B) 大うつ病性障害患者を対象とした中央評価の妥当性に関する予備研究～対面評価と情報通信技術を介した遠隔評価との一致性の検討～(CENTRAD 研究)（住吉、長谷川 他）大うつ病性障害患者を対象とした、代表的なうつ症状評価尺度である MADRS について、対面による評価と中央評価者による情報通信機器を介した、評価の一致の確認を目的とする。日本神経精神薬理学会のトランスレーショナル・メディカル・サイエンス委員会の活動の一つであり、慶應大学、東京女子医科大学、杏林大学、青山学院大学、ひもろぎクリニック、病院 CREP、IBIC の支援を受けている。2021 年度は目標症例数からのデータ収集を完了し、生物統計専門家によるデータ解析が進められた。

C) 抗うつ薬の単剤治療を新たに開始する大うつ病患者を対象とした認知機能、抑うつ症状、社会機能の追跡調査に関する多施設共同前向き観察研究(PERFORM-J)（住吉）抗うつ薬の単剤治療を新たに開始する大うつ病患者 518 例を対象とし、認知機能、社会機能、抑うつ症状などの推移を 6 ヶ月追跡した多施設共同前向き観察研究である。2021 年度は縦断的データの post-hoc 解析を行い、早期（治療開始 1 あるいは 2 カ月後）に抑うつ症状が寛解に至る場合は、6 カ月後の主観的認知機能障害の残遺が少ないことを初めて報告した。さらに、客観的認知機能に関しても、治療前に低下を認める場合は同様のパターンが示された (Sumiyoshi et al. J Affect Disord

2022). 今後は, PERFORM-J で用いられた主要アウトカムである主観的認知機能評価尺度 PDQ-D の短縮版の妥当性検討を行う予定である.

2) 精神疾患早期支援・予防研究室 (松元, 飯島)

(1) 精神疾患患者における「自己」の神経回路病態の解明

「自己」が, 前頭連合野とその他の領域 (中脳ドーパミン作動核, 海馬など) とのどのような相互作用によって形成されるのか, その脳領域間相互作用が統合失調症患者および気分障害患者においてどのような異常を来しているのか, 種々の脳イメージング法により検討している. ヒト脳表現型コンソーシアムデータベースより, 統合失調症患者および健常者のニューロメラニン画像, 構造的画像, 拡散強調画像を解析し, 統合失調症患者の中脳ドーパミン作動核におけるドーパミン機能とその他の脳領域との関係性について検討した. 本研究は, 当センター精神保健研究所精神疾患病態研究部 (橋本亮太郎長) との共同研究である.

(2) 非ヒト霊長類を用いた「自己」の神経回路基盤の解明

ヒトと同じ霊長類であり遺伝子改変可能なマーモセットを用いて, 「自己」の神経機構を構成する特定の脳内経路の詳細を検討している. マーモセットに他個体の声を聞かせることで鳴きかわし行動を引き起こし, その際の皮質脳波 (ECoG) を計測・解析した. 実験個体が自ら発声しつつ自身の声を聞いている条件と, 録音した自身の声を聴いているのみの条件とで脳活動を比較し, 発声時の聴覚野活動抑制を観察した. そして, この発声時聴覚活動抑制への前頭葉活動の関与を, グレンジャー因果解析により検討した. 本研究は, 当センター神経研究所微細構造研究部 (一戸紀孝部長) および理化学研究所脳神経科学研究センター高次脳機能分子解析チームとの共同研究である.

(3) 自閉症モデル動物における神経回路異常の解明

自閉症の治療法シーズ開発のため, バルプロ酸の母体投与により作出した自閉症モデルマーモセットの神経回路異常を, ECoG により検討している. 健常個体および自閉症モデルマーモセット個体の片半球全体を覆うように ECoG 電極を埋め込み, ①純音刺激に対する初期聴覚誘発応答, ②聴性定常反応 (ASSR), ③ミスマッチ陰性電位 (mismatch negativity: MMN), および④聴覚 high gamma activity の活動伝搬様式について比較検討した. また, 拡散強調画像を取得した個体について, 主だった線維束における拡散異方性の程度 (FA 値) を, 健常群と自閉症モデルマーモセット群とで比較検討した. 本研究は, 当センター神経研究所微細構造研究部 (一戸紀孝部長) との共同研究である.

3) 児童・青年期精神保健研究室 精神障害者へのロボットを用いた支援についての研究 (熊崎)

発達障害者は時に, ロボットとの対話を好む. 我々は, 現在まで発達障害者について, ロボットを用いること, またロボット相手だと対話が可能な例を数多く報告してきた. それ故早急な実用化が期待されているのであるが, 実用化のためには解決しなければならない問題が多く残されている. また発達障害以外の精神障害者にもロボットの応用が期待されている. 本研究課題では, 基礎研究及び, 発達障害者やうつ病患者といった精神障害者を対象として, 実用化を目指した実証実験研究に取り組む.

ロボットの実装化に向けて患者様ごとに, 適切なロボット選択は重要である. また, ロボット有効者の明確化は重要である. また個別化として患者様の状態に合わせて, ロボットが適切に反応することも重要である. また同じロボットを使用するにしても, 様々なシチュエーションが考えられる. ロボットがメインのセラピストになり得るケース, ヒトのセラピストのアシスタントとして存在するケース, また複数のロボットが存在するケースが考えられる. シチュエーションを適切に設定することで, ロボットが多くの患者様の役に立つことが考えられる. こういった基礎研究を充実させていく. 実証研究では, ①発達障害者については, 個々の特性に合わせて, 最適な表情・動作の設定を自動調整できるロボットの開発を行う. ②うつ病患者については, 患者の精神症状に合わせて, 最適な表情・動作の設定を自動調整できるロボットの開発を行う. ③また発達障害者, うつ病患者がロボットを操作することで, ロボットを通して社会生活に参加するシステムの開発を行う.

上記システム開発は診察室、デイケア、訪問看護といったメンタルヘルス医療の多様な場面でいき、精神科医療におけるロボットの利用方法を確立する。

4) COVID-19 パンデミックがメンタルヘルスに及ぼす影響のインターネット調査 (Stickley, 白間, 住吉)

新型コロナウイルス (COVID-19) 感染症がメンタルヘルスに及ぼす影響が懸念されている。例えば、ソーシャル・ディスタンスなどの予防対策が幸福感を低下させ、パンデミックによる失業、就労時間短縮、解雇などが、メンタルヘル스에悪影響を及ぼすとされる。特に、精神疾患の既往がある人々は COVID-19 感染拡大予防に求められる行動変容などに対し脆弱であり、関連した報道の視聴や、手洗いやソーシャル・ディスタンスの確保等で、より強い孤立感や、精神症状の再発・増悪が生じると懸念される。本研究ではオンライン調査により日本の一般人口サンプルを収集し、様々な精神症状と自殺念慮、ビンジ飲酒(短時間に大量に飲酒すること)、感染予防行動の関係を検討した。その結果、非常事態宣言下においてビンジ飲酒習慣がある個人では感染予防行動が低下したこと (Stickley et al. in press), ADHD 症状や睡眠の問題といった要因が自殺念慮の増加と関連していることなどが明らかになった。

5) 統合失調症における予測的推論過程 (白間, 住吉)

予測的推論は、予測誤差情報を用いて変化し続ける環境の内部モデルを維持・更新する機能であり、その異常は妄想・幻覚や社会認知機能などに影響を及ぼす。統合失調症の予測的推論過程について、ベイジアン・モデルと瞳孔径解析を組み合わせた手法により、詳細な計算過程と神経機構を明らかにするため、データ収集を行なっている。

6) 気分障害の認知機能障害評価バッテリーに関する研究 (末吉, 長谷川, 住吉)

気分障害における認知機能障害を評価する簡便なテストバッテリー、Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry (SCIP) と Brief Assessment of Cognition In Affective Disorders (BAC-A) の信頼性・妥当性を検討している。SCIP は国際双極性障害学会が推奨するスクリーニングツールであり、気分障害患者の認知機能を短時間で評価することができる。BAC-A は精神科疾患において低下があることで知られてきた認知機能に加え、情動刺激が認知機能へ与える影響を評価することができる。

7) 児童・青年の感情障害に対する認知行動療法の統一プロトコルに関する研究 (藤里, 住吉)

本研究は、感情障害の児童青年に幅広く適用可能な認知行動療法とされる統一プロトコル (Unified protocol: UP) について、①児童版統一プロトコル (UP-C) のランダム化比較試験、および②青年版統一プロトコル (UP-A) のパイロット試験を行い、その実施可能性や有効性を明らかにすることを目的としている。4年目である2021年度は、Covid19の影響でグループ療法であるUP-Cのランダム化比較試験はほぼ進めることができなかった。一方、UP-Aについてはプロトコルの作成および倫理申請を終え、リクルートを開始した。2022年3月現在までに、目標症例数12件のうち、3件が登録となっている。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

2021年度気分障害センター市民公開講座 (2022.1.29) を主催し、総合司会を担当した(住吉)。

(2) 専門教育面における貢献

- 研究と臨床の橋渡しを目指すカンファレンス「児童・予防精神医学研究会」を統合失調症早期診断・治療センターとの共催で2回開催 (住吉)

- 研究成果の国際的な発信力向上を目指し、医学英語のベテラン講師がセンター職員による医学英語論文に対し指導を行うセミナーを、病院 CREP との共催で開催（2022.1.18）（住吉）

(3) 精研の研修の主催と協力

- 国立精神・神経医療研究センターにおいて令和 3 年度精神保健に関する技術研修，第 2 回 発達障害者支援研修：指導者養成研修，および第 2 回 発達障害者支援研修：行政実務研修を開催した。（住吉，熊崎）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

- 厚労省 発達障害の情報提供等事業に関する運営会議・構成員（住吉）
- クロザリル適正使用委員会委員（住吉）

(5) センター内における臨床的活動

- センター病院 統合失調症専門外来・初診（兼部長診）：毎週月曜日（住吉）
- センター病院 気分障害センター外来・初診：毎週月曜日（住吉）
- センター病院 一般再来：毎週金曜日（住吉）
- センター病院 こころのリスク診療枠：隔週月曜日（住吉）

(6) その他

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Stickley A, Shirama A, Katamura A, Kamio Y, Takahashi H, Saito A, Haraguchi H, Kumazaki H, Mishima K, Sumiyoshi T. Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and sleep problems in preschool children: the role of autistic traits. *Sleep Medicine*, 2021; 83:214-221.
- 2) Higuchi Y, Sumiyoshi T, Tateno T, Nakajima S, Sasabayashi D, Nishiyama S, Mizukami Y, Takahashi T, Suzuki M.: Prolonged P300 Latency in antipsychotic-Free Subjects with At-Risk Mental States Who Later Developed Schizophrenia. *Journal of Personalized Medicine* 2021, 11(5), 327.
- 3) Yamada Y, Inagawa T, Yokoi Y, Shirama A, Sueyoshi K, Wada A, Hirabayashi N, Oi H, Sumiyoshi T. Efficacy and Safety of Multi-Session Transcranial Direct Current Stimulation on Social Cognition in Schizophrenia: A Study Protocol for an Open-Label, Single-Arm Trial. *Journal of Personalized Medicine*.2021;11(4):317.
- 4) Kubota R, Okubo R, Akiyama H, Okano H, Ikezawa S, Miyazaki A, Toyomaki A, Sasaki Y, Yamada Y, Uchino T, Nemoto T, Sumiyoshi T, Yoshimura N, Hashimoto N: Study protocol: the Evaluation Study for Social Cognition Measures in Japan (ESCoM). *Journal of Personalized Medicine* 2021;11(7), 667.
- 5) Sumiyoshi T, Hoshino T, Mishiro I, Hammer-Helmich L, Ge H, Moriguchi Y, Fujikawa K, Fernandez J: Prediction of residual cognitive disturbances by early response of depressive symptoms to antidepressant treatments in patients with major depressive disorder. *Journal of Affective Disorders* 2022;296:95-102.
- 6) Ueda N, Tanaka K, Maruo K, Roach N, Sumiyoshi T, Watanabe K, Hanakawa T: Perceptual inference, accuracy, and precision in temporal reproduction in schizophrenia. *Schizophrenia Research Cognition* 28(2022)100229.
- 7) Uehara T, Kurachi M, Kondo T, Abe H, Itoh H, Sumiyoshi T, Suzuki M: Apocynin-tandospirone derivatives suppress methamphetamine-induced hyperlocomotion in rats with

- neonatal exposure to dizocilpine. *Journal of Personalized Medicine* 2022, 12, 366. <https://doi.org/10.3390/jpm12030366>
- 8) Stickley A, Neligan A, Baburin A, Jasilionis D, Krumins J, Martikainen P, Kondo N, Sumiyoshi T, Shin JI, Oh H, Waldman K, Leinsalu M: Educational inequities in epilepsy mortality in the Baltic countries and Finland in 2,000-2015. *Scientific Reports* 2022, 12:4597. <https://doi.org/10.1038/s41598-022-08456-x>
 - 9) Matsumoto M, Abe H, Tanaka K, Matsumoto K: Different types of uncertainty distinguished by monkey prefrontal neurons. *Cerebral Cortex Communications*, Volume 3, Issue 1, 2022.
 - 10) Kumazaki K, Yoshikawa Y, Muramatsu T, Haraguchi H, Fujisato H, Sakai K, Matsumoto Y, Ishiguro H, Sumiyoshi T, Mimura M. Group-Based Online Job Interview Training Program Using Virtual Robot for Individuals With Autism Spectrum Disorders. *Frontiers in Psychiatry*. 2022. doi: 10.3389/fpsy.2021.704564.
 - 11) Kumazaki H, Sumioka H, Muramatsu T, Yoshikawa Y, Shimaya J, Iwanaga R, Ishiguro H, Sumiyoshi T, Mimura M. Brief Report: The Effectiveness of Hugging a Huggable Device before having a Conversation with an Unfamiliar Person for Autism Spectrum Disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders*. 2021. doi: 10.1007/s10803-021-05173-8.
 - 12) Shirama A, Stickley A, Kamio Y, Nakai A, Takahashi H, Saito A, Haraguchi H, Kumazaki H, Sumiyoshi T. Emotional and behavioral problems in Japanese preschool children with motor coordination difficulties: the role of autistic traits. *European Child & Adolescent Psychiatry*. 2021. doi:10.1007/s00787-021-01732-7.
 - 13) Sumioka H, Kumazaki K, Muramatsu T, Yoshikawa Y, Ishiguro H, Higashida H, Yuhi T, Mimura M. A huggable device can reduce the stress of calling an unfamiliar person on the phone for individuals with ASD. *PLoS One*. 16(7):e0254675. 2021. doi: 10.1371/journal.pone.0254675.
 - 14) Hasegawa C, Takahashi T, Ikeda T, Yoshimura Y, Hiraishi H, Nobukawa S, Saito D, Kumazaki T, Yaoi K, Hirata M, Asada M, Kikuchi M. Effects of familiarity on child brain networks when listening to a storybook reading: A magnetoencephalographic study. *NuroImage*. 241:118389. 2021. doi: 10.1016/j.neuroimage.
 - 15) Yoshimura Y, Ikeda T, Hasegawa C, Kyung-Min An, Tanaka S, Yaoi K, Iwasaki S, Saito D, Kumazaki H, Hiraishi H, Kikuchi M. Shorter P1m response in children with autism spectrum disorder without intellectual disabilities. *International journal of molecular sciences*. 22(5):2611. 2021. doi: 10.3390/ijms22052611.
 - 16) Fujisato H, Kato N, Namatame H, Ito M, Usami M, Nomura T, Ninomiya S, and Horikoshi M. The Unified Protocol for Transdiagnostic Treatment of Emotional Disorders Among Japanese Children: A Pilot Study. *Frontiers in Psychology*, 12:731819. 2021.
 - 17) Ito M, Horikoshi M, Kato N, Oe Y, Fujisato H, Yamaguchi K, Nakajima S, Miyamae M, Toyota A, Okumura Y, Takebayashi Y. Efficacy of the Unified Protocol for Transdiagnostic Cognitive Behavioral Treatment for Depressive and Anxiety Disorders: A Randomized Controlled Trial. *Psychological Medicine*, 1-12. 2022.
 - 18) Stickley A, Koposov R, Koyanagi A, Oh H, Ruchkin V. Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and community violence exposure in Russian adolescents. *Journal of Interpersonal Violence* 2021; 36(17-18):NP9738-NP9756.
 - 19) Stickley A, Ueda M. Loneliness in Japan during the COVID-19 pandemic: Prevalence, correlates and association with mental health. *Psychiatry Research* 2022;307:114318.
 - 20) Ruchkin V, Isaksson J, Schwab-Stone M, Stickley A. Prevalence and early risk factors for bulimia nervosa symptoms in inner-city youth: gender and ethnicity perspectives. *Journal of Eating Disorders* 2021;9:136.

- 21) Jiang W, Stickley A, Ueda M. Green space and suicide mortality in Japan: an ecological study. *Social Science & Medicine* 2021;283:114137.
- 22) Koposov R, Stickley A, Ruchkin V. Non-suicidal self-injury among incarcerated adolescents: prevalence, personality, and psychiatric comorbidity. *Frontiers in Psychiatry* 2021;12:652004.
- 23) Koposov RA, Stickley A, Ruchkin V. Bulimia symptoms in Russian youth: prevalence and association with internalizing problems. *Frontiers in Psychiatry* 2022;12:797388.
- 24) Isaksson J, Westermarck C, Koposov RA, Stickley A, Ruchkin V. Risky sexual behaviour among Russian adolescents: association with internalizing and externalizing symptoms. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health* 2021;15:40.
- 25) Oka T, Ishikawa SI, Saito A, Maruo K, Stickley A, Watanabe N, Sasamori H, Shioiri T, Kamio Y. Changes in self-efficacy in Japanese school-age children with and without high autistic traits after the Universal Unified Prevention Program: a single-group pilot study. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health* 2021;15:42.
- 26) Choi MJ, Yang JW, Lee S, Kim JY, Oh JW, Lee J, Stubbs B, Lee KH, Koyanagi A, Hong SH, Ghayda RA, Hwang J, Dragioti E, Jacob L, Carvalho AF, Radua J, Thompson T, Smith L, Fornaro M, Stickley A, Bettac EL, Han YJ, Kronbichler A, Yon DK, Lee SW, Shin JI, Lee E, Solmi M. Suicide associated with COVID-19 infection: an immunological point of view. *European Review for Medical and Pharmacological Sciences* 2021;25:6397-6407.
- 27) Yoon S, Kim SE, Ko Y, Jeong GH, Lee KH, Lee J, Solmi M, Jacob L, Smith L, Stickley A, Carvalho AF, Dragioti E, Kronbichler A, Koyanagi A, Hong SH, Thompson T, Oh H, Salazar de Pablo G, Radua J, Shin JI, Fusar-Poli P. Differential expression of MicroRNAs in Alzheimer's disease: a systematic review and meta-analysis. *Molecular Psychiatry* 2022 doi: 10.1038/s41380-022-01476-z.
- 28) Nobukawa, S, Shirama, A, Takahashi, T, Takeda, T, Ohta, H, Kikuchi, M, Iwanami, A, Kato, N, Toda, S. Identification of attention-deficit hyperactivity disorder based on the complexity and symmetry of pupil diameter. *Scientific Reports* 11(1) 8439-8439 2021
- 29) 兼田康宏, 住吉太幹: 統合失調症認知機能簡易評価尺度(BACS)の簡略版および短縮版. *精神医学* 63:1745-48, 2021.

(2) 総説

- 1) Yoshikawa Y, Kumazaki H, Kato T. Future perspective of robot psychiatry: Can communication robots assist psychiatric evaluation in the COVID-19 pandemic era? *Current Opinion in Psychiatry*. 34(3):277-286. 2021. doi: 10.1097/YCO.0000000000000692.
- 2) 住吉太幹: 精神疾患の長期経過: 機能的転帰の観点から. 特集「薬物療法の維持治療: 実践的な続け方とやめ方」*臨床精神薬理* 24(7): 667-671, 2021.
- 3) 住吉太幹: 精神疾患における早期介入と予防: 機能的転帰の改善に向けて. 特集「ライフコース全体で考えるメンタルヘルス」*臨床精神医学* 50(9): 921-28, 2021.
- 4) 吉村直記, 和田 歩, 住吉太幹: 統合失調症の長期展望. 特集「精神疾患患者の人生全体を視野に入れた治療と支援」*臨床精神医学* 50(11): 1175-81, 2021.
- 5) 住吉太幹, 和田 歩: うつ病への経頭蓋直流刺激(tDCS)治療. 特集「うつ病のニューロモデュレーション治療の新展開」*精神医学* 63(12): 1783-89, 2021.
- 6) 住吉太幹, 末吉一貴: 統合失調症の認知機能障害に対する薬物療法: 認知機能増強薬の開発に向けて. 特集「統合失調症と気分障害における認知機能障害への対処と治療」*臨床精神医学* 50(12): 1311-18, 2021.
- 7) 藤里紘子, 住吉太幹: 思春期の精神疾患に対するエビデンスに基づく治療: 心理社会的アプローチ. 特集「思春期患者への精神科治療と薬物療法の役割」*臨床精神薬理* 25(3): 231-39,

2022.

- 8) 熊崎博一. 精神科におけるヒューマノイドの潜在性. 医学のあゆみ.278(11):948-951. 2021 年.
- 9) 熊崎博一. ロボットを用いた精神疾患治療の可能性.精神科 Resident. 2(2): 89-91. 2021 年.
- 10) 熊崎博一. 自閉スペクトラム症. Clinical Neuroscience. 39(2): 236-239. 2021 年.
- 11) 熊崎博一. ヒューマノイドロボットを用いた自閉スペクトラム症治療の可能性. 医学のあゆみ. 276(3): 230-231. 2021 年.

(3) 著書

- 1) Sumiyoshi T: Editorial: Psychoneurobiology Research and Personalized Treatment of Schizophrenia, In Psychoneurobiology Research and Personalized Treatment of Schizophrenia, Multidisciplinary Digital Publishing Institute Basel, 1 - 3, 20, 2022.
- 2) Fujisato H, Kato N, Dominique Phillips, Estefany Sáez-Clarke. Chapter 13: Culturally and Linguistically-Sensitive Applications in Other Countries. In Jill Ehrenreich-May and Sarah Kennedy (Eds.) Applications of the Unified Protocols for transdiagnostic Treatment of Children and Adolescents. Oxford University Press, 2021 年 10 月.
- 3) 伊藤正哉・藤里紘子・山口慶子 精神病理と感情調整 有光興記(監修) 感情制御ハンドブック 北大路書房 2022 年 2 月.
- 4) 熊崎博一. 新しい治療の試み ―ロボット研究の現状. 今後の課題. 発達障害の患者学 治す医療から治し支える医療へ. 加藤進昌・太田晴久(編) (日本評論社). 113-122. 2021 年.

(4) 研究報告書

(5) 翻訳

- 1) ジル・エレンリッチ-メイ, サラ・M・ケネディ, ジェイミー・A・シェアマン, シャノン・M・ベネット, デイビッド・H・バーロウ(著), 藤里紘子・堀越 勝(監訳), 伊藤正哉・加藤典子(翻訳) つらい感情とうまくつきあう認知行動療法の統一プロトコル 10 代のための感情を味方につけるプログラム ワークブック 福村出版, 2021 年 6 月.

(6) その他

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Sumiyoshi T, Stickley A., Shirama A.: Mental health status of the general population in Japan during COVID-19 pandemic. 5th Mental Health International Symposium of Asian Consortium of National Mental Health Institutes, 2021, 6, 9 Virtual Congress (2021, 6, 9) (Invited lecture)
- 2) Higuchi Y., Sumiyoshi T, Tateno T, Nakajima S, Nishiyama S, Takahashi T, Suzuki M.: The role of neurophysiological findings as biomarkers for psychotic disorders. In Symposium "Use of electrophysiological methods in management of psychotic states", 21st WPA World Congress of Psychiatry, 2021, 10, 18 Virtual Congress (2021, 10, 18 - 21) (Invited lecture)
- 3) Kumano H. Nobukawa S. Shirama A. Takahashi T. Toda S. Pupil diameter control model focusing on the left-right difference of the neural activity locus coeruleus of ADHD. The 2021 Nonlinear Science Workshop, virtual congress, 2021. 12.
- 4) 山田悠至, 稲川拓磨, 末吉一貴, 和田 歩, 長谷川由美, 白間 綾, 住吉太幹: 統合失調症の認知機能障害に対する経頭蓋直流電気刺激 (tDCS) の効果と展望: ワークショップ「ニューロモデュレーション」. 第 6 回 Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders 研究会・年次大会, オンライン開催, 2021.5.29(5.29)

- 5) 住吉太幹：気分障害患者における認知機能障害と対応. 共催セミナー. 第 40 回日本社会精神医学会, オンライン開催, 2021.3.5 (3.4-5)
- 6) 住吉太幹：うつ病における認知機能障害の評価; 日常診療への応用を目指して「課題と展望」. シンポジウム「うつ病における認知機能障害の評価; 日常診療への応用を目指して」第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療学会, 横浜, 2021.7.9(7.8-10)
- 7) 住吉太幹, 山田悠至, 稲川拓磨, 白間 綾, 末吉一貴, 長谷川由美, 和田 歩, 横井優磨, 住吉チカ, 成田 瑞：経頭蓋直流電気刺激の統合失調症治療への応用 – 機能的転帰の向上を目指して：シンポジウム「精神疾患治療におけるニューロモデレーションの現状と開発の動向」. 第 43 回日本生物学的精神医学会/51 回日本神経精神薬理学会・年次大会, 京都, 2021.7.15(7.14-16)
- 8) 樋口悠子, 住吉太幹, 立野貴大, 中島 英, 伊藤博子, 水上祐子, Anh Le Thi Phuong, 高橋 努, 鈴木道雄：統合失調症, 精神病発症リスク状態と Omega-3 多価不飽和脂肪酸. シンポジウム「 ω 3 不飽和脂肪酸と精神疾患」第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.20(9.19-21)
- 9) 樋口悠子, 立野貴大, 中島 英, 水上祐子, 住吉太幹, 高橋 努, 鈴木道雄：精神病発症リスク状態におけるミスマッチ陰性電位と臨床的転帰との関連. シンポジウム「統合失調症バイオマーカーとしての mismatch negativity」. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.20 (9.19-21)
- 10) 山田悠至, 稲川拓磨, 末吉一貴, 和田 歩, 長谷川由美, 平林直次, 白間 綾, 住吉太幹：統合失調症の社会認知機能障害に対する経頭蓋直流電気刺激 (tDCS) の効果：シンポジウム「経頭蓋直流刺激による精神分野における治療法開発の現状と展望」. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.20 (9.19-21)
- 11) 横井優磨, 稲川拓磨, 山田悠至, 住吉太幹：認知症に対する経頭蓋直流電気刺激：シンポジウム「経頭蓋直流刺激による精神分野における治療法開発の現状と展望」. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.20 (9.19-21)
- 12) 住吉太幹, 立野貴大, 鈴木道雄, 樋口悠子：統合失調症およびハイリスク状態におけるミスマッチ陰性電位：機能的予後との関連. シンポジウム「第 5 回 MMN 研究会」. 第 51 回日本臨床神経生理学会学術大会, 仙台, 2021.12.16 (12.16-18)
- 13) 矢部博興, 樋口悠子, 刑部有祐, 志賀哲也, 住吉太幹：統合失調症発症前状態と MMN. シンポジウム「統合失調症バイオマーカーとしての MMN：早期発見と保険収載」. 第 51 回日本臨床神経生理学会学術大会, 仙台, 2021.12.17 (12.16-18)
- 14) 住吉太幹, 山田悠至, 稲川拓磨, 末吉一貴, 長谷川由美, 和田 歩, 白間 綾, 山田理沙, 横井優磨, 住吉チカ, 成田 瑞：経頭蓋直流電気刺激による統合失調症の認知機能障害の改善：アンメット・ニーズの克服を目指して：シンポジウム「ニューロモデレーションのフロンティア：新しい治療戦略の可能性」. 第 51 回日本臨床神経生理学会学術大会, 仙台, 2021.12.17 (12.16-18)
- 15) 熊崎博一. 発達障害者へのロボットを用いた支援の潜在性. 日本特殊教育学会第 59 回大会. WEB 開催. 2021 年 9 月.
- 16) 熊崎博一. 自閉スペクトラム症者の嗅覚特性に着目する意義. 第 62 回日本児童青年精神医学会総会. WEB 開催. 2021 年 11 月.
- 17) 熊崎博一. 自閉スペクトラム症児の嗅覚特性. 第 60 回日本鼻科学会総会・学術講演会. 大津市. 2021 年 9 月.
- 18) 熊崎博一. 発達障害者へのヒューマノイドロボットを用いた支援の潜在性. 第 45 回日本神経心理学会学術集会. WEB 開催. 2021 年 9 月.
- 19) 熊崎博一. 精神障害者へのロボット介入の潜在性. 第 117 回日本精神神経学会学術総会. 京都市. 2021 年 9 月.
- 20) 伊藤正哉, 竹林由武, 大江美佐里, 藤里紘子, 牧野みゆき, 山口慶子, 佐藤珠恵, 高岸百合子, 堀越 勝. 心的外傷後ストレス障害とその関連要因と症状に関する調査 第 20 回 日本トラウマティック・ストレス学会 2021 年 7 月.

(2) 一般演題

- 1) Sumiyoshi C, Ohi K, Fujino H, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Uno Y, Takahashi J, Morita K, Katsuki A, Yamamoto M, Okahisa Y, Sata A, Katsumoto E, Koeda M, Hirano Y, Nakataki M, Hashimoto N, Makinodan M, Takahashi T, Nemoto K, Kishimoto T, Suzuki M, Sumiyoshi T, Hashimoto R; Cross-Diagnostic Comparisons of Intellectual Ability and Work Outcome in Patients with Mental Disorders: A Multi-Center Stud. 8th Schizophrenia International Research Society Conference, 2021, 4, 20, Virtual conference, April (17-21).
- 2) 本田秀仁, 熊崎博一, 植田一博. 自閉症者の不確実性理解と意思決定: 言語的確率表現を用いた実験的検証. 認知インタラクション学会. WEB 開催. 2022 年 2 月.
- 3) 秋吉拓斗, 住岡英信, 熊崎博一, 中西惇也, 塩見昌裕, 加藤博一. 精神科デイケアにおける考え方の整理を支援するロボットの開発に向けた印象調査. インタラクション WEB 開催. 2022 年 2 月.
- 4) 前田昌志, 吉川雄一郎, 酒井和紀, 熊崎博一, 石黒浩, 上出寛子, 松浦直己. 社会的対話ロボットが第 4 学年「夏の星」の授業に与える影響. 日本天文学会. 2021 年秋季年会. WEB 開催. 2021 年 9 月.
- 5) 熊崎博一, 吉川雄一郎, 松本吉央. 精神科医療におけるロボットと患者様の共生. 第 35 回人工知能学会全国大会. オンライン開催. 2021 年 6 月.
- 6) 鉄田雅輝, 松本吉央, 熊崎博一, 吉川雄一郎. アンドロイドを用いた ASD 児向け自律対話訓練システムの構築. ROBOMECH2021. 大阪市. 2021 年 6 月.
- 7) 熊野 開, 信川 創, 白間綾, 高橋哲也, 戸田重誠 (2021)「ADHD における瞳孔制御モデルの構築」第 20 回情報科学技術フォーラム, オンライン開催, 2021.8.
- 8) 熊野開, 信川 創, 白間綾, 高橋哲也, 戸田重誠「青斑核活動の非対称性に着目した ADHD の瞳孔径制御モデルの構築」インテリジェント・システム・シンポジウム FAN2021, オンライン開催, 2021.9.
- 9) 白間綾 (2021)「発達性協調運動障害をもつ子どもの情緒と行動の問題: 自閉的行動特性の影響」日本心理臨床学会 第 40 回大会, オンライン開催, 2021.9.
- 10) 熊野 開, 信川 創, 白間綾, 高橋哲也, 戸田重誠「ADHD の瞳孔径制御モデルにより生成された瞳孔径時系列の複雑性解析」ニューロコンピューティング研究会, 沖縄, 2022.1.

(3) 研究報告会

(4) その他

C. 講演

- 1) 住吉太幹: 統合失調症薬物療法の変遷と課題—日常生活機能向上におけるセロトニン伝達の役割. 岡山県精神神経科診療所協会学術講演会. オンライン開催, 2021.4.8
- 2) 住吉太幹: 統合失調症の日常生活機能向上と薬物療法—セロトニン伝達の役割—. 山口県脳とこころの研究会. オンライン開催, 2021.6.10
- 3) 住吉太幹: 統合失調症の日常生活機能向上と薬物療法—セロトニン伝達の役割—. 令和三年京都精神神経科診療所協会学術講演会. 京都市, 2021.11.6

D. 学会活動

(1) 学会主催

- 1) 住吉太幹: 第 6 回 Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder 研究会・年次大会, オンライン開催, 2021.5.29

(2) 学会役員

- 1) Sumiyoshi T : World Psychiatric Association Section on Psychoneurobiology, Chairman
- 2) Sumiyoshi T : EEG & Clinical Neuroscience Society, Councilor
- 3) Sumiyoshi T : International Society of Bipolar Disorder; Cognition Task Force, Member
- 4) 住吉太幹 : Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder研究会, 理事
- 5) 住吉太幹 : 日本神経精神薬理学会 評議員, 編集委員
- 6) 住吉太幹 : 日本生物学的精神医学会 評議員
- 7) 住吉太幹 : 日本臨床精神神経薬理学会 評議員
- 8) 住吉太幹 : 日本脳科学会 評議員
- 9) 住吉太幹 : 日本統合失調症学会 評議員
- 10) 住吉太幹 : 日本精神保健・予防学会 評議員

(3) 座長

- 1) Sumiyoshi T: Symposium “Use of electrophysiological methods in management of psychotic states“, 21st WPA World Congress of Psychiatry, 2021, 10, 18 Virtual Congress (2021, 10, 18 - 21)
- 2) 住吉太幹 : ワークショップ「ニューロモデュレーション」. 第6回 Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorders 研究会・年次大会, オンライン開催, 2021.5.29(5.29)
- 3) 住吉太幹 : シンポジウム「うつ病における認知機能障害の評価; 日常診療への応用を目指して」第18回日本うつ病学会総会/第21回日本認知療法・認知行動療法学会, 横浜, 2021.7.9(7.8-10)
- 4) 住吉太幹 : シンポジウム「ω3 不飽和脂肪酸と精神疾患」第117回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.20(9.19-21)
- 5) 住吉太幹 : シンポジウム「統合失調症バイオマーカーとしての mismatch negativity」. 第117回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.20 (9.19-21)
- 6) 住吉太幹 : シンポジウム「経頭蓋直流刺激による精神分野における治療法開発の現状と展望」. 第117回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.20 (9.19-21)
- 7) 住吉太幹 : シンポジウム「統合失調症バイオマーカーとしての MMN : 早期発見と保険収載」. 第51回日本臨床神経生理学会学術大会, 仙台, 2021.12.17 (12.16-18)
- 8) 松元まどか : 国内シンポジウム『脳計測・解析技術の最先端』. 第5回ヒト脳イメージング研究会, WEB 開催, 2021.09.17-18.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Sumiyoshi T: Clinical Psychopharmacology and Neuroscience, Associate Editor
- 2) Sumiyoshi T: Frontiers in Pharmacology, Associate Editor
- 3) Sumiyoshi T: Clinical EEG and Neuroscience, Editorial Board Member
- 4) Sumiyoshi T: Schizophrenia Research Cognition, Editorial Board Member
- 5) Sumiyoshi T: Neuropsychopharmacology Reports, Editorial Board Member

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 住吉太幹: 令和3年度第1回児童・予防精神医学研究会. オンライン, 2021.6.18.
- 2) 住吉太幹: 令和3年度第2回児童・予防精神医学研究会. オンライン, 2022.3.18.
- 3) 住吉太幹, 熊崎博一: 令和3年度第2回発達障害者支援研修: 指導者養成研修パートII オンライン, 2021.9.28-29.
- 4) 住吉太幹, 熊崎博一: 令和3年度第2回発達障害者支援研修: 行政実務研修 オンライン, 2022.1.25-26.

- 5) 住吉太幹, 小居秀紀:令和 3 年度 Meet the Expert :「読める!医学英語論文の書き方」 オンライン, 2022.2.18.

(2) 研修会講師

- 1) 住吉太幹: 総合失調症における認知機能障害の克服に向けて: 神経生理学および薬理学的アプローチ. 精神科専門医障害教育研修会(福島県精神医学会主催) 2022.2.20.

F. その他

- 1) 松元まどか: 日米科学技術協力事業「脳研究」分野研究計画委員会委員

6. 精神薬理研究部

I. 研究部の概要

精神薬理研究部では、最終目標を「精神疾患の克服を目指した研究開発を行い、研究成果を目の前の医療に活かす」と定義し、当センターの事業計画における位置づけを明確化している。具体的には、我が国において重要な政策課題となっている精神疾患に焦点を当て、精神薬理学をバックボーンとする研究手法を用い、政策立案に必須となる臨床研究を実施するとともに、非臨床ステージにおける創薬研究を中心とした精神神経疾患の治療介入法の研究開発を行っている。

精神薬理研究部には、分子精神薬理研究室と向精神薬研究開発室の2室が所属している。令和三年度常勤研究員は部長の山田光彦、分子精神薬理研究室長の三輪秀樹、向精神薬研究開発室長の古家宏樹の3名であった。リサーチフェローは、小林桃子、上條諭志（5/1～）の2名、科研費研究員は、山田美佐、外来研究員は、國石 洋（学振PD）、中武優子（学振DC2）の2名であった。併任研究員は、野田隆政（国立精神・神経医療研究センター病院第二精神科医長）、であった。客員研究員は、稲垣正俊（島根大学医学部精神科医学講座教授）、岡 淳一郎（東京理科大学薬学部名誉教授）、川島義高（明治大学文学部心理社会学科臨床心理学専攻専任講師）、澤 幸祐（専修大学人間科学部心理学科教授）、白川修一郎（睡眠評価研究機構代表者）、関口正幸（東京理科大学薬学部薬学科客員教授）、高原 円（福島大学共生システム理工学類准教授）、中嶋智史（鹿児島純心女子大学人間教育学部教育・心理学科講師）、西川 徹（昭和大学医学部薬理学講座客員教授）、吉澤一巳（東京理科大学薬学部疾患薬理学研究室准教授）、米本直裕（ファイザー株式会社経営政策管理本部医療技術・事業性評価部部長）であった。研究生は、大槻露華、川島友子、上條諭志（4/1～4/30）、後藤玲央、早田暁伸、寺尾真実、西岡玄太郎であった。科研費研究助手は、松谷真由美、村松浩美であった。

II. 研究活動

(1) 実験動物を利用した研究

分子精神薬理研究室では、光遺伝学等の最先端の神経回路研究手法を駆使して、精神疾患の病態研究を進めている。統合失調症ではノンレム睡眠中に観察されるスピンドル波発生の著しい異常が観察されている。そこで、スピンドル波発生に重要な視床網様核の神経活動を操作可能なモデルマウスを用いて、統合失調症の病態仮説に関する研究を進めている。研究成果は、基礎研究から得られた知見をベッドサイド、ひいては日常臨床へと相互にトランスレーションするための基盤となる。

向精神薬研究開発室では、新規向精神薬候補化合物の基礎研究開発を進めている。イオンチャンネル型グルタミン酸受容体の一つであるNMDA受容体は、神経細胞の増殖・分化・移動を調節しており、新生仔期のラットにNMDA受容体拮抗薬を投与すると多様な神経解剖学的変化及びドーパミン過剰を含む神経化学的变化を生じる。新生仔期NMDA受容体遮断ラットは、感覚運動ゲーティングの障害や、社会行動の異常、ドーパミン作動薬への過感受性、空間学習障害などの統合失調症に類似する行動異常を示すことから、統合失調症の神経発達障害仮説に基づいた有力な動物モデルと目されている。令和三年度には、出生前後の脳発達におけるNMDA受容体NR2Aサブユニットの機能低下が統合失調症発症リスクを形成する可能性を示唆する研究成果が *Neuroscience Research* 誌に掲載された。

また、当研究部では様々な共同研究を国内外で進めている。令和三年度には、国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第六部及び病態生化学研究部との共同研究の成果として井上由紀子先生による論文が *eNeuro* 誌に、東京都医学総合研究所睡眠プロジェクトとの共同研究の成果として平井志伸先生による論文が *Science Advances* 誌に、群馬大学医学系研究科遺伝発達行動学分野との共同研究の成果として三輪秀樹室長による論文が *Cerebellum* 誌に掲載された。これらの知見を臨床研究と双方向にトランスレーションすることで、これまで困難とされてきた向精神薬の創薬研究をより合理的に進めることができるものと期待される。

(2) 臨床研究

精神薬理研究部では、実臨床の改善の基礎となる臨床研究を実施している。

・DEPRESSD Project：カナダ McGill 大学の Brett D. Thombs 教授が主宰する国際共同研究である DEPRESSD Project では、システマティックレビューにより作成された大型データベースについて、参加者個人のデータ（IPD: Individual Participant Data）に基づくメタ解析を行い、うつ病スクリーニング評価指標の標準化に資する研究を進めている。現在、副次解析研究が精力的に続けられている。令和三年度には、BMJ 誌や Psychotherapy and Psychosomatics 誌にその成果が原著論文として掲載された。DEPRESSD Project から得られたエビデンスが日々の診療に役立つことが期待されている。

・HOPE Project：精神疾患を伴う自殺未遂者ケアに関する先行研究の再評価、精神疾患を伴う自殺未遂者に対するケース・マネージメントの効果についての検討、ケース・マネージメント手法の標準化と人材育成プログラムの事業化に関する研究を進めている。令和三年度も、日本自殺予防学会による「The HOPE program standards（英語版）」を当研究部のホームページにて引き続き公開している。また、Psychiatry Res 誌にその成果が原著論文として掲載された。諸外国においても、救急医療施設を起点とした自殺未遂者支援の輪が広がればと期待している。

・Public Health Research Project：米本直裕客員研究員は複数の Public Health Research Project に参画している。

・京都大学健康科学センター健康推進・行動学分野（古川壽亮教授）により実施されている「大学生のメンタルヘルス増進のためのスマートフォン認知行動療法の最適化研究：完全要因ランダム化試験（ヘルシー・キャンパス・トライアル：HCT）」において、データ安全性モニタリング委員会（DSMB）の委員長を務めている。（山田光彦）

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

市民講座、保健所、地方自治団体等による講演会、マスメディア等にて普及啓発活動を行った。

(2) 専門教育面における貢献

- ・東京理科大学薬学部より大学院生を受け入れ指導した。
- ・日本精神神経薬理学会認定医・指導医・治験登録医・日本臨床薬理学会専門医として、教育活動を実施した。（山田光彦）

(3) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・厚生労働省自殺未遂者等支援拠点医療機関整備事業評価委員会委員。（山田光彦）
- ・厚生労働省被災3県心のケア総合支援調査研究等事業評価委員会委員。（山田光彦）
- ・厚生労働省健康増進総合支援システム（e-ヘルスネット）情報専門委員会委員。（山田光彦）
- ・診療報酬評価「自殺企図の患者に対する継続的な指導の評価」の算定要件となる研修会（日本自殺予防学会主催）をリモート開催。（山田光彦）

(4) センター内における臨床的活動

- ・日本臨床精神神経薬理学会専門医制度の研修施設である NCNP 病院において専門医・指導医として、病院レジデント等への教育及び指導を実施。（山田光彦）

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Negeri ZF, Levis B, Sun Y, He C, Krishnan A, Wu Y, Bhandari PM, Neupane D, Brehaut E,

- Benedetti A, Thombs BD; Depression Screening Data (DEPRESSD) PHQ Group (Yamada M): Accuracy of the Patient Health Questionnaire-9 for screening to detect major depression: updated systematic review and individual participant data meta-analysis. *BMJ* 375: n2183, 2021.
- 2) Inoue YU, Miwa H, Hori K, Kaneko R, Morimoto Y, Koike E, Asami J, Kamijo S, Yamada M, Hoshino M, Inoue T: Targeting neurons with functional oxytocin receptors: A novel set of simple knock-in mouse lines for oxytocin receptor visualization and manipulation. *eNeuro* 9(1):ENEURO.0423-21, 2022.
 - 3) Furuie H, Yamada M: Neonatal blockade of NR2A-containing but not NR2B-containing NMDA receptor induces spatial working memory deficits in adult rats. *Neurosci Res* 176:57-65, 2022.
 - 4) Miwa H, Kobayashi K, Hirai S, Yamada M, Watanabe M, Okado H, Yanagawa Y: GAD67-mediated GABA synthesis and signaling impinges on directing basket cell axonal projections toward purkinje cells in the cerebellum. *Cerebellum* Oct 21, 2021. online ahead of print.
 - 5) Harel D, Levis B, Sun Y, Fischer F, Ioannidis JPA, Cuijpers P, Patten SB, Ziegelstein RC, Markham S, Benedetti A, Thombs BD; DEPRESSion Screening Data DEPRESSD PHQ Collaboration (Yamada M): External validation of a shortened screening tool using individual participant data meta-analysis: A case study of the Patient Health Questionnaire-Dep-4. *Methods*. S1046-2023(21)00262-0, 2021. online ahead of print.
 - 6) Hirai S, Miwa H, Tanaka T, Toriumi K, Kunii Y, Shimbo H, Sakamoto T, Hino M, Izumi R, Nagaoka A, Yabe H, Nakamachi T, Shioda S, Dan T, Miyata T, Nishito Y, Suzuki K, Miyashita M, Tomoda T, Hikida T, Horiuchi J, Itokawa M, Arai M, Okado H: High-sucrose diets contribute to brain angiopathy with impaired glucose uptake and psychosis-related higher brain dysfunctions in mice. *Sci Adv* 7(46):eabl6077, 2021.
 - 7) Kazuki Y, Gao FJ, Yamakawa M, Hirabayashi M, Kazuki K, Kajitani N, Miyagawa-Tomita S, Abe S, Sanbo M, Hara H, Kuniishi H, Ichisaka S, Hata Y, Koshima M, Takayama H, Takehara S, Nakayama Y, Hiratsuka M, Iida Y, Matsukura S, Noda N, Li Y, Moyer AJ, Cheng B, Singh N, Richtsmeier JT, Oshimura M, Reeves RH: A transchromosomal rat model with human chromosome 21 shows robust Down syndrome features. *Am J Hum Genet* 3:109(2):328-344, 2022.
 - 8) Miyazawa T, Hasebe Y, Murase M, Sakurai M, Kazuo Itabashi K, Yonemoto N: The effect of early postnatal nutrition on human T cell leukemia virus type 1 mother-to-child transmission: A systematic review and meta-analysis. *Viruses* 13(5):819, 2021.
 - 9) GBD 2019 Tobacco Collaborators (Yonemoto N): Spatial, temporal, and demographic patterns in prevalence of smoking tobacco use and attributable disease burden in 204 countries and territories, 1990-2019: a systematic analysis from the Global Burden of Disease Study 2019. *Lancet* 397(10292):2337-2360, 2021.
 - 10) Local Burden of Disease HIV Collaborators (Yonemoto N): Subnational mapping of HIV incidence and mortality among individuals aged 15-49 years in sub-Saharan Africa, 2000-18: a modelling study. *Lancet HIV* 8(6):e363-e375, 2021.
 - 11) Tahara Y, Noguchi T, Yonemoto N, Nakashima T, Yasuda S, Kikuchi M, Hashiba K, Arimoto H, Nishioka K, Kokubu N, Atsumi T, Kashiwase K, Kasaoka S, Kuroda Y, Kada A, Yokoyama H, Nonogi H: J-PULSE-Hypo-DC Trial Study Group: Cluster randomized trial of duration of cooling in targeted temperature management after resuscitation for cardiac arrest. *Circ Rep* 3(7):368-374, 2021.

- 12) Johnson SC, Cunningham M, Dippenaar IN, Sharara F, Wool EE, Agesa KM, Han C, Miller-Petrie MK, Wilson S, Fuller JE, Balassyano S, Bertolacci GJ, Davis Weaver N; GBD Cause of Death Collaborators ([Yonemoto N](#)), Lopez AD, Murray CJL, Naghavi M: Public health utility of cause of death data: applying empirical algorithms to improve data quality. *BMC Med Inform Decis Mak* 21(1):175, 2021.
- 13) Cromwell EA, et al, ([Yonemoto N](#)): Predicting the environmental suitability for onchocerciasis in Africa as an aid to elimination planning. *PLoS Negl Trop Dis* 15(7):e0008824, 2021.
- 14) GBD 2019 Chewing Tobacco Collaborators ([Yonemoto N](#)): Spatial, temporal, and demographic patterns in prevalence of chewing tobacco use in 204 countries and territories, 1990-2019: a systematic analysis from the Global Burden of Disease Study 2019. *Lancet Public Health* 6(7):e482-e499, 2021.
- 15) GBD 2019 Dementia Collaborators ([Yonemoto N](#)): The Burden of dementia due to down syndrome, parkinson's disease, stroke, and traumatic brain injury: A Systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2019. *Neuroepidemiology* 55(4):286-296, 2021.
- 16) GBD 2020, Release 1, Vaccine Coverage Collaborators ([Yonemoto N](#)): Measuring routine childhood vaccination coverage in 204 countries and territories, 1980-2019: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2020, Release 1. *Lancet* 398(10299):503-521, 2021.
- 17) GBD 2019 Dementia Collaborators ([Yonemoto N](#)): Use of multidimensional item response theory methods for dementia prevalence prediction: an example using the health and retirement survey and the aging, demographics, and memory study. *BMC Med Inform Decis Mak* 21(1):241. 2021.
- 18) Natalia V Bhattacharjee, Lauren E Schaeffer, Simon I Hay, Local Burden of Disease Exclusive Breastfeeding Collaborators ([Yonemoto N](#)): Mapping inequalities in exclusive breastfeeding in low- and middle-income countries, 2000-2018. *Nat Hum Behav* 5(8):1027-1045, 2021.
- 19) GBD 2019 Under-5 Mortality Collaborators ([Yonemoto N](#)): Global, regional, and national progress towards sustainable development goal 3.2 for neonatal and child health: all-cause and cause-specific mortality findings from the Global Burden of Disease Study 2019. *Lancet* 398(10303):870-905, 2021.
- 20) Inui-Yukawa M, Miyaoka H, Yamamoto K, Kamijo Y, Takai M, [Yonemoto N](#), Kawanishi C, Otsuka K, Tachikawa H, Hirayasu Y: Effectiveness of assertive case management for patients with suicidal intent. *Psychiatry Res* 304:114125, 2021.
- 21) Global Burden of Disease 2020 Health Financing Collaborator Network ([Yonemoto N](#)): Tracking development assistance for health and for COVID-19: a review of development assistance, government, out-of-pocket, and other private spending on health for 204 countries and territories, 1990-2050. *Lancet* 398(10308):1317-1343, 2021.
- 22) GBD 2019 HIV Collaborators ([Yonemoto N](#)): Global, regional, and national sex-specific burden and control of the HIV epidemic, 1990-2019, for 204 countries and territories: the Global Burden of Diseases Study 2019. *Lancet HIV* 8(10):e633-e651, 2021.
- 23) GBD 2019 Stroke Collaborators ([Yonemoto N](#)): Global, regional, and national burden of stroke and its risk factors, 1990-2019: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2019. *Lancet Neurol* 20(10):795-820, 2021.
- 24) GBD 2019 Adolescent Mortality Collaborators ([Yonemoto N](#)): Global, regional, and national mortality among young people aged 10-24 years, 1950-2019: a systematic analysis for the

- Global Burden of Disease Study 2019. Lancet 398(10311):1593-1618, 2021.
- 25) Owolabi MO, Thrift AG, Martins S, Johnson W, Pandian J, Abd-Allah F, Varghese C, Mahal A, Yaria J, Phan HT, Roth G, Gall SL, Beare R, Phan TG, Mikulik R, Norrving B, Feigin VL; Stroke Experts Collaboration Group (Yonemoto N): The state of stroke services across the globe: Report of World Stroke Organization-World Health Organization surveys. Int J Stroke 16(8):889-901, 2021.
 - 26) Owolabi MO, Thrift AG, Mahal A, Ishida M, Martins S, Johnson WD, Pandian J, Abd-Allah F, Yaria J, Phan HT, Roth G, Gall SL, Beare R, Phan TG, Mikulik R, Akinyemi RO, Norrving B, Brainin M, Feigin VL Stroke Experts Collaboration Group (Yonemoto N): Primary stroke prevention worldwide: translating evidence into action. Lancet Public Health 7(1):e74-e85, 2022.
 - 27) GBD 2019 Adolescent Young Adult Cancer Collaborators (Yonemoto N): The global burden of adolescent and young adult cancer in 2019: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2019. Lancet Oncol 23(1):27-52, 2022.
 - 28) GBD 2019 Dementia Forecasting Collaborators (Yonemoto N): Estimation of the global prevalence of dementia in 2019 and forecasted prevalence in 2050: an analysis for the Global Burden of Disease Study 2019. Lancet Public Health 7(2):e105-e125, 2022.
 - 29) GBD 2019 Tuberculosis Collaborators (Yonemoto N): Global, regional, and national sex differences in the global burden of tuberculosis by HIV status, 1990-2019: results from the Global Burden of Disease Study 2019. Lancet Infect Dis 22(2):222-241, 2022.
 - 30) Global Burden of Disease 2019 Cancer Collaboration (Yonemoto N): Cancer incidence, mortality, years of life lost, years lived with disability, and disability-adjusted life years for 29 cancer groups from 2010 to 2019: A systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2019. JAMA Oncol 8(3):420-444, 2022.
 - 31) GBD 2019 Ageing Collaborators (Yonemoto N): Global, regional, and national burden of diseases and injuries for adults 70 years and older: systematic analysis for the Global Burden of Disease 2019 Study. BMJ 10;376:e068208, 2022.

(2) 総説

- 1) 稲垣正俊, 河西千秋, 山田光彦, 錦織 光:【その後の自殺対策Ⅱ-臨床に生かす自殺対策の展開】自殺の再企図予防のための介入: これまでの知見, これからの課題. 精神科治療学 36(9):1009-1014, 2021.
- 2) 湯浅 晃, 米本直裕: 諸外国と日本における医療技術評価の現状. 薬理と治療 49(4):509-516, 2021.

(3) その他

- 1) 國石 洋, 関口正幸, 山田光彦: ストレス関連疾患への眼窩前頭皮質の寄与—ストレスによる眼窩前頭皮質—扁桃体回路の可塑的变化. 日本薬理学雑誌 156(2): 62-65, 2021.
- 2) 山田光彦: 厚生労働省による戦略研究において精神・神経科学振興財団が果たした役割-科学的根拠に基づく精神保健行政の推進のために. 精神・神経科学振興財団業績集, 2021.

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Nakatake Y, Furuie H, Inoue-Ueno Y, Inoue T, Yosizawa K, Hosino M, Yamada M: A psychosocial stress model using witnessing social defeat scenes. 第95回日本薬理学会年会, 福岡, 2022.3.7-9.

- 2) 川島義高, 米本直裕, 稲垣正俊, 井上佳祐, 河西千秋, 山田光彦: がん患者の自殺リスク因子と自殺予防介入研究のレビュー. 第 18 回日本うつ病学会オンライン, 横浜, 2021.7.8-10.
- 3) 石塚量見, 山田光彦, 中村治雅: 遺伝子治療用製品の開発に係る薬事等の特徴と留意すべきポイント. 第 42 回日本臨床薬理学会学術総会ハイブリッド, 仙台, 2021.12.9-11.

(2) 一般演題

- 1) Kawashima Y, Sakakibara S, Ueno M, Sone H, Ishida W, Yonemoto N, Kanazawa Y, Yamada M: Conceptualization of the difficulties faced by emergency paramedics in the care of suicide attempters: A consensual qualitative study. 31st IASP World Congress, Australia, 2021.09.21-24.
- 2) Kuniishi H, Yamada M: Effects of adolescent social isolation and resocialization on the mOFC-BLA synaptic transmission and social behavior mice. 第 95 回日本薬理学会年会, 福岡, 2022.3.7-9.
- 3) Furuie H, Yamada M: Neonatal blockade of NR2A-containing NMDA receptor induces schizophrenia-related behaviors in adult rats. 第 95 回日本薬理学会年会, 福岡, 2022.3.7-9.
- 4) 國石 洋, 関口正幸, 山田光彦: 発達期マウスにおける社会隔離飼育は内側・外側 OFC-BLA 経路のシナプス伝達に異なる影響を与え, 情動行動の異常を引き起こす. 第 44 回日本神経科学大会/CJK 第 1 回国際会議 オンライン, 神戸, 2021.7.28-31.
- 5) 中武優子, 古家宏樹, 吉澤一巳, 山田光彦: The oxytocin signaling in the anterior insular cortex mediates the emotional contagion in mice. 第 44 回日本神経科学大会 オンライン, 神戸, 2021.7.28-31.
- 6) 米本直裕, 川島義高: 新型コロナウイルス (COVID-19) 流行下における メンタルヘルスに関する援助希求行動: 系統的レビュー. 第 45 回日本自殺予防学会 オンライン, 2021.9.4-5.
- 7) 山田光彦, 川島義高: 救急医療機関におけるエビデンスにもとづく自殺未遂者支援の社会実装. 第 117 回日本精神神経学会学術総会 オンライン, 京都, 2021.9.19-21.
- 8) 國石 洋, 関口正幸, 山田光彦: 幼少期隔離飼育ストレスによるマウス内側・外側眼窩前頭皮質一扁桃体経路のシナプス変化と情動行動異常への寄与. 第 40 回躁うつ病の薬理・生化学的研究懇話会 オンライン, 2021.10.23.
- 9) 中武優子, 古家宏樹, 吉澤一巳, 山田光彦: 前部頭オキシトシンシグナルが社会的ストレスの伝達を仲介する. 第 40 回躁うつ病の薬理・生化学的研究懇話会 オンライン, 2021.10.23.
- 10) 山田光彦, 川島義高, 山田美佐, 古家宏樹, 國石 洋, 立花良之, 野田隆政: 不安を主症状とする精神疾患に対する Riluzole の効果: システムティックレビューによる検討. 第 42 回日本臨床薬理学会学術総会ハイブリッド, 仙台, 2021.12.9-11.

(3) 研究報告会

- 1) Hashimoto Y, Kuniishi H, Sakai K, Fukushima Y, Du X, Yamashiro K, Hori K, Motohashi N, Imamura M, Hoshino M, Yamada M, Araki T, Itaka K, Ichinohe N, Sekiguchi M, Aoki Y: Brain Dp140 alters glutamatergic transmission and social behavior in Duchenne muscular dystrophy mouse model. The 43rd Annual Scientific Meeting National Institute of Neuroscience National Center of Neurology and Psychiatry onsite and online, Tokyo, 2022.3.22-23.
- 2) Inoue YU, Miwa H, Hori K, Kaneko R, Morimoto Y, Koike E, Asami J, Kamijyo S, Yamada M, Hoshino M, Inoue T: Targeting neurons with functional oxytocin receptors: A novel set of simple Knock-in mouse lines for oxytocin receptor visualization and manipulation. The 43rd Annual Scientific Meeting National Institute of Neuroscience National Center of Neurology and Psychiatry onsite and online, Tokyo, 2022.3.22-23.

- 3) 三輪秀樹: トランスレータブル脳指標を用いた基礎研究から精神疾患の共通病態基盤の解明を目指して. 第 42 回 NCNP 精神保健研究所ランチョンセミナー オンライン, 東京, 2021.9.6.
- 4) 小林桃子, 古家宏樹, 山田美佐, 山田光彦: 統合失調症関連遺伝子 WDR3 の中枢神経系における発現と機能の検討. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 3 年度研究報告会 (第 33 回) オンライン, 東京, 2022.3.28.
- 5) 古家宏樹, 山田光彦: NMDA 受容体 NR2A サブユニットの新生仔期における機能阻害は空間作業記憶の発達を阻害する. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 3 年度研究報告会 (第 33 回) オンライン, 東京, 2022.3.28.

(4) その他

- 1) 古家宏樹: 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 3 年度研究報告会 (第 33 回) オンライン, 2022.3.28. 青申賞受賞
- 2) 小林桃子: 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 3 年度研究報告会 (第 33 回) オンライン, 2022.3.28. 若手奨励賞受賞

D. 学会活動

(1) 学会役員

- 1) 山田光彦: 日本薬理学会 評議員
- 2) 山田光彦: 日本臨床精神神経薬理学会 評議員
- 3) 山田光彦: 日本うつ病学会 評議員
- 4) 山田光彦: 日本神経精神薬理学会 評議員
- 5) 山田光彦: 日本神経精神薬理学会 TMS 委員会/薬事委員会 委員
- 6) 山田光彦: 日本自殺予防学会 継続支援研修委員会 委員
- 7) 山田光彦: 躁うつ病の薬理生化学的研究懇話会 幹事

(2) 座長

- 1) 山田光彦: 医療機関がアデノ随伴ウイルス等を利用した遺伝子治療の臨床試験を安全に実施するために. 第 42 回日本臨床薬理学会学術総会ハイブリッド, 仙台, 2021.12.9-11.
- 2) 山田光彦: 新規うつ病動物モデルの発展と今後の課題. Development of Novel Animal Models for Depression and Future Challenges. 第 95 回日本薬理学会年会, 福岡, 2022.3.7-9.
- 3) 山田光彦: 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 3 年度研究報告会 (第 33 回) オンライン, 東京, 2022.3.28.

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 山田光彦: 分子精神医学 編集同人

E. 研修

(1) 研修企画・講師

- 1) 診療報酬評価「自殺企図の患者に対する継続的な指導の評価」の算定要件となる「自殺再企図防止のための救急患者精神科継続支援研修会 (日本自殺予防学会主催)」について, 令和 3 年度に 3 回リモート開催し, 講師を務めた (2021.6.26-27; 2021.10.9-10; 2022.3.5-6).

F. その他

- 1) 精神薬理研究部: 脳科学でこころの仕組みを理解したい. 世界脳週刊 2021 オンライン (zoom 開催), 東京, 2022.2.26

7. 精神疾患病態研究部

I. 研究部の概要

精神疾患病態研究部では、精神疾患の克服とその障害の支援のための先駆的研究活動を展開している。精神疾患の生物学的な研究と精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動をより発展させて全国レベルで展開することを目標としている。精神疾患の生物学的な研究は、認知社会機能、脳神経画像、神経生理機能などの中間表現型及びゲノムなどの生体試料を用いて、統合失調症、気分障害、発達障害などの幅広い精神疾患について疾患横断的に検討することにより、病態を解明し、新たな診断法・治療法の開発を行っている。この研究は、当研究部においてのみ行うものではなく、国立精神・神経医療研究センターの他の研究部門および日本全国42の精神疾患関連研究機関の共同研究体制であるCOCORO（Cognitive Genetics Collaborative Research Organization：認知ゲノム共同研究機構）を運営しオールジャパン体制で遂行している。精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動は、EGUIDEプロジェクト（Effectiveness of GUIDeline for Dissemination and Education in psychiatric treatment：精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究）という全国44大学を含む240医療機関の共同研究組織を牽引し、全国でガイドラインの講習を行い、その効果検証を行っている。

令和3年度の人員構成は次のとおりである。部長：橋本亮太，室長：三浦健一郎，松本純弥，リサーチフェロー：長谷川尚美，科研費心理療法士：田村友里江，新谷茉莉果，科研費研究補助員：木村哲也，北川 航，小池春菜，山縣眞美子，研究助手：山口綾子，大重満津子，併任研究員：久保田智香，佐藤英樹，宮川 希，柏木宏子，竹田康二，高野晴成，石川夏絵，林 大祐，一戸紀孝，渡邊 恵，外来研究員12名，客員研究員56名，研究生13名。

II. 研究活動

A. 精神疾患の病態解明と診断法・治療法の開発研究

1) 精神疾患の脳神経画像研究（松本，三浦，橋本，高野，伊藤，宮山，宮川）

精神疾患の脳神経画像研究は、COCOROの主なメンバーである大阪大学（藤本，山森，安田客員研究員），生理学研究所（福永客員研究員），筑波大学（根本客員研究員），東京大学（岡田客員研究員），北海道大学（橋本直樹客員研究員），山口大学（中川客員研究員），京都大学（宮田客員研究員），富山大学（高橋客員研究員），名古屋大学（尾崎客員研究員），岐阜大学（大井客員研究員），九州大学（鬼塚客員研究員），昭和大学（中村客員研究員），徳島大学（沼田客員研究員），産業医科大学（吉村客員研究員），奈良医科大学（牧之段客員研究員），慈恵医科大学（小高客員研究員），広島大学，日本医科大学などとの多施設共同研究にて行っている。統合失調症を中心に三次元脳構造画像解析，拡散テンソル画像解析，安静時機能的MRI解析などを行い，今年度は5編の論文成果があった。そして，COCOROの多施設共同研究にて統合失調症，双極性障害，うつ病，自閉スペクトラム症，健常者合わせて5425例の脳構造画像を用いて大脳皮質厚及び大脳皮質面積のメガアナリシスを行い，統合失調症，双極性障害，うつ病の順に大脳皮質厚の菲薄化が認められ，統合失調症とうつ病に大脳皮質面積の減少が認められることを示した。また，68の大脳皮質領域における皮質厚菲薄化及び皮質面積減少のパターンを解析し，統合失調症，うつ病，双極性障害の皮質厚菲薄化パターンの共通性と，統合失調症，うつ病，自閉スペクトラム症の皮質面積減少パターンの共通性を見出した。これらの研究により，JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP2021，日本統合失調症学会2021年度国際学会若手発表奨励賞，第16回日本統合失調症学会一般演題賞（優秀賞）を松本室長が受賞した。児童・予防精神医学研究部とは，統合失調症のニューロメラニン解析の共同研究を松元まどか室長を中心に行っている。国際的な脳神経画像の巨大コンソーシアムであるENIGMA

との共同研究も引き続き行っている。

2) 精神疾患の眼球運動研究（三浦，松本，橋本）

精神疾患の眼球運動研究は、大阪大学（藤本，山森，安田客員研究員），名古屋大学（尾崎客員研究員），九州大学（鬼塚客員研究員），東京大学，奈良医科大学（牧之段客員研究員），北海道大学（橋本直樹，吉田，岡田客員研究員），岐阜大学（大井客員研究員），徳島大学（沼田客員研究員），京都大学（宮田客員研究員），生理学研究所（福永客員研究員）などとの多施設共同研究にて行っている。統合失調症を中心にフリービューイング課題，滑動性追跡眼球運動課題，注視課題などから得られた眼球運動の特徴，および眼球運動異常を示す眼球運動スコアの解析や，眼球運動の基礎研究などを行い，今年度は 6 編の論文成果があった。また，本年度，日本医療研究開発機構（AMED）医工連携・人工知能実装研究事業（研究課題：AI 技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発）が採択され，眼球運動と認知機能を用いた統合失調症の診断マーカーの社会実装化を企業と，アカデミアの 9 医療機関の共同研究にて開始した。医療現場で実施可能なタブレット機器にて簡便に測定できる医療機器プログラム開発を行っており，タブレット実装の一号機が完成した。今後，実際に健常者や統合失調症患者で測定を行い，より精度を改善した二号機作成し，臨床試験に進めていく予定である。健常者の年齢と性別における眼球運動特性を検討した研究や（三浦，橋本，Takanashi et al, *Neuropsychopharmacol Rep*, 2021），高齢者のうつ病と健常者における眼球運動特性の違いなどの成果が得られた（三浦，橋本，Takahashi et al, *Front Psy, section Neuroimaging and Stimulation*, 2021）。

3) 認知社会機能プロジェクト（橋本，松本，三浦，伊藤）

広く診療で使えるような統合失調症の認知機能障害の簡便な測定法を開発し，2000 例程度のデータを COCORO にて集積して解析し，普及のため各地で講習会などを行っている。認知機能障害は，簡略版 WAIS で測定する推定知能と Japanese Adult Reading Test (JART) で測定する推定病前知能の差にて算出したものである。2021 年 4 月の第 15 回日本統合失調症学会と 2022 年 3 月の第 16 回日本統合失調症学会で，統合失調症の認知社会機能障害の簡易な測定法のワークショップを行った。統合失調症の認知特性としての病識の欠如に関する研究など 3 編の論文成果があった。299 名の日本人統合失調症患者を対象として病識の評価スケールである SAI と服薬アドヒアランスや精神症状の関連を調べた。その結果，SAI で評価した病識と服薬アドヒアランスや精神症状との相関が認められた（橋本，松本，三浦，Ito et al, *Psychiatry Clin Neurosci*, 2021）。本論文は，伊藤研究生（お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科人間発達学専攻）の修士論文となった。

4) 精神疾患のゲノム・生体試料研究（橋本，松本，三浦）

精神疾患のゲノム・生体試料研究は，国内においては大阪大学（藤本，山森，安田，菊地，橋本均客員研究員），東京農業大学（中澤客員研究員），徳島大学（沼田客員研究員），岐阜大学（大井客員研究員），奈良医科大学（牧之段客員研究員），東京都医学研究所（新井客員研究員），福島県立医科大学などとの共同研究，そして国外においては双極性障害におけるリチウムの治療反応性の遺伝学研究のコンソーシアムである ConLiGen や ENIGMA との共同研究を中心に行っている。今年度はリチウムの治療反応性の遺伝学研究の 3 編を含むゲノム研究が 5 編や精神疾患死後脳研究で 2 編など計 11 編の研究成果が得られた。統合失調症多発家系の iPS 細胞を用いた分子病態解析により，グルタミン酸系とドーパミン系が関与していることを見出した（橋本，Yamamoto et al, *Transl Psychiatry*, 2021）。治療抵抗性統合失調症のクロザピン反応の不一致例のゲノムワイドメチル化解析により，メチル化の変化が神経細胞のシナプス機能異常にかかわる可能性が示唆された（橋本，Kikuchi et al, *Front Psy, section Schizophrenia*,

2021).

5) 精神疾患の分子メカニズム研究 (橋本, 松本)

東京農業大学 (中澤客員研究員) と大阪大学 (橋本均客員研究員) との共同研究にて, ヒト 3q29 領域に対応する領域に欠失を導入した 3q29 欠失モデルマウスの社会的行動異常がオキシトシンの投与により回復することを見いだした (橋本, Takemoto et al, Mol Brain, 2022). また, 3q29 欠失モデルマウスでは, 室傍核のオキシトシン陽性細胞数が野生型マウスに比べて少ないこと, 及び大脳皮質のオキシトシン含有量が少ないことも明らかにした. 神経研究所微細構造研究部 (一戸部長: 併任) と自閉スペクトラム症に関する共同研究を開始した. また, 本年度, 大阪大学と東京農業大学との共同研究が, 日本医療研究開発機構 (AMED) 脳とこころの研究推進プログラム精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト (研究課題: iPS 細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究) に採択された.

6) 司法精神医学領域の生物学的研究 (柏木, 竹田, 三浦, 松本, 橋本)

暴力の既往のある統合失調症群, 暴力の既往のない統合失調症群, 健常者データ 1600 例以上を COCORO データベースから抽出し, 認知機能, 精神病理, 社会機能, QOL 等について解析し, 暴力歴のある統合失調症患者では暴力歴のない統合失調症患者と比較して, 視覚的記憶機能の低いこと, 性格傾向における自己超越性が高いこと, 労働時間が短, QOL が低いことなどが明らかになった (橋本, 松本, 三浦, Kashiwagi et al, J Psychiatr Res, 2022). 犯罪被害者となったてんかん患者の判決文データベース調査を行い, 家族介護者による重大犯罪にはてんかんそのものよりも, 被害者の併存疾患や問題行動が関係していることを見出した (橋本, 松本, 三浦, Takeda et al, Epilepsy Behav, 2021).

B. 精神科医療の普及・均てん化に関する研究

1) 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動: EGUIDE プロジェクト (長谷川, 久保田, 佐藤, 柏木, 三浦, 松本, 橋本)

EGUIDE プロジェクトは, 精神科医に対してガイドラインの教育の講習を行い, ガイドラインの効果を検証する社会実証研究である. 対象とするガイドラインは, 統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインであり, 日本神経精神薬理学会, 日本うつ病学会, 日本臨床精神神経薬理学会, 日本精神神経学会のバックアップを受けて行っている. 2016 年に開始した EGUIDE プロジェクトは, 本年度 44 大学 240 医療機関が参加する巨大なプロジェクトになり, 毎年 20 回以上の講習会を全国で行い, 延べ 3000 名以上の精神科医が講習を受講した. EGUIDE プロジェクトにおける検証活動は, 講習受講直後のガイドラインの理解度の向上, その後のガイドラインを遵守した治療行動調査における実践度の向上, 処方行動を診療の質 (Quality Indicator: QI) という形で測定し, 例えば統合失調症患者の退院時の抗精神病薬単剤治療率というような QI を設定し, 経時的に測定することにより, 講習の効果の有無についての検討を行った. たった一日の講習を受けることにより統合失調症とうつ病の両方のガイドラインに対する理解度が顕著に向上することを昨年度論文報告し, そのガイドラインの実践度も顕著に向上し, それが 2 年間持続すること, そして, 処方行動も向上することなどを本年度学会発表にて行った. これらの発表により, 長谷川が, 第 5 回日本精神薬学会総会にて日本精神薬学賞, AsCNP2021 Best Poster Award, 日本統合失調症学会 2021 年度国際学会若手発表奨励賞を受賞し, 橋本が第 117 回日本精神神経学会学術総会優秀発表賞を受賞した. また, 本年度の論文成果は 5 編であった.

EGUIDE プロジェクトでは講習資料を前年度の受講者の理解度の結果に基づいて毎年改訂している. この講習資料の改訂が, ガイドラインの理解度向上に寄与しているかどうかを検証すると, 講義資料の改訂がガイドラインの理解度向上に有効である可能性を示唆する成果が得

られた（長谷川，松本，三浦，橋本，Numata et al, *Neuropsychopharmacol Rep*, 2021）．設問における理解度の改善が，将来，医師の処方行動の変化により寄与することが期待できる成果であった．

EGUIDE プロジェクトの講習の処方行動の向上効果を検討するためには，ベースラインにおける処方行動の実態を調査する必要がある．統合失調症患者 2177 名と大うつ病性障害患者 1238 名から退院時の処方データから，統合失調症患者における抗精神病薬の多剤併用とうつ病患者における抗うつ薬の多剤併用は，他の向精神薬の併用率の高さと関連することが示された（長谷川，松本，三浦，橋本，Hashimoto N et al, *Asian J Psychiatr*, 2021）．また，精神疾患では不眠症状の頻度が高率であり睡眠薬の併用がしばしばなされていることが知られていたが，その実態は明らかではなかった．統合失調症の睡眠薬処方率が 56%であり，うつ病の睡眠薬所要率が 64%に上がることがわかり，睡眠薬処方をなされている患者では抗精神病薬，抗うつ薬，抗不安薬，気分安定薬などの薬剤の併用率が高いことが明らかになった（長谷川，松本，三浦，橋本，Furihata et al, *Sleep Med*, 2021）．また，臨床現場では屯用薬が良く用いられているが，その効果は明らかではなく，各種ガイドラインでも屯用薬処方は勧められていない．しかし，屯用薬処方の実態は明らかでないため EGUIDE プロジェクトにて検討すると，統合失調症においてもうつ病においても約 3 割の患者において屯用薬処方がなされていた（長谷川，松本，三浦，橋本，Ichihashi et al, *Asian J Psychiatr*, 2022）．このような実態を踏まえて，統合失調症では抗精神病薬の単剤治療，うつ病では抗うつ薬の単剤治療が推奨されていることから，抗精神病薬や抗うつ薬の単剤治療を推進するために QI として設定し，例えば 75% を目標として医師，多職種，患者・家族とも共有しモニタリングを行う必要があると考えられた．睡眠薬や屯用薬においても同様に目標とする QI を設定して今後進めていく予定である．

クロザピンは治療抵抗性統合失調症に唯一適応のある抗精神病薬であり，世界中のガイドラインでも治療抵抗性統合失調症＝クロザピン治療とされている．しかし，日本でのクロザピン治療率は諸外国の概ね 1/10 程度であり，普及が必要とされている．クロザピン治療の普及に関連する要因が知られていないため，病院毎の治療抵抗性統合失調症の診断の検討についての治療抵抗性統合失調症診断検討記載率とクロザピンの処方率とその相関について検討した．結果から，治療抵抗性統合失調症診断率を高めることが，クロザピン処方率を高めることに寄与する可能性が示唆された（長谷川，松本，三浦，橋本，Yasui-Furukori et al, *Neuropsychopharmacol Rep*, 2022）．

日本の精神医学領域ではこのような社会実装研究はまだ認知されていなかったが，この研究により広く認知されるようになった．

2) 精神科治療ガイドラインの作成・改訂（橋本）

統合失調症薬物治療ガイドラインを当事者・家族・支援者など関連団体すべてを網羅した 80 名以上の委員と共同で改訂をしている．精神科領域では初めての試みであり，他の診療領域においても先進的な取り組みである．2021 年度にはドラフトが完成し，パブリックコメントを受けた．2022 年度に公開予定としている．

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 日本医療機能評価機構 EBM 普及推進事業（Minds）が行う「第 23 回 診療ガイドライン作成に関する意見交換会」において，統合失調症薬物治療ガイドラインについての講演を行った．Minds では 400 以上のガイドラインが掲載されており，その中で講演を行ったのは選ばれた 4 つのガイドラインだけであり，当事者・家族・支援者との共同作成と EGUIDE プロジェクトによる普及・教育・検証活動が先進的であると評価されて招聘された（橋本）．

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 統合失調症やうつ病などのガイドラインの作成を行い、精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動である EGUIDE プロジェクトも全国展開している。EGUIDE プロジェクトにおいては、統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインの講習を全国の精神科医を対象に行い、その医療機関における治療に影響を与えるかどうかについての検討を行い、精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果を検証している。令和3年度は、統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインの講習を全国8か所で行い、45以上の医療機関、延べ501名の精神科医が参加した（長谷川、久保田、佐藤、柏木、橋本）。
- ・ 開発した統合失調症の認知機能障害の簡便な測定法についての講習会を統合失調症学会において行い、評価シートを配布し普及活動を行った（松本、伊藤、橋本）。
- ・ 国立大学法人 大阪大学の医学系研究科、連合小児発達学研究科においては招へい教授として、奈良県立医科大学においては非常勤講師として、精神医学研究の指導や知見の教授を行っている（橋本）。

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・ クロザピンは治療抵抗性統合失調症に効果のある唯一の抗精神病薬であるが無顆粒球症などの重篤な副作用のリスクが高く厳しい規制の下で処方が可能となっているため、諸外国と比較して極端に普及率が低い。精神疾患病態研究部より発信した研究成果に基づいて、その規制を諸外国並みにするための提言を、日本精神神経学会、日本神経精神薬理学会、日本臨床精神神経薬理学会、日本統合失調症学会の関連4学会合同で厚生労働省に提言を行った結果、令和3年度第8回薬事・食品衛生審議会薬事分科会医薬品等安全対策部会案審議調査会（5月24日）にてクロザピンの添付文書改訂について審議された。その際に、精神科を代表して橋本が参考人として招聘され、その結果、規制を諸外国並みに緩和する添付文書改訂が認められ、6月3日に添付文書が改訂された。クロザピンは諸外国にはない日本独特の精神疾患患者の長期入院問題に対して入院期間の短縮に唯一かかわる要因であることから、厚生労働省はクロザピンの普及に力を入れており、大きな社会的な貢献であると考えられる。

(5) センター内における臨床的活動

- ・ 外来診療において、連携新患、統合失調症外来をそれぞれ週に1回の新患枠の診察及び、再診を週に半日行っている。専門として、統合失調症及び発達障害の診療を行い、病院内外からの紹介を受け、セカンドオピニオン対応も行っている（橋本）。

(6) その他

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Idemoto K, Niitsu T, Hata T, Ishima T, Yoshida S, Hattori K, Horai T, Otsuka I, Yamamori H, Toda S, Kamenoy Y, Ota K, Oda Y, Kimura A, Hashimoto T, Mori N, Kikuchi M, Minabe Y, Hashimoto R, Hishimoto A, Nakagome K, Hashimoto K, Iyo M: Serum levels of glial cell line-derived neurotrophic factor as a biomarker for mood disorders and lithium response. *Psychiatry Res* 301:113967, 2021.
- 2) Hayashi K, Miki K, Hayashi N, Hashimoto R, Yukioka M: Weather sensitivity associated with quality of life in patients with fibromyalgia. *BMC Rheumatol* 5(1):14, 2021.

- 3) Takeda K, Yamashita S, Taniguchi G, Kuramochi I, Murakami M, Kashiwagi H, Hashimoto R, Hirabayashi N, Okada T: Criminal victimization of people with epilepsy: Sixteen criminal judgments in Japan between 1990 and 2019. *Epilepsy Behav* 118:107912, 2021.
- 4) Ito S, Matsumoto J, Sakai Y, Miura K, Hasegawa N, Yamamori H, Ishimaru K, Kim Y, Hashimoto R: Positive association between insight and attitudes toward medication in Japanese patients with schizophrenia: Evaluation with the Schedule for Assessment of Insight (SAI) and the Drug Attitude Inventory - 10 Questionnaire (DAI-10). *Psychiatry Clin Neurosci* 75(5):187-188, 2021.
- 5) Takahashi J, Miura K, Morita K, Fujimoto M, Miyata S, Okazaki K, Matsumoto J, Hasegawa N, Hirano Y, Yamamori H, Yasuda Y, Makinodan M, Kasai K, Ozaki N, Onitsuka T, Hashimoto R: Effects of age and sex on eye movement characteristics. *Neuropsychopharmacol Rep* 41(2):152-158, 2021.
- 6) Numata S, Nakataki M, Hasegawa N, Takaesu Y, Takeshima M, Onitsuka T, Nakamura T, Edagawa R, Edo H, Miura K, Matsumoto J, Yasui-Furukori N, Kishimoto T, Hori H, Tsuboi T, Yasuda Y, Furihata R, Muraoka H, Ochi S, Nagasawa T, Kyou Y, Murata A, Katsumoto E, Ohi K, Hishimoto A, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R: Improvements in the degree of understanding the treatment guidelines for schizophrenia and major depressive disorder in a nationwide dissemination and implementation study. *Neuropsychopharmacol Rep* 41(2):199-206, 2021.
- 7) Ohi K, Nishizawa D, Sugiyama S, Takai K, Kuramitsu A, Hasegawa J, Soda M, Kitaichi K, Hashimoto R, Ikeda K, Shioiri T: Polygenic Risk Scores Differentiating Schizophrenia From Bipolar Disorder Are Associated With Premorbid Intelligence in Schizophrenia Patients and Healthy Subjects. *Int J Neuropsychopharmacol* 24(7):562-569, 2021.
- 8) Nakano T, Kajiya Y, Revankar G, Hashimoto R, Watanabe Y, Kishima H, Ikeda M, Mihara M, Mochizuki H, Hattori N: Neural networks associated with quality of life in patients with Parkinson's disease. *Parkinsonism Relat Disord* 89:6-12, 2021.
- 9) Takemura A, Matsumoto J, Hashimoto R, Kawano K, Miura K: Macaque monkeys show reversed ocular following responses to two-frame-motion stimulus presented with inter-stimulus intervals. *J Comput Neurosci* 49(3):273-282, 2021.
- 10) Takahashi J, Hirano Y, Miura K, Morita K, Fujimoto M, Yamamori H, Yasuda Y, Kudo N, Shishido E, Okazaki K, Shiino T, Nakao T, Kasai K, Hashimoto R, Onitsuka T: Eye Movement Abnormalities in Major Depressive Disorder. *Frontiers in Psychiatry, section Neuroimaging and Stimulation, Front Psychiatry, section Neuroimaging and Stimulation* 12: 673443, 2021.
- 11) Hashimoto N, Yasui-Furukori N, Hasegawa N, Ishikawa S, Numata S, Hori H, Iida H, Ichihashi K, Furihata R, Murata A, Tsuboi T, Takeshima M, Kyou Y, Komatsu H, Kubota C, Ochi S, Takaesu Y, Usami M, Nagasawa T, Hishimoto A, Miura K, Matsumoto J, Ohi K, Yamada H, Inada K, Watanabe K, Shimoda K, Hashimoto R: Characteristics of discharge prescriptions for patients with schizophrenia or major depressive disorder: Real-world evidence from the Effectiveness of Guidelines for Dissemination and Education (EGUIDE) psychiatric treatment project. *Asian J Psychiatr* 63:102744, 2021.
- 12) Amare AT, Schubert KO, Hou L, Clark SR, Papiol S, Cearns M, Heilbronner U, Degenhardt F, Tekola-Ayele F, Hsu YH, Shekhtman T, Adli M, Akula N, Akiyama K, Ardaur R, Arias B, Aubry JM, Backlund L, Bhattacharjee AK, Bellivier F, Benabarre A, Bengesser S, Biernacka JM, Birner A, Brichant-Petitjean C, Cervantes P, Chen HC, Chillotti C,

- Cichon S, Cruceanu C, Czerski PM, Dalkner N, Dayer A, Del Zompo M, DePaulo JR, Étain B, Jamain S, Falkai P, Forstner AJ, Frisen L, Frye MA, Fullerton JM, Gard S, Garnham JS, Goes FS, Grigoriu-Serbanescu M, Grof P, Hashimoto R, (113 名中 48 番目) Hauser J, Herms S, Hoffmann P, Hofmann A, Jiménez E, Kahn JP, Kassem L, Kuo PH, Kato T, Kelsoe JR, Kittel-Schneider S, Kliwiczki S, König B, Kusumi I, Laje G, Landén M, Lavebratt C, Leboyer M, Leckband SG, Tortorella A, Manchia M, Martinsson L, McCarthy MJ, McElroy SL, Colom F, Mitjans M, Mondimore FM, Monteleone P, Nievergelt CM, Nöthen MM, Novák T, O'Donovan C, Ozaki N, Ösby U, Pfennig A, Potash JB, Reif A, Major Depressive Disorder Working Group of the Psychiatric Genomics Consortium, Reininghaus E, Rouleau GA, Rybakowski JK, Schalling M, Schofield PR, Schweizer BW, Severino G, Shilling PD, Shimoda K, Simhandl C, Slaney CM, Squassina A, Stamm T, Stopkova P, Maj M, Turecki G, Vieta E, Veeh J, Witt SH, Wright A, Zandi PP, Mitchell PB, Bauer M, Alda M, Rietschel M, McMahon FJ, Schulze TG, Baune BT: Association of polygenic score for major depression with response to lithium in patients with bipolar disorder. *Mol Psychiatry* 26(6):2457-2470, 2021.
- 13) Le Clerc S, Lombardi L, Baune BT, Amare AT, Schubert KO, Hou L, Clark SR, Papiol S, Cearns M, Heilbronner U, Degenhardt F, Tekola-Ayele F, Hsu YH, Shekhtman T, Adli M, Akula N, Akiyama K, Ardaur R, Arias B, Aubry JM, Backlund L, Bhattacharjee AK, Bellivier F, Benabarre A, Bengesser S, Biernacka JM, Birner A, Brichant-Petitjean C, Cervantes P, Chen HC, Chillotti C, Cichon S, Cruceanu C, Czerski PM, Dalkner N, Dayer A, Del Zompo M, DePaulo JR, Étain B, Jamain S, Falkai P, Forstner AJ, Frisen L, Frye MA, Fullerton JM, Gard S, Garnham JS, Goes FS, Grigoriu-Serbanescu M, Grof P, Hashimoto R(122 名中 51 番目), Hauser J, Herms S, Hoffmann P, Jiménez E, Kahn JP, Kassem L, Kuo PH, Kato T, Kelsoe JR, Kittel-Schneider S, Ferensztajn-Rochowiak E, König B, Kusumi I, Laje G, Landén M, Lavebratt C, Leckband SG, Tortorella A, Manchia M, Martinsson L, McCarthy MJ, McElroy SL, Colom F, Millischer V, Mitjans M, Mondimore FM, Monteleone P, Nievergelt CM, Nöthen MM, Novák T, O'Donovan C, Ozaki N, Ösby U, Pfennig A, Potash JB, Reif A, Reininghaus E, Rouleau GA, Rybakowski JK, Schalling M, Schofield PR, Schweizer BW, Severino G, Shilling PD, Shimoda K, Simhandl C, Slaney CM, Pisanu C, Squassina A, Stamm T, Stopkova P, Maj M, Turecki G, Vieta E, Veeh J, Witt SH, Wright A, Zandi PP, Mitchell PB, Bauer M, Alda M, Rietschel M, McMahon FJ, Schulze TG, Spadoni JL, Boukouaci W, Richard JR, Le Corvoisier P, Barrau C, Zagury JF, Leboyer M, Tamouza R: HLA-DRB1 and HLA-DQB1 genetic diversity modulates response to lithium in bipolar affective disorders. *Sci Rep* 11(1):17823, 2021.
- 14) Japanese Society of Neuropsychopharmacology: Japanese Society of Neuropsychopharmacology: "Guideline for Pharmacological Therapy of Schizophrenia". *Neuropsychopharmacol Rep* 41(3):266-324, 2021.
- 15) Kikuchi M, Nakazawa T, Kinoshita M, Yamamori H, Yasuda Y, Fujimoto M, Hashimoto R, Numata S: Methylation Analysis in Monozygotic Twins With Treatment-Resistant Schizophrenia and Discordant Responses to Clozapine. *Front Psychiatry*, section Schizophrenia 12:734606, 2021.
- 16) Yamagata H, Kobayashi A, Tsunedomi R, Seki T, Kobayashi M, Hagiwara K, Che C, Uchida S, Okada G, Fuchikami M, Kamishikiyo T, Iga J, Numata S, Kinoshita M, Kato TA, Hashimoto R, Nagano H, Okamoto Y, Ueno S, Ohmori T, Nakagawa S: Optimized protocol for the extraction of RNA and DNA from frozen whole blood sample stored in a single EDTA tube. *Sci Rep* 11(1):17075, 2021.

- 17) Kajiya Y, Hattori N, Nakano T, Revankar G.S., Otomune H, Hashimoto R, Mori E, Ikeda M, Mihara M, Mochizuki H: Decreased frontotemporal connectivity in patients with parkinson's disease experiencing face pareidolia. *npj Parkinsons Dis* 7:90, 2021.
- 18) Yamamoto K, Kuriu T, Matsumura K, Nagayasu K, Tsurusaki Y, Miyake N, Yamamori H, Yasuda Y, Fujimoto M, Fujiwara M, Baba M, Kitagawa K, Takemoto T, Gotoda-Nishimura N, Takada T, Seiriki K, Hayata-Takano A, Kasai A, Ago Y, Kida S, Takuma K, Ono F, Matsumoto N, Hashimoto R, Hashimoto H, Nakazawa T: Multiple alterations in glutamatergic transmission and dopamine D2 receptor splicing in induced pluripotent stem cell-derived neurons from patients with familial schizophrenia. *Transl Psychiatry* 11(1):548, 2021.
- 19) Yamauchi T, Makinodan M, Toritsuka M, Okumura K, Kayashima Y, Ishida R, Kishimoto N, Takahashi M, Komori T, Yamaguchi Y, Takada R, Yamamuro K, Kimoto S, Yasuda Y, Hashimoto R, Kishimoto T: Tumor necrosis factor- α expression aberration of M1/M2 macrophages in adult high-functioning autism spectrum disorder. *Autism Res* 14(11):2330-2341, 2021.
- 20) Schubert KO, Thalamuthu A, Amare AT, Frank J, Streit F, Adl M, Akula N, Akiyama K, Ardaur R, Arias B, Aubry JM, Backlund L, Bhattacharjee AK, Bellivier F, Benabarre A, Bengesser S, Biernacka JM, Birner A, Marie-Claire C, Cearns M, Cervantes P, Chen HC, Chillotti C, Cichon S, Clark SR, Cruceanu C, Czerski PM, Dalkner N, Dayer A, Degenhardt F, Del Zompo M, DePaulo JR, Étain B, Falkai P, Forstner AJ, Frisen L, Frye MA, Fullerton JM, Gard S, Garnham JS, Goes FS, Grigoriou-Serbanescu M, Grof P, Hashimoto R(117 名中 44 番目), Hauser J, Heilbronner U, Herms S, Hoffmann P, Hou L, Hsu YH, Jamain S, Jiménez E, Kahn JP, Kassem L, Kuo PH, Kato T, Kelsoe J, Kittel-Schneider S, Ferensztajn-Rochowiak E, König B, Kusumi I, Laje G, Landén M, Lavebratt C, Leboyer M, Leckband SG, Maj M; Major Depressive Disorder Working Group of the Psychiatric Genomics Consortium, Manchia M, Martinsson L, McCarthy MJ, McElroy S, Colom F, Mitjans M, Mondimore FM, Monteleone P, Nievergelt CM, Nöthen MM, Novák T, O'Donovan C, Ozaki N, Ösby U, Papiol S, Pfennig A, Pisanu C, Potash JB, Reif A, Reininghaus E, Rouleau GA, Rybakowski JK, Schalling M, Schofield PR, Schweizer BW, Severino G, Shekhtman T, Shilling PD, Shimoda K, Simhandl C, Slaney CM, Squassina A, Stamm T, Stopkova P, Tekola-Ayele F, Tortorella A, Turecki G, Veeh J, Vieta E, Witt SH, Roberts G, Zandi PP, Alda M, Bauer M, McMahon FJ, Mitchell PB, Schulze TG, Rietschel M, Baune BT: Combining schizophrenia and depression polygenic risk scores improves the genetic prediction of lithium response in bipolar disorder patients. *Transl Psychiatry* 29;11(1):606, 2021.
- 21) Furihata R, Otsuki R, Hasegawa N, Tsuboi T, Numata S, Yasui-Furukori N, Kashiwagi H, Hori H, Ochi S, Muraoka H, Onitsuka T, Komatsu H, Takeshima M, Hishimoto A, Nagasawa T, Takaesu Y, Nakamura T, Asami T, Miura K, Matsumoto J, Ohi K, Yasuda Y, Iida H, Ogasawara K, Hashimoto N, Ichihashi K, Yamada H, Watanabe K, Inada K, *Hashimoto R: Hypnotic medication use among inpatients with schizophrenia and major depressive disorder: results of a nationwide study. *Sleep Med* 89:23-30, 2021.
- 22) Iino K, Toriumi K, Agarie R, Miyashita M, Suzuki K, Horiuchi Y, Niizato K, Oshima K, Imai A, Nagase Y, Kushima I, Koike S, Ikegame T, Jinde S, Nagata E, Washizuka S, Miyata T, Takizawa S, Hashimoto R, Kasai K, Ozaki N, Itokawa M, Arai M: AKR1A1 variant associated with schizophrenia causes exon skipping, leading to loss of enzymatic activity, *Front Genetics, section Neurogenomics* 12:762999, 2021.

- 23) Yoshikawa H, Kitamura S, Matsuoka K, Takahashi M, Ishida R, Kishimoto N, Yasuno F, Yasuda Y, Hashimoto R, Miyasaka T, Kichikawa K, Kishimoto T, Makinodan M: Adverse Childhood Experience Is Associated With Disrupted White Matter Integrity in Autism Spectrum Disorder: A Diffusion Tensor Imaging Study. *Front Psychiatry* 12:823260, 2022.
- 24) Tanaka M, Yanagisawa T, Fukuma R, Tani N, Oshino S, Mihara M, Hattori N, Kajiyama Y, Hashimoto R, Ikeda M, Mochizuki H, Kishima H: Magnetoencephalography detects phase-amplitude coupling in Parkinson's disease. *Sci Rep* 3:12(1):1835, 2022.
- 25) Kashiwagi H, Matsumoto J, Miura K, Takeda K, Yamada Y, Fujimoto M, Yasuda Y, Yamamori H, Ikeda M, Hirabayashi N, Hashimoto R: Neurocognitive features, personality traits, and social function in patients with schizophrenia with a history of violence. *J Psychiatr Res* 147:50-58, 2022.
- 26) Ichihashi K, Kyou Y, Hasegawa N, Yasui-Furukori N, Shimnizu Y, Hori H, Hashimoto N, Ide K, Imamura Y, Yamada H, Ochi S, Iga J, Takaesu Y, Ohi K, Tsuboi T, Iida H, Yamagata H, Hishimoto A, Horai T, Usami M, Makinodan M, Nagasawa T, Komatsu H, Kido M, Muraoka H, Atake K, Takeshima M, Kubota C, Inagaki T, Tamai S, Kishimoto T, Furihata R, Matsumoto J, Miura K, Inada K, Watanabe K, Kasai K, Hashimoto R: The characteristics of patients receiving psychotropic pro re nata medication at discharge for the treatment of schizophrenia and major depressive disorder: A nationwide survey from the EGUIDE project. *Asian J Psychiatr* 69:103007, 2022.
- 27) Yasui-Furukori N, Muraoka H, Hasegawa N, Ochi S, Numata S, Hori H, Hishimoto A, Onitsuka T, Ohi K, Hashimoto N, Nagasawa T, Takaesu Y, Inagaki T, Tagata H, Tsuboi T, Kubota C, Furihata R, Iga JI, Iida H, Miura K, Matsumoto J, Yamada H, Watanabe K, Inada K, Shimoda K, Hashimoto R: Association between the examination rate of treatment-resistant schizophrenia and the clozapine prescription rate in a nationwide dissemination and implementation study. *Neuropsychopharmacol Rep* 42(1):3-9, 2022.
- 28) Takemoto T, Baba M, Yokoyama K, Kitagawa K, Nagayasu K, Ago Y, Seiriki K, Hayata-Takano A, Kasai A, Mori D, Ozaki N, Takuma K, Hashimoto R, Hashimoto H, Nakazawa T: Oxytocin ameliorates impaired social behavior in a mouse model of 3q29 deletion syndrome. *Mol Brain* 15(1):26, 2022.
- 29) Miyamoto T, Numasawa K, Hirata Y, Katoh A, Miura K, Ono S: Effects of smooth pursuit and second-order stimuli on visual motion prediction. *Physiol Rep* 9(9):e14833, 2021.
- 30) Miyamoto T, Miura K, Kizuka T, Ono S: The effect of explicit cues on smooth pursuit termination. *Vision Res* 189:27-32, 2021.
- 31) Miyamoto T, Hirata Y, Katoh A, Miura K, Ono S: The influence of stimulus and behavioral histories on predictive control of smooth pursuit eye movements. *Sci Rep* 11(1):22327, 2021.
- 32) Kunii Y, Matsumoto J, Izumi R, Nagaoka A, Hino M, Shishido R, Sainouchi M, Akatsu H, Hashizume Y, Kakita A, Yabe H: Evidence for Altered Phosphoinositide Signaling-Associated Molecules in the Postmortem Prefrontal Cortex of Patients with Schizophrenia. *Int J Mol Sci* 22(15):8280, 2021.
- 33) Hino M, Kondo T, Kunii Y, Matsumoto J, Wada A, Niwa SI, Setou M, Yabe H: Tubulin/microtubules as novel clozapine targets. *Neuropsychopharmacol Rep* 42(1):32-41, 2022.

(2) 総説

- 1) Onitsuka T, Hirano Y, Nemoto K, Hashimoto N, Kushima I, Koshiyama D, Koeda M,

- Takahashi T, Noda Y, Matsumoto J, Miura K, Nakazawa T, Hikida T, Kasai K, Ozaki N, Hashimoto R: Trends in big data analyses by multicenter collaborative translational research in psychiatry. *Psychiatry Clin Neurosci* 76(1):1-14, 2022.
- 2) Koshiyama D, Miura K, Nemoto K, Okada N, Matsumoto J, Fukunaga M, Hashimoto R: Neuroimaging studies within Cognitive Genetics Collaborative Research Organization aiming to replicate and extend works of ENIGMA. *Hum Brain Mapp* 43(1):182-193, 2022.
 - 3) S nderby IE, Ching CRK, Thomopoulos SI, van der Meer D, Sun D, Villalon-Reina JE, Agartz I, Amunts K, Arango C, Armstrong NJ, Ayesa-Arriola R, Bakker G, Bassett AS, Boomsma DI, B low R, Butcher NJ, Calhoun VD, Caspers S, Chow EWC, Cichon S, Ciufolini S, Craig MC, Crespo-Facorro B, Cunningham AC, Dale AM, Dazzan P, de Zubicaray GI, Djurovic S, Doherty JL, Donohoe G, Draganski B, Durdle CA, Ehrlich S, Emanuel BS, Espeseth T, Fisher SE, Ge T, Glahn DC, Grabe HJ, Gur RE, Gutman BA, Haavik J, H berg AK, Hansen LA, Hashimoto R(156 名中 44 番目), Hibar DP, Holmes AJ, Hottenga JJ, Hulshoff Pol HE, Jalbrzikowski M, Knowles EEM, Kushan L, Linden DEJ, Liu J, Lundervold AJ, Martin-Brevet S, Mart nez K, Mather KA, Mathias SR, McDonald-McGinn DM, McRae AF, Medland SE, Moberget T, Modenato C, Monereo S nchez J, Moreau CA, M hleisen TW, Paus T, Pausova Z, Prieto C, Ragothaman A, Reinbold CS, Reis Marques T, Repetto GM, Reymond A, Roalf DR, Rodriguez-Herreros B, Rucker JJ, Sachdev PS, Schmitt JE, Schofield PR, Silva AI, Stefansson H, Stein DJ, Tamnes CK, Tordesillas-Guti rrez D, Ulfarsson MO, Vajdi A, van't Ent D, van den Bree MBM, Vassos E, V zquez-Bourgon J, Vila-Rodr guez F, Walters GB, Wen W, Westlye LT, Wittfeld K, Zackai EH, Stef nsson K, Jacquemont S, Thompson PM, Bearden CE, Andreassen OA; ENIGMA-CNV Working Group; ENIGMA 22q11.2 Deletion Syndrome Working Group. Effects of copy number variations on brain structure and risk for psychiatric illness: Large-scale studies from the ENIGMA working groups on CNVs. *Hum Brain Mapp* 43(1):300-328, 2022.
 - 4) 越山太輔, 福永雅喜, 笠井清登, 橋本亮太: 統合失調症・双極性障害に共通する大脳白質の微細構造変化. *精神科臨床 Legato* 7(2):90-93, 2021.
 - 5) 橋本亮太, 神庭重信, 岩田仲生, 尾崎紀夫, 加藤忠史: Round Table Discussion 座談会 今後の精神医学研究を語る. *精神科臨床 Legato* 7(2):72-79, 2021.
 - 6) 市橋香代, 橋本亮太: 当事者・家族・支援者と作り上げる出口戦略. *臨床精神薬理* 24(9):911-918, 2021.
 - 7) 橋本亮太: 「当事者・ご家族からこころの問題を学ぶ」と「基礎神経科学と臨床精神が融合したブレークスルー研究の育て方」. *MULTISCAL BRAIN News letter* 4:24, 2021.
 - 8) 稲垣 中, 佐藤英樹, 稲田 健, 市橋香代, 中川敦夫, 古郡規雄, 橋本亮太: わが国で実施された臨床試験と使用成績調査の結果から見た抗精神病薬による統合失調症治療の安全性. *臨床精神薬理* 24(11):1153-1169, 2021.
 - 9) 安田由華, 橋本亮太: 統合失調症における認知機能障害と脳画像. *臨床精神医学* 50(12):1319-1326, 2021.
 - 10) 三浦健一郎, 松本純弥, 長谷川尚美, 橋本亮太: 眼球運動の定量的分析とその精神医学への応用. *月刊細胞* 54(2):17-20, 2022.
 - 11) 松本純弥: 入院編 術後合併症 術後せん妄 (注意力障害・意識障害), 泌尿器科当直医マニュアル:臨床泌尿器科 75(4):155-159, 2021.

(3) 著書

- 1) 木田直也, 橋本亮太: クロザピン療法. 一般社団法人内科系学会社会保険連合 編: 標準的医

療説明—インフォームド・コンセントの最前線—。医学書院，東京，pp243-244，2021。

- 2) 橋本亮太：第 IX 章 精神疾患「統合失調症」。日常診療に活かす診療ガイドライン UP-TO-DATE 2022-2023。メディカルレビュー社，大阪，pp596-600，2022。

(4) 研究報告書

- 1) 橋本亮太，三浦健一郎，松本純弥，長谷川尚美：多次元脳神経画像とゲノムによる精神疾患の脳病態に基づく新たな診断体系の構築。2020 年度科学研究費助成事業基盤研究（B）研究実績報告書。2022
- 2) 橋本亮太：発達障害のリスク遺伝子の同定。2021 年度科学研究費助成事業特別推進研究「発達障害に関わる神経生物学的機構の霊長類的基盤の解明（代表：高田昌彦）」2020 年度研究実績報告書。2022。
- 3) 橋本亮太：クロザピンモニタリングシステムの国際比較調査。令和 3 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業（精神障害分野）「治療抵抗性統合失調症薬の安全性の検証による望ましい普及と体制構築に向けた研究（代表：上野雄文）」分担研究報告書。2022。
- 4) 橋本亮太，三浦健一郎，松本純弥，安田由華：精神医療分野における治療の質を評価する QI とその向上をもたらす介入技法の開発と実用性の検証。2021 年度日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）2021 年度 委託研究開発成果報告書。2022。
- 5) 橋本亮太，三浦健一郎，松本純弥：AI 技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究。2021 年度日本医療研究開発機構 医工連携・人工知能実装研究事業 2021 年度 委託研究開発成果報告書。2022。
- 6) 橋本亮太，三浦健一郎，松本純弥：iPS 細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究。2021 年度日本医療研究開発機構 脳とこころの研究推進プログラム（精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト）2021 年度 委託研究開発成果報告書。2022。
- 7) 橋本亮太：気分障害と統合失調症の疾患連続性に関する脳画像等の総合的解析研究。2021 年度日本医療研究開発機構 戦略的国際脳科学研究推進プログラム「縦断的 MRI データに基づく成人期気分障害と関連疾患の神経回路の解明（研究開発代表者：岡本泰昌）」2021 年度 委託研究開発成果報告書。2022。
- 8) 橋本亮太：脳神経画像の解析と縦断データに基づく，精神疾患の治療効果及び予後に関する層別化。2021 年度日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）「精神疾患レジストリの利活用による治療効果，転帰予測，新たな層別化に関する研究（研究開発代表者：中込和幸）」2021 年度 委託研究開発成果報告書。2022。
- 9) 橋本亮太：脳神経画像の解析と縦断データに基づく，精神疾患の治療効果及び予後に関する層別化。2021 年度日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）「精神疾患レジストリの利活用による治療効果，転帰予測，新たな層別化に関する研究（研究開発代表者：中込和幸）」2021 年度 委託研究開発成果報告書。2022。
- 10) 橋本亮太：多次元ビッグデータのデータ駆動型解析による精神疾患の脳病態メカニズムの解明，先進医薬研究振興財団 2020 年度 研究助成 精神薬療分野 一般研究助成 研究成果報告書。2021。
- 11) 三浦健一郎：眼球運動の状況予測性解析法の研究開発と疾患横断的理解。令和 3 年度日本医療研究開発機構 革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト「双方向トランスレーショナルアプローチによる精神疾患の脳予測性障害機序に関する研究開発（研究開発代表者：小池進介）」2021 年度 委託研究開発成果報告書。2022。
- 12) 三浦健一郎，松本純弥，長谷川尚美：精神疾患の視覚認知行動異常のシステム神経科学的研究。2021 年度科学研究費助成事業 基盤研究（C）研究実施状況報告書。2022。
- 13) 松本純弥：心因性疼痛の治療と認知機能障害の関連。2021 年度科学研究費助成事業 若手研

究実施状況報告書. 2022.

- 14) 長谷川尚美: 心精神疾患の処方行動における治療ガイドラインの普及と教育の効果検証. 2021 年度科学研究費助成事業 若手研究実施状況報告書. 2022

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 橋本亮太: CPMS 基準に関する要望, 日本精神神経学会, 日本神経精神薬理学会, 日本臨床指針神経薬理学会, 日本統合失調症学会の関連 4 学会合同, クロザリル適正使用委員会 委員長宛て 2021.10.20.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Hashimoto R: Treatment resistance schizophrenia. 7th Congress of AsCNP 2021 (Asian College of Neuropsychopharmacology 2021) Virtual Congress, Online, 2021.10.22-23.
- 2) 古郡規雄, 橋本亮太: うつ病診療の将来. 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催], 横浜, 2021.7.9.
- 3) 飯田仁志, 伊賀淳一, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 古郡規雄, 橋本直樹, 降旗隆二, 坪井貴嗣, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太, 川寄弘詔: 日本のうつ病の治療実態と課題. 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催], 横浜, 2021.7.9.
- 4) 橋本亮太, 松本純弥, 長谷川尚美, 三浦健一郎: 統合失調症のバイオタイプ研究. 第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 京都, 2021.7.14-16.
- 5) 井手本啓太, 新津富央, 石間 環, 畑 達記, 吉田寿美子, 服部功太郎, 蓬萊 政, 大塚郁夫, 山森英長, 戸田重誠, 亀野陽亮, 太田貴代光, 小田靖典, 木村敦史, 橋本 佐, 森 則夫, 菊知充, 三邊義雄, 橋本亮太, 菱本明豊, 中込和幸, 伊豫雅臣, 橋本謙二: 気分障害のバイオマーカーとしての血清中血小板由来増殖因子 (PDGF-BB)に関する多施設共同研究. 日本プロテオーム学会 2021 年, オンライン, 2021.7.19-20.
- 6) 橋本亮太: 治療抵抗性統合失調症へのクロザピン治療とは. 第 10 回日本精神科医学会学術大会, 横浜, 2021.9.9.
- 7) 橋本亮太: 精神科領域における多施設共同研究の実際と研究倫理. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.19.
- 8) 橋本亮太: 統合失調症の薬物療法 up to date. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.19.
- 9) 橋本亮太, 松本純弥, 長谷川尚美, 三浦健一郎: データ駆動型解析による精神疾患のバイオタイプとは? 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.21.
- 10) 橋本亮太, 内田裕之, 水野裕也, 古郡規雄: COVID-19 による緊急事態宣言時におけるクロザピン検査間隔における緊急対応. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.21.
- 11) 橋本亮太: 科学的な根拠に基づく添付文書改訂のための研究とは. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.21.
- 12) 橋本亮太: 更年期女性のうつ病の診断のポイントと治療のコツ. 第 36 回日本女性医学学会学術集会, 大阪, 2021.11.7.

(2) 一般演題

- 1) Sumiyoshi C, Ohi K, Fujino H, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Uno Y, Takahashi J, Morita K, Katsuki A, Yamamoto M, Okahisa Y, Sata A, Katsumoto E, Koeda M, Hirano Y,

- Nakataki M, Hashimoto N, Makinodan M, Takahashi T, Nemoto K, Kishimoto T, Suzuki M, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Cross-diagnostic Comparisons of Intellectual Ability and Work Outcome in Patients with Mental Disorders: A Multi-center Study. 2021 Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS), Online, 2021.4.17-21.
- 2) Schijven D, Fisher S.E, Franke B, Glahn D.C, Gur R.C, Hashimoto R, Jahanshad N, Medland S.E, Thompson P.M, van Erp T.G.M, Turner J.A, Francks C, ENIGMA-Schizophrenia working group: A Large-scale Consortium Study of Brain Anatomical Asymmetries in Schizophrenia. 2021 Society of Biological Psychiatry (SOPB 2021) Annual Meeting, Online, 2021.4.29-5.
 - 3) Miura K, Matsumoto J, Hasegawa N, Fujimoto M, Yamamori H, Yasuda Y, Hashimoto R: Combinations of cognitive function and eye movement tests are effective in distinguishing schizophrenia cases from healthy controls. 7th Congress of AsCNP 2021 (AsianCollege of Neuropsychopharmacology 2021) Virtual Congress, Online, 2021.10.22-23.
 - 4) Hasegawa N, Miura K, Matsumoto J, Yasuda Y, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R: The effect of EGUIDE project on medication for schizophrenia and major depressive disorder: from the 2016-2019 prescribing survey. 7th Congress of AsCNP 2021 (Asian College of Neuropsychopharmacology 2021) Virtual Congress, Online, 2021.10.22-23.
 - 5) Matsumoto J, Fukunaga M, Miura K, Nemoto K, Okada N, Hashimoto N, Morita K, Koshiyama D, Ohi K, Takahashi T, Koeda M, Yamamori H, Fujimoto oM, Yauda Y, Hasegawa N, Narita H, Yokoyama S, Mishima R, Kawashima T, Kobayashi Y, Sasabayashi D, Harada K, Yamamoto M, Hirano Y, Itahashi T, Nakataki M, Hashimoto R, Tha K, Koike S, Matsubara T, Okada G, Yoshimura R, Abe O, Onitsuka T, Watanabe Y, Matsuo K, Yamasue H, Okamoto Y, Suzuki M, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R: Cortical structural mega-analysis across four major psychiatric disorders in 5432 individuals. 7th Congress of AsCNP 2021 (AsianCollege of Neuropsychopharmacology 2021) Virtual Congress, Online, 2021.10.22-23.
 - 6) 木戸幹雄, 長谷川尚美, 古市厚志, 高柳陽一郎, 高橋 努, 安田 由華, 山本智也, 渡邊 衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太, 鈴木道雄: EGUIDE 講習会の効果測定: 富山大学附属病院における過去3年分の処方調査. 第15回統合失調症学会, オンライン, 2021.4.9-10.
 - 7) 住吉チカ, 成田 瑞, 稲川拓磨, 山田悠至, 白間 綾, 末吉一貴, 長谷川由美, 和田 歩, 橋本亮太, 住吉太幹: 統合失調症患者の意味記憶構造に対する経頭蓋直流刺激の改善効果: テキストマイニングによる分析. 第15回統合失調症学会, オンライン, 2021.4.9-10.
 - 8) 長谷川尚美, 安田由華, 山本智也, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: EGUIDE プロジェクトによる退院時処方への効果〜クロザピン治療と医療の質 (Quality Indicator) との関係に着目して〜. 第15回統合失調症学会, オンライン, 2021.4.9-10.
 - 9) 住吉チカ, 大井一高, 藤野陽生, 山森英長, 藤本美智子, 安田由華, 宇野洋太, 高橋潤一, 森田健太郎, 香月あすか, 山本真江里, 岡久祐子, 佐田あゆ美, 勝元榮一, 肥田道彦, 平野羊嗣, 中瀧理仁, 橋本直樹, 牧之段 学, 高橋 努, 根本清貴, 岸本年史, 鈴木道雄, 住吉太幹, 橋本亮太: 疾患の横断的分類: 多施設共同研究. 第6回 CEPD 研究会・年次大会, オンライン, 2021.5.29.
 - 10) 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 安田由華, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: 精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究 (EGUIDE プロジェクト) 〜処方行動に対する効果の報告〜. D&I 科学研究会 (保健医療福祉における普及と実装科学研究会) RADISH 第6回学術集会, オンライン, 2021.7.3.
 - 11) 本山美久仁, 山田 恒, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: 精神科レジデントに対する治療ガイドライン教育プロジェクト (EGUIDE プロジェクト)

- の効果の検討ー臨床行動実践度の比較ー. 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催], 横浜 (オンライン), 2021.7.8-10.
- 12) 小笠原一能, 沼田周助, 飯田仁志, 長谷川尚美, 松本純弥, 三浦健一郎, 尾崎紀夫, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: EGUIDE プロジェクトチーム:「EGUIDE プロジェクト」受講者アンケートの解析から (第 2 報). 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催], 横浜 (オンライン), 2021.7.8-10.
 - 13) 山田恒, 本山美久仁, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: 治療ガイドライン教育プロジェクト (EGUIDE プロジェクト) の効果の検討ーガイドライン講習前と受講後 3 年間の臨床行動実践度の変化ー, 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催], 横浜 (オンライン), 2021.7.8-10.
 - 14) 村岡寛之, 長谷川尚美, 古郡規雄, 福本健太郎, 柏木宏子, 小高文聰, 松本純弥, 三浦健一郎, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 西村勝治, 橋本亮太: EGUIDE データから, うつ病重症度記載によるうつ病入院患者の薬物療法の変化. 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催], 横浜 (オンライン), 2021.7.8-10.
 - 15) 福本健太郎, 古郡規雄, 村岡寛之, 安田由華, 市橋香代, 飯田仁志, 小高文聰, 越智紳一郎, 長谷川尚美, 松本純弥, 三浦健一郎, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 大塚耕太郎, 橋本亮太:「EGUIDE プロジェクト」うつ病治療ガイドライン適合度を用いた処方評価について. 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催], 横浜 (オンライン), 2021.7.8-10.
 - 16) 飯田仁志, 根本清貴, 長谷川尚美, 沼田周助, 山田 恒, 市橋香代, 稲垣貴彦, 小笠原一能, 松本純弥, 三浦健一郎, 川寄弘詔, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: うつ病治療ガイドラインに関する Web 講習の有効性の検討ーEGUIDE プロジェクトから得られた知見ー. 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催], 横浜 (オンライン), 2021.7.8-10.
 - 17) 古郡規雄, 橋本直樹, 長谷川尚美, 沼田周助, 堀 輝, 降旗隆二, 飯田仁志, 市橋香代, 三浦健一郎, 松本純弥, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: うつ病患者の退院時処方の特徴:EGUIDE データより. 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催], 横浜 (オンライン), 2021.7.8-10.
 - 18) 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 安田由華, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: うつ病の薬物治療に対する EGUIDE プロジェクトの効果: 2016~2019 年の処方調査から. 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催], 横浜 (オンライン), 2021.7.8-10.
 - 19) 降旗隆二, 大槻 怜, 長谷川尚美, 坪井貴嗣, 沼田周助, 古郡規雄, 伊賀淳一, 山田 恒, 市橋香代, 松本純弥, 三浦健一郎, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: うつ病入院患者における睡眠薬処方の実態と他の向精神薬処方との関連. 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催], 横浜 (オンライン), 2021.7.8-10.
 - 20) 坪井貴嗣, 五十嵐 俊, 越智紳一郎, 長谷川尚美, 古郡規雄, 飯田仁志, 村岡寛之, 高江洲義和, 岡田剛史, 柏木宏子, 小高文聰, 福本健太郎, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: ECT はうつ病入院患者の薬物療法をどのように変化させるか: EGUIDE データを用いて. 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催], 横浜 (オンライン), 2021.7.8-10.
 - 21) 橋本亮太: タブレットを用いた精神疾患の補助診断法の開発. 第 16 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2021.7.11.
 - 22) 松岡 究, 牧之段 学, 北村聡一郎, 高橋誠人, 吉川裕晶, 安野史彦, 石田理緒, 岸本直子, 安田由華, 橋本亮太, 田岡俊昭, 宮坂俊輝, 吉川公彦, 岸本年史: 自閉スペクトラム症の左側後頭回の樹状突起のばらつき増大と視覚非定型性の関連. 第 43 回日本生物学的精神医学

- 会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 23) 松本純弥, 三浦健一郎, 福永雅喜, 岡田直大, 根本清貴, 藤本美智子, 肥田道彦, 宮田 淳, 大井一高, 中瀧理仁, 吉村玲児, 原田健一郎, 橋本直樹, 鬼塚俊明, 山本真江里, 山末英典, 高橋努, 笠井清登, 渡邊嘉之, 橋本亮太: COCORO (Cognitive Genetics Collaborative Research Organization: 認知ゲノム共同研究機構) による統合失調症の脳皮質厚・脳皮質面積のメタアナリシス, 第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 24) 藤本美智子, 三浦健一郎, 森田健太郎, 山森英長, 安田由華, 池田 学, 橋本亮太: 統合失調症におけるバイオマーカーとしての眼球運動スコアの臨床的意義. 第 43 回日本生物学的精神医学会第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会 第 10 回若手研究者育成プログラム ショートトーク, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 25) 橋本直樹, 古郡規雄, 長谷川尚美, 沼田周助, 飯田仁志, 市橋香代, 降旗隆二, 堀 輝, 三浦健一郎, 松本純弥, 稲田 健, 橋本亮太: 2177 名の統合失調症患者の退院時処方についての検討—EGUIDE2016-2018 年度調査の結果から—, 第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 26) 柏木宏子, 松本純弥, 三浦健一郎, 福永雅喜, 根本清貴, 岡田直大, 竹田康二, 長谷川尚美, 藤本美智子, 安田由華, 山森英長, 池田 学, 渡邊嘉之, 平林直次, 橋本亮太: 暴力の既往のある統合失調症罹患者の, 脳体積, 脳皮質厚および表面積の特徴. 第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 27) 安田由華, 稲田 健, 飯田仁志, 古郡規雄, 堀 輝, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: 統合失調症薬物治療ガイドラインを用いたエビデンス・診療ギャップの検討について—精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究 (EGUIDE プロジェクト) より—, 第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 28) 本山美久仁, 山田 恒, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: 精神科レジデントに対する治療ガイドライン教育プロジェクト (EGUIDE プロジェクト) の効果の検討—統合失調症薬物治療ガイドラインに沿った臨床行動実践度の比較—, 第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 29) 山田 恒, 本山美久仁, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: 治療ガイドライン教育プロジェクト (EGUIDE プロジェクト) の効果の検討—ガイドライン講習前と受講後 3 年間の治療ガイドラインに沿った臨床行動実践度の変化—, 第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 30) 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 安田由華, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: 統合失調症の薬物治療に対する EGUIDE プロジェクトの効果: 2016~2019 年の処方調査から. 第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 31) 堀 輝, 古郡規雄, 伊賀淳一, 越智紳一郎, 鬼塚俊明, 姜 善貴, 高江洲義和, 降旗隆二, 村田篤信, 長谷川尚美, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: 統合失調症患者における各施設における抗コリン薬併用パターンの特徴, 第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 32) 坪井貴嗣, 五十嵐 俊, 越智紳一郎, 長谷川尚美, 古郡規雄, 飯田仁志, 村岡寛之, 高江洲義和, 岡田剛史, 柏木宏子, 小高文聰, 福本健太郎, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: ECT は統合失調症入院患者の薬物療法をどのように変化させるか: EGUIDE データを用いて. 第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 京都 (オンライン),

2021.7.14-16.

- 33) 三浦健一郎, 松本純弥, 長谷川尚美, 藤本美智子, 山森英長, 安田由華, 橋本亮太: 認知機能と眼球運動を用いた統合失調症の診断マーカーに関する検討. 第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会, 京都 (オンライン), 2021.7.14-16.
- 34) 三浦健一郎, 山本哲也, 松田圭司, 松本純弥, 橋本亮太, 小野誠司, 定藤規弘, 福永雅喜: 追跡眼球運動中の大脳皮質活動特性: 円滑追跡眼球運動と衝動性眼球運動の比較. 第 44 回日本神経科学大会, 神戸 (オンライン), 2021.7.28-31.
- 35) 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 安田由華, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: 統合失調症とうつ病の薬物治療に対する EGUIDE プロジェクトの効果: 2016~2019 年の処方調査から. 第 5 回日本精神薬学会総会・学術集会, オンライン, 2021.8.21-22.
- 36) 北川航平, 馬場優志, 竹本智哉, 永安一樹, 笠井淳司, 橋本亮太, 橋本 均, 吾郷由希夫, 中澤敬信: 7q36.3 領域微小重複を有する精神疾患患者の iPS 細胞由来分化神経幹細胞を用いた分子病態解析. 日本薬学会生体機能と創薬シンポジウム 2021, 北海道 (オンライン), 2021.8.28.
- 37) 橋本亮太, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 安田由華, 稲田 健, 渡邊衡一郎: 統合失調症とうつ病の治療に対する EGUIDE プロジェクトの効果. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.19-21.
- 38) 降旗隆二, 大槻 怜, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 坪井貴嗣, 沼田周助, 古郡規雄, 伊賀淳一, 山田 恒, 市橋香代, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: 睡眠薬処方の実態と多剤処方の関連要因: 統合失調症とうつ病患者の処方データの分析. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.19-21.
- 39) 飯田仁志, 根本清貴, 長谷川尚美, 山田 恒, 市橋香代, 稲垣貴彦, 小笠原一能, 沼田周助, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: Web 講習の有効性の検討—EGUIDE プロジェクトから得られた知見—. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都 (オンライン), 2021.9.19-21.
- 40) 山田恒, 本山美久仁, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: EGUIDE プロジェクトの効果の検討—ガイドライン講習前後の治療ガイドラインに沿った臨床行動実践度の比較—, 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都 (オンライン), 2021.9.19-21.
- 41) 林 大祐, 南 拓人, 染谷知恵, 春口洸希, 稲川拓磨, 沖田恭治, 佐竹直子, 野田隆政, 鬼頭伸輔, 橋本亮太: 精神病症状を呈した Silver-Russell 症候群の一例. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都 (オンライン), 2021.9.19-21.
- 42) 古郡規雄, 長谷川尚美, 村岡寛之, 三浦健一郎, 松本純弥, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: EGUIDE における治療抵抗性統合失調症の診断記載率とクロザピン処方率の関連性について. 第 31 回日本臨床精神神経薬理学会学術集会, 東京 (オンライン), 2021.10.7-8.
- 43) 市橋香代, 姜 善貴, 長谷川尚美, 今村弥生, 堀 輝, 山田 恒, 松本純弥, 三浦健一郎, 古郡規雄, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: 統合失調症及びうつ病と診断された患者における精神科退院時頓用処方の性別及び年代別傾向について: EGUIDE プロジェクトのデータより. 第 31 回日本臨床精神神経薬理学会学術集会, 東京 (オンライン), 2021.10.7-8.
- 44) 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 安田由華, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: EGUIDE プロジェクトが統合失調症とうつ病の薬物治療に与える効果の検討. 第 31 回日本臨床精神神経薬理学会学術集会, 東京 (オンライン), 2021.10.7-8.
- 45) 名和佳弘, 久島 周, 加藤秀一, 木村大樹, 阪野正大, 橋本亮太, 菱本明豊, 尾崎紀夫: 3q29 欠失を有し統合失調症と診断された 4 症例の報告. 第 62 回日本児童青年精神医学会総会, オンライン, 2021.11.14-12.11.
- 46) 藤井優子, 山形弘隆, 關 友恵, 長谷川尚美, 橋本亮太, 中川 伸: EGUIDE プロジェクトによる統合失調症患者・うつ病患者に対する外来処方の変化. 第 34 回総合病院精神医学会, オ

ンライン, 2021.11.19-20.

- 47) 橋本亮太: COCORO の概要. 第 17 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2021.12.5.
- 48) 橋本亮太: タブレットを用いた精神疾患の補助診断法の開発コンセプト. 第 17 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2021.12.5.
- 49) 岡崎康輔, 三浦健一郎, 松本純弥, 長谷川尚美, 藤本美智子, 山森英長, 安田由華, 牧之段学, 橋本亮太: 眼球運動と認知機能を組み合わせた統合失調症の補助診断法の開発. 第 16 回日本統合失調症学会, オンライン, 2022.3.20-21.
- 50) 松本純弥, 福永雅喜, 三浦健一郎, 岡田直大, 根本清貴, 藤本美智子, 肥田道彦, 宮田 淳, 大井一高, 中瀧理仁, 吉村玲児, 岡本泰昌, 原田健一郎, 橋本直樹, 鬼塚俊明, 山本真江里, 山末英典, 高橋 努, 渡邊嘉之, 笠井清登, 橋本亮太: 多施設共同研究による統合失調症と双極性障害の脳皮質構造画像解析. 第 16 回日本統合失調症学会, オンライン, 2022.3.20-21.
- 51) 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 安田由華, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: 統合失調症の治療に対するガイドライン講習の効果: 4 年間の経年的変化に着目して. 第 16 回日本統合失調症学会, オンライン, 2022.3.20-21.
- 52) Hayashi K, Matsumoto N, Matsuda K, Miura K, Yamane A, Eldridge M.A.G., Saunders R.C., Richmond B.J., Nagai Y, Miyakawa N, Minamimoto T, Okada M, Kawano K, Sugase-Miyamoto Y. Effects of different facial surface properties on neuronal activity in the temporal cortex and on discrimination learning in macaque monkeys. 日本動物心理学会 第 81 回大会, オンライン, 2021.10.30.
- 53) Miyamoto T, Hirata Y, Katoh A, Miura K, Ono S. Predictive control of smooth pursuit eye movements based on stimulus and behavioral histories. Neuroscience 2021 (SfN), Chicago(Online), 2021.11.8-11.
- 54) 三浦健一郎: 精神疾患横断的サリエンシー解析. 第 16 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2021.7.11.
- 55) 松本純弥, ENIGMA_CDJ_Cortical. 第 16 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2021.7.11.
- 56) 松本純弥: ENIGMA_CDJ_Cortical. 第 17 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2021.12.5.

(3) 研究報告会

- 1) 橋本亮太: 精神医療分野における治療の質を評価する **QI** とその向上をもたらす介入技法の開発と実用性の検証. 令和 3 年度障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)分科会, オンライン, 2021.7.17-18.
- 2) 松本純弥, 福永雅喜, 三浦健一郎, 根本清貴, 岡田直大, 橋本直樹, 森田健太郎, 越山太輔, 大井一高, 高橋 努, 肥田道彦, 山森英長, 藤本 美智子, 安田由華, 長谷川尚美, 成田 尚, 横山仁史, 三嶋 亮, 河島孝彦, 小林祐子, 笹林大樹, 原田健一郎, 山本真江里, 平野羊嗣, 板橋貴史, 中瀧理仁, 橋本龍一郎, タ キンキン, 小池進介, 松原敏郎, 岡田 剛, 吉村玲児, 阿部 修, 鬼塚俊明, 渡邊嘉之, 松尾幸治, 山末英典, 岡本泰昌, 鈴木道雄, 尾崎紀夫, 笠井清登, 橋本亮太: 多施設共同研究による統合失調症・双極性障害・うつ病・自閉スペクトラム症の疾患横断的脳皮質構造画像解析. 令和 3 年度精神保健研究所研究報告会, オンライン, 2022.3.28.
- 3) 三浦健一郎, 岡崎康輔, 松本純弥, 長谷川尚美, 藤本美智子, 山森英長, 安田由華, 牧之段学, 橋本亮太: 統合失調症の客観的診断マーカーの探索と医療機器プログラムの開発, 令和 3 年度精神保健研究所研究報告会, オンライン, 2022.3.28.

(4) その他

- 1) 橋本亮太: 精神疾患の診断医療機器プログラムの開発研究. BIC 大型画像機器研究推進委員会第 54 回検討会, オンライン, 2021.4.27.

- 2) 橋本亮太：長谷川尚美，松本純弥，三浦健一郎，精神疾患の脳科学：トランスレーショナルアプローチ．東京農業大学農学研究科大学院講義，オンライン，2021.5.19.
- 3) 橋本亮太：精神疾患の克服のための病態解明研究とその障害支援のための社会実装研究．NCNP 精神保健研究所ランチョンセミナー，オンライン，2021.7.5.
- 4) 橋本亮太：精神医学の最前線：精神疾患の克服とその障害の支援のための研究とは．横浜市立大学大学院医学セミナー講義，オンライン，2021.12.6.
- 5) 橋本亮太：精神医学研究の最前線：精神疾患の克服とその障害の支援のための研究とは．NCNP 精神科セミナー，オンライン，2022.1.18.

C. 講演

- 1) 橋本亮太：精神疾患の克服のための病態解明研究とその障害支援のための社会実装研究．学術講演会，奈良県立医科大学，奈良，2021.8.4.
- 2) 橋本亮太，市橋香代：統合失調症薬物治療ガイドライン改訂 当事者・家族・支援者との共同作成についての報告．厚生労働省委託事業 Minds 第 23 回診療ガイドライン作成に関する意見交換会，オンライン，2021.11.13.
- 3) 橋本亮太，標準治療と臨床経験を踏まえた精神科医療とは．精神医療フォーラム from 弘前，オンライン，2021.12.23.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 橋本亮太：日本神経精神薬理学会 理事，評議員，広報委員会委員，統合失調症薬物治療ガイドラインタスクフォース委員，国際学術委員会委員，執行委員会委員，クロザピン TF 委員会委員長，トランスレーショナル・メディカルサイエンス (TMS) 委員会イノベーションサイエンス部会委員，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長 (通称：EGUIDE 委員会)
- 2) 橋本亮太：日本精神神経学会 PCN 編集委員会委員，薬事委員会委員，精神医学研究推進委員会委員，PCN Reports 編集委員会
- 3) 橋本亮太：日本神経化学会 評議員，利益相反委員会委員，若手育成委員会委員，脳研究推進委員会委員，連合大会・多分野交流委員会委員
- 4) 橋本亮太：日本統合失調症学会 評議員
- 5) 橋本亮太：日本臨床精神神経薬理学会 評議員，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長 (通称：EGUIDE 委員会)
- 6) 橋本亮太：日本うつ病学会 評議員，気分障害の治療ガイドライン検討委員会委員，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長 (通称：EGUIDE 委員会)
- 7) 橋本亮太：日本生物学的精神医学会 理事，将来計画委員会委員，広報委員会委員，関連学会対応委員会副委員長，評議員
- 8) 橋本亮太：日本神経科学学会 臨床・関連学会連携委員会委員
- 9) 橋本亮太：国際神経精神薬理学会 理事，フェローシップ表彰委員会委員，教育委員会委員，評議員
- 10) 三浦健一郎：電子情報通信学会ニューロコンピューティング研究専門委員会 専門委員

(3) 座長

- 1) 橋本亮太：統合失調症の認知社会機能障害の簡易な測定法．第 15 回日本統合失調症学会，オンライン，2021.4.9.

- 2) 橋本亮太：ポスター発表「薬物治療」．第 15 回日本統合失調症学会，オンライン，2021.4.10.
- 3) 橋本亮太，渡邊 衡一郎：MD 自主企画シンポジウム「うつ病治療ガイドラインが明らかにした日本のうつ病の診療実態と課題」．第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 [合同開催]，横浜，2021.7.9.
- 4) 橋本亮太：シンポジウム：「統合失調症研究アップデート」：基礎研究から社会実装研究まで，第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会，京都，2021.7.14-16.
- 5) 橋本亮太，和氣弘明：基礎-臨床連携シンポジウム「当事者・ご家族の想いを適える精神医学研究」．第 44 回日本神経科学大会，神戸（オンライン），2021.7.28-31.
- 6) 橋本亮太：口演セッション「統合失調症等」，第 44 回日本神経科学大会，神戸（オンライン），2021.7.28-31.
- 7) 橋本亮太：シンポジウム：With 新型コロナ時代の薬物療法の注意点，第 117 回日本精神神経学会学術総会，京都，2021.9.19-21.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 橋本亮太：日本精神神経学会機関誌「Psychiatry and Clinical Neuroscience」編集委員会委員
- 2) 橋本亮太：日本精神神経学会機関誌「Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports」編集委員会委員
- 3) 橋本亮太：日本神経精神薬理学会機関誌「Neuropsychopharmacology Reports」「日本神経精神薬理学雑誌」編集委員会委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 橋本亮太：第 15 回日本統合失調症学会ワークショップ，統合失調症の認知社会機能障害の簡易な測定法，オンライン，2021.4.9-10.
- 2) 橋本亮太：第 15 回日本統合失調症学会ワークショップ，統合失調症薬物治療ガイドライン（EGUIDE プロジェクト）当事者，当事者家族，支援者，医療者による，EBM に基づく Shared Decision Making の達成にむけてー統合失調症薬物治療ガイドライン/ガイドを利用 SDM の実践ー，オンライン，2021.4.9-10.
- 3) 橋本亮太：大阪精神科診療所協会，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，オンライン，2021.6.19.
- 4) 橋本亮太：大阪精神科診療所協会，うつ病治療ガイドライン講習会，オンライン，2021.6.26.
- 5) 橋本亮太：日本うつ病学会ワークショップ，EGUIDE プロジェクト うつ病治療ガイドライン講習会，オンライン，2021.7.10.
- 6) 橋本亮太：第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会ワークショップ，統合失調症薬物治療ガイドライン講習，京都（オンライン），2021.7.16.
- 7) 橋本亮太：第 5 回日本精神薬学会総会・学術集会，薬剤師のための EGUIDE プロジェクトワークショップ，オンライン，2021.8.21.
- 8) 橋本亮太：日本精神神経科診療所協会日本精神神経科診療所協会 2021 年度定時総会 第 27 回学術研究会（通算 48 回）学術研究会ワークショップ，「日常診療に治療ガイドラインは役に立つのか？ー外来うつ病症例ディスカッションを通じてガイドラインの使い方を学ぶー」，オンライン，2021.9.12.
- 9) 橋本亮太：第 117 回精神神経学会学術総会ワークショップ，「ー症例ディスカッションを通じてガイドラインの使い方を学ぶーEGUIDE プロジェクト」，京都（オンライン），2021.9.21.

- 10) 橋本亮太：第 31 回日本臨床精神神経薬理学会ワークショップ，「ガイドラインを超えたところにある治療技法」，オンライン，2021.10.8.
- 11) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東 NCNP 講習，統合失調症のガイドライン講習，オンライン，2021.10.3.
- 12) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東 NCNP 講習，うつ病のガイドライン講習，オンライン，2021.10.10.
- 13) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東東京女子医科大学講習，統合失調症のガイドライン講習，オンライン，2021.10.17.
- 14) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿・北陸 大阪 1，統合失調症のガイドライン講習，オンライン，2021.10.23.
- 15) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿・北陸 大阪 2，統合失調症のガイドライン講習，オンライン，2021.10.23.
- 16) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿・北陸 大阪 1，うつ病のガイドライン講習，オンライン，2021.10.24.
- 17) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿・北陸 大阪 2，うつ病のガイドライン講習，オンライン，2021.10.24.
- 18) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北海道，東北，中部，東北大学，統合失調症のガイドライン講習，オンライン，2021.10.30.
- 19) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北海道，東北，中部，東北大学，うつ病のガイドライン講習，オンライン，2021.10.31.
- 20) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中四国・九州・沖縄，福岡大学，統合失調症のガイドライン講習，オンライン，2021.11.6.
- 21) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト中四国・九州・沖縄，福岡大学，うつ病のガイドライン講習，オンライン，2021.11.7.
- 22) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東東京女子医科大学講習，うつ病のガイドライン講習，オンライン，2021.11.21.
- 23) 橋本亮太：大阪精神科診療所協会，統合失調症薬物治療ガイドライン講習（ディスカッションパート），オンライン，2022.1.22.
- 24) 橋本亮太：大阪精神科診療所協会，うつ病治療ガイドライン講習会（ディスカッションパート），オンライン，2022.2.26.
- 25) 橋本亮太：16 回日本統合失調症学会，統合失調症の認知機能障害ワークショップ，オンライン，2022.3.21.

(2) 研修会講師

- 1) 橋本亮太：統合失調症の認知社会機能障害の簡易な測定法．第 15 回日本統合失調症学会ワークショップ，オンライン，2021.4.9.
- 2) 橋本亮太：統合失調症薬物治療ガイドライン（EGUIDE プロジェクト）当事者，当事者家族，支援者，医療者による，EBM に基づく Shared Decision Making の達成にむけてー統合失調症薬物治療ガイドライン/ガイドを利用した SDM の実践ー．第 15 回日本統合失調症学会ワークショップ，オンライン，2021.4.10.
- 3) 橋本亮太：再発・再燃時．統合失調症薬物治療ガイドライン講習（大阪精神科診療所協会主催），オンライン，2021.6.19.
- 4) 橋本亮太：精神病性．うつ病治療ガイドライン講習会（大阪精神科診療所協会主催），オンライン，2021.6.26.
- 5) 橋本亮太：治療抵抗性．統合失調症薬物治療ガイドライン講習（第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 合同年会），オンライン，2021.7.16.

- 6) 橋本亮太：薬剤師のための EGUIDE プロジェクト. 第 5 回日本精神薬学会総会・学術集会, オンライン, 2021.8.21.
- 7) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入. EGUIDE プロジェクト関東地区 NCNP 講習, 統合失調症のガイドライン講習, オンライン, 2021.10.3.
- 8) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入. EGUIDE プロジェクト関東地区 NCNP 講習, うつ病のガイドライン講習, オンライン, 2021.10.10,
- 9) 橋本亮太：治療抵抗性. EGUIDE プロジェクト近畿・北陸 大阪 2, 統合失調症のガイドライン講習, オンライン, 2021.10.23.
- 10) 橋本亮太：児童思春期. EGUIDE プロジェクト近畿・北陸 大阪 2, うつ病のガイドライン講習, オンライン, 2021.10.24.
- 11) 橋本亮太：ファシリテーター, うつ病治療ガイドライン講習会(大阪精神科診療所協会主催), オンライン, 2022.2.26.

F. その他

【受賞】

- 1) 橋本亮太：第 117 回日本精神神経学会学術総会 優秀発表賞, 統合失調症とうつ病の治療に対する EGUIDE プロジェクトの効果, 2021.9.
- 2) 降旗隆二, 橋本亮太他：第 117 回日本精神神経学会学術総会 優秀発表賞, 睡眠薬処方の実態と多剤処方の関連要因：統合失調症とうつ病患者の処方データの分析, 2021.9.
- 3) 松本純弥：日本神経精神薬理学会 JSNP Excellent Presentation Award for AsCNP2021, Cortical structural mega-analysis across four major psychiatric disorders in 5432 individuals, 2021.12.
- 4) 松本純弥：日本統合失調症学会 2021 年度国際学会若手発表奨励賞, 2022.3.
- 5) 松本純弥：第 16 回日本統合失調症学会 一般演題賞（優秀賞）, 多施設共同研究による統合失調症と双極性障害の脳皮質構造画像解析. 2022.3.
- 6) 長谷川尚美：第 5 回日本精神薬学会総会・学術集会 日本精神薬学賞, 統合失調症とうつ病の薬物治療に対する EGUIDE プロジェクトの効果 2016～2019 年の処方調査から, 2021.9.
- 7) 長谷川尚美：AsCNP2021 Best Poster Award, The effect of EGUIDE project on medication for schizophrenia and major depressive disorder: from the 2016-2019 prescribing survey. 2021.10.
- 8) 長谷川尚美：日本統合失調症学会 2021 年度国際学会若手発表奨励賞, 2022.3.
- 9) 市橋香代：日本神経精神薬理学会 NPPR Article Award 2021, 2021.7. 受賞論文：Ichihashi K, Hori H, Hasegawa N, Yasuda Y, Yamamoto T, Tsuboi T, Iwamoto K, Kishimoto T, Horai T, Yamada H, Sugiyama N, Nakamura T, Tsujino N, Nemoto K, Oishi S, Usami M, Katsumoto E, Yamamori H, Tomita H, Suwa T, Furihata R, Inagaki T, Fujita J, Onitsuka T, Miura K, Matsumoto J, Ohi K, Matsui Y, Takaesu Y, Hashimoto N, Iga J, Ogasawara K, Yamada H, Watanabe K, Inada K, Hashimoto R. Prescription patterns in patients with schizophrenia in Japan: First-quality indicator data from the survey of "Effectiveness of Guidelines for Dissemination and Education in psychiatric treatment (EGUIDE)" project. Neuropsychopharmacol Rep, 40(3):281-286, 2020.

【その他】

- 1) 橋本亮太：参考人として出席し意見を陳述. 厚生労働省令和 3 年度第 8 回薬事・食品衛生審議会薬事分科会医薬品等安全対策部会船対策調査会, 2021.5.24.
- 2) 橋本亮太：研究会主宰. 第 16 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2021.7.11.
- 3) 橋本亮太：コーディネーター. シンポジウム：With 新型コロナ時代の薬物療法の注意点, 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.19-21.

- 4) 橋本亮太：コーディネーター．科学的な根拠に基づく添付文書改訂のための研究とは，シンポジウム：臨床現場・学会・厚生労働省・PMDA の連携による当事者のためのクロザピン添付文書改訂への道，第 117 回日本精神神経学会学術総会，京都，2021.9.19-21.
- 5) 橋本亮太：総司会．統合失調症のガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区 NCNP 講習，オンライン，2021.10.3.
- 6) 橋本亮太：総司会．うつ病のガイドライン講習，EGUIDE プロジェクト関東地区 NCNP 講習，オンライン，2021.10.10.
- 7) 橋本亮太：プレスリリース．治療抵抗性統合失調症の診断により 治療抵抗性統合失調症薬クロザピンの処方率が向上～精神科医への教育がよりよい医療の実践に大きく前進～(NCNP, 獨協医科大医学共同発表)，掲載誌 Neuropsychopharmacology Reports, 2021.11.26.
- 8) 橋本亮太：研究会主宰．第 17 回 COCORO 合同会議，オンライン，2021.12.5.

8. 睡眠・覚醒障害研究部

I. 研究部の概要

研究部および研究室の研究目的

睡眠・覚醒障害研究部では、睡眠、意識、認知、感情、意欲等の精神活動を脳科学的にとらえ、その制御メカニズムを明らかにし、これら生理機能の調節障害に基づく各種の睡眠・覚醒障害、気分障害、不安障害、認知症性障害、神経・発達障害などの病態および治療法を解明することを目的としている。このため、精神生理学、時間生物学、神経薬理学、分子生物学、神経内分泌学、脳画像解析学などの手法を用いて、学際的な研究を進めている。

部長 1 名、室長 2 名に加え、リサーチフェロー 1 名、科研費研究員 3 名、研究補助員 2 名、事務助手 3 名、国立精神・神経医療研究センター内外の研究・治療協力施設の客員研究員および協力研究者との連携のもとに研究を進めている。

研究部の構成

部長：栗山健一。精神生理機能研究室長：吉池卓也。臨床病態生理研究室長：北村真吾。リサーチフェロー：河村葵。併任研究員：松井健太郎（センター病院）、都留あゆみ（センター病院）、羽澄恵（公共精神健康医療研究部）。客員研究員：内山 真（日本大学）、兼板佳孝（日本大学）、大川匡子（睡眠総合ケアクリニック代々木）、井上雄一（医療法人社団絹和会）、樋口重和（九州大学）、本多 真（東京都医学総合研究所）、上田泰己（東京大学）、池田正明（埼玉医科大学）、山寺 亘（東京慈恵会医科大学）、守口善也（ルンドベックジャパン）、阿部高志（筑波大学）、福水道郎（瀬川記念小児神経学クリニック）、榎本みのり（東京工科大学）、有竹清夏（埼玉県立大学）、亀井雄一（上諏訪病院）、渡辺和人（明治大学）、三島和夫（秋田大学）、西村勝治（東京女子医科大学）、梶達彦（あいせいかいココロのクリニック）、阿部又一郎（伊敷病院）、岡島義（東京家政大学）、高橋英彦（東京医科歯科大学）、肥田昌子（HKG 合同会社）、玉置應子（国立研究開発法人理化学研究所）、鈴木正泰（日本大学）、村上裕樹（大分大学）、吉村道孝（愛知東邦大学）、太田英伸（秋田大学）、綾部直子（秋田大学）、駒田陽子（明治薬科大学）、田中克俊（北里大学）、志村哲祥（東京医科大学）、大橋由基（洛和会音羽リハビリテーション病院）、尾崎章子（東北大学）、金子宜之（日本大学）、坂口昌徳（筑波大学）、橋本英樹（プロアシスト）。そのほか科研費研究員 3 名、科研費研究補助員 1 名、センター研究補助員 1 名、科研費事務助手 2 名、センター事務助手 1 名、研究生 16 名、実習生 5 名。

II. 研究活動

1) 適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備（21FA1002）

厚生労働科学研究費補助金循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業（代表研究者：栗山健一、研究分担者：吉池卓也 他、研究協力者：北村真吾、綾部直子、河村葵、岡邨しのぶ、篠崎未生、松井健太郎、都留あゆみ、大槻怜、長尾賢太郎、羽澄恵 他）

本研究では主に、前研究事業「健康づくりのための睡眠指針 2014」のブラッシュアップ・アップデートを目指した「睡眠の質」の評価及び向上手法確立のための研究（19FA1009）の成果として見出した、「睡眠の質」を反映し健康を維持するために目標となる「睡眠休養感」指標を社会実装するための準備を行う。「睡眠休養感」指標は、「睡眠時間」指標と相補的な関係を有し、国民の健康寿命延伸を測るための調査項目として組み込まれるとともに、各個人が日常生活の中で、健康維持・促進に役立てられるような指標とすべく、これに資するプラットフォームを開発する。さらに、「睡眠休養感」を向上・改善に寄与する日常生活行動・習慣を調査し、生活・睡眠習慣に組み込むべき目標として具体的に提示することも目標とする。さらに、国

民の睡眠健康増進に寄与しうる、睡眠健診の有用性および実装可能性を検討するとともに、ウェアラブルデバイス等を用いた簡易睡眠測定の有用性も検証し、前述のプラットフォームに組み込み有用性を高める試みも検討する。本研究の成果は、次世代の健康指針アップデートに直ちに活用可能であるとともに、健康づくりに寄与する、睡眠健康の社会基盤を整備・発展させることに寄与する。

2) 睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンク構築研究

精神・神経疾患研究開発費研究事業「睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンク構築研究（課題番号 2-1）」（主任研究者：栗山健一，研究協力者：吉池卓也，北村真吾，松井健太郎，河村葵，木村綾乃，岡邨しのぶ，篠崎未生）

本研究事業の目的は、わが国初にして最大の睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンクを構築することである。日本国内の主要な睡眠ポリグラフ実施機関と連携し、2013 年 1 月以降に睡眠ポリグラフを受検した患者の睡眠ポリグラフデータと、これに紐づいた患者背景情報・関連生体データを集約することで、睡眠障害および併存精神・神経疾患における新規バイオマーカーの探索、病態解明促進や新たな健康指標の定義を見越した生理学的検討を行う基盤とする。このために、厚生労働省や経済産業省、総務省が発行する医療情報システムに関する安全管理ガイドライン（3 省 2 ガイドライン）に準拠したセキュアなクラウドシステムの構築に着手した。また、多施設で個別に保管されるデータを過不足なく収集するにあたり、本事業用の統一データ集計フォーマットを作成した。他の共同研究施設と協議の上、各施設が分担する研究テーマを定めた。

3) 大脳深部皮質下白質病変が不眠症病態に及ぼす影響の検討

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C（研究代表者：栗山健一）

不眠症は「不眠に対する恐怖」と「生理的過覚醒」が病態の中核をなす症候群であるが、一部の患者は自身の睡眠に対して、眠れているにもかかわらず「全く眠れてない」という誤認を示す。睡眠障害国際分類（The International Classification of Sleep Disorders: ICSD）第 2 版では、「睡眠状態誤認」は逆説性不眠症（Paradoxical Insomnia: PI）という下位診断分類の特徴とされていたが、近年は多くの不眠症患者が共有する病態特性（スペクトラム）と考えられるようになった。「睡眠状態誤認」は、「漠とした健康障害への不安」を基に生じる認知構造として、身体症状症（疼痛性障害含む）と共通した特徴を示し、加齢に伴い増強する疾患共通の治療抵抗因子であると推測される。特に、大脳灰白皮質の萎縮性病変および脳微小血管障害を背景とした大脳白質病変が、この認知構造に関与している可能性が推測されるが、系統的に検討した研究はない。本研究は、上記病態関連性を検討するとともに、身体愁訴、疼痛症状との関連も検討項目に加え、不眠症と身体症状症等の精神疾患病態との関連性を検討することを目的とし行われた。

4) 子どもの睡眠調節に対する睡眠恒常性機能と概日リズム機能の寄与

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C（研究代表者：北村真吾）

本研究の目的は、子どもの年齢変化に伴う睡眠調節の機能変化に対する要因としての睡眠恒常性機能諸側面（主観的眠気、脳波検査）と概日リズム機能諸側面（放熱反応、概日リズム位相後退、夜型化）の寄与の検証である。39 名の男女児童（平均年齢 10.4 ± 2.6 歳、範囲 6～15 歳、男女比 55%:45%）が、在宅 7 日間の活動量 FS-760 の測定を行った後に実験室での実験に参加し、座位安静で皮膚温測定による放熱評価、唾液メラトニン測定によるメラトニン分泌開始時刻（DLMO）評価、眠気主観評価、精神運動ビジランス課題、覚醒脳波検査を行った後、7 時間の PSG 測定を行った。就床時刻および DLMO は年齢とともに後退を示し、思春期にみられる夜型化傾向に一致した。放熱の指標である DPG は就床前 100 分で年齢との相関がみられ（ $r=-0.359$, $p=0.047$ ）、低年齢ほど放熱が高い関係がみられたが、就床前 100 分の中央値を

超える DPG の時刻と DLMO に相関が認められ ($r=0.594, p<0.01$), 両者の時間差には年齢との相関がみられなかったことから, 放熱反応のリズム性はメラトニンにみられる中枢時計のリズム性と一致していることが示唆された。

5) 個人の概日リズム特性の決定に対する出生後環境の寄与

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C (研究代表者: 北村真吾)

朝型夜型の個人差はクロノタイプとも呼ばれ, 連続的なスペクトラムである。概日リズム位相や周期と密接な関連を示すことから視交叉上核を中心とした生物時計機構の表現型のひとつと考えられている。双生児研究からクロノタイプの遺伝率は約 50%と見積もられ, 複数の大規模なゲノムワイド関連研究 (GWAS) でも共通した遺伝的多型が報告されるなど, 生得的な側面がある。一方, クロノタイプを規定する環境要因に関する知見は乏しい。また, 睡眠・覚醒スケジュールや深部体温やメラトニンといった概日リズムの主要なマーカーでは 6~12 週齢ごろに概日リズムが確立するが, 確立時期に個人差がみられ, その要因も不明である。本研究では, 概日リズム機能と密接な授乳形態と光環境に着目し, 出生後 1 年間の縦断的評価を行い, クロノタイプ及び概日リズム確立時期に寄与する出生後要因を明らかにする目的で実施される。

6) 脳構造の可塑性ダイナミクスと気分障害病態の関連探索メカニズム

文部科学省科学研究費助成事業 若手研究 (研究代表者: 吉池卓也)

双極性障害やうつ病を有する患者において, 朝に増悪するうつ症状の日内変動が特徴的に出現するのみならず, 体温調節, ホルモン分泌, 時計遺伝子発現といった様々な生理指標の概日パターンが健常者と比べ変化することが知られている。近年, ヒトの灰白質及び白質の容積が同日内で変化することが明らかにされ, 脳の粗大な構造変化 (構造的可塑性) の生理学的意義が議論されるようになった。しかし, 構造的可塑性が精神疾患においていかなる変化を示し, 病態及び治療といかに関係するかは明らかにされていない。本研究は, 磁気共鳴画像 (MRI) の解析手法のうち, 脳表面形態計測法や白質微細構造解析法を用い, 気分障害患者の臨床症状, 治療反応性, 高次認知機能との関連を検討することにより, 特定の脳部位における構造変化を描出し, 新たな病態指標を開発することを目的として行われる。

7) 急性期治療後の高齢患者のリハビリテーション効果促進のための心理的支援に関する研究

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C (研究代表者: 篠崎未生)

高齢者の入院治療では, 2 週間程度の安静臥床であってもフレイル (虚弱) が急激に進行する。フレイルは要介護の前段階であり, 適切な介入を行うことで健康な状態に回復しようという可逆性が特徴とされるが, 入院患者では介入効果が限定的であり, 介入効果の阻害・促進要因の解明が課題となっている。本研究では, 急性期治療後の高齢入院患者のフレイルの進行を予防し, 身体的回復を促進するための心理的支援に関する知見を得ることを目的としている。急性期治療直後の高齢の入院患者 723 名 (平均年齢 82.4 ± 7.7 歳, 男性 243 名) から客観的身体機能, 主観的身体機能, 認知機能, 抑うつ, 心理的レジリエンス, 活動意欲, 体組成, ライフスタイル等に関するデータ収集を行った。現在, 長期予後に関する追跡調査を進めている。

8) 概日リズム睡眠覚醒障害の遺伝的要因とその発症分子メカニズム

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C (研究代表者: 肥田昌子)

概日リズム睡眠-覚醒障害のサブタイプの一つである非 24 時間睡眠-覚醒リズム障害と関連する遺伝的要因を調べるため, 概日リズム・睡眠関連遺伝子 76 個に対して次世代シーケンシングによる配列解析を行い, 4 遺伝子に新規バリエーションが存在することを明らかにしている。そのうち 2 遺伝子の変異体動物は活動リズムの概日性や睡眠調節と関連することが報告されてい

る。この2遺伝子について、非24時間睡眠-覚醒リズム障害患者合計64人を対象にサンガーシーケンスを実施した結果、1遺伝子には2つの新規バリエーションと3つの既知バリエーションが見出され、クロマチンリモデリングを阻害するドメインや転写活性化ドメインに位置するバリエーションが存在した。また、もう1つの遺伝子には1つの新規バリエーションと9つの既知バリエーションが検出され、標的とする遺伝子の転写抑制に関わるドメインに位置するバリエーションが存在した。このことから、これらのバリエーションが概日リズムや睡眠-覚醒の調節に関連する可能性が示唆された。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

各研究員は、都民・市民のための公開講座、講演会などにおいて睡眠と健康づくり、睡眠障害および関連する健康問題などについての普及啓発に努めた。NHK および民放テレビ、ラジオ、オンラインサイト、新聞、雑誌等のメディアを通して、睡眠習慣および睡眠問題の重要性について普及啓発活動を行った。

(2) 専門教育面における貢献

各研究員は、国内各地の学術集会、研究会、談話会、医師会講演会などで睡眠障害、気分障害、認知症の睡眠行動障害等の治療と予防について講演した。栗山健一は東京農工大学（客員教授）、滋賀医科大学（客員教授）、東京慈恵会医科大学（客員教授）など教育機関において学生教育の援助を行った。北村真吾は、京都大学（非常勤講師）、神奈川大学（非常勤講師）、埼玉県立大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った。綾部直子は帝京大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った。吉池卓也は武蔵野大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った。

また、研究員は日本睡眠学会、日本時間生物学会、日本生物学的精神医学会、日本公衆衛生学会、不眠研究会、睡眠学研究会、関東睡眠障害懇話会、日本生理人類学会、関東脳核医学研究会などにおける理事、評議員、世話人としての活動を通じて睡眠障害診療従事者の研究及び教育のサポートを行った。

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

全ての研究員は、厚生労働科学研究（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備（研究代表者：栗山健一）に参画し、厚生労働省健康日本21（第2次）による「健康づくりのための睡眠指針」アップデートの際に活用される新たな睡眠健康指標の普及・活用基盤開発・整備に貢献した。

栗山健一は、厚生労働科学研究（障害者政策総合研究事業）睡眠薬・抗不安薬の処方実態調査ならびに共同意思決定による適正使用・出口戦略のための研修プログラムの開発と効果検証研究（研究代表者：高江洲義和）に参加し、主に共同意思決定方針策定に貢献した。

(5) センター内における臨床的活動

栗山健一は、国立精神・神経医療研究センター病院睡眠障害センター長として、睡眠障害臨床部門の管理・運営の指揮を執った。

栗山健一、吉池卓也、河村葵は、国立精神・神経医療研究センター病院において睡眠障害専門外来での診療および臨床研究を行った。

(6) その他

栗山健一は、精神保健判定医として複数の医療観察法裁判に参加し、同法の有機的・機能的運用に貢献した。

北村真吾および研究員は企業から要請された診断機器の安全性、有効性、機能向上に関する受託研究に関わった。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Yoshiike T, Utsumi T, Matsui K, Nagao K, Saitoh K, Otsuki R, Aritake-Okada S, Suzuki M, Kuriyama K: Mortality associated with nonrestorative short sleep or nonrestorative long time-in-bed in middle-aged and older adults. *Sci Rep* 12(1):189. doi:10.1038/s41598-021-03997-z, 2022.
- 2) Izuno T, Saeki T, Hirai N, Yoshiike T, Sunagawa M, Nakamura M: Local and Transient Changes of Sleep Spindle Density During Series of Prefrontal Repetitive Transcranial Magnetic Stimulation in Patients With a Major Depressive Episode. *Front Hum Neurosci* 15. doi:10.3389/fnhum.2021.738605, 2022.
- 3) Matsui K, Yoshiike T, Nagao K, Utsumi T, Tsuru A, Otsuki R, Ayabe N, Hazumi M, Suzuki M, Saitoh K, Aritake-Okada S, Inoue Y, Kuriyama K: Association of Subjective Quality and Quantity of Sleep with Quality of Life among a General Population. *Int J Environ Res Public Health* 18(23):12835. doi:10.3390/ijerph182312835, 2021.
- 4) Matsui K, Inada K, Kuriyama K, Yoshiike T, Nagao K, Oshibuchi H, Akaho R, Nishimura K: revalence of Circadian Rhythm Sleep-Wake Disorder in Outpatients with Schizophrenia and Its Association with Psychopathological Characteristics and Psychosocial Functioning. *J Clin Med* 10(7):1513. doi:10.3390/jcm10071513, 2021.
- 5) Matsui K, Komada Y, Okajima I, Takaesu Y, Kuriyama K, Inoue Y: A Cross-Sectional Study of Evening Hyperphagia and Nocturnal Ingestion: Core Constituents of Night Eating Syndrome with Different Background Factors. *Nutrients* 13(11):4179, doi: 10.3390/nu13114179, 2021.
- 6) Aoki Y, Takaesu Y, Suzuki M, Okajima I, Takeshima M, Shimura A, Utsumi T, Kotorii N, Yamashita H, Kuriyama K, Watanabe N, Mishima K: Development and acceptability of a decision aid for chronic insomnia considering discontinuation of benzodiazepine hypnotics. *Neuropsychopharmacol Rep* doi: 10.1002/npr2.12219, 2021 Nov 22.
- 7) Kurimoto N, Inagaki T, Aoki T, Kadotani H, Kurimoto F, Kuriyama K, Yamada N, Ozeki Y: Factors causing a relapse of major depressive disorders following successful electroconvulsive therapy: A retrospective cohort study. *World J Psychiatry* 11(10): 841-853, doi: 10.5498/wjp.v11.i10.841, 2021.
- 8) Matsui K, Yoshiike T, Tsuru A, Otsuki R, Nagao K, Ayabe N, Hazumi M, Utsumi T, Yamamoto K, Fukumizu M, Kuriyama K: Psychological burden of attention-deficit/hyperactivity disorder traits on medical workers under the COVID-19 outbreak: a cross-sectional web-based questionnaire survey. *BMJ Open* 11(10):e053737. doi:10.1136/bmjopen-2021-053737, 2021.
- 9) Nishikawa K, Kuriyama K, Yoshiike T, Yoshimura A, Okawa M, Kadotani H, Yamada N: Effects of Cognitive Behavioral Therapy for Insomnia on Subjective-Objective Sleep Discrepancy in Patients with Primary Insomnia: a Small-Scale Cohort Pilot Study. *Int J Behav Med*. 28(6):715-726. doi:10.1007/s12529-021-09969-x, 2021.

- 10) Matsui K, Kuriyama K, Kobayashi M, Inada K, Nishimura K, Inoue Y. The efficacy of add-on ramelteon and subsequent dose reduction of benzodiazepine derivatives/Z-drugs for the treatment of sleep-related eating disorder and night eating syndrome: a retrospective analysis of consecutive cases. *J Clin Sleep Med.* 17(7):1475-1483, doi: 10.5664/jcsm.9236, 2021.
- 11) Matsuno S, Yoshiike T, Yoshimura A, Morita S, Fujii Y, Honma M, Ozeki Y, Kuriyama K: Contribution of somatosensory and parietal association areas in improving standing postural stability through standing plantar perception training in community-dwelling older adults. *J Aging Phys Act.* 29(5):761-770 doi.org/10.1123/japa.2020-0130, 2021.
- 12) 栗山健一: COVID-19 感染拡大が睡眠・覚醒行動および不眠関連症候に及ぼす影響に関する国際調査状況. ミニレビュー 日本時間生物学 18(1): 28-31, 2021.
- 13) Itoh Y, Takeshima M, Kaneita Y, Uchimura N, Inoue Y, Honda M, Yamadera W, Watanabe N, Kitamura S, Okajima I, Ayabe N, Nomura K, Mishima K: Associations Between the 2011 Great East Japan Earthquake and Tsunami and the Sleep and Mental Health of Japanese People: A 3-Wave Repeated Survey. *Nat Sci Sleep* 14:61-73, 2022.
- 14) Stickley A, Shirama A, Kitamura S, Kamio Y, Takahashi H, Saito A, Haraguchi H, Kumazaki H, Mishima K, Sumiyoshi T: Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and sleep problems in preschool children: the role of autistic traits. *Sleep Med* 83:214-221, 2021.
- 15) Motomura Y, Kitamura S, Nakazaki K, Oba K, Katsunuma R, Terasawa Y, Hida A, Moriguchi Y, Mishima K: The Role of the Thalamus in the Neurological Mechanism of Subjective Sleepiness: An fMRI Study. *Nat Sci Sleep* 13:899-921, 2021.
- 16) Motomura Y, Katsunuma R, Ayabe N, Oba K, Terasawa Y, Kitamura S, Moriguchi Y, Hida A, Kamei Y, Mishima K: Decreased activity in the reward network of chronic insomnia patients. *Scientific Reports* 11(1), 2021.
- 17) Korman M, Tkachev V, Reis C, Komada Y, Kitamura S, Gubin D, Kumar V, Roenneberg T: Outdoor daylight exposure and longer sleep promote wellbeing under COVID-19 mandated restrictions. *J Sleep Res.* Published online e13471, September 21, 2021.
- 18) Ishizuya A, Enomoto M, Tachimori H, Takahashi H, Sugihara G, Kitamura S, Mishima K: Risk factors for low adherence to methylphenidate treatment in pediatric patients with attention-deficit/hyperactivity disorder. *Scientific Reports.* 2021;11(1).
- 19) Higuchi S, Lin Y, Qiu J, Zhang Y, Ohashi M, Lee SI, Kitamura S, Yasukouchi A: Is the use of high correlated color temperature light at night related to delay of sleep timing in university students? A cross-country study in Japan and China. *J Physiol Anthropol* 40(1):7, 2021.

(2) 総説

- 1) 栗山健一: 在宅睡眠脳機能評価のウェアラブルシステムと将来像. 特集 ウェアラブル診断システムとしての簡易睡眠検査を再考する, *睡眠医療*, 16(1):37-43, 2022.
- 2) 栗山健一: 特集にあたって. (企画) 特集 精神神経疾患の治療と QOL. *精神医学*, 64(3): 253, 2022.
- 3) 栗山健一: 良質な睡眠とは 睡眠の量と質. 特集 皮膚科医が学ぶ睡眠医学. *Visual Dermatology*, 21(3): 242-244, 2022.
- 4) 綾部直子, 栗山健一: 睡眠・覚醒相後退に伴う不眠へのアプローチ【不眠症に対する認知行動療法(CBT-I)】. *睡眠医療*, 15(4): 427-432, 2021.
- 5) 都留あゆみ, 松井健太郎, 木村綾乃, 大槻怜, 長尾賢太郎, 内海智博, 山元健太郎, 福水道郎,

- 吉池卓也, 坂本崇, 栗山健一 : パーキンソン病患者の QOL に関連する睡眠関連指標の検討. 不眠研究, 17-17, 2021.
- 6) 内海智博, 吉池卓也, 有竹清夏, 松井健太郎, 長尾賢太郎, 都留あゆみ, 大槻怜, 福水道郎, 山元健太郎, 綾部直子, 羽澄恵, 斎藤かおり, 鈴木正泰, 栗山健一 : 高齢男性におけるレム睡眠出現率減少および睡眠時間の過大評価と総死亡リスクの関連. 不眠研究, 18-18, 2021.
 - 7) 福水道郎, 木村一恵, 星野恭子, 長尾ゆり, 野崎真紀, 小島泰子, 林雅晴, 中川栄二, 末永祐太, 本橋裕子, 佐々木征行, 木村綾乃, 松井健太郎, 都留あゆみ, 栗山健一 : 日中の過剰な眠気からてんかん, ADHD, 過眠症の鑑別が必要だった一例. てんかん研究, 39(2):449-449, 2021.
 - 8) 福水道郎, 長尾ゆり, 野崎真紀, 上東雅子, 小島泰子, 木村一恵, 星野恭子, 林雅晴, 中川栄二, 松井健太郎, 都留あゆみ, 大槻怜, 長尾賢太郎, 吉池卓也, 栗山健一 : ADHD の周辺にある併存症について理解を深める. 注意欠陥多動性障害(ADHD)と睡眠障害. 脳と発達, 53(Suppl.) S90-S90, 2021.
 - 9) 福水道郎, 野崎真紀, 長尾ゆり, 上東雅子, 小島泰子, 木村一恵, 星野恭子, 林雅晴, 中川栄二, 松井健太郎, 都留あゆみ, 大槻怜, 長尾賢太郎, 吉池卓也, 栗山健一 : 小児睡眠障害の治療. 脳と発達, 53(Suppl.) S180-S180, 2021.
 - 10) 栗山健一 : 序文. (企画) 特集 睡眠・覚醒の調節機構: その謎から臨床へ. PROGRESS IN MEDICINE, 524 : 41(12) : 7-8, 2021.
 - 11) 長尾賢太郎, 栗山健一 : 長期的展望に基づく睡眠障害診療. 精神疾患患者の人生全体を視野に入れた治療と支援. 臨床精神医学. アークメディア, 50(11) : 1225-1230, 2021.
 - 12) 栗山健一 : 充足感のある睡眠をとる. 月刊ことぶき, 寿出版, 496 : 42(3) : 48-51, 2022.
 - 13) 栗山健一 : 高齢者の不眠症. ドクターサロン, 杏林製薬(ラジオ NIKKEI), 65(11):15-19, 2021.
 - 14) 栗山健一 : 大事なものは, 寝る時間より起きる時間! 季刊 Be!アスク, 144 : 9, 2021.
 - 15) 内海智博, 栗山健一 : オレキシン受容体アンタゴニストのピットフォール症例. 月刊薬事. じほう, 63(6) : 71-76, 2021.
 - 16) 栗山健一, 鈴木圭輔, 柳沢正史 : 【不眠・過眠性障害-病態に即した治療戦略と薬剤の使用法】睡眠・覚醒障害診断・治療の方向性. ブレイクスルーをもたらす新規視点. カレントセラピー, 39(3) : 290-298, 2021.
 - 17) 栗山健一 : エディトリアル. 特集 不眠・過眠性障害 -病態に即した治療戦略と薬剤の使用法-. カレントセラピー, 39(3) : 7, 2021.
 - 18) 内海智博, 吉池卓也, 栗山健一 : 健康増進・疾病予防を目指した睡眠改善のあり方. 特集 不眠・過眠性障害 -病態に即した治療戦略と薬剤の使用法-. カレントセラピー, 39(3) : 65-71, 2021.
 - 19) 内海智博, 吉池卓也, 栗山健一 : 健康増進・疾病予防を目指した睡眠改善のあり方. 特集 不眠・過眠性障害 -病態に即した治療戦略と薬剤の使用法-. カレントセラピー, 39(3) : 65-71, 2021.
 - 20) 吉池卓也 : 睡眠・覚醒メカニズムに即した睡眠薬の使い方. 特集 睡眠・覚醒の調節機構: その謎から臨床へ. PROGRESS IN MEDICINE 41(12): 1211-1217, 2021.
 - 21) 河村葵, 栗山健一 : 非ベンゾジアゼピン系・ベンゾジアゼピン系睡眠薬. 筋弛緩・転倒. 特集 ピットフォールから学ぶ睡眠薬の適正使用. 月刊薬事 63(6), pp1059-1063, 2021.
 - 22) 北村真吾 : 睡眠・生体リズムの調節メカニズム (概論). メディカルビューポイント, 43(3): 1-2, 2021.
 - 23) 北村真吾 : 現代社会での睡眠・生体リズムの不調和と対処法. ストレス&ヘルスケア, 243: 2-3, 2022.

(3) 著書

- 1) 吉池卓也 : 時間生物学的治療. 6 てんかん. 睡眠・覚醒障害. 講座 精神疾患の臨床. pp294-304,

2021.

- 2) 河村葵, 栗山健一: 不眠障害群. 6 てんかん 睡眠・覚醒障害. 講座 精神疾患の臨床. pp311-321, 2021.
- 3) 長尾賢太郎, 栗山健一: 精神・神経系 4 催眠鎮静薬・抗不安薬 治療薬 UP-TO-DATE 2021. メディカルレビュー社, pp35-53, 2021.

(4) 研究報告書

- 1) 栗山健一: 睡眠時間指標を補填し国民の健康増進に資する「睡眠の質」指標の探索. 令和 2 年厚生労働科学研究費補助金(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)「健康づくりのための睡眠指針 2014」のブラッシュアップ・アップデートを目指した「睡眠の質」の評価及び向上手法確立のための研究(代表研究者: 栗山健一) 令和 2 年度総括・分担研究報告書, pp 1-15, 2021.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 栗山健一: 過眠症. 「Doctors File」, 2022.3.15.
- 2) 栗山健一: 概日リズム睡眠・覚醒障害. 「Doctors File」, 2022.3.15.
- 3) 栗山健一: レム睡眠行動障害(RBD). 「Doctors File」, 2022.3.15.
- 4) 栗山健一: 【パンフレット】眠れないときのために ―眠れないことでお困りの方へ―. 埼玉県精神科救急情報センター(公益財団法人埼玉県精神保健福祉協会), 2022.2.
- 5) 栗山健一: 不眠症③治療. 名医が教える日本人の病気の最新治療. 週刊朝日, 2022.2.25.
- 6) 栗山健一: 不眠症①原因と併発疾患. 名医が教える日本人の病気の最新治療. 週刊朝日, 2022.2.11
- 7) 栗山健一: 「良い睡眠で, からだもこころも健康に」. 厚生労働省 SMART LIFE PROJECT, Web 記事(博報堂), 2022.2.14.
- 8) 栗山健一: 下肢静止不能症候群. 「Medical Note」, 2021.12.27.
- 9) 栗山健一: 「コロナ禍の巣ごもり「冬のうつ」注意」. 中国新聞, 2021.12.8
- 10) 栗山健一: 眠りを変える技術「スリープテック」. 科学雑誌 Newton, pp44-53, 2022.1.7
- 11) 栗山健一: 科学雑誌 Newton 別冊, 2021.9.10.
- 12) 栗山健一: 睡眠は究極の「ひとり時間」眠活市場の目覚め 勝てる睡眠. 日本経済新聞, 2021.9.24.
- 13) 栗山健一: 科学雑誌 Newton, pp70-85, 2021.7.7.
- 14) 栗山健一: 睡眠健康に新たな指標“睡眠休養感” 睡眠で健康寿命が延びる? Housing Tribune 619(No8・9): 84-85, 2021.5.28.
- 15) 北村真吾: ブルーライトによる睡眠障害 デジタルデバイス使用は最小限に. 時事メディカル, 2021.7.27.
- 16) 吉池卓也: 大事なものは“睡眠時間”だけではない? FNN プライムオンライン, 2022.3.24.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 栗山健一: 睡眠と健康との深い関係～睡眠にかかわる生理機能の全容～. あなたの睡眠は大丈夫? ～生活リズムの基本・健やかな睡眠を化学する～. 第 11 回 CSJ 化学フェスタ, オンライン, 2021.10.19-21.
- 2) 三島和夫, 栗山健一: ウェアラブルデバイスとクラウドを活用した睡眠医療と精神医学の接合と展開. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 国立京都国際会館(オンライン)(座長・オーガナイザー), 2021.9.19-21.

- 3) 栗山健一：ウェアラブルデバイスを用いた睡眠医療の展望・期待される成果。ウェアラブルデバイスとクラウドを活用した睡眠医療と精神医学の接合と展開。第117回日本精神神経学会学術総会,国立京都国際会館(オンライン), 2021.9.19-21.
- 4) 高江洲義和, 栗山健一：精神疾患に併存する睡眠障害の診断と治療を考える。第117回日本精神神経学会学術総会,国立京都国際会館(オンライン) (座長・オーガナイザー), 2021.9.19-21.
- 5) 三島和夫, 栗山健一：ICT を活用した睡眠医療と精神医学の融合と展開。日本睡眠学会第46回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン) (座長), 2021.9.23-24.
- 6) 栗山健一：ICT を活用した睡眠医療と精神医学の展望。ICT を活用した睡眠医療と精神医学の融合と展開。日本睡眠学会第46回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン) (シンポジスト), 2021.9.23-24.
- 7) 栗山健一, 兼板佳孝：健康・長寿を目指した新たな睡眠指標の開発。日本睡眠学会第46回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン) (座長・オーガナイザー), 2021.9.23-24.
- 8) 土生川光成, 栗山健一：PTSD での睡眠障害-COVID-19 感染拡大を受けて。日本睡眠学会第46回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン) (座長), 2021. 9.23-24.
- 9) 栗山健一：恐怖記憶の消去・忘却による PTSD 発症予防・治療。PTSD での睡眠障害-COVID-19 感染拡大を受けて。日本睡眠学会第46回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン) (シンポジスト), 2021. 9. 23-24.
- 10) 三島和夫, 栗山健一：Patient-Centered Insomnia Care を考える。日本睡眠学会第46回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン) (座長), 2021.9.23-24.
- 11) 栗山健一：患者の声から考える不眠症医療の課題。Patient-Centered Insomnia Care を考える。日本睡眠学会第46回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン) (シンポジスト), 2021.9.23-24.
- 12) 栗山健一：うつ病, 不安症に併存する不眠症およびその他睡眠障害の治療戦略。日本睡眠学会第46回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 13) 栗山健一, 喜田聡：トラウマおよび周辺病態におけるトランスレーショナルリサーチ,第13回日本不安症学会学術大会,北海道大学学術交流会館(オンライン) (座長・オーガナイザー), 2021. 5.22-23.
- 14) 吉池卓也, 河村葵, 栗山健一：光療法の抗うつ効果と不安関連疾患への応用可能性.シンポジウム 睡眠・生体リズムをターゲットとした精神疾患治療の新展開.日本睡眠学会第46回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン) (座長・演者), 2021. 9.23-24.
- 15) 吉池卓也, 栗山健一：睡眠休養感,睡眠・床上時間と健康との関連.シンポジウム：健康・長寿を目指した新たな睡眠指標の開発.日本睡眠学会第46回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン) (演者), 2021. 9.23-24.
- 16) 鈴木正泰, 斎藤かおり, 吉池卓也, 金子宜之, 内海智博, 松井健太郎, 長尾賢太郎, 大槻怜, 有竹清夏, 角谷寛, 栗山健一：睡眠休養感と精神健康との関連.シンポジウム：健康・長寿を目指した新たな睡眠指標の開発.日本睡眠学会第46回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 17) 内海智博, 吉池卓也, 有竹清夏, 栗山健一：睡眠時間の主観・客観乖離と健康との関連.シンポジウム：健康・長寿を目指した新たな睡眠指標の開発,日本睡眠学会第46回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 18) 吉池卓也, 栗山健一：不安障害に併存する不眠症の診断と治療を考える.シンポジウム：精神疾患に併存する睡眠障害の診断と治療を考える.第117回日本精神神経学会学術総会,国立京都国際会館(オンライン) (演者), 2021. 9.19-21.
- 19) 吉池卓也：睡眠と概日リズムの制御機構と気分障害における異常.ワークショップ：睡眠・生体リズムをターゲットとした気分障害治療—日常診療における時間生物学的治療の実践に向けて—.第18回日本うつ病学会総会／第21回日本認知療法・認知行動療法学会 (合同開催),パ

- シフィコ横浜会議センター(オンライン) (座長・演者) , 2021.7.8-10.
- 20) 尾崎章子, 駒田陽子, 松井健太郎, 綾部直子, 都留あゆみ, 大橋由基, 岡島義, 大川匡子, 栗山健一: 健康増進に寄与する睡眠の質向上法. 健康・長寿を目指した新たな睡眠指標の開発. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン), 2021.9-23-24.
 - 21) 福水道郎, 長尾ゆり, 野崎真紀, 上東雅子, 小島泰子, 木村一恵, 星野恭子, 林雅晴, 中川栄二, 松井健太郎, 都留あゆみ, 大槻怜, 長尾賢太郎, 吉池卓也, 栗山健一: 注意欠陥多動性障害 (ADHD) と睡眠障害.シンポジウム: ADHD の周辺にある併存症について理解を深める. 第 63 回日本小児神経学会学術集会,福岡国際会議場(オンライン), 2021.5-27-29.
 - 22) 福水道郎, 長尾ゆり, 野崎真紀, 上東雅子, 小島泰子, 木村一恵, 星野恭子, 林雅晴, 中川栄二, 松井健太郎, 都留あゆみ, 大槻怜, 長尾賢太郎, 吉池卓也, 栗山健一: 小児睡眠障害の治療.実践教育セミナー: 小児の睡眠と神経疾患.第 63 回日本小児神経学会学術集会,福岡国際会議場(オンライン) (演者) , 2021.27-29.
 - 23) 吉池卓也, 栗山健一: 病的悲嘆の生物学的理解・持続性悲嘆障害における痛み共感性の神経行動学的変化.シンポジウム: トラウマおよび周辺病態におけるトランスレーショナルリサーチ. 第 13 回日本不安症学会学術大会,北海道大学学術交流会館(オンライン) (演者) , 2021.5.22-23.
 - 24) 福水道郎, 野崎真紀, 小島泰子, 長尾ゆり, 木村一恵, 星野恭子, 林雅晴, 中川栄二, 松井健太郎, 都留あゆみ, 大槻怜, 伊豆原宗人, 長尾賢太郎, 河村葵, 木村綾乃, 三好智佳子, 内海智博, 羽澄恵, 綾部直子, 吉池卓也, 栗山健一, Hayes Marie J: 小児期の睡眠問題とその影響 成長発達と神経発達症,起立性調節障害,睡眠時無呼吸症候群,概日リズム障害. 睡眠障害を Long Life Disorder として考える. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
 - 25) 北村真吾: パンデミック下の行動制約による睡眠リズム変容. 第 30 回日本睡眠環境学会学術大会, オンライン, 2022.2.18-19.
 - 26) 北村真吾: 行動制限下で顕在化した社会的な時間制約による睡眠・リズムへの影響. シンポジウム: コロナ社会からポストコロナ社会への適応. 日本生理人類学会第 82 回大会, オンライン, 2021.10.30-31.
 - 27) 北村真吾: 個人特性の視点で夜勤交代制勤務を読み解く. シンポジウム: 夜勤交代制勤務ー最新の動向と今後の課題. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.

(2) 一般演題

- 1) 吉池卓也, 河村葵, 堀口涼子, 内海智博, 松井健太郎, 長尾賢太郎, 都留あゆみ, 大槻怜, 綾部直子, 羽澄恵, 伊豆原宗人, 北村真吾, 栗山健一: 米国地域住民における不眠症, うつ病, 不安症の既往と炎症の関連 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 2) 吉池卓也, 内海智博, 松井健太郎, 長尾賢太郎, 斎藤かおり, 大槻怜, 有竹清夏, 鈴木正泰, 栗山健一: 中年・高齢世代における睡眠休養感, 客観的睡眠時間, 床上時間と総死亡の関連 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 3) 河村葵, 吉池卓也, 吉村篤, 小泉葉月, 長尾賢太郎, 藤井勇佑, 鷹見将規, 高橋正洋, 松尾雅博, 山田尚登, 栗山健一: 高照度光による曝露型認知行動療法増強作用.日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 4) 河村葵, 吉池卓也, 松井健太郎, 羽澄恵, 都留あゆみ, 内海智博, 長尾賢太郎, 大槻怜, 綾部直子, 伊豆原宗人, 栗山健一: COVID-19 流行下におけるデジタル機器使用頻度は流行後の起床時刻変化を介し健康感に影響する. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会,福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 5) 松井健太郎, 吉池卓也, 長尾賢太郎, 内海智博, 都留あゆみ, 大槻怜, 綾部直子, 羽澄恵, 鈴

- 木正泰, 斎藤かおり, 有竹清夏, 井上雄一, 栗山健一: 一般人口における主観的な睡眠の質的／量的評価が Quality of Life に及ぼす影響: 不眠症状の媒介的役割を考慮して. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 6) 内海智博, 吉池卓也, 有竹清夏, 松井健太郎, 長尾賢太郎, 都留あゆみ, 大槻怜, 綾部直子, 羽澄恵, 斎藤かおり, 鈴木正泰, 栗山健一: 一般高齢男性における睡眠時間の過大評価と総死亡リスクの関連. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 7) 長尾賢太郎, 吉池卓也, 斎藤かおり, 松井健太郎, 内海智博, 大槻怜, 河村葵, 有竹清夏, 鈴木正泰, 内山真, 栗山健一: 一般成人における睡眠休養感の背景因子の検討. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 8) 斎藤かおり, 吉池卓也, 金子宜之, 大槻怜, 内海智博, 長尾賢太郎, 松井健太郎, 有竹清夏, 角谷寛, 栗山健一, 鈴木正泰: 睡眠による休養感の欠如と高血圧発症との縦断的関連 — 既存コホートデータ (HCHS/SOL) による検討—. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 9) 羽澄恵, 吉池卓也, 松井健太郎, 長尾賢太郎, 都留あゆみ, 大槻怜, 綾部直子, 内海智博, 栗山健一: COVID-19 パンデミックと不眠障害における不眠症状と不安症状の関係性の変化. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 10) 都留あゆみ, 松井健太郎, 木村綾乃, 大槻怜, 長尾賢太郎, 内海智博, 山元健太郎, 福水道郎, 吉池卓也, 栗山健一: パーキンソン病患者の健康関連 QOL に関連する睡眠関連指標の検討. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 11) 大槻怜, 松井健太郎, 都留あゆみ, 伊豆原宗人, 長尾賢太郎, 河村葵, 内海智博, 羽澄恵, 綾部直子, 山元健太郎, 福水道郎, 吉池卓也, 栗山健一: 概日リズム睡眠・覚醒障害(CRSWD)患者における COVID-19 流行拡大に伴う症状変化/増悪要因の検討. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 12) 綾部直子, 松井健太郎, 吉池卓也, 長尾賢太郎, 都留あゆみ, 大槻怜, 羽澄恵, 内海智博, 山元健太郎, 福水道郎, 伊豆原宗人, 栗山健一: COVID-19 流行下における気晴らし行動の変化が ADHD 傾向を伴う医療従事者の睡眠に及ぼす影響. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 13) 福本裕, 川辺裕文, 松井健太郎, 都留あゆみ, 大槻怜, 長尾賢太郎, 吉池卓也, 栗山健一: 下顎隆起が閉塞性睡眠時無呼吸症候群に与える影響について. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9.23-24.
- 14) 斎藤かおり, 吉池卓也, 大槻怜, 金子宜之, 内海智博, 長尾賢太郎, 松井健太郎, 有竹清夏, 角谷寛, 栗山健一, 鈴木正泰: 睡眠による休息感の欠如とうつ病発症リスクとの関連. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 国立京都国際会館(オンライン), 2021.9.19-21.
- 15) 大槻怜, 松井健太郎, 吉池卓也, 都留あゆみ, 長尾賢太郎, 綾部直子, 羽澄恵, 内海智博, 山元健太郎, 福水道郎, 栗山健一: COVID-19 流行下での医療関係者における不眠症状と睡眠・覚醒リズム/社会的ジェットラグの関連. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 国立京都国際会館(オンライン), 2021.9.19-21.
- 16) 内海智博, 吉池卓也, 有竹清夏, 松井健太郎, 長尾賢太郎, 都留あゆみ, 大槻怜, 福水道郎, 山元健太郎, 綾部直子, 羽澄恵, 斎藤かおり, 鈴木正泰, 栗山健一: 一般高齢男性における不眠, 睡眠時間の誤認, およびレム睡眠出現率と総死亡リスクの関連. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 国立京都国際会館(オンライン), 2021.9.19-21.
- 17) 羽澄恵, 松井健太郎, 吉池卓也, 都留あゆみ, 大槻怜, 長尾賢太郎, 綾部直子, 内海智博, 山元健太郎, 福水道郎, 栗山健一: COVID-19 治療従事経験の有無による医療関係者の精神健康関連要因の相違. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 国立京都国際会館(オンライン), 2021.9.19-21.

- 18) 松井健太郎, 吉池卓也, 都留あゆみ, 大槻怜, 長尾賢太朗, 綾部直子, 羽澄恵, 内海智博, 山元健太郎, 福水道郎, 栗山健一: COVID-19 の流行がわが国の医療関係者の心理的健康に与える影響. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 国立京都国際会館(オンライン), 2021.9.19-21.
- 19) 綾部直子, 松井健太郎, 吉池卓也, 長尾賢太朗, 都留あゆみ, 大槻怜, 羽澄恵, 内海智博, 山元健太郎, 福水道郎, 栗山健一: ADHD/ASD 傾向と COVID-19 流行下における気晴らし行動の変化が不眠に及ぼす影響. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 国立京都国際会館(オンライン), 2021.9.19-21.
- 20) 吉池卓也, Elisa Melloni, Sara Dallaspezia, 栗山健一, Francesco Benedetti: 双極性障害における抑うつ的認知と時間知覚の関連. 第 43 回日本生物学的精神医学会・第 51 回日本神経精神薬理学会 (合同大会). 国立京都国際会館(オンライン), 2021.7.14-16.
- 21) 稲垣貴彦, 村上純一, 石田展弥, 栗山健一, 尾関祐二: 思春期の精神科臨床における QOL と精神症状の連関. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 国立京都国際会館(オンライン), 2021.9.19-21.
- 22) 北村真吾, 盛本翼, 岸本直子, 田形弘実, 樋口悠子, 加藤隆郎, 小曾根基裕, 三島和夫, 石間環, 大西隆, 大庭真梨, 松木佑, 桂雅宏, 富田博秋, 内村直尚, 鈴木道雄, 根本隆洋, 橋本謙二, 岸本年史, 住吉太幹, 中込和幸: Ultra High Risk 症例における COVID-19 感染拡大に伴うサイトカインおよび睡眠関連パラメータへの影響の検討. 第 24 回日本精神保健・予防学会学術集会, オンライン, 2021.11.27-28.
- 23) 江藤太亮, 大橋路弘, 佐藤燦斗, 河野寛之, 永田浩太郎, 李相逸, 北村真吾, 樋口重和: 小学生におけるクロノタイプと概日リズム位相との関連性: 成人との比較. 第 28 回日本時間生物学学会学術大会, 沖縄県市町村自治会館(オンライン), 2021.11.20-21.
- 24) 星本弘之, 美代賢吾, 石井雅通, 波多野賢二, 平松治彦, 渡辺浩, 三原直樹, 野口貴史, 北村真吾, 櫻井理紗: 国立高度専門医療研究センター (NC) における多施設共同リアルワールド臨床データベース (JASPEHR) のデータ利活用環境の構築について. 第 41 回医療情報学連合大会・第 22 回日本医療情報学会学術大会. 名古屋国際会議場(オンライン), 2021.11.21.
- 25) 波多野賢二, 美代賢吾, 三原直樹, 平松治彦, 野口貴史, 渡辺浩, 北村真吾, 櫻井理紗, 星本弘之, 向井まさみ, 田中勝弥: ナショナルセンターにおける電子カルテ情報を活用したリアルワールドデータ収集・提供基盤の構築事業 (JASPEHR). 第 41 回医療情報学連合大会・第 22 回日本医療情報学会学術大会, 名古屋国際会議場(オンライン), 2021.11.21.
- 26) 榎本みのり, 北村真吾: 小児のアクチグラフィには独自の睡眠/覚醒判定アルゴリズムが必要か? 日本生理人類学会第 82 回大会, オンライン, 2021.10.30-31.
- 27) 國枝泰希, 榎本みのり, 東風谷祐子, 北村真吾: 夜間の食事のタイミングの違いによる血糖代謝と睡眠の質の変化. 日本生理人類学会第 82 回大会, オンライン, 2021.10.30-31.
- 28) 伊藤結生, 竹島正浩, 兼板佳孝, 内村直尚, 井上雄一, 本多真, 山寺亘, 渡辺範雄, 北村真吾, 岡島義, 綾部直子, 南園佐知子, 野村恭子, 三島和夫: 東日本大震災 2011 による日本人の睡眠及びメンタルヘルスへの影響. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9-23-24.
- 29) 工藤瑞樹, 綾部直子, 北村真吾, 三島和夫: 不眠症状と睡眠状態誤認, 日中機能との関連. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9-23-24.
- 30) 榎本みのり, 北村真吾: 小児用アクチグラフの睡眠/覚醒判定アルゴリズムの作成とその妥当性の検討. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会, 福岡国際会議場(オンライン), 2021.9-23-24.
- 31) Mio Shinozaki, Shigemi Yamamoto, Masanori Tanimoto, Yuichiro Tomita, Akiko Yamaoka, Hisayuki Miura, Takashi Sakurai, Shosuke Satake, Izumi Kondo, Yutaka Arahata: Predictors of post-acute care recovery of physical function in older inpatients. 2021 Regional IPA / JPS Meeting, Kyoto, Japan, 2021. Kyoto, Japan. Poster Presentation, September 16-18, 2021.

- 32) Mio Shinozaki, Shigemi Yamamoto, Yuichiro Tomita, Masanori Tanimoto, Akiko Yamaoka, Hisayuki Miura, Shosuke Satake, Takashi Sakurai, Izumi Kondo, Yutaka Arahata. Exploration of factors that reduce post-acute care depression in elderly hospitalized patients. 2021 Regional IPA / JPS Meeting, Kyoto, Japan, 2021. Kyoto, Japan. Poster Presentation, September 16-18.

(3) 研究報告会

(4) その他

- 1) 栗山健一：質の良い睡眠で負けないカラダ作り！日テレカラダウィーク. NewsEvery, 2021.11.2.
- 2) 栗山健一：「睡眠時異常行動」.ラジオ NIKKEI ドクターサロン, 2021.11.23.
- 3) 栗山健一：睡眠研究の最前線 睡眠環境のカギは「光と熱」.Panasonic 暮らしソリューション スクエア, 2021.11.10-30.

C. 講演

- 1) 栗山健一：第2回精神科睡眠障害 WEB セミナー（大日本住友製薬株式会社主催）座長, Zoom オンライン配信, 2022.1.19.
- 2) 栗山健一：「不眠症診療の基礎と応用」.令和3年度 精神神経科連携セミナー（精神神経科関連施設セミナー実行委員会/MSD 共催）, 慶應義塾大学病院 北里講堂(オンライン), 2021.10.7.
- 3) 栗山健一：「末梢放熱機序に着目した不眠治療」.不眠症領域全国 Web 講演会（武田薬品工業株式会社主催）, M3.com オンライン配信, 2021.11.8.
- 4) 栗山健一：「働き盛り世代～高齢者における不眠診療 -近年の社会情勢を考慮した対処法-」 第2回横浜市精神科学術講演会（MSD 主催）, TKP ガーデンシティ PREMIUM 横浜ランドマークタワー(zoom オンライン), 2021.10.7.
- 5) 栗山健一：「不眠症治療の最前線」. 第914回松本市医師会生涯教育講座（松本市医師会/エーザイ株式会社共催）, Zoom オンライン配信, 2021.9.9.
- 6) 栗山健一：「不眠症の治療目標と背景心理」睡眠を学んで診療に役立てる会（MSD 主催）. Zoom オンライン講演会, 2021.6.1.
- 7) 栗山健一：「不眠症治療の最前線」.昭島市医師会学術講演会（昭島市医師会/立川医師会/北多摩医師会/エーザイ株式会社共催）, 東村山市医師会館(Zoom オンライン配信), 2021.5.26.
- 8) 吉池卓也：覚醒療法（断眠療法）：睡眠・覚醒リズム操作による抑うつエピソードの治療 気分障害センターオンライン市民公開講座.オンライン, 2022.1.29.
- 9) 吉池卓也：精神疾患の診断・治療と客観的睡眠評価 第2回日本睡眠検査学会（関東・北海道支部例会）, オンライン, 2021.7.18.
- 10) 吉池卓也：睡眠, 概日時計と気分障害. Tokyo Mental Disorder Conference, 東京医科歯科大学 オンライン配信（MSD 株式会社主催）, 2021.5.28.
- 11) 河村葵：「女性特有の睡眠の悩み」.NCNP 市民公開講座「～意外と身近な睡眠の悩み～」, オンライン, 2022.1.16.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 栗山健一：日本睡眠学会 理事・評議員
- 2) 栗山健一：日本時間生物学会 評議員

- 3) 栗山健一：日本生物学の精神医学会：評議員
- 4) 肥田昌子：日本時間生物学会 評議員
- 5) 肥田昌子：日本睡眠学会 評議員
- 6) 北村真吾：日本時間生物学会 評議員
- 7) 北村真吾：日本生理人類学会 理事
- 8) 北村真吾：日本睡眠学会 評議員
- 9) 吉池卓也：日本時間生物学会 評議員
- 10) 吉池卓也：日本睡眠学会 評議員
- 11) 吉池卓也：日本生物学の精神医学会 評議員

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 栗山健一：日本時間生物学会誌 編集委員
- 2) 栗山健一：日本睡眠学会 倫理委員会 委員長
- 3) 栗山健一：日本睡眠学会 利益相反委員会 副委員長
- 4) 栗山健一：日本睡眠学会 用語委員会 副委員長
- 5) 栗山健一：日本睡眠学会 将来構想委員
- 6) 栗山健一：日本睡眠学会 機関紙編集委員
- 7) 栗山健一：日本睡眠学会 睡眠研究支援委員
- 8) 栗山健一：日本精神神経学会 精神医学研究推進委員
- 9) 吉池卓也：日本睡眠学会 認定試験委員会試験問題作成委員
- 10) 吉池卓也：日本総合病院精神医学会誌 編集委員
- 11) 吉池卓也：日本総合病院精神医学会 治療戦略検討委員
- 12) 肥田昌子：Scientific Reports, Editorial Board
- 13) 肥田昌子：日本時間生物学会誌 編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

F. その他

9. 知的・発達障害研究部

I. 研究部の概要

知的・発達障害研究部は、知的障害研究室、発達機能研究室の二室体制で構成され、知的障害、自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、限局性学習症、トゥレット症などの神経発達症の病態解明、治療・支援に関する研究を幅広く実施している。研究においては、部局内だけではなく、国立精神・神経医療研究センター内、ならびに、国立国際医療研究センター国府台病院や国立成育医療センターなどのナショナルセンター間の連携、東京大学、京都大学、名古屋大学などの中核的研究機関との連携など、幅広い連携のもとに進めている。加えて研究者のキャリア・パス形成を基本方針の一つに掲げており、競争的研究資金の確保、研究計画の立案と遂行、論文執筆まで、共同性と相互研鑽を通して研究者としての成長を図り、知的・発達障害ならびに関連領域における次世代のリーダーシップを国内外で発揮できる人材育成を強く意識しているのも特徴である。また、厚生労働省から委託された国研修として発達障害者支援研修を実施し、各地でかかりつけ医対応力向上研修を実施する高度な知識と技能を有する医師の育成を行っているほか、注意欠如・多動症のペアレントトレーニング実施者養成研修を実施し、各地で心理社会的治療を普及させるリーダーシップを発揮する人材の育成を行うなど、知的・発達障害の当事者支援を拡充するための人材育成の拠点として機能できるよう努めている。

部長の岡田 俊（児童精神医学）は、自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症、トゥレット症とその精神医学的併存症に関して、臨床知見を基盤として、ゲノム（自閉スペクトラム症、統合失調症の発症に関連するゲノムコピー数変異）、新規介入手法の開発（自閉スペクトラム症に対するオキシトシン、難治性トゥレット症に対する脳深部刺激療法）、ガイドライン作成（注意欠如・多動症）、周産期メンタルヘルスと養育が子どもの発達に及ぼす影響の調査研究、22q11.2 欠失症候群のコホート研究、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染拡大下における神経発達症の子どもと親のメンタルヘルスに関する調査研究などに取り組んできた。また、令和3年5月からはNCNP病院の小児外来において発達障害外来での診療を行い、当研究部の連携のもと診断・評価と支援を提供してきた。また、厚生労働科学研究への参画や協力だけではなく、環境省や文部科学省の委員会の委員なども務め、知的・発達障害に関連する国の施策に寄与してきた。

魚野翔太室長（認知神経科学、実験心理学）は、自閉スペクトラム症を中心とする神経発達症の表情、視線、バイオロジカルモーションの知覚などの社会認知機能の障害とその神経基盤について認知科学的手法を用いた病態解明を進めている。当研究部においても岡田部長、江頭優佳リサーチフェロー（神経生理学、実験心理学）、林小百合リサーチフェロー（神経生理学、実験心理学）との共同のもと、定型発達ならびに神経発達症当事者のデータサンプリングを精力的に進めてきた。特に、江頭は、神経発達症における多様な時間知覚に着目し、その神経基盤の同定と神経発達症における障害の解明に取り組んでいる。また、林は、注意欠如・多動症等において見いだされる実行機能障害、特に抑制機能の障害に対して社会的報酬が促進的な影響を及ぼすことに着目し、年齢層ごとの両機能の連関や神経発達症における障害の解明を進めている。さらに、請園正敏（行動科学、生物統計学）リサーチフェローは、高野裕治客員研究員との共同のもと、バルプロ酸自閉症モデルマウスを用いて、社会性を反映する新規行動指標としてのリーチング課題を作成し、その妥当性を検証し、介入技法の検討へと独自性のある研究を展開している。また、令和3年4月からは科研費研究補助員として高田美希（臨床心理学）が加わり、行動上の問題のある児童の養育を変容する行動的介入である親子相互交流療法(PCIT)に着目し、システムティックレビューを実施して、治療継続を阻害する要因を明確化して、その成果をまとめている。高田は、日本医療研究開発機構(AMED)研究（中込班）のオンライン相談員として研究に参加するほか、当部における神経心理学的評価のうち、臨床心理学的評価を担当した。さらに当研究部は、脳統合イメージングセンターIBICとの連携をはかり、これらの臨床表現型や神経心理学的機能の背後にある神経学的病態を明らかにする研

究への展開を図っており、令和4年度から始動する準備を整えることができた。

令和3年4月1日より、東京大学大学院医学系研究科脳神経医学専攻統合脳医学講座（こころの発達診療部）より石井礼花が発達機能研究室長として着任した。石井室長は、AMED研究として、注意欠如・多動症のペアレントトレーニングの有効性について、ランダム化比較試験を継続するとともに、その有効性を行動特性だけではなく、親子の愛着や脳画像からも検討を進めている。また、厚生労働科学研究としてペアレントトレーニング実施者養成研修プログラムを作成し、岡田部長とともに2回の実施者養成研修を実施した。石井と岡田は、国立高度専門医療研究センター（JH）実装科学推進のための基盤整備事業（金班）に研究協力者として参画し、ペアレントトレーニングの普及を阻害している要因を明確化し、その実装を図る取り組みを継続している。

上述のように、岡田部長、魚野室長、石井室長に加え、リサーチフェローとして、江頭優佳、林小百合、請園正敏、科研費研究補助員として高田美希、鈴木茜音、草間千絵、上田 翠、中島直美、廣瀬愛希子、眞神花帆が参加した。また、併任研究員の中川栄二（センター病院特命副院長、外来部長）、客員研究員として、會田千重、稲垣真澄、稲田尚子、岩垂喜貴、宇佐美政英、小沢 浩、加我牧子、加賀佳美、金生由紀子、久島 周、黒田美保、軍司敦子、小平雅基、佐藤 弥、高橋長秀、高野裕治、竹市博臣、辻井農亜、堀内史枝、安村 明、吉川 徹、趙朔、鈴木 太、小川しおり、義村さや香、研究生として、上田理誉、崎原ことえ、白川由佳、熊澤 綾、田中美歩、中村雅子、山内 彩、奥貫奈津恵、実習生として、吉丸ゆず、鶴田あすみ、矢沢里菜が研究に参加している。また、秋月由紀子、井上さゆりの2名の秘書が、研究、研修活動を支えた。

Ⅱ. 研究活動

1) 認知神経科学的手法を用いた神経発達症と併存精神疾患の病態研究

注意欠如・多動症ならびに自閉スペクトラム症の臨床表現型（神経発達症特性、適応行動、不安・抑うつなどの精神病理学的評価）と神経、心理学的機能（表情認知、視線認知、実行機能、報酬系、時間知覚）との関係についてデータを蓄積している（現在122名）。科学研究費（岡田、魚野、江頭、林）ならびに精神・神経疾患研究開発費（分担：岡田）に基づいて研究を遂行しており、その成果の一部をSociety for Neuroscience（岡田、江頭、林）、日本生理人類学会（江頭）、日本心理学会（林）、日本ADHD学会（林）で発表した。さらに、江頭は、国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部横断的研究推進費若手研究助成を得て、国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科宇佐美政英（客員研究員）らとともにデータサンプリングできる体制を構築し、JH Symposium 2021での若手研究課題の発表において最多得票を獲得した。また、魚野室長は理化学研究所の佐藤 弥（当部、客員研究員）及び京都大学の義村さや香（当部、客員研究員）との他機関連携、また深圳大学（中国）の趙朔との国際共同研究を推進し、自閉スペクトラム症ならびに社会認知の基盤となる病態研究を推進している。

2) 注意欠如・多動症のペアレントトレーニングに関する実装研究

注意欠如・多動症の心理社会的治療として、ペアレントトレーニングはその有効性が実証され、第一選択治療とされているにもかかわらず、本邦におけるエビデンス構築は不十分であり、その普及が十分ではないという実情があった。石井室長は、AMED研究費を用いて、東京大学との連携のもと、ペアレントトレーニングのランダム化比較試験を遂行するとともに、行動特性のみならず愛着形成、MRI撮像を行い、多様なアウトカムを用いてそのエビデンス構築を進めている。また、石井は、厚生労働科学研究費を得て、ペアレントトレーニング実施者養成研修テキストを作成し、岡田部長らとともにペアレントトレーニング実施者養成研修を実施した。また、石井と岡田は、国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部横断的研究推進費（分担：金 吉晴）の一環として、その促進要因、阻害要因を明確化した上で実装化を図る研究を推進している。なお、石井は、第117回日本精神神経学会学術総会において、優秀発表賞（演題：ADHD児とその親への社会サポートネットワークへのCOVID-19感染拡大の影響）を受賞した。

3) 自閉スペクトラム症の齧歯類モデルの確立と動物モデルを用いた治療法開発

自閉スペクトラム症の治療法開発の支障となっているのは、齧歯類モデルが数多く存在し、どのモデルを対象に検討すればいいか不明瞭なことである。齧歯類モデルが多数存在する理由の一つとして、一側面の社会性の行動指標のみで、自閉症モデルか否かの判断をしていることがあげられる。さらに重要な点として、治療法開発の障害はモデルが定められないことだけでなく、効果判定の指標となる行動が同定されていないことである。請園正敏リサーチフェローは、高野裕治客員研究員（人間環境大学教授）と共同して、ラットのリーチング行動を用いた、齧歯類の社会性検討のための新規行動指標を確立し、国際誌にも発表した。これは、リーチング行動を学習した個体同士であれば、以下2つの社会的な行動が生じる指標である。1つは、リーチング行動を行っている他個体へ注視する行動が生じる。リーチング行動を学習している観察個体は、他個体が行っているリーチング行動に対して接近行動だけでなく、注視行動が頻繁に生じることを示した。もう一つは、他個体から注視されていると、リーチング行動の速度が促進されることである。すなわち、リーチング行動を実施している個体は、他個体から見られていることを知覚することが可能であることが示された。この現象は、リーチング行動を学習した個体同士でしかみられず、未学習個体では他個体への注視行動が頻繁には生じず、速度の促進の強度も減少する。加えて、リーチング行動をする個体がケージメイトか否かも影響しており、未学習個体でかつ他個体がケージメイトではない場合は、ほとんどその行動を注視しなかった。この新規行動指標を、胎児期にバルプロ酸を投与されたマウスを対象に検討したところ、バルプロ酸モデルでは、リーチングを行っている他個体へ注視することがなく、また他個体から注視されても、リーチング行動の促進が生じなかった。興味深いことに、バルプロ酸モデル動物がリーチング行動を行っていても、健常個体は注視する頻度が減少していることがみられた。今後、炎症モデルでも同様の結果がみられるかどうかの検討を展開していく。現在は、バルプロ酸モデルを対象にこの行動指標を用いた治療法開発研究を遂行している（科研費：請園、開発費：岡田）。

4) 神経発達症の中間表現型と候補となる認知基盤の認知神経科学研究

江頭優佳リサーチフェローは漢字認識時の脳活動を調べ、その成果を国際誌に投稿中である。限局性学習症については、言語の差異があることから本邦におけるエビデンス構築が求められるが、いまなおそのエビデンスは不足している。本邦での読み書き障害は漢字学習開始後に症状が顕在化することが多いため漢字認知時の脳機能不全が認められる可能性がある。LDでは従来から報告があった紡錘状回（漢字の形態認知を担う）のみならず、より低次の視覚処理を行う後頭極での機能不全がある可能性が示された。従って漢字認知以前の視知覚の弱さがLDの症状をもたらす要因の一つである可能性がある。一方でLDの症状を呈する背景にはASDやADHDといった他の発達障害の併存がある場合が多く、今後は背景因子を考慮した症状個別の検討が必要である。

更に、発達障害においては社会的情報に対する認知のゆがみを持つことが多く報告されていることに関連し、林小百合リサーチフェローは他者動作から社会的情報を取得する神経心理学的メカニズムを、バイオリジカルモーションを用いて検討している。これまでに、特定の脳波成分が他者情報（動作者の性別・動作の美しさ）によって変化することを明らかにし、*Neuropsychologia* 誌に掲載された。

5) 養育困難を抱える児童のペアレンティング・スキル向上を目指した介入の有効性検証

神経発達症の児童は、親の養育困難と結びつきがちであり、親の不安や抑うつ、虐待リスクとも関連する。ペアレンティング・スキル向上と子どもの行動上の問題の減少に親子相互交流療法（PCIT）の有効性が示されているが、その一方で、中断率が高く、十分に効果が出るまで治療が継続できない、などの課題も存在する。高田美希科研費研究補助員は岡田部長と共同して、システムティックレビューを実施し、中断に関与する要因を特定した。この成果は、日本児童青年精神医学

会で発表するとともに、国際誌に投稿準備中である。

また、COVID-19 感染拡大下で、発達障害の子どもや養育者のメンタルヘルス悪化が懸念されたことから、岡田部長と上田研究生は、2020 年 5 月の緊急事態宣言発令中に日本心身障害児協会島田療育センターはちおうじ小沢浩所長（当部、客員研究員）と共同し、発達障害がある子どもとその養育者を対象にして、生活の質に関連する精神症状、心理社会的状況、日常生活状況との関連を調べ、その成果を国際誌に発表した。さらに 1 年後のフォローアップを実施し、令和 3 年度はその成果を Scientific Reports 誌に掲載した。

6) 難治性トゥレット症に対する脳深部刺激療法の有効性・安全性とレジストリ構築

トゥレット症の一部は、成人期にも症状が強く残存し、身体損傷を伴ったり、社会生活が著しく困難な病状を呈することがある。脳深部刺激療法は、そのような患者の有効な治療となり得てはいるものの、その有効性と安全性の検証が不十分であり、本邦におけるレジストリ構築が望まれる。岡田部長は、NCNP 病院脳神経外科の岩崎真樹部長（兼 手術・材料部長）、木村唯子医師のレジストリ構築を目指す研究（開発費、分担：岩崎部長）に参加している。

7) 自閉スペクトラム症の中核症状に対するオキシトシンの有効性・安全性の検討

自閉スペクトラム症の中核症状に有効な薬物療法は確立していない。オキシトシンは、対人関係障害を改善する治療薬候補であるが、その有効性、安全性は未確立であり、特に耐性の出現が問題となっていた。岡田部長は、浜松医科大学の山末英典教授がリーダーを務める AMED 融合脳の開発分担者として参加した。その結果、オキシトシン新規製剤が自閉スペクトラム症の対人関係障害の改善に有効であることが示され、その成果を Brain 誌に公表した。また、自閉スペクトラム症発症やオキシトシン反応性に関連するゲノムのコピー数変異については久島 周名古屋大学講師（当部、客員研究員）らと進めており、その成果を Psychiatry and Clinical Neurosciences 誌に公表した。

臨床試験では、知的能力障害のある自閉スペクトラム症についての知見は含まれていない。そのため、知的能力障害のある自閉スペクトラム症への介入効果を検証した會田千重国立病院機構肥前精神医療センター療育指導科長（当部、客員研究員）と共同して検討を進めている。

8) 注意欠如・多動症の薬物療法の継続・中止に関するガイドライン作成

注意欠如・多動症の薬物療法の有効性・安全性は確認されているものの、その継続・中止の基準は明確でない。岡田は、厚生労働科学研究（主任研究者：三島和夫秋田大学教授）の分担として、客員研究員である辻井農亜近畿大学准教授、宇佐美雅英国際医療研究センター国府台病院児童精神科科長らとともに実施したメタ解析をもとにデシジョン・エイドを作成し、患者の意思決定に資する資料作成を行った。令和 3 年度は、その成果を国際誌に投稿する準備を進めた。

9) 22q11.2 欠失症候群の精神障害発生に関するフォローアップ研究

22q11.2 欠失症候群は、先天性心疾患、精神発達遅延、特徴的顔貌を主徴とする症候群で、胸腺低形成・無形成による免疫低下、口蓋裂・軟口蓋閉鎖不全、鼻声、低カルシウム血症などを合併することの多い遺伝子疾患であるが、成人期までに統合失調症などの精神疾患を高率に発症することが知られているが、その実態は明確でない。岡田部長は、名古屋大学（尾崎紀夫教授）、愛知学院（夏目長門教授、早川統子准教授）の構築するコホートにおいて、山内彩心理士（現、当部研究生）、久島 周名古屋大学講師（当部、客員研究員）とともに経時的評価を実施している。その成果は日本児童青年精神医学会で発表した。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

当研究部では、部のホームページに神経発達症に関する支援情報を含めた医学的情報を掲示したほか、講演、書籍などを通じて、市民向けの情報発信に努めた。また、NCNP メディア塾において、注意欠如・多動症（ADHD）であることは何を意味するか：診断と治療の課題と題する講演を行い、マスメディアへの正確な情報の普及に努めた。

(2) 専門教育面における貢献

岡田部長は、奈良女子大学において心理職を目指す博士課程大学院生、高知県立大学において精神科専門看護師を目指す博士課程大学院生の教育に関与するほか、国立リハビリテーションセンターの研修において、発達障害の専門的支援を目指す児童指導員、保健師、看護師、臨床心理士などへの教育を実施した。また、岡田は日本精神神経学会専門医のレポート評価並びに面接試験を担当し、専門医教育に貢献した。

また、魚野室長は同志社大学、武庫川女子大学、石井室長は東京大学医学部、江頭リサーチフェローは九州大学、立教大学、請園正敏リサーチフェローは神奈川大学、神奈川県立保健福祉大学において、心理職の大学教育に関与し、魚野室長は、京都大学における文部科学省事業（神経発達症の介入を専門とする高度医療人材養成プログラム）にも参画している。

(3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援法に示されている専門家養成のため、全国で開始された、かかりつけ医等発達障害対応力向上研修の基盤研修として、発達障害支援者研修パート1（令和3年6月30日～7月1日、41名参加）ならびにパート3（令和3年11月25日～26日、52名参加）を実施した。COVID-19の感染拡大下にあることから、オンライン実施とした。運営には、部の全員が参加し、岡田部長は「かかりつけ医研修の実際」の講演を行った。また、石井と岡田は、医療におけるペアレントトレーニング実施者養成研修を2回にわたりオンライン実施した。

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

岡田部長が、環境省エコチル調査企画評価委員会委員国立障害者リハビリテーションセンター情報分析会議委員、国における発達障害関連研修のあり方の検討に関する作業部会委員、国立重度知的障害者総合施設のぞみの園「高齢期発達障害者支援における関係機関の役割と地域連携の在り方に関する調査」検討委員会委員、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員、文部科学省生徒指導提要の改訂に関する協力者会議委員、文部科学省多様な背景を持つ児童生徒への生徒指導に関するワーキンググループ委員として参加し、国あるいは関連機関の施策への協力を行った。また、小平市教育委員会いじめ問題対策委員会委員、小平市特別支援教育専門家委員会委員、江戸川区児童相談所協力医として、知的・発達障害の支援情報の発信、特別支援教育の研究・実践、小平市の特別支援教育に関する貢献活動を行っている。

(5) センター内における臨床的活動

岡田部長が2021年5月よりNCNP小児外来において発達障害外来を開設し、年度末までに63名の新患、また、これらの患者に対する再診療を提供した。

(6) その他

なし

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Ukezono M, Takano Y: Dataset of reaching behavior for reward in social situations in mice. Data in Brief 35(2021)106773, 2021.4. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.dib.2021.106773>
- 2) Sato M, Okada T, Morikawa M, Nakamura Y, Yamauchi A, Ando M, Ozaki N: Validation and factor analysis of the parental bonding instrument in Japanese pregnant Women. Scientific Reports 11: 13759(2021), 2021.7.2. DOI: <https://doi.org/10.1038/s41598-021-93146-3>
- 3) Ueda R, Kaga Y, Kita Y, Nakagawa E, Okada T, Inagaki M: Clinical profile of reading ability and reading and writing achievement of children with borderline full-scale intellectual quotient: A prospective study. Bio Med Central Pediatrics 21: 389(2021), 2021.9.7. DOI: <https://doi.org/10.1186/s12887-021-02865-z>
- 4) Sudo R, Nakashima S F, Ukezono M, Takano Y, Lauwereyns J: The role of temperature in moral decision-making: Limited reproducibility. Frontiers in Psychology 12: 681527, 2021.9.28. DOI: <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.681527>
- 5) Ueda R, Okada T, Kita Y, Ozawa Y, Inoue H, Shioda M, Kono Y, Kono C, Nakamura Y, Amemiya K, Ito A, Sugiura N, Matsuoka Y, Kaiga C, Kubota M, Ozawa H: Psychological status associated with low quality of life in school-age children with neurodevelopmental disorders during COVID-19 stay-at-home period. Frontiers in Psychiatry 12(2021)676493, 2021.10.18. DOI: <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.676493>
- 6) Uono S, Sato W, Sawada R, Kawakami S, Yoshimura S, Toichi M: Schizotypy is associated with difficulties detecting emotional facial expressions. Royal Society Open Science 8(2021)211322, 2021.11.24 DOI: <https://royalsocietypublishing.org/doi/10.1098/rsos.211322>
- 7) Kato H, Kushima I, Yoshimi A, Ishizuka K, Kimura H, Aleksic B, Takahashi N, Okada T, Ozaki N: Autism spectrum disorder comorbid with obsessive compulsive disorder and eating disorder in a woman with NBEA deletion. Psychiatry and Clinical Neurosciences 34716974(2021), 2021.10.30. DOI: 10.1111/pcn.13309
- 8) Aoki A, Niimura M, Kato T, Takehara K, Iida J, Okada T, Kurokami T, Nishimaki K, Ogura K, Okuno M, Koeda T, Igarashi T: Trajectories of healthcare utilization among children and adolescents with autism spectrum disorder and/or attention-deficit/hyperactivity disorder in Japan. Frontiers in Psychiatry Original Research article, 2022.1.20. DOI: <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.812347>
- 9) Uono S, Sato W, Kochiyama T, Yoshimura S, Sawada R, Kubota Y, Sakihama M, Toichi M: The structural neural correlates of atypical facial expression recognition in autism spectrum disorder. Brain Imaging and Behavior 2022.1.20. DOI: 10.1007/s11682-021-00626-1
- 10) Yamasue H, Kojima M, Kuwabara H, Kuroda M, Matsumoto K, Kanai C, Inada N, Owada K, Ochi K, Ono N, Benner S, Wakuda T, Kamenno Y, Inoue J, Harada T, Tsuchiya K, Umemura K, Yamauchi A, Ogawa N, Kushima I, Ozaki N, Suyama S, Saito T, Uemura Y, Hamada J, Kano Y, Honda N, Kikuchi S, Seto M, Tomita H, Miyoshi N, Matsumoto M, Kawaguchi Y, Kanai K, Ikeda M, Nakamura I, Isomura S, Hirano Y, Onitsuka T, Kosaka H, Okada T: Effect of a novel nasal oxytocin spray with enhanced bioavailability on autism: A randomised trial. Brain 1-10(2022), 2022.1.24. DOI: <https://doi.org/10.1093/brain/awab291>
- 11) Nakamura Y, Takahashi N, Yamauchi A, Morikawa M, Okada T, Ozaki N: Perceived social support partially mediates the impact of temperament and character on postpartum

- depression. *Frontiers in Psychiatry* 2022.1.24. DOI: <https://doi.org/10.3389/fpsyt.2021.816342>
- 12) Wang C, Horigane S, Wakamori M, Ueda S, Kawabata T, Fujii H, Kushima I, Kimura H, Ishizuka K, Nakamura Y, Iwayama Y, Ikeda M, Iwata N, Okada T, Aleksic B, Mori D, Yoshida T, Bito H, Yoshikawa T, Takemoto-Kimura S, Ozaki N: Identification of ultra-rare disruptive variants in voltage-gated calcium channel-encoding genes in Japanese samples of schizophrenia and autism spectrum disorder. *Translational Psychiatry* 12: 84(2022), 2022.2.26. DOI: <https://doi.org/10.1038/s41398-022-01851-y>
 - 13) Ueda R, Okada T, Kita Y, Ukezono M, Takada M, Ozawa Y, Inoue H, Shioda M, Kono Y, Kono C, Nakamura Y, Amemiya K, Ito A, Sugiura N, Matsuoka Y, Kaiga C, Shiraki Y, Kubota M, Ozawa H: Quality of life of children with neurodevelopmental disorders and their parents during the COVID-19 pandemic: A one-year follow-up study. *Scientific Reports* 12: 4298(2022), 2022.3.12. DOI: <https://doi.org/10.1038/s41598-022-08273-2>
 - 14) Hayashi S, Nishimura Y, Ikeda Y, Nakashima H, Egashira Y, Ukezono M, Uono S, Okada T, Higuchi S: Beauty in everyday motion: electrophysiological correlates of aesthetic preference for human walking. *Neuropsychologia in press*

(2) 総説

- 1) 岡田 俊: 成人期 ADHD の薬物療法. *臨床精神医学* 50(59): 423-428, 2021.5.28.
- 2) 岡田 俊: 神経発達症における強迫. *精神医学* 63(6): 891-896, 2021.6.15.
- 3) 岡田 俊: 神経発達症の維持治療: 実践的な続け方とやめ方. *臨床精神薬理* 24(7): 731-736, 2021.7.10.
- 4) 岡田 俊: 児童青年領域におけるレジストリの構築 (指定発言). *児童青年精神医学とその近接領域* 62(4): 592-593, 2021.8.
- 5) 岡田 俊: 注意欠如・多動症治療薬の出口戦略. *臨床精神薬理* 24(9): 961-965, 2021.9.10.
- 6) 岡田 俊: COVID-19 が児童・青年のメンタルヘルスへ与える影響. *臨床精神薬理* 24(10): 1011-1016, 2021.10.10.
- 7) 岡田 俊: 子どもへの薬物療法を実施するうえで踏まえるべき臨床精神薬理学. *精神科治療学* 36(10): 1121-1125, 2021.10.19.
- 8) 岡田 俊: ADHD の長期的展望. *臨床精神医学* 50(11): 1245-1249, 2021.11.28.
- 9) 岡田 俊: 養育者のメンタルヘルスと子どもの心理的・情緒的発達. *精神神経学雑誌* 123(11): 740-745, 2021.11.25.
- 10) 岡田 俊: ADHD の小児期から成人期をめぐって—診断の位置づけ, うつ病等の併存障害の意味を考える—. *東京こころのクリニック* 20: 53-65, 2021.11.25.
- 11) 岡田 俊: ADHD の診断と診断ツール. *週刊医学のあゆみ* 280(2): 138-140, 2022.1.8.
- 12) 岡田 俊: 精神疾患の背景にある神経発達症についての今日的な理解. *精神科治療学* 37(1): 5-9, 2022.1.19.
- 13) 岡田 俊: 早期発症統合失調症の薬物療法. *臨床精神薬理* 25(3): 241-244, 2022.3.10.
- 14) 魚野翔太, 佐藤 弥: 自閉スペクトラム症の表情認知の障害と表情表出の特異性. *脳神経内科印刷中*.
- 15) 江頭優佳, 岡田 俊: ADHD における機能的結合. *Clinical Neuroscience*, 40, 2022. 印刷中.

(3) 著書

- 1) 岡田 俊: 自閉スペクトラム症をめぐる仮説とその検証. 大森哲郎 編: 精神医学の基盤 5 精神医学における仮説の形成と検証. 学樹書院, 東京, pp176-183, 2021.4.20.

- 2) 岡田 俊: 自閉スペクトラム症. 水口 雅, 山形崇倫 編: クリニカルガイド小児科 専門医の診断・治療. 南山堂, 東京, pp887-893, 2021.5.1.
- 3) 上田理瑩, 岡田 俊: コロナ禍における発達障害児の親子の QOL. 日本発達障害連盟 編: 発達障害白書 2022 年版. 明石書店, 東京, pp52-53, 2021.9.15.
- 4) 岡田 俊: 発達障害研究の最前線. 発達障害連盟 編: 発達障害白書 2022 年版. 明石書店, 東京, pp36-37, 2021.9.15.
- 5) 岡田 俊: 人口動態と子ども. 社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 愛育研究所 編: 日本子ども資料年鑑. KTC 中央出版, 東京, pp35-68, 2022.2.1.
- 6) 岡田 俊: 自閉スペクトラム症—その本態は何か, 当事者の支えとして何が必要か. 青木省三, 福田正人 編: 子どもの心と脳—発達のつまずきを支援する. 日本評論社, 東京, pp103-111, 2022.3.
- 7) 江頭優佳: 発育. 生理人類学認定委員会 編: 新編 生理人類学入門. 国際文献社, 東京, pp43-46, 2022.2.

(4) 研究報告書

- 1) 五十嵐隆 (研究分担者), 奥野正景, 西牧謙吾, 小倉加恵子, 小枝達也, 竹原健二, 加藤承彦, 青木藍, 新村美知, 黒神経彦, 岡田 俊, 飯田順三: 令和 3 年度厚生労働科学研究費補助金児童・思春期精神疾患の診療実態把握と連携推進のための研究 (20GC1019) 分担研究報告書「子どもの心の診療実態の把握と連携に関するカルテ調査」
- 2) 独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園: 令和 3 年度障害者総合福祉推進事業 高齢期発達障害者支援における関係機関の役割と地域連携の在り方に関する調査 (検討委員会委員として岡田 俊が参加)

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 岡田 俊: 神経発達症のある子の成長を見守る—子ども・養育者・医療関係者のコミュニケーションから—, ファーマスタイル 第 14 号, pp12-15, 2021.11.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 岡田 俊: ADHD と不安・気分障害. 共催シンポジウム 2 小児期 ADHD と併存疾患—その診断法と治療法— 第 63 回日本小児神経学会学術集会, オンライン, 2021.5.28.
- 2) 岡田 俊, 上田理瑩: COVID-19 感染拡大下における発達障害のある子の不安・抑うつと育児ストレス. MD 自主企画シンポジウム 3 抑うつ発達の理解と抑うつを抱える養育者の支援を考える 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会, オンライン, 2021.7.9.
- 3) 岡田 俊: 薬物療法は ADHD 当事者のパーソナルリカバリーに寄与しえるか. シンポジウム 1 パーソナルリカバリーに向けて薬物療法にできること 第 31 回日本臨床精神神経薬理学会, オンライン, 2021.10.7.
- 4) 岡田 俊: 知的障害のある子どもの行動, 情緒的問題に対する薬物療法. シンポジウム 16 エビデンス通りにいかない子どもの状態像に薬物療法でどう立ち向かうのか 第 31 回日本臨床精神神経薬理学会, オンライン, 2021.10.8.
- 5) 岡田 俊: 神経発達症と併存症. ランチョンセミナー 2 第 126 回日本小児精神神経学会, オンライン, 2021.10.17.
- 6) 江頭優佳: 神経発達症と生理人類学. 第 2 回日本生理人類学会フロンティアミーティング FM2

- 「時代を超えて常識を変える一流科学者×若手研究者 交流促進シンポジウム」, オンライン, 2021.10.29.
- 7) 岡田 俊: 自閉スペクトラム症と不安, こだわりー摂食障害とのつながり. 教育講演 1 第 24 回日本摂食障害学会学術集会, オンライン, 2021.10.30.
 - 8) 岡田 俊: COVID-19 感染拡大下の子どもと養育者のメンタルヘルス. シンポジウム 5 COVID-19 感染拡大下の子どもと養育者のメンタルヘルス 第 62 回日本児童青年精神医学会総会, オンライン, 2021.11.13.
 - 9) 岡田 俊: 子どもの睡眠とその障害. 薬事委員会セミナー 子どもの睡眠障害 第 62 回日本児童青年精神医学会総会, オンライン, 2021.11.13.
 - 10) 岡田 俊: ADHD の診断と治療をめぐる課題: 現状と近年の知見を踏まえて. 共催セミナー2 第 62 回日本児童青年精神医学会総会, オンライン, 2021.11.13.
 - 11) 石井礼花: 思春期の理論～思春期の特性を学ぼう. 日本小児科医会 第 20 回思春期の臨床講演会, 2021.11.14.
 - 12) 岡田 俊: 大人の ADHD と産業精神保健. 共催セミナー2 第 28 回日本産業精神保健学会, オンライン, 2021.11.20.
 - 13) 岡田 俊: ADHD と大人の精神保健. ランチョンセミナー2 日本 ADHD 学会第 13 回総会, オンライン, 2022.3.6.
 - 14) 岡田 俊: 成人期 ADHD の心理教育と支持的精神療法を再考する. シンポジウム 2【治療(薬物療法, 非薬物療法)】日本 ADHD 学会第 13 回総会, オンライン, 2022.3.6.
 - 15) 林 小百合: 他者の顔表情で変化する行動制御, 及び, 他者の動作を美しく感じる脳活動. シンポジウム「他者認識へのアプローチ—哲学・認知心理学・神経心理学の観点から—」国立大学法人千葉大学全方位イノベーション創発博士人材養成プロジェクト, オンライン, 2022.3.18.

(2) 一般演題

- 1) Okada T, Uno Y: Intranasal oxytocin reduces facial affect misrecognition between disgusted angry faces in adults with autism spectrum disorders. Neuroscience 2021, on line, 2021.11.9.
- 2) Hayashi S, Nishimura Y, Ikeda Y, Egashira Y, Ukezono M, Uono S, Okada T, Higuchi S: Investigation of effects of the aesthetic preference on the perception of human walking: a preliminary study using event-related potentials. Neuroscience 2021, on line, 2021.11.9.
- 3) Egashira Y, Hayashi S, Ukezono M, Uono S, Kaga Y, Kitamura Y, Kita Y, Yamashita Y, Okada T, Inagaki M: A closer look at impairments of time perception function in individuals with attention-deficit/hyperactivity disorder. Neuroscience 2021, on line, 2021.11.9.
- 4) Ueda R, Iwasaki M, Kita Y, Takeichi H, Saito T, Nakagawa E, Sugai K, Okada T, Sasaki M: Improvement of brain function after surgery in infants with posterior quadrant cortical dysplasia. AES 2021 ANNUAL MEETING, on line, 2021.12.2.
- 5) 林 小百合, 江頭優佳, 魚野翔太, 岡田 俊: 社会的報酬を用いたフィードバックの確実性が行動抑制に与える影響. 日本心理学会第 85 回大会, オンライン, 2021.9.1-8.
- 6) 稲垣貴彦, 上野千穂, 岡田 俊, 小野善郎: 本邦の医療状況に即した子どものうつ病臨床の最適化への提言. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.19-21.
- 7) 石井礼花, 新谷美穂子, 廣瀬愛希子, 草間千絵, 鈴木茜音, 金 里沙, 中島直美, 金生由紀子: ADHD 児とその親への社会サポートネットワークへの COVID-19 感染拡大の影響. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, オンライン, 2021.9.21.
- 8) 江頭優佳, 林 小百合, 魚野翔太, 高田美希, 請園正敏, 岡田 俊: 複数の時間知覚課題を用いた注意欠如・多動症の時間知覚機能の検討. 日本生理人類学会第 82 回大会, オンライン, 2021.10.31.

- 9) 山内 彩, 岡田 俊, 尾崎紀夫: 22q11.2 欠失症候群患者の認知発達・行動に関する臨床像と支援ニーズの検討ー前方視的な追跡調査からー. 第 62 回日本児童青年精神医学会総会, オンライン, 2021.11.13.
- 10) 高田美希, 細金奈奈, 木原望美, 小平雅基, 岡田 俊: 親子総合交流療法 (PCIT) の治療中断に関するエビデンスレビュー. 第 62 回日本児童青年精神医学会総会, オンライン, 2021.11.13.
- 11) 林 小百合, 江頭優佳, 魚野翔太, 高田美希, 請園正敏, 岡田 俊: 注意欠如・多動症の成人では実行機能に対する社会的報酬の効果が減弱している. 日本 ADHD 学会第 13 回総会, オンライン, 2022.3.5.

(3) 研究報告会

- 1) 石井礼花: ADHD または慢性疾患を持つ子どもへの成育環境の影響を測定するマルチモーダル MRI 神経ネットワーク指標の開発ーChild Attachment Interview による愛着分類を用いて. AMED 成育疾患克服等総合研究事業ーBIRTHDAY 令和 3 年度班会議, オンライン, 2021.10.27.
- 2) 岡田 俊: 発達障害の認知神経科学的アプローチに基づく病態解明. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 2-7「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」令和 3 年度班会議, オンライン, 2021.12.6.
- 3) 石井礼花: ペアレントトレーニングの効果測定のための日本語版児童愛着面接/親子社会サポート評価面接/MRI 信号評価の実用化と実施者養成研修カリキュラムの開発ーオンライン提供を含めて. 厚生労働省令和 4 年度障害者政策総合研究事業 (精神障害分野) 令和 3 年度事後評価ヒアリング, オンライン, 2022.02.18.
- 4) 岡田 俊: 【報告 4】知的・発達障害研究部 座長 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 令和 3 年度研究報告会 (第 33 回), オンライン, 2022.3.28.
- 5) 石井礼花, 鈴木茜音, 眞上花帆, 金生由紀子, 岡田 俊: 成育環境が注意欠如・多動症児の愛着に関連する神経基盤に与える影響. 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 令和 3 年度研究報告会 (第 33 回), オンライン, 2022.3.28.
- 6) 請園正敏, 岡田 俊: バルプロ酸自閉症モデルマウスにおける新規社会性の検討. 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 令和 3 年度研究報告会 (第 33 回), オンライン, 2022.3.28.

(4) その他

- 1) 岡田 俊: オーガナイザー MD 自主企画シンポジウム 3 抑うつ発達の理解と抑うつを抱える養育者の支援を考える 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会, オンライン, 2021.7.9.
- 2) 岡田 俊: オーガナイザー シンポジウム 7 強度行動障害を伴う知的・発達障害児 (者) への薬物療法 第 31 回日本臨床精神神経薬理学会, オンライン, 2021.10.7.
- 3) 岡田 俊: オーガナイザー シンポジウム 16 エビデンス通りにいかない子どもの状態像に薬物療法でどう立ち向かうのか 第 31 回日本臨床精神神経薬理学会, オンライン, 2021.10.8.
- 4) 江頭優佳, 湯田恵美: 企画 第 2 回日本生理人類学会フロンティアミーティング FM2「時代を超えて常識を変える: 一流科学者×若手研究者 交流促進シンポジウム」オンライン, 2021-10.29.
- 5) 江頭優佳: 進行 教育講演, 特別講演 日本生理人類学会第 82 回大会, オンライン, 2021.10.30-31.

C. 講演

- 1) 岡田 俊: 注意欠如・多動症 (ADHD) であることは何を意味するか: 診断と治療の課題. 第

7回 NCNP メディア塾, オンライン, 2021.8.20.

- 2) 岡田 俊:「発達障害の理解と支援」東京都府中市立府中第一小学校, 2021.9.15
- 3) 岡田 俊:発達障害のある子の育ちの理解と育みの支援. 明治安田こころの財団専門講座 8, 東京(オンライン) 2021.12.4.
- 4) 岡田 俊:自閉スペクトラム症の心の世界. 社団法人神奈川学習障害教育研究協会 オンライン講座. 2022.2.25.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 岡田 俊:日本精神神経学会 専門医, 指導医, 英文誌 Field Editor, 小児精神医療委員会副委員長, 第 118 回総会プログラム委員
- 2) 岡田 俊:日本児童青年精神医学会理事, 事務局運営委員会委員長, 児童青年精神医学用語集改訂委員会委員長, 薬事委員会担当理事, ICD-11 に関する委員会委員, 第 62 回総会プログラム委員
- 3) 岡田 俊:日本 ADHD 学会理事, 第 14 回総会総会長
- 4) 岡田 俊:日本臨床精神神経薬理学会 専門医, 指導医, 第 31 回総会プログラム委員
- 5) 岡田 俊:日本神経精神薬理学会 児童思春期神経精神薬理タスクフォース委員
- 6) 岡田 俊:日本うつ病学会 双極性障害委員会フェロー
- 7) 石井礼花:日本小児精神神経学会 認定医委員会委員
- 8) 魚野翔太:日本心理学会(代議員)
- 9) 江頭優佳:一般社団法人日本生理人類学会(代議員, 若手の会顧問, 総務幹事)
- 10) 江頭優佳:日本生理人類学会第 82 回大会実行委員
- 11) 林小百合:一般社団法人日本生理人類学会(代議員, 若手の会副会長)

(3) 座長

- 1) 岡田 俊:MD 自主企画シンポジウム 3 抑うつの発達の理解と抑うつを抱える養育者の支援を考える 第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会, オンライン, 2021.7.9.
- 2) 岡田 俊, 小平雅基:シンポジウム 73 アタッチメントとトラウマの混在病理にどう介入するか? 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.9.21.
- 3) 岡田 俊, 曾田千重:シンポジウム 7 強度行動障害を伴う知的・発達障害児(者)への薬物療法 第 31 回日本臨床精神神経薬理学会, オンライン, 2021.10.7.
- 4) 岡田 俊, 梶屋二郎:シンポジウム 16 エビデンス通りにいかない子どもの状態像に薬物療法でどう立ち向かうのか 第 31 回日本臨床精神神経薬理学会, オンライン, 2021.10.8.
- 5) 岡田 俊:セッション 2 第 28 回トウレット研究会, オンライン, 2021.11.21.
- 6) 江頭優佳, 山本征孝:口演セッション 1 日本生理人類学会第 82 回大会, オンライン, 2021.10.30.
- 7) 高雄元晴, 江頭優佳:口演セッション 3 日本生理人類学会第 82 回大会, オンライン, 2021.10.31.
- 8) 岡田 俊:教育講演 2 日本 ADHD 学会第 13 回総会, オンライン, 2022.3.5.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 岡田 俊:日本精神神経学会 Psychiatry and Clinical Neurosciences Field Editor

- 2) 岡田 俊：臨床精神薬理編集委員
- 3) 岡田 俊：Depression Journal 編集委員
- 4) 江頭優佳：日本生理人類学会誌編集委員会（編集委員）
- 5) 魚野翔太：Frontiers in Psychology: Emotion Science Section, Associate Editor.

E. 教育

- 1) 岡田 俊：千葉大学大学院医学研究科精神神経科学客員教授
- 2) 岡田 俊：奈良女子大学非常勤講師
- 3) 岡田 俊：高知県立大学非常勤講師
- 4) 石井礼花：東京大学医学部小児科学非常勤講師
- 5) 江頭優佳：九州大学大学院統合新領域学府「感覚生理心理学」講義
- 6) 江頭優佳：立教大学現代心理学部「神経心理学」講義，秋学期
- 7) 請園正敏：神奈川大学人間科学部人間学科「心理実験実習」講義
- 8) 請園正敏：「マニファクチャリング データサイエンティスト養成講座」「メディカル データサイエンティスト養成講座」株式会社データサイエンス研究所
- 9) 請園正敏：経済産業省 第四次産業革命スキル習得講座 【分野別データサイエンティスト養成講座】講義
- 10) 岡田 俊：『リハビリテーション概論：発達障害』国立障害者リハビリテーションセンター学院児童指導員科 CI 授業，オンライン，2021.7.5.
- 11) 岡田 俊：「精神疾患とその治療」小児・児童精神医学 奈良女子大学講義，オンライン，2021.7.14.
- 12) 岡田 俊：「精神科診断治療学 1」高知県立大学集中講義，オンライン，2022. 2.7.
- 13) 請園正敏：神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 実践教育部「情報科学」講義，2021.7.24. -7.31.
- 14) 魚野翔太：臨床研究方法論．文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム「発達症への介入による国民的健康課題の解決」講義，オンライン，2021.8.1.
- 15) 石井礼花：思春期の医療 こころと行動．東京大学医学部小児科学非常勤講師「小児科学」講義，オンライン，2021.9.21.
- 16) 魚野翔太：認知機能評価実習．文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム「発達症への介入による国民的健康課題の解決」講義，オンライン，2021.10.3.
- 17) 魚野翔太：ASD の神経生理とエビデンス．文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム「発達症への介入による国民的健康課題の解決」講義，オンライン，2021.11.21.
- 18) 魚野翔太：自閉スペクトラム症の社会認知機能．同志社大学「赤ちゃん学応用」講義，オンライン，2021.12.20.
- 19) 魚野翔太：特別支援教育の可能性を探る－発達障害児の認知特性に着目して．武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻セミナー講義，2022.3.12.

F. 研修

(1) 研修企画

- 1) 岡田 俊：令和 3 年度 精神保健に関する技術研修課程，第 2 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅠ．オンライン，2021.6.30-7.1.
- 2) 岡田 俊：令和 3 年度 精神保健に関する技術研修課程，第 2 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅢ．オンライン，2021.11.25.-26.
- 3) 石井礼花：第 1 回医療機関における注意欠如・多動症（ADHD）児への親へのペアレントトレーニング実施者養成研修．オンライン，2021.12.14.
- 4) 石井礼花：第 2 回医療機関における注意欠如・多動症（ADHD）児への親へのペアレントトレーニング実施者養成研修．オンライン，2022.01.18

(2) 研修会講師

- 1) 岡田 俊, 石井礼花: かかりつけ医研修の実際(講義, 実習). 令和3年度 精神保健に関する技術研修課程, 第2回発達障害者支援研修パートⅢ オンライン, 2021.11.26.
- 2) 岡田 俊: ADHD の概要. 第1回医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児への親へのペアレントトレーニング実施者養成研修. オンライン, 2021.12.14.
- 3) 石井礼花: ADHD のペアレントトレーニング. 第1回医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児への親へのペアレントトレーニング実施者養成. オンライン, 2021.12.14.
- 4) 岡田 俊: ADHD の概要. 第2回医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児への親へのペアレントトレーニング実施者養成研修. オンライン, 2022.1.18
- 5) 石井礼花: ADHD のペアレントトレーニング. 第2回医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児への親へのペアレントトレーニング実施者養成. オンライン, 2022.1.18

G. 取材・報道

- 1) 岡田 俊: コロナ下の「心の不調」, 不安を抱える子 親も悩む. 日本経済新聞朝刊 pp015, 2021.4.19. <https://www.nikkei.com/article/DGXZQODK097A90Z00C21A4000000/>
- 2) 野田正人, 笹森洋樹, 岡田 俊: 子供の心身や家庭要因に注目 生徒指導提要会議が WG 設置. 教育新聞, 2021.9.17. https://www.kyobun.co.jp/news/20210916_05
- 3) 岡田 俊: 支援困難な家庭への対応 生徒指導提要の見直しで議論. 教育新聞, 2021.10.8. https://www.kyobun.co.jp/news/20211008_04/
- 4) 岡田 俊: 逆境に負けない! 強い女たち. テレビ東京, 家、ついて行っていいですか?, 医学監修, 2021.10.27.
- 5) 岡田 俊: 【生徒指導提要】多様な児童生徒への対応 WG が原案. 教育新聞, 2021.11.5. https://www.kyobun.co.jp/news/211105_05/
- 6) 岡田 俊, 上田理誉: 新型コロナウイルス感染症流行禍(コロナ禍)が妊産婦や子どものメンタルヘルスに及ぼす影響. DEPRESSION JOURNAL, 9(3): pp30-31, 2021.12.1.

H. その他の活動

- 1) 岡田 俊: 環境省エコチル調査企画評価委員会委員
- 2) 岡田 俊: 国立障害者リハビリテーションセンター情報分析会議委員
- 3) 岡田 俊: 国における発達障害関連研修のあり方の検討に関する作業部会委員
- 4) 岡田 俊: 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園「高齢期発達障害者支援における関係機関の役割と地域連携の在り方に関する調査」検討委員会委員
- 5) 岡田 俊: 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員
- 6) 岡田 俊: 文部科学省生徒指導提要の改訂に関する協力者会議委員
- 7) 岡田 俊: 文部科学省多様な背景を持つ児童生徒への生徒指導に関するワーキンググループ委員
- 8) 岡田 俊: 小平市教育委員会いじめ問題対策委員会委員
- 9) 岡田 俊: 小平市特別支援教育専門家委員会委員
- 10) 岡田 俊: 東京地方裁判所精神保健審判医
- 11) 岡田 俊: 江戸川区児童相談所協力医師
- 12) 岡田 俊: 特別支援学校精神科学校医
- 13) 岡田 俊: 面接試験面接委員・判定審査委員. 第12回精神科専門医認定試験 面接試験, オンライン, 2021.4.4.
- 14) 岡田 俊: 面接試験面接委員・判定審査委員. 第13回精神科専門医認定試験 面接試験, オンライン, 2021.11.28.

I. 受賞

- 1) 岡田 俊：第 18 回日本うつ病学会総会/第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会 2021 年
下田光造賞：対象論文：Nakamura Y, Okada T, Morikawa M, Yamauchi A, Sato M, Ando M,
Ozaki N: Perinatal depression and anxiety of primipara is higher than that of multipara in
Japanese women. Scientific Reports 10:17060 (2020), 2020.10.13. DOI:
<https://doi.org/10.1038/s41598-020-74088-8>
- 2) 石井礼花：第 117 回日本精神神経学会学術総会 一般演題 優秀発表賞：ADHD 児とその親
への社会サポートネットワークへの COVID-19 感染拡大の影響. 2021.9.21.
- 3) 江頭優佳：国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 JH Symposium 2021 若
手研究者奨励賞：江頭優佳, 箱島有輝, 宇佐美政英, 岡田 俊, 魚野翔太, 林 小百合, 請園
正敏, 高田美希：発達障害の二次障害発症リスクを形成する心理社会的要因と認知神経機能の
解明. 2022.3.15.

10. 地域・司法精神医療研究部

I. 研究部の概要

当研究部は、生物・心理・社会的観点から精神障害を多面的に捉え、地域に暮らす精神障害者とその家族が主体的な生活を送るための支援技法やシステムの開発、その効果に関する実証的研究を当事者のリカバリー支援の観点から実施することを活動の中心としている。また、医療観察法に基づく医療の検証を通じて、医療観察法の対象者への支援や権利擁護のあり方、それらの一般精神科医療への適用に関する検討を行うことも重要な柱のひとつである。研究活動を通じて政策としても取り入れることが可能な支援モデルを提示し、自治体や専門職、市民への教育研修等を実施してそれらの普及を図ることにより、研究成果の社会への還元を行っている。

研究の実施にあたっては、以下の人員構成で活動を行うとともに、センター病院専門疾病センターの「こころのリカバリー地域支援センター」のデイケア、訪問看護ステーション PORT、所沢市アウトリーチ支援チーム、医療観察法病棟との協働、研究所内の他部との連携および外部機関とのネットワークの構築についても重視している。

令和3年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：藤井千代、精神保健サービス評価研究室長：山口創生、臨床援助技術研究室長：佐藤さやか、司法精神保健研究室長：菊池安希子、制度運用研究室長：曾雌崇弘、常勤研究員：小塩靖崇、リサーチフェロー：松長麻美、小池純子、塩澤拓亮、川口敬之、科研費研究員：小川 亮、阿部真貴子、岡野茉莉子、五十嵐百花、科研費研究補助員：藤本 悠、併任研究員：平林直次、坂田増弘、佐竹直子、竹田康二、柏木宏子、客員研究員：伊藤順一郎、瀬戸屋雄太郎、吉田光爾、橘 薫子、杉山直也、美濃由紀子、三澤孝夫、河野稔明、松本桂子、柑本美和、横山恵子、稲垣 中、堀口雅則、北村俊則（4.15～）、研究生：安間尚徳、松本衣美、田村早織、小黒早紀（5.1～）、石塚公太（6.15～）、岩永麻衣（12.1～）、山田裕貴（R4.1.1～）所沢市アウトリーチ支援チームについては、統括管理責任者：中西清晃、副看護師長：下平美智代、医療社会事業専門員：西内絵里沙、真行寺伸江（～9.30）、作業療法士：大迫直樹、科研費シニアテクニカルフェロー：真行寺伸江（10.1～）科研費心理療法士：臼井 香、曹 由寛、森田典子（R4.1.1～1.31）、糸繰朝美（R4.1.1～）。

II. 研究活動

- 1) 地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究（藤井、菊池、佐藤、山口、松長、小池）

地域精神保健医療福祉制度の充実により精神障害者が地域で安心して自分らしく生活できるようにするため、エビデンスに基づいた効果的な精神保健医療福祉サービスを地域でより効果的に展開するための具体的かつ実現可能な提言を行うことを目的として、以下の7つの分担班で研究を実施している。

A. 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に関する研究 B. 精神科外来機能強化に関する研究 C. 措置入院及び退院後支援のあり方に関する研究 D. 措置通報及び措置入院の実態に関する研究 E. 精神医療審査会のあり方に関する研究 F. 精神障害者の意思決定及び意思表明支援に関する研究 G. 精神保健医療福祉制度の国際比較

- 2) 精神保健・福祉に関するエビデンスに関する WEB サイト作成と精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関する検討のための研究（佐藤、山口、川口、五十嵐、小川、阿部、安間、藤井）本研究では国内の実践家が効果的な実践を行うための支援として、①精神保健福祉サービス効果等についてのエビデンスの収集及び分類、専門的知見を介した信頼性等の評価を行うこと、②国内外の調査・研究等のシステムティックレビューの実施すること、③これらの結果等を容易に入手可能な日本語プラットフォームの構築を行うことを目的としている。②について

Risk of bias 評価およびデータ抽出を完了し現在論文投稿準備中である。①③については①で検討した内容を反映したサイトを 2021 年 7 月に公開済である。

- 3) 個別援助付き雇用に関する研究（山口，佐藤，小池，松長，小塩，塩澤，五十嵐）
精神障害者に対する就労支援として最も効果的とされる *individual placement and support (IPS)* に準ずる個別型援助付き雇用の均てん化と質の評価に関する調査に取り組んだ。具体的には実践者とネットワークを構築し，日本版個別型援助付き雇用フィデリティ調査を実施した。また，個別型援助付き雇用事業所における包括的なアウトカムを検証し，論文化して発表した。
- 4) 障害福祉人材の確保・養成のための研究（山口）
大学生や障害福祉サービス事業所を対象として，障害福祉サービス分野への就職状況や離職状況などを調査中である。ピアサポーターについて，研修を担当する講師やファシリテーターを要請する研修を構築し，その評価検証を実施中である。
- 5) 精神障害者に対するスティグマに関する研究（山口，小川，小塩，松長，藤井）
東京大学および *Institute of Psychiatry, Psychology & Neuroscience (IoPPN)* の研究者と共同し，精神障害者のスティグマ是正を図るための全般的かつ学術的な研究を推し進め，2018 メディアを用いた介入の効果を検証する長期無作為比較試験を論文化した。また，*INDOG READ* という医学生に向けた教育プログラムの効果検証の日本サイトとして，データ種集を完了した。現在 *IoPPN* の研究者を中心に国際的なデータ分析の途中・論文投稿の途中である。
- 6) 精神科訪問看護師による家族心理教育 クラスター無作為化比較対照試験（安間，松長，塩澤，山口，佐藤，藤井）
本研究の目的は，精神科訪問看護師が統合失調症をもつ当事者をケアする家族に対して家族心理教育を行うことによる効果を，家族の介護負担感を主要評価項目としてクラスター無作為化比較対照試験により明らかにすることである。全 4 回で実施する家族心理教育プログラムを開発し，埼玉，東京で訪問看護ステーション事業を展開する事業者の協力を得て，100 家族弱を対象とした *RCT* デザインによる効果検討を実施した。論文投稿済である。
- 7) 医療観察法通院処遇者における暴力および自傷・自殺の予測因子に関する研究（菊池，岡野，阿部）
司法精神科患者においては，暴力のリスク要因と自傷自殺のリスク要因は重複しているとの指摘がある。暴力のリスクアセスメントツールである *HCR-20* 第 3 版の日本版を使用し，通院処遇中の医療観察法患者の 6 ヶ月以内の暴力と自傷自殺行動に対する予測妥当性についてのデータを収集し，分析を実施した。
- 8) ドメスティック・バイオレンス加害者の暴力重症化リスクアセスメントの開発（菊池，藤井）
本研究では，*Danger Assessment (Campbell, 2003, 2019)* の日本版 (*DA-J*) を用いてドメスティック・バイオレンスの重症化リスクのアセスメントを開発し，その信頼性・妥当性，ならびに配偶者暴力相談支援の現場における実施可能性を検証することを目的とする。本年度は，*DA-J* を翻訳し，原著者と協議の上，日本の配偶者暴力支援現場職員のフォーカスグループを実施して文言の文化的調整を行い，*DA-J* 日本版を作成した。
- 9) *Facial Emotion Selection Test (FEST)* の信頼性・妥当性に関する研究（菊池）
顔表情認知は，統合失調症の社会転帰を予測する社会的認知の 1 つである。人の基本感情は文化横断的であるが，顔表情への表出の仕方は文化の影響を受ける。本研究では，*FEST*（日

本人の顔表情を用いた 21 枚の写真図版から成る簡便な検査) の信頼性・妥当性を検証することを目的とする。本年度は、併存的妥当性を検証するためのデータ収集を行い、分析を実施した。

10) 精神科入院経験の患者報告指標の調査①② (菊池, 藤井)

精神科医療の質の向上のために入院期間や症状改善度, 再発回数と言った客観指標だけに頼ることは, 過度の介入を招いたりしてリカバリー促進を制約する可能性がある。本研究では日本における精神科入院経験についての患者報告指標 (Patient Reported Indicators) の基礎的資料を収集するために①オンライン調査, および, ②精神科患者の当事者集団を対象とする調査を実施し, データを収集した。本年度は, オンライン調査の一部について, OECD PaRIS ワーキンググループに提供した。

11) 医療観察法入院データベースを活用した研究 (河野, 曾雌, 小池, 藤井)

厚生労働省の重度精神疾患標準的治療法確立事業では, 医療観察法指定入院医療機関が実施主体となり, 同法入院対象者の診療情報をデータベース化して分析・共有することにより, 医療を向上させ対象者の社会復帰を促進することを目指している。本研究では, 医療観察法対象者を類型化し, それぞれに応じた処遇のあり方を検討する。そのために本年度は, 法施行から 2021 年 6 月までの入院対象者 (約 4,000 名) の類型化を行うデータの利用の申請手続きおよび必要な準備を行った。データの提供を受け次第, 分析を開始する予定である。

12) 精神科救急に関する研究 (杉山, 藤井, 塩澤, 阿部)

現在運用に大きな地域差がある精神科救急医療体制整備事業 (地方自治体) の実態と, 医療機関間で多様性がある精神科救急及び急性期の医療内容を把握し, 課題の抽出を行って標準化を推進するための諸策について, 指針としてまとめるための提言を行った。

13) 精神科救急・急性期病棟の入院患者のコホート研究 (ePOP-J 研究) (山口, 藤井, 菊池, 松長, 小塩, 小池, 小川)

プロジェクト名は「早期に退院する精神障害者における再入院と地域定着に影響する要因に関する縦断研究 (Early discharge and Prognostic community Outcomes for Psychiatric inpatients in Japan [ePOP-J])」としている。本研究は, 退院後 12 ヶ月間の再入院 (アウトカム) と個人の主観的指標 (特に生活の質) の推移の関連を探ることを第 1 の目的とする。また, その他の曝露データを収集し, アウトカムに関連しうる要因を包括的に検証することを第 2 の目的としている。本研究には国内 21 の精神科病院が参加しており, 635 名から参加同意を得た。2021 年 3 月 31 日までに 493 名の追跡が完了しており, 現在データの分析中である。

14) 計画相談支援と入院アウトカムの検証 (山口)

我が国の地域精神保健福祉サービスは, 医療サービスと福祉サービスがそれぞれに独立して発展してきたが, 患者はその両方を使うことが珍しくない。本研究は, 障害者総合支援法における計画相談支援の利用と入院アウトカムとの関連を検証することを目的とする。本年度は, プロセス調査デザインおよび調査項目の設定に取り組んだ。

15) 地域精神保健研究における患者・市民参画 (山口, 佐藤, 塩澤, 川口, 小川, 阿部, 五十嵐, 安間)

近年の対人サービス評価に関する研究では, 研究者だけでなく, 患者や一般市民を含めて実施することが期待されている。国際的に普及中の研究における患者・市民の参画 (patient-public involvement: PPI) は, 日本の地域精神保健の文脈では認知度も高くない。そこで, 本研究は,

当事者や家族、行政関係者、実践者、研究者など幅広いステークホルダーを集め、地域精神保健研究で取り扱うべきアウトカムのデルファイ調査を実施した。

16) 重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発
(佐藤, 山口, 菊池, 藤井)

本研究は、重症精神障害者への地域生活支援においても効果的な支援技法と考えられる CBT について、アウトリーチ等に従事する心理職以外の精神保健福祉スタッフを対象に、研修やスキルトレーニングを遠隔会議形式で行うシステム (=遠隔トレーニングシステム) を開発し、その実施可能性および効果に関する予備的検討を行うことを目的とする。本年度は遠隔会議のためのオンラインシステムについて株式会社アクセライトと意見交換を行った。

17) アスリートのメンタルヘルスケアシステム開発に関する研究 (小塩, 松長, 山口, 塩澤, 小川, 藤井)

日本ラグビーフットボール選手会と共同し、日本スポーツ界におけるメンタルヘルスケアシステム開発のための研究を推し進めた。2021 年度はラグビー選手を対象とした実態調査を実施し、複数の学術論文を発表した。「よわいはつよいプロジェクト」というアスリートが情報発信の担い手となり、メンタルヘルスに関する経験や情報を一般市民向けに届ける web サイトを公開し、メンタルヘルス普及啓発に取り組んだ。現在、アスリートのメンタルヘルスケアに関する国際標準ツールである IOC Mental health toolkit の日本版開発を進めている。

18) 処遇の難しい精神障害者に対する医療支援体制の整備に向けた当事者参画研究 (小池, 菊池, 藤井, 岡野)

共生社会の実現を目指す中で、処遇が難しいとされている者への治療戦略や、社会復帰支援策の強化を検討するため、処遇困難となる要因の本質を明らかにし、処遇困難例への効果的な治療及び支援体制の構築に寄与することを目的とする。本年度は、「重度かつ慢性」の精神障害者と医療観察法対象者の特性と臨床経過に関わるデータをカルテから収集し、現在分析中である。

19) 共同意思決定の基盤となる関係構築プロセスに関する研究 (川口)

地域精神保健福祉サービスにおける共同意思決定 (shared decision making: SDM) の普及のために、円滑な SDM の基盤となる当事者と専門職間の関係構築プロセスに焦点をあてた研究を進めている。2021 年度は、当事者、ピアスタッフ、専門職を対象に、SDM に向けて関係構築をはかるために必要な関わりやコミュニケーションに関するインタビュー調査を実施・完了しており、現在分析中である。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・地域の保健センターにおける思春期精神保健相談およびアウトリーチによる相談支援を定期的に実施した。(藤井)
- ・地域における講演会などに講師として可能な限り参加した。(藤井)
- ・特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構・コンボ 理事 (山口)
- ・精神障害者の地域生活に関する研究紹介サイト「こころとくらし」構築および運営 (佐藤, 五十嵐, 川口, 藤本, 小川, 山口, 藤井)

(2) 専門教育面における貢献

- ・愛媛大学 医学部公衆衛生学教室 非常勤講師 (藤井)
- ・文教大学 人間科学学部 非常勤講師 (山口)

- ・法政大学 現代社会学部 非常勤講師（山口）
- ・東洋大学 福祉社会システム先行 非常勤講師（山口）
- ・早稲田大学 人間科学部 非常勤講師（佐藤）
- ・立教大学 現代心理学部 非常勤講師（佐藤）
- ・目白大学 心理学部 非常勤講師（佐藤）
- ・東京医科歯科大学 精神保健看護学 非常勤講師（菊池）
- ・帝京平成大学 大学院臨床心理学研究科 非常勤講師（菊池）
- ・広島市立大学 大学院 非常勤講師（曾雌）
- ・立教大学 現代心理学部 非常勤講師（下平）
- ・日本赤十字看護大学 精神保健看護学 非常勤講師（下平）
- ・東京大学 教育学部 非常勤講師（小塩）
- ・法政大学 キャリアデザイン学部 非常勤講師（小塩）
- ・東京大学 医学部健康総合科学科 非常勤講師（松長）
- ・東京医科歯科大学 医学部保健衛生学 非常勤講師（松長）
- ・東海大学 教養学部芸術学科音楽学課程 非常勤講師（阿部）
- ・東京都立産業技術大学院大学 非常勤講師（阿部）

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・第1回精神科救急医療体制整備研修の主任・講師（藤井）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・厚生労働省 地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制の実現に向けた検討会 構成員（藤井）
- ・厚生労働省 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築支援事業広域アドバイザー（藤井）
- ・社会保障審議会障害者部会 委員（藤井）
- ・厚生労働省 診療報酬改定結果検証委員会 委員（藤井）
- ・OECD PaRIS WORKING GROUP ON PATIENT-REPORTED INDICATORS FOR MENTAL HEALTH CARE（菊池）
- ・内閣府「配偶者暴力被害者支援における機関連携及び加害者対応に関する調査研究事業」検討委員（菊池）
- ・矯正研修所効果検証センター(アドバイザー)、東日本矯正医療センター（菊池）
- ・法務省保護局「アセスメントに基づく保護観察 モニタリング会議」外部有識者（菊池）
- ・法務省矯正局「矯正処遇等の在り方に関する検討会」外部有識者（菊池）
- ・日本学校保健会「精神疾患に関する指導参考資料作成委員会」委員（小塩）

(5) センター内における臨床的活動

- ・こころのリカバリー地域支援センターの訪問看護ステーション、精神科デイケアと連携し、センター内での精神科リハビリテーションのシステム作りに関与している（藤井、佐藤、山口）
- ・国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーションにて週に0.5程度、訪問時を中心に利用者本人および家族に認知行動療法を提供した（佐藤）
- ・国立精神・神経医療研究センター病院医療観察法病棟（8病棟）心理療法士として週1日程度、対象者の診療に関わった（菊池）
- ・国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーションの事例検討会のスーパーバイザーとして関わった（1.5時間）（菊池）

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Arima H, Akiyama T, de Moura PA, Bernick P, Sakai Y, Ozaki Y, Matsumoto S, Ohki Y, Igarashi Y, Tachimori H, Yamaguchi S: Resilience building for mood disorders: Theoretical introduction and the achievements of the Re-Work program in Japan. *Asian Journal of Psychiatry* 58: 102580, 2021. <https://doi.org/10.1016/j.-ajp.2021.102580>
- 2) Yamaguchi S, Sato S, Ojio Y, Shiozawa T, Matsunaga A, Taneda A, Sawada U, Yoshida K, Fujii C: Assessing stable validity and reliability of the Japanese version of the individualized supported employment fidelity scale: A replication. *Neuropsychopharmacology Reports* 41(2): 248-254, 2021. doi:10.1002/npr2.12172
- 3) Kikuchi A, Soshi T, Kono T, Koyama M, Fujii C: Validity of Short-Term Assessment of Risk and Treatability in the Japanese Forensic Probation Service. *Frontiers in Psychiatry*, 2021. doi:10.3389/fpsyt.2021.645927
- 4) Shirai M, Soshi T: The role of bodily expression in memory representations of sadness. *Journal of Nonverbal Behavior*, 2021. <https://doi.org/10.1007/s10919-021-00360-8>
- 5) Shirai M, Soshi T: Color features continuously represent negative and positive aspects of sadness. *Journal of General Psychology*, 2021. doi:10.1080/00221309.2021.1922344
- 6) Soshi T, Andersson M, Kawagoe T, Nishiguchi S, Yamada M, Otsuka Y, Nakai R, Abe N, Aslah A, Igasaki T, Sekiyama K: Prefrontal plasticity after a 3-month exercise intervention in older adults relates to enhanced cognitive performance. *Cerebral Cortex*, 2021. bhab102. doi:10.1093/cercor/bhab102
- 7) Matsumoto A, Soshi T, Fujimaki N, Ihara A: Distinctive responses in anterior temporal lobe and ventrolateral prefrontal cortex during categorization of semantic information. *Scientific Reports* 11: 13343, 2021. doi:10.1038/s41598-021-92726-7
- 8) Soshi T, Nagamine M, Fukuda E, Takeuchi A: Modeling skin conductance response time series during consecutive rapid decision-making under concurrent temporal pressure and information ambiguity. *Brain Sciences* 11: 1122, 2021. doi: 10.3390/brainsci11091122
- 9) Ojio Y, Matsunaga A, Yamaguchi S, Hatakeyama K, Kawamura S, Yoshitani G, Horiguchi M, Nakajima S, Kanie A, Horikoshi M, Fujii C: Association of mental health help-seeking with mental health-related knowledge and stigma in Japan Rugby Top League players. *PLoS One*.2021.16(8): doi.org/10.1371/journal.pone.0256125
- 10) Ojio Y, Matsunaga A, Kawamura S, Horiguchi M, Yoshitani G, Hatakeyama K, Amemiya R, Kanie A, Purcell R, Rice SM, Fujii C: Validating a Japanese Version of the Athlete Psychological Strain Questionnaire. *Sports Med Open*. 11:7(1): 90. 2021. <https://doi.org/10.1186/s40798-021-00385-9>
- 11) Ojio Y, Matsunaga A, Kawamura S, Horiguchi M, Yoshitani G, Hatakeyama K, Amemiya R, Kanie A, Fujii C: Anxiety and Depressive Symptoms in the New Life With COVID-19: A Comparative Cross-Sectional Study in Japan Rugby Top League Players. *Int J Public Health*, 2021. 66:1604380. doi:10.3389/ijph.2021.1604380
- 12) Takegata M, Matsunaga A, Ohashi Y, Toizumi M, Yoshida LM, Kitamura T: Prenatal and intrapartum factors associated with infant temperament: A systematic review. *Frontiers in Psychiatry* 12: 609020, 2021. doi: 10.3389/fpsyt.2021.609020
- 13) Shiozawa T, Yamaguchi S, Ogawa M, Abe M, Kawaguchi T, Igarashi M, Yasuma N, Fujii C: Consensus development of priority outcome domains for community mental health cares by multiple stakeholders: protocol for an online Delphi study in Japan.

- Neuropsychopharmacology Reports. 2021. <https://doi.org/10.1002/npr2.12211>
- 14) Igarashi M, Yamaguchi S, Kawaguchi T, Ogawa M, Sato S, Fujii C. Outcomes frequently specified in Cochrane reviews of community-based psychosocial interventions for adults with severe mental illness: A systematic search and narrative synthesis. Neuropsychopharmacol Rep. 2021; 41: 459-463. doi: 10.1002/npr2.12216
 - 15) Satoh M, Tabei K, Abe M, Kamikawa C, Fujita S, Ota Y: The Correlation between a New Online Cognitive Test (the Brain Assessment) and Widely Used In-Person Neuropsychological Tests. Dement Geriatr Cogn Disord. 2021.50(5):473-481.doi: 10.1159/000520521. Epub 2021 Dec 15
 - 16) Satoh M, Tabei K, Abe M, Kamikawa C, Fujita S, Ota Y: The Correlation between a New Online Cognitive Test (the Brain Assessment) and Widely Used In-Person Neuropsychological Tests. Dement Geriatr Cogn Disord. 2021. doi: 10.1159/000520521
 - 17) Abe M, Tabei K, Satoh M: The Assessments of Music Therapy for Dementia Based on the Cochrane Review. Dement Geriatr Cogn Disord Extra 2022;12:6-13 . doi:10.1159/000521231
 - 18) Shi J, Kirihara K, Tada M, Fujioka M, Usui K, Koshiyama D, Araki T, Chen L, Kasai K, Aihara K: Criticality in the Healthy Brain. Frontiers in Network Physiology, 2022. <https://doi.org/10.3389/fnetp.2021.755685>
 - 19) Yasuma N, Nishi D, Watanabe K, Ishikawa H, Tachimori H, Takeshima T, Umeda M. Kawakami N: Association between Urban Upbringing and Compulsive Internet Use in Japan: A Cross-Sectional, Multilevel Study with Retrospective Recall. Int. J. Environ. Res. Public Health 2021.18(18), 9890. <https://doi.org/10.3390/ijerph18189890>
 - 20) 米倉裕希子, 山口創生: 知的障害者に対する施設職員のスティグマティゼーションに関する横断研究. 関西福祉大学研究紀要 24 : 51-59, 2021.
 - 21) 小池純子, 柴崎聡子, 河野稔明, 熊倉陽介, 大塚俊弘, 小口芳世, 袖長光知穂, 小野和哉, 古茶大樹, 竹島 正: 川崎市の精神保健福祉法第 23 条通報における複数回通報事例の特性と地域生活支援の必要性について. 精神神経学雑誌 123(11), 721-731, 2021.
 - 22) 小池純子, 中西清晃, 小口芳世, 瀬戸秀文, 稲垣 中, 藤井千代: 措置入院患者が COVID-19 陽性・疑似例となった場合の受け入れ体制の現状 (その 2) 質的分析をもとにした現状と課題. 臨床精神医学 50(10), 1099-1107, 2021.
 - 23) 小口芳世, 小池純子, 瀬戸秀文, 稲垣 中, 島田達洋, 藤井千代: 措置入院患者が COVID-19 陽性・疑似例となった場合の受け入れ体制の現状 (その 1) 臨床指標的側面の検討. 臨床精神医学 50(10), 1091-1098, 2021.

(2) 総説

- 1) 藤井千代: 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムにおける精神科救急医療体制. 精神科 39(2) : 132-138, 2021.
- 2) 藤井千代: 精神障害にも対応した地域包括ケアにおける精神科救急・急性期医療の役割. 精神科救急 24 : 26-30, 2021.
- 3) 藤井千代: アウトリーチのエビデンスと質評価. 精神科治療学 36(4) : 405-411, 2021.
- 4) 藤井千代: 地域精神保健医療福祉の機能強化推進について—政策研究から「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」を考える—. 日精協誌 40(2) : 7-13, 2021.
- 5) 藤井千代: 精神障害をもつ人々と共に精神医療を考える 研究への患者・市民参画 (patient and public involvement:PPI)の推進. 医療の広場 61(12) : 5-6, 2021.
- 6) 藤井千代: 措置入院の運用に関するガイドライン. こころの元気+15(7) : 63, 2021.
- 7) 久我弘典, 西 大輔, 藤井千代: ライフコースアプローチをマルチステークホルダーの視点に生かして 地域連携強化のための政策. 臨床精神医学 50(9) : 949-955, 2021.

- 8) 山口創生, 小川 亮, 阿部真貴子, 五十嵐百花, 川口敬之, 塩澤拓亮, 安間尚徳, 佐藤さやか : 保健医療福祉サービス領域の研究における患者・市民参画と共同創造の概要. 精神障害者とりハビリテーション 25(1) : 6-17, 2021.
- 9) 山口創生, 小川知子, 三ツ井幸子 : 社会人としてみられたいのですが. —社会とのかかわり—, Progress in Medicine 41(6) : 539-543, 2021.
- 10) 山口創生 : お医者さんとの関係を表す専門用語と歴史. こころの元気+ 15(8) : 24-25, 2021.
- 11) 山口創生 : 援助付き雇用プログラムのサービスの見える化. 精神科臨床 Legarto 7(2) : 126-129, 2021.
- 12) 山口創生, 安間尚徳 : 統合失調症 : 共同意思決定の文脈をもとに. 精神医学 63(11) : 1607-1615, 2021.
- 13) 山口創生, 塩澤拓亮 : 精神疾患当事者の地域生活に関する主体性を測定する試み : Five-item Subjective Personal Agency scale (SPA-5) の紹介. 大阪作業療法ジャーナル 35(2) : 117-120, 2022.
- 14) 山口創生, 塩澤拓亮 : 精神疾患当事者の地域生活に関する主体性を測定する試み : Five-item Subjective Personal Agency scale (SPA-5) の紹介. 大阪作業療法ジャーナル, 35(2) : 117-120, 2022.
- 15) 佐藤さやか : 精神科領域における患者報告アウトカム・患者市民参画. こころの科学 219, 2-7, 2021.
- 16) 佐藤さやか : 心理師はどこにいる? —精神科リハビリテーションと心理学的支援—. 精神障害とりハビリテーション, 25 (2) : 155-156, 2021.
- 17) 佐藤さやか : 精神障害者の地域生活に関する研究紹介サイトについて. 心と社会, 187 : 97-102, 2022.
- 18) 菊池安希子 : 精神障害がある加害者の理解と介入. 子どもの虐待とネグレクト 23(3) : 274-279, 2021.
- 19) 小塩靖崇 : COVID-19 感染拡大とアスリートのメンタルヘルス. 日本社会精神医学会雑誌 30(2) : 182-190 , 2021.
- 20) 小塩靖崇, 臼田謙太郎, 塩澤拓亮, 小川 亮, 松長麻美 : アスリートのメンタルヘルス研究における国内外の状況と展望 精神科 38(4) : 372-378 , 2021.
- 21) 小塩靖崇 : 学校でのメンタルヘルス教育への期待—メンタルヘルスは自分事— 初等教育資料 1008 : 74-77 , 2021.
- 22) 山下慎一, 川村 慎, 堀口雅則, 小塩靖崇 : アスリート支援における PDP (Player Development Program) の意義と PDM (Player Development Manager) の役割, および日本での導入可能性について. 福岡大学法学論叢 66(1) : 167 -187, 2021.
- 23) 小塩靖崇 : 新学習指導要領に対応した精神保健教育資材の開発. 精神科臨床 Legarto 7(2) : 12-16, 2021.
- 24) 小塩靖崇, 水野雅文 : 精神障害とスティグマをめぐって. こころの科学 220 : 35-41, 2021.
- 25) 小川 亮, 川口敬之, 佐々木理恵, 鶴田英規, 宮本有紀, 安間尚徳, 山口創生 : 当事者と研究者が共同して研究を行うことについての「ざっくばらんな」座談会. 精神障害者とりハビリテーション 25(1) : 39-54, 2021.
- 26) 臼井 香, 切原賢治, 多田真理子 : NMDA 受容体とミスマッチ陰性電位. 週刊医学のあゆみ 277(11) : 960-963, 2021.
- 27) 臼井 香, 榊原英輔, 石井綾華 : 第 1 章 7 節 本当に狙われているんです. —病識と妄想—, Progress in Medicine 41(6) : 41-46, 2021.
- 28) 安間尚徳, 佐藤さやか : 統合失調症の家族支援, 家族心理教育. 統合失調症の心理社会的治療—どのように使い分け, 効果を最大化するか, 精神医学 63(10) : 1445-1452, 2021.

(3) 著書

- 1) 藤井千代：精神科リハビリテーションの概念. 萱間真美, 稲垣 中 編：精神看護学Ⅱ 地域・臨床で活かすケア 改訂第3版, 南江堂, 東京, pp232-233, 2022.
- 2) 藤井千代：精神科リハビリテーションの基礎. 萱間真美, 稲垣 中 編：精神看護学Ⅱ 地域・臨床で活かすケア 改訂第3版, 南江堂, 東京, pp233-234, 2022.
- 3) 藤井千代：医療機関におけるリハビリテーションのさまざまな技術. 萱間真美, 稲垣 中 編：精神看護学Ⅱ 地域・臨床で活かすケア 改訂第3版, 南江堂, 東京, pp234-240, 2022.
- 4) 藤井千代：入院と地域をつなぐかわり. 萱間真美, 稲垣 中 編：精神看護学Ⅱ 地域・臨床で活かすケア 改訂第3版, 南江堂, 東京, pp240-244, 2022.
- 5) 藤井千代：包括的リハビリテーションとは. 萱間真美, 稲垣 中 編：精神看護学Ⅱ 地域・臨床で活かすケア 改訂第3版, 南江堂, 東京, pp244-246, 2022.
- 6) 藤井千代：今後の精神科リハビリテーション. 萱間真美, 稲垣 中 編：精神看護学Ⅱ 地域・臨床で活かすケア 改訂第3版, 南江堂, 東京, pp246, 2022.
- 7) 佐藤さやか：③精神障害. 山中克夫, 四ノ宮恵美子, 宮本信也 編：福祉心理学, 医歯薬出版株式会社, 東京, pp74-78, 2022.
- 8) 菊池安希子：医療観察法における心理支援. 公認心理師への関係行政論ガイド, 下山晴彦, 岡田裕子, 和田仁孝 編：北大路書房, 東京, pp193-195, 2021.
- 9) 菊池安希子：医療観察法指定医療機関における公認心理師の活動. 公認心理師の基礎と実践 16, 健康・医療心理学, 丹野義彦 編：遠見書房, 東京, pp141-152, 2021.
- 10) 下平美智代：地域精神医療とオープンダイアログ. オープンダイアログ実践システムと精神医療 III-5, 石原孝二, 斎藤 環 編：オープンダイアログと地域精神医療, 東京大学出版会, 東京, 2022.
- 11) 小池純子：地域における精神医療との連携. 関連領域・関連する理論, 医学更生保護学会編集：更生保護学事典, 成文堂, pp62-63, 東京, 2021.

(4) 研究報告書

- 1) Kikuchi A: OECD (2021), Health at a Glance 2021: OECD Indicators, OECD Publishing, Paris, <https://doi.org/10.1787/ae3016b9-en>.
- 2) Kikuchi A: de Bienassis, K., et al. (2022), "Establishing standards for assessing patient-reported outcomes and experiences of mental health care in OECD countries: Technical report of the PaRIS mental health working group pilot data collection", OECD Health Working Papers, No. 135, OECD Publishing, Paris, <https://doi.org/10.1787/e45438b5-en>.
- 3) 瀬戸秀文, 朝倉為豪, 稲垣 中, 岩永英之, 牛島一成, 太田順一郎, 大塚達以, 小口芳世, 奥野栄太, 木崎英介, 来住由樹, 椎名明大, 島田達洋, 鈴木 亮, 酢野 貢, 田崎仁美, 戸高 聡, 富田真幸, 中西清晃, 中濱裕二, 中村 仁, 平林直次, 松尾寛子, 宮崎大輔, 山田直哉, 横島孝至, 吉川 輝, 吉住 昭, 芳野昭文, 渡辺純一：措置通報および措置入院の実態に関する研究 その1 措置入院となった精神障害者の前向きコホート研究 (1) 2020年9月18日における患者登録の状況. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業_地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究 (19GC2003) 令和2年度_総括・分担研究報告書 pp177-190, 2021.
- 4) 瀬戸秀文, 朝倉為豪, 稲垣 中, 岩永英之, 牛島一成, 太田順一郎, 大塚達以, 小口芳世, 奥野栄太, 木崎英介, 来住由樹, 椎名明大, 島田達洋, 鈴木 亮, 酢野 貢, 田崎仁美, 戸高 聡, 富田真幸, 中西清晃, 中濱裕二, 中村 仁, 平林直次, 松尾 寛子, 宮崎大輔, 山田直哉, 横島孝至, 吉川 輝, 吉住 昭, 芳野昭文, 渡辺純一 (論文執筆：稲垣 中)：措置通報および措置入院の実態に関する研究 その1 措置入院となった精神障害者の前向きコホート研究 (2) 社会機能から見た措置入院患者のサブクラス分類の試み. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障

害者政策総合研究事業_地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究 (19GC2003) 令和 2 年度_総括・分担研究報告書 pp191-213, 2021.

- 5) 瀬戸秀文, 朝倉為豪, 稲垣 中, 岩永英之, 牛島一成, 太田順一郎, 大塚達以, 小口芳世, 奥野栄太, 木崎英介, 来住由樹, 椎名明大, 島田達洋, 鈴木 亮, 酢野 貢, 田崎仁美, 戸高 聡, 福田真幸, 中西清晃, 中濱裕二, 中村 仁, 平林直次, 松尾 寛子, 宮崎大輔, 山田直哉, 横島孝至, 吉川 輝, 吉住 昭, 芳野昭文, 渡辺純一 (論文執筆者: 中村 仁): 措置通報および措置入院の実態に関する研究 その 1 措置入院となった精神障害者の前向きコホート研究 (3) 退院時のケア会議実施状況と退院後のサービス利用状況. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業_地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究 (19GC2003) 令和 2 年度_総括・分担研究報告書 pp215-224, 2021.
- 6) 瀬戸秀文, 稲垣 中, 小口芳世, 小池純子, 椎名明大, 島田達洋, 中西清晃 (論文執筆者: 小口芳世): 措置通報および措置入院の実態に関する研究 その 2 (1) 措置入院者における COVID-19 陽性/疑似例への対応の実態調査. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業_地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究 (19GC2003) 令和 2 年度_総括・分担研究報告書 pp225-231, 2021.
- 7) 瀬戸秀文, 朝倉為豪, 稲垣 中, 岩永英之, 太田順一郎, 大塚達以, 奥野栄太, 小口芳世, 小池純子, 椎名明大, 島田達洋, 鈴木 亮, 田崎仁美, 中西清晃, 中村 仁, 平林直次, 山田直哉, 芳野昭文 (論文執筆者: 小池純子): 措置通報および措置入院の実態に関する研究 その 2 (2) 他科との協働を要する精神科治療例および措置入院 COVID-19 陽性 /疑似例への対応の実態調査精神科医療機関における COVID-19 受け入れ体制構築の糸口. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業_地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究 (19GC2003) 令和 2 年度_総括・分担研究報告書 pp233-240, 2021.

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 山口創生: 読者からの声: 構成員からの 122 号への意見. 精神保健福祉 52(2): 134-135, 2021.
- 2) 菊池安希子: エビデンスから見た医療観察法処遇. 日本犯罪心理学会主催第 3 回全国研修会. 犯罪心理学研究 59(2): 58-60, 2022.
- 3) 下平美智代: コミュニティケア-所沢市の精神保健に係る取り組み. 臨床心理 21(3): 304-309, 2021.
- 4) 下平美智代: 死を見つめ いまを生き 語ること ~特集に寄せて. 月刊みんなねっと 6, 6-7, 2021.
- 5) 下平美智代: 「自ら助けを求めることのない人」へのアプローチ アウトリーチと「孤独の尊重」. 臨床心理学 22(2): 213-217, 2022.
- 6) 西内絵里沙: ファミリーワークによるヤングケアラー支援の手応え. 精神科看護 vol.48 No7, 32-37, 2021.
- 7) 小塩靖崇: 巻頭言 with/after コロナ時代を生きる若手研究者として. 日本社会精神医学会雑誌 30(2): 107-108, 2021.
- 8) 小塩靖崇: 思春期のストレスとメンタルヘルス. 生活習慣とメンタルヘルスシリーズ①, 中学保健ニュース, 少年写真新聞社 1818 号, 2021.
- 9) 小塩靖崇: 心の健康と関係が深い“睡眠リズム”. 生活習慣とメンタルヘルスシリーズ②, 中学保健ニュース, 少年写真新聞社 1818 号, 2021.
- 10) 小塩靖崇: アスリートのメンタルヘルスを守る環境作りを. 週刊医学界新聞 (通常号) 第 3441 号, 2021.

- 11) 小塩靖崇：ストレスを解消するための“積極的休養”生活習慣とメンタルヘルスシリーズ④，中学高校保健ニュース，少年写真新聞社 1839 号，2022.
- 12) 小塩靖崇：心の不調を言葉にして伝えてみよう．生活習慣とメンタルヘルスシリーズ⑤，中学高校保健ニュース，少年写真新聞社 1840 号，2022.
- 13) 松長麻美：心理援助の理論やエビデンスを臨床床助産ケアに活かそう！連載第 7 回 心理的側面のアセスメント 3～自殺リスクのアセスメント技法～．臨床助産ケア 13(4)，83-88，2021.
- 14) 松岡耕史，渡邊愛記，川口敬之，三沢幸史，福田倫也：日常生活動作における脳卒中上肢機能に対する難易度設定を考慮した作業療法介入．北里医学 51(1)：31-41，2021.
- 15) 加藤伸輔，川口敬之：立場を越えて“同じ景色”をみるとき（リレー連載「リカバリーをめぐるって，対話のように」⑩）．月刊みんなねっと 171：20-23，2021.
- 16) 阿部真貴子：第 14 回学術集会 座長のまとめ 一般演題 1. 音楽医療研究 14：8-10，2022.

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等
 - 1) 藤井千代：当事者，家族とともに地域精神保健医療福祉の実施におけるアウトカムを探る．精神医学における研究方法の特徴を改めて考える～身体医学との異同に注目して～（委員会シンポジウム 16（精神医学研究推進委員会））．第 117 回日本精神神経学会学術総会，京都大会，京都，2021.9.20.
 - 2) 藤井千代：【教育講演 29】地域共生社会のために精神医療ができること．第 117 回日本精神神経学会学術総会，京都大会，京都，2021.9.20.
 - 3) 藤井千代：措置入院制度における警察との連携．措置入院制度を見直すー主に連携の視点からー委員会シンポジウム 23（精神医療・保険福祉システム委員会），第 117 回日本精神神経学会学術総会，京都大会，京都，2021.9.21.
 - 4) 藤井千代：重篤な精神疾患を持つ方への心理社会的アプローチと SDM.（Session1 演者，ワークショップ司会）．大日本住友製薬株式会社，SDM Forum 2021，東京，2021.12.4.
 - 5) 山口創生，小塩靖崇，小池純子，松長麻美，小川 亮，菊池安希子，藤井千代：早期に退院する精神障害者における再入院と地域定着に影響する要因に関する縦断研究：中間報告．第 117 回日本精神神経学会学術総会，京都大会，京都，2021.9.20.
 - 6) 山口創生：研究と実践がつながるためへの第 1 歩：研究を専門とする者の立場からの一見解．第 28 回日本精神障害者リハビリテーション学会，愛知大会，オンライン，2021.12.11.
 - 7) 山口創生，林輝男，池田真砂子，久永文恵：IPS の視点に学ぶ就労支援の検証：今日も実施したその支援に疑いを持ってみないか？．就労支援フォーラム NIPPON SUB FORUM，オンライン，2022.3.18.
 - 8) 山口創生：わかっていること・いないこと：心理社会的支援．第 16 回日本統合失調症学会，東京大会，オンライン，2022.3.21.
 - 9) 佐藤さやか，中西三春，小川 亮，阿部真貴子，安間尚徳，河野稔明，五十嵐百花，山口創生：精神科長期入院患者の退院後の転帰に関するシステムティックレビュー．第 117 回日本精神神経学会学術総会，京都大会，京都，2021.9.20.
 - 10) 佐藤さやか：【シンポジウム 4】「統合失調症の疾病・障害認識とリカバリー」「医者にかかりたくない」「薬を飲みたくない」心理をサポートするーリカバリーを支えるためにー．第 15 回日本統合失調症学会，オンライン，2021.4.10.
 - 11) 佐藤さやか：生活支援に認知機能リハを活かす．統合失調症治療レクチャー，オンライン，2022.3.30
 - 12) 大山みち子，長谷川直美（講師），菊池安希子（企画者）：司法犯罪分野：介入の入り口にたどり着くまでのワークショップ．日本ブリーフサイコセラピー学会大会ワークショップ，オンライン開催，2021.5.9.

- 13) 菊池安希子：ブリーフサイコセラピーのこれまでとこれから．学会長・大会長企画シンポジウム（シンポジスト）．日本ブリーフサイコセラピー学会第 31 回オンライン大会，オンライン開催，2021.6.27.
- 14) 菊池安希子：エビデンスから見た医療観察法処遇．「刑事司法分野のより良き実践をめざして：エビデンスをつくり・つたえ・つかおう」第 2 部シンポジウム（シンポジスト），日本犯罪心理学会主催第 3 回全国研修会，2021.7.4.
- 15) 菊池安希子：【シンポジウム S-15】EMDR における適応的情報処理モデルと治療計画．エビデンスに基づく PTSD 治療の背景理論と見立て：PE,CPT,EMDR の比較（企画者，シンポジスト），第 20 回日本トラウマティック・ストレス学会，Web 開催，2021.7.17-31.
- 16) 菊池安希子，山口創生，小塩靖崇，小池純子，松長麻美，小川 亮，藤井千代：精神科入院患者の退院後における問題行動のリスク評価に関する研究．第 117 回日本精神神経学会学術総会，京都大会，京都，2021.9.20.
- 17) 小塩靖崇：「よわいはつよいプロジェクト」の立ち上げ，そしてこれから～アスリートもひとりの人間である～．Sports X Conference 2020+1，Web 開催，2021.5.25-28.
- 18) 小塩靖崇：新学習指導要領にみる心の健康・メンタルヘルスに関する教育の拡充．第 117 回日本精神神経学会学術総会，京都大会，京都，2021.9.21.
- 19) 小塩靖崇：【教育講演】トップアスリートへのメンタルヘルスサポート．第 10 回 日本アスレティックトレーニング学会学術大会，Web 開催，2021.10.9-31.
- 20) 小塩靖崇：【教育講演】日本スポーツ界でのメンタルヘルスケアのあり方を考える～アスリートの，アスリートによる，みんなのためのメンタルヘルス～．令和 3 年度 東北体育・スポーツ学会大会，宮城教育大学，2021.12.11.
- 21) 松長麻美，佐竹直子，山口創生，藤井千代：【シンポジウム 43】精神科医療における満足度の向上および治療関係改善に資する治療方針決定のあり方とは．社会実装化や当事者の視点などを踏まえた Shared Decision Making(SDM)の今後の可能性，第 117 回日本精神神経学会学術総会，京都大会，2021.9.20.
- 22) 相澤和美，稲毛礼子，小林鮎奈，中谷真樹，小川瑛子，澤田高綱，佐藤慎子，川口敬之：今こそ語ろう！ピアサポート～医療の場から～．リカバリー全国フォーラム 2021，Web 開催，2021.10.16.
- 23) 川口敬之：E-Lecture「精神障がいをもつ人のリカバリーに向けた作業療法実践ポイント～大切な作業と生活の困難さの共有に基づく協働～」．第 18 回神奈川県作業療法学会，Web・オンデマンド開催，2021.11.16-12.5.
- 24) 増川ねてる，植田俊幸，安保寛明，栄 セツコ，川口敬之：「リカバリーモデル」の実装～体験を持ち寄り，語り合おう～．第 28 回日本精神障害者リハビリテーション学会，愛知大会，オンライン，2021.12.11.
- 25) 阿部真貴子，山里亜未，井貝梨紗，田部井賢一：いま改めて音楽療法のエビデンスを問う．第 15 回日本音楽医療研究会学術集会，オンライン，2022.2.6.

(2) 一般演題

- 1) Kikuchi A, Hashimoto R, Fujii C: Changes observed in mentally disordered offenders during forensic community treatment in Japan. International Association of Forensic Mental Health Services 2021 Virtual Conference, Online, 2021.6.17.
- 2) Katayanagi A, Oe M, Kikuchi A, Ito M, Makita K, Kanie A, Nakajima S1,5, Masaru Horikoshi M: Development of an online version of cognitive processing therapy for youth during the COVID-19 pandemic. European Society for Traumatic Stress Studies Virtual Conference, 2021.6.17-18.

- 3) Kikuchi A: Targets of intervention during forensic probation in Japan. Asian Criminological Society 12th Annual Conference 2020, Online & On-demand, 2021.6.18-8.30.
- 4) Nagamine M, Soshi T, Fukuda E, Takeuchi A: Different effects of time pressure on learning decision-making strategies in young and older adults. 32nd International Congress of Psychology, Online. July 18-23, 2021.
- 5) Takahashi K, Hirata S, Zenba Y, Kawaguchi T, Nobematsu A, Hundgen JQ: Resilience and Sensory Profile in Children with William's Syndrome. The 2nd COTEC-ENOTHE Congress 2021, Online, 2021.9.15-18.
- 6) Matsuoka K, Watanabe A, Kawaguchi T, Misawa K, Fukuda M: Investigation of performance and predictive factors of eating-related activities in an affected arm of stroke patients by use of the Activities-Specific Upper-extremity Hemiparesis Scale. The 7th Asia-Pacific Occupational Therapy Congress, Online, 2021.11.22-24.
- 7) Sano K, Watanabe A, Kawaguchi T, Sakamoto Y, Fukuda M: The incidence of delirium and characteristics of cognitive function in postoperative patients with heart disease. The 7th Asia-Pacific Occupational Therapy Congress, Online, 2021.11.22-24.
- 8) Abe M, Tabei K, Satoh M: What is the most appropriate outcome measure to detect the effects of music therapy for dementia?. The neuroscience and music-7, Web 開催, 2021.6.20.
- 9) Usui K, Kirihara K, Araki T, Tada M, Koshiyama D, Fujioka M, Nishimura R, Ando S, Koike S, Kasai K: Development of mismatch negativity is associated with psychological difficulties in adolescence. The 8th BESETO International Psychiatry Conference, online, 2021. 11.12.
- 10) 山口創生: 精神障害者に対する援助付き雇用のサービスの質とアウトカムの比較: 実臨床場面における多施設共同縦断研究. 日本精神保健福祉学会, オンライン大会, 2021.6.26-27.
- 11) 山口創生, 阿部真貴子, 川口敬之, 五十嵐百花, 塩澤拓亮, 小川 亮, 安間尚徳, 佐藤さやか, 宮本有紀: 当事者・家族・支援者・行政職員・研究者の研究における患者・市民参画に関する見解: テーマ分析. 第 28 回日本精神障害者リハビリテーション学会, 愛知大会, オンライン, 2021.12.11.
- 12) 佐藤さやか, 川口敬之, 五十嵐百花, 小川 亮, 山口創生, 藤井千代: 精神障害当事者の地域生活にかかわる研究結果紹介サイト「こころとくらし (略称: ここくら)」の開発. 第 28 回日本精神障害者リハビリテーション学会, 愛知大会, オンライン, 2021.12.11.
- 13) 菊池安希子, 曾雌崇弘: Short-Term Assessment of Risk and Treatability (START)から見た医療観察法通院処遇中の自傷・自殺企図者の特徴. 第 17 回日本司法精神医学会大会, Web 開催, 2021.6.11-12.
- 14) 曾雌崇弘, 永岑光恵: 皮膚電気抵抗反応(SCR)関数を用いたリスク回避行動の分析. 日本心理学会第 85 回大会, Web 開催, 2021.9.1-8.
- 15) 白井真理子, 曾雌崇弘: 悲しみの身体表出と泣き表出語の関連. 日本心理学会第 85 回大会, Web 開催, 2021.9.1-8.
- 16) 王 雪妍, 曾雌崇弘, 山下雅俊, 柿原マルセロ, 堤 孝信, 岩寄唱子, 積山 薫: 健常高齢者への短期的介入の効果検出における Sternberg 課題の有用性. 第 18 回日本ワーキングメモリ学会大会, オンライン, 2021.12.11.
- 17) 小池純子, 中西清晃, 小口芳世, 島田達洋, 藤井千代, 瀬戸秀文: 措置入院者の COVID 受け入れ体制の構築に向けた手がかりと課題. 第 117 回精神神経学会総会, 京都大会, 2021.9.19-21.
- 18) 小口芳世, 小池純子, 中西清晃, 稲垣 中, 椎名明大, 大塚達以, 島田達洋, 藤井千代, 瀬戸秀文: 措置入院受け入れ医療機関における COVID-19 陽性・疑似例への対応の実態に関する Web アンケート調査 (その 1): COVID-19 陽性/疑似例への対応の準備. 第 117 回精神神経学

- 会総会，京都大会，2021.9.19-21.
- 19) 小口芳世，小池純子，中西清晃，稲垣 中，椎名明大，大塚達以，島田達洋，藤井千代，瀬戸秀文：措置入院受け入れ医療機関における COVID-19 陽性・疑似例への対応の実態に関する Web アンケート調査（その 2）. 第 117 回精神神経学会総会，京都大会，2021.9.19-21.
 - 20) 塩澤拓亮，兼行浩史，藤井千代，平田豊明，野田寿恵，杉山直也：精神科救急医療ニーズの多様化に向けた医療の質向上と医療提供体制の最適化に関する研究. 第 29 回日本精神科救急学会学術集会，2021.10.23-24.
 - 21) 塩澤拓亮，小川 亮，川口敬之，五十嵐百花，阿部真貴子，安間尚徳，山口創生：精神疾患当事者や多様な関係者が地域精神保健研究において重要と考える評価項目の合意形成調査：デルファイ調査のプロトコル. 第 28 回日本精神障害者リハビリテーション学会，愛知大会，オンライン，2021.12.11-12.
 - 22) 川口敬之，渡邊愛記，崎本麻衣，及川裕也，古屋慶一郎，松岡太一：地域生活を営む統合失調症者のリカバリーの変化と生活の困難さの構造的関係：潜在曲線モデルに基づく縦断的検討. 第 15 回日本統合失調症学会，オンデマンド開催，2021.4.9-4.30.
 - 23) 渡邊愛記，川口敬之，金子美鈴，佐野邦典，陳松歩実，小林 毅：周術期乳がん患者の生活の質と首尾一貫感覚における因果関係の推定：交差遅延効果モデルに基づく予備的研究. 第 6 回日本がんサポーターブケア学会学術集会，Web 開催，2021.5.29-6.30.
 - 24) 作間弘彬，清家庸佑，松岡太一，川口敬之：作業機能障害の改善に焦点を当てた目標設定およびアウトリーチの試み—精神障害に対する探索的ケースシリーズ—. 第 7 回日本臨床作業療法学会，オンデマンド開催，2021.7.31-8.29.
 - 25) 松岡太一，川口敬之，清家庸佑：精神科病院入院患者の介入早期のリカバリープロセスに影響する因子の推定—作業機能障害に焦点をあてた個別支援に基づく探索的研究—. 第 55 回日本作業療法学会，オンデマンド開催，2021.9.10-10.17.
 - 26) 松岡耕史，渡邊愛記，川口敬之，三沢幸史，福田倫也：ASUHS を用いた脳卒中患者の麻痺側上肢における整容動作の遂行可否に関する予後予測の検討. 第 55 回日本作業療法学会，オンデマンド開催，2021.9.10-10.17.
 - 27) 葛岡 哲，吉葉咲穂，松岡太一，川口敬之：作業機能障害の評価の共有による施設間連携の影響—OT 退院サマリーを活用した統合失調症の一事例—. 第 55 回日本作業療法学会，オンデマンド開催，2021.9.10-10.17.
 - 28) 増川ねてる，植田俊幸，安保寛明，栄 セツコ，川口敬之：「リカバリー」を実装する—先行国の「モデル」探索と，「SAMHSA2012」の個人のリカバリーに向けた cultivation 実践報告—. 第 28 回日本精神障害者リハビリテーション学会，愛知大会，オンライン，2021.12.11.
 - 29) 阿部真貴子，田部井賢一，佐藤正之：認知症に対する音楽療法で用いられるアウトカム・尺度の検討. 第 40 回日本認知症学会学術集会，オンデマンド開催，2021.11.26-28.
 - 30) 田部井賢一，神川ちあき，阿部真貴子，藤田彩子，太田芳徳，佐藤正之：神経心理検査の対面実施と遠隔実施は所要時間が異なる. 第 40 回日本認知症学会学術集会，オンデマンド開催，2021.11.26-28.
 - 31) 臼井 香，長谷川智恵，市橋香代，森田健太郎，大路友惇，金生由紀子，多田真理子：メンタル不調を有する AYA 世代に対する疾患横断的早期支援法の開発. 第 31 回日本ブリーフサイコセラピー学会大会，オンライン，2021.6.26-27.
 - 32) 臼井 香，長谷川智恵，多田真理子，市橋香代，森田健太郎，金原明子，大路友惇，里村嘉弘，金生由紀子，笠井清登：AYA 世代のこころの不調に対する早期・簡易心理支援：CAYAC プログラムの開発. 第 16 回日本統合失調症学会，オンライン，2022.3.20-21.
 - 33) 五十嵐百花，宮本有紀，渡辺慶一郎：学生が支援を受ける中で経験した困難と助かったこと：テーマ分析. 第 28 回日本精神障害者リハビリテーション学会，愛知大会，オンライン，2021.12.11.

- 34) 安間尚徳：思春期における都市居住と成人期のインターネット依存症：思い出し法による横断的マルチレベル分析．第 62 回日本児童青年精神医学会総会，Web 開催，2021.11.13-12.11.

(3) 研究報告会

- 1) 山口創生，阿部真貴子，川口敬之，五十嵐百花，塩澤拓亮，小川 亮，安間尚徳，佐藤さやか，宮本有紀，藤井千代：研究における患者・市民参画についての当事者・家族・支援者・行政職員・研究者の見解：テーマ 分析．令和 3 年度精神保健研究所研究報告会，東京，2022.3.28.
- 2) 塩澤拓亮，小川 亮，川口敬之，五十嵐百花，阿部真貴子，安間尚徳，山口創生，藤井千代：精神疾患当事者や多様な関係者が地域精神保健研究において重要と考える評価項目枠組みの開発：デルファイ法による検討．令和 3 年度精神保健研究所研究報告会，東京，2022.3.28.

(4) その他

C. 講演

- 1) Fujii C: The Community-based comprehensive care system focusing on mental health. Member State consultation on the new Regional framework for the future of mental health in the Western Pacific 2022-2030, Online, Kobe, 2022.2.10.
- 2) 藤井千代：職域・地域架橋型-価値に基づく支援者育成．東京大学医学部附属病院 精神神経科 C コース，オンライン，東京，2021.7.4.
- 3) 藤井千代：精神障がい者の就労とその下支えとなる医療について．NPO 法人全国精神保健職親会・vfoster，一般社団法人日本うつ病センター，大塚製薬株式会社共催，精神障がい者と家族のための市民公園講座，東京，2021.8.29.
- 4) 藤井千代：精神科医療におけるジレンマ-非自発的入院と意思決定支援-．大塚製薬株式会社京都支店，第 21 回北陸 PPST 研究セミナー，東京，2021.9.10.
- 5) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステム．2021 年度 権利擁護システム研究会，オンライン，2021.9.26.
- 6) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムとは？．Meiji Seika ファルマ株式会社 CNS 東京第一営業部，第 13 回城東プシケフォーラム，東京，2021.11.9.
- 7) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムについて．長崎県社会参加促進事業保健所等担当者研修会，オンライン，2021.11.9.
- 8) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムについて．NPO 法人じんかれん 第 47 回『県民の集い』in 綾瀬，神奈川，2021.11.21.
- 9) 藤井千代：「精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム」と早期介入．大日本住友製薬株式会社 CNS 営業部，社会精神医学・予防精神医学セミナー，東京，2021.12.21.
- 10) 藤井千代：最新の知見について．大日本住友製薬株式会社 CNS 営業部，第 8 回リカバリーを学ぶ会 会津地区会，福島，2022.1.26.
- 11) 藤井千代：リカバリーを支える就労支援と精神科医療．大塚製薬株式会社広島支店，これからの統合失調症治療を考える会，埼玉，2022.1.29.
- 12) 藤井千代：統合失調症のリカバリーを支える精神保健医療福祉政策を考える．ヤンセンファーマ株式会社，これからの精神医療を考える会～共に生き共に働く地域共生社会の実現へ～，オンライン，2022.2.15.
- 13) 藤井千代：地域共生社会と精神科医療．大日本住友製薬株式会社 CNS 営業部，精神科における地域包括ケアを考える会，オンライン，2022.2.21.
- 14) 藤井千代：地域連携によるリカバリー支援．飯能市スキルアップセミナー～医療と保健・福祉連携の会～，オンライン，2022.2.25.

- 15) 藤井千代：精神科障害にも対応した地域包括ケアシステムを考える。大阪府豊中市健康医療部，豊中市メンタルヘルス対策推進会議，オンライン，2022.2.28.
- 16) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について。一般社団法人上越相談支援ネットワーク 研修会，オンライン，2022.3.2.
- 17) 藤井千代：精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムと多職種によるアウトリーチの展望。特定非営利活動法人日本医療政策機構，第104回HGPIセミナー，オンライン，2022.3.4.
- 18) 藤井千代：日本におけるこれからの地域精神保健－愛南町の実践と世界の潮流を踏まえて－。令和3年度南宇和心の健康を考える会，オンライン，2022.3.25.
- 19) 山口創生：数多くの波が打ち寄せる年月 何を道しるべに歩んだらよりよいのでしょうか？：精神障害者の人々と共に。2021年度杉並家族会・例会。東京，2021.5.12.
- 20) 山口創生：リカバリーの再整理：リカバリーを「ちょっと」理解するために！リカバリーを「陰ながら」応援するために！。第56回精神科作業療法協会全国研修会，オンライン，2021.11.20.
- 21) 佐藤さやか：精神障害当事者の地域生活にかかわるエビデンス紹介サイトの開発とその意義。第46回NCNP精神保健研究所ランチョンセミナー，NCNP精神保健研究所，2022.1.17.
- 22) 菊池安希子：医療観察法通院処遇者の自傷・自殺。第174回【東京】医療観察制度関係機関連絡協議会。オンライン，2021.8.12.
- 23) 小塩靖崇：アスリートのメンタルヘルスを考える～よわいはつよいプロジェクトからのメッセージ。日比谷カレッジ，東京，2021.11.3.
- 24) 小塩靖崇：【WEB 配信講演会】こんなときどうする？思春期の「こころ」の支え方。豊中市令和3年度（2021年度）思春期メンタルヘルス講演会，大阪，オンライン，2021.11.8-12.10.
- 25) 小塩靖崇：日本スポーツ界に求められるアスリートのメンタルヘルスケア。11～12月 研究助成×先端技術オンラインカフェミーティング，オンライン，2021.11.10.
- 26) 小塩靖崇：「よわいはつよい～誰もがよわさをさらけ出せ，よわさを受け入れられる社会～」日本マイクロソフト社，2021.12.3.
- 27) 小塩靖崇：「日本スポーツ界でのメンタルヘルスケアのあり方を考える～アスリートの，アスリートによる，みんなのためのメンタルヘルス～」令和3年度東北体育・スポーツ学会大会，特別講演，2021.12.11.
- 28) 塩澤拓亮：日本精神科看護協会倫理綱領改正プロジェクトから考える～当事者参画・連携と協働についてのこれから～。精神障害当事者会ポルケ，オンライン，2021.9.4.
- 29) 塩澤拓亮：ダブルライセンスの公認心理師に聞く一現状や取り組み，困りごとを聞き，今後を一緒に考えよう。年次総会シンポジウム，公認心理師の会，2021.9.12.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 藤井千代：日本精神神経学会 代議員
- 2) 藤井千代：日本精神神経学会 医療倫理委員会委員長
- 3) 藤井千代：日本精神神経学会 地域ケアにおける自立支援検討委員会委員長
- 4) 藤井千代：日本社会精神医学会 副理事長
- 5) 藤井千代：日本精神保健福祉政策学会 理事
- 6) 藤井千代：日本司法精神医学会 評議員
- 7) 藤井千代：日本精神保健・予防学会 評議員
- 8) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 常任理事
- 9) 山口創生：日本社会精神医学会 評議員
- 10) 山口創生：日本統合失調症学会 評議員

- 11) 山口創生：こころのバリアフリー研究会 評議員
- 12) 山口創生：日本社会精神医学会 理事
- 13) 山口創生：日本統合失調症学会 理事
- 14) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会 常任理事
- 15) 佐藤さやか：公認心理師の会 医療部会委員（2021 年度部会長代理）
- 16) 佐藤さやか：VCAT-J 研究会 理事
- 17) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会理事 研修委員会委員
- 18) 菊池安希子：日本 EMDR 学会理事 資格認定委員会委員
- 19) 菊池安希子：日本司法精神医学会 評議員
- 20) 菊池安希子：日本心理臨床学会 代議員
- 21) 菊池安希子：日本犯罪心理学会 関東地区代議員
- 22) 菊池安希子：医療観察法心理士ネットワーク 幹事
- 23) 菊池安希子：日本公認心理師協会 司法犯罪分野委員会委員，専門認定委員会委員
- 24) 菊池安希子：EMDR Asia Scientific Committee (2019～)
- 25) 菊池安希子：CBT for Psychosis (CBTp) ネットワーク 幹事.
- 26) 西内絵里沙：日本精神障害者リハビリテーション学会 ベストプラクティス賞委員
- 27) 小塩靖崇：日本精神保健・予防学会 評議員
- 28) 松長麻美：こころのバリアフリー研究会 評議員
- 29) 松長麻美：日本精神障害者リハビリテーション学会 研修委員
- 30) 松長麻美：日本社会精神医学会 多職種協働特別委員

(3) 座長

- 1) 藤井千代：統合失調症患者さんにとってパーソナルリカバリーとは？. 大塚製薬株式会社医薬営業本部，All for your smile～統合失調症患者さんの明日を考える～，東京，2021.9.26.
- 2) 伊豫雅臣，山口創生：急性期精神科医療における患者の New long stay の要因と防止プログラム. 第 117 回日本精神神経学会学術総会，京都大会，2021.9.20.
- 3) 松本和紀，菊池安希子：統合失調症の認知行動療法（CBTp）の現在地から未来へ. CT 自主企画シンポジウム 2（座長），第 18 回日本うつ病学会総会／第 21 回日本認知療法・認知行動療法学会[合同開催]，オンライン開催，2021.7.9.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 藤井千代：日本社会精神医学会 編集委員会委員長
- 2) 藤井千代：日本精神神経学会 編集委員
- 3) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
- 4) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 英文監修者
- 5) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 学会誌編集委員
- 6) 山口創生：学会誌投稿論文等査読小委員会及び査読制度の在り方検討小委員会
- 7) 山口創生：Canadian Journal of Psychiatry: reviewer registration
- 8) 山口創生：Epidemiology and Psychiatric Sciences: reviewer registration
- 9) 山口創生：American Academy of Child and Adolescent Psychiatry: reviewer registration
- 10) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員（2021 年 10 月～）
- 11) 菊池安希子：日本認知療法・認知行動療法学会 編集委員
- 12) 菊池安希子：日本 EMDR 学会 英文監修者
- 13) 小塩靖崇：IACAPAP テキストブック翻訳委員会委員
- 14) 小塩靖崇：予防精神医学 編集委員
- 15) 小塩靖崇：日本社会精神医学会雑誌 編集委員

- 16) 松長麻美：Archives of Women's Mental Health: reviewer registration
- 17) 川口敬之：日本臨床作業療法研究 査読委員
- 18) 川口敬之：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 佐藤さやか：ダブルライセンスの公認心理師に聞くー現状や取り組み，困りごとを聞き，今後を一緒に考えようー．年次総会シンポジウム，公認心理師の会，2021.9.12.
- 2) 渡邊 悟，吉村雅世，須藤 明，井口由美子，押切久遠，菊池安希子：少年非行に関する基礎知識．日本公認心理師協会 第1回 司法・犯罪分野研修会，オンライン，2021.10.31.

(2) 研修会講師

- 1) 藤井千代：精神障がい者のアウトリーチ支援と措置入院者退院後支援の連携を考える．福島県精神保健福祉センター，令和3年度福島県精神障がい者アウトリーチ推進事業研修会，オンライン，2021.10.13.
- 2) 藤井千代：精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムについて．長崎県長崎こども・女性・障害者支援センター，令和3年度社会参加促進事業保健等担当者研修会，オンライン，2021.11.9.
- 3) 藤井千代：精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムについて．愛知県精神保健福祉センター，令和3年度第2回精神障害者地域移行・地域定着支援推進研修（医療と福祉の連携合同研修），オンライン，2021.12.13.
- 4) 藤井千代：精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムの構築について．神奈川県精神保健福祉センター，令和3年度市町村・保険福祉事務所・精神保健福祉センター等連絡会，オンライン，2022.1.31.
- 5) 山口創生：リカバリーを応援するための支援．医療法人社団栄仁会研修会，オンライン，2021.06.19.
- 6) 山口創生：患者報告式尺度の開発と当事者参加．愛知教育大学福祉講座，オンライン，2021.6.24.
- 7) 山口創生：研究成果の普及と実装の科学：精神保健研究の方法論．東京大学，2021年度課題解決型高度医療人材養成プログラム「職域・地域架橋型一価値に基づく支援者育成」（2018-2022年），東京，2021.7.4.
- 8) 山口創生：システマティックレビューの概要．愛知教育大学福祉講座，オンライン，2021.9.8.
- 9) 山口創生：論文の書き方について．愛知教育大学福祉講座，オンライン，2021.10.8.
- 10) 山口創生：調査論文の基本執筆スキル．2021年度 大学院社会福祉学専攻課程協議会第1回研究大会，東京，2022.02.19.
- 11) 山口創生：精神疾患におけるSDMについて．2021年度 大日本住友製薬社内研修会，東京，2022.03.10.
- 12) 佐藤さやか：認知機能リハビリテーションのエビデンス，適応等について．VCAT-J研究会，オンライン，2021.9.12.
- 13) 佐藤さやか：医療で働く公認心理師のエッセンシャルスキルズ（ファシリテーター）．公認心理師の会2021年度第二期研修会，オンライン，2022.2.27
- 14) 佐藤さやか：認知機能リハビリテーションのエビデンス，適応等について．VCAT-J研究会，オンライン，2022.3.6.
- 15) 菊池安希子：三分岐プロトコルによる治療計画の基礎．東海 EMDR 研究会 6月セミナー，オンライン，2021.6.5.
- 16) 堀越 勝，伊藤正哉，高岸百合子，菊池安希子，牧野みゆき，宮前光宏，佐藤珠恵：心的外傷後ストレス障害に対する認知処理療法研修．国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研修，オンライン，2021.7.1-8.13.

- 17) 菊池安希子: 暴力のリスクマネジメント. 厚生労働省令和3年度精神科医療体制確保研修事業「精神科病院における安心・安全な医療を提供するための研修」オンライン(オンデマンド), 2021.11.9-2022.1.10.
- 18) 菊池安希子: 「医療観察におけるリスクアセスメント」. 社会復帰調整官初任研修, 東京, 2020.10.19.
- 19) 菊池安希子: 司法精神科における認知行動療法—CBT for Psychosis の基礎. 北海道大学病院医療観察法開棟に伴う研修, オンライン研修, 2022.2.8.
- 20) 堀越 勝, 伊藤正哉, 菊池安希子, 高岸百合子, 牧野みゆき, 佐藤珠恵, 宮前光宏, 今村扶美, 蟹江絢子, 片柳章子, 中島聡美, 森田展彰: 心的外傷後ストレス障害への認知処理療法: 実践練習研修, 国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター, オンライン, 2022.3.17.
- 21) 菊池安希子: 実践的取組から学ぶ統合失調症のための認知行動療法. 東京都立精神保健福祉センター職員研修, オンライン研修, 2022.2.25.
- 22) 菊池安希子: 医療観察における事例概念化. 社会復帰調整官専修科研修, オンライン研修, 2022.3.8.
- 23) 菊池安希子: EMDR 入門. 日本ブリーフサイコセラピー学会ブリーフサイコセラピーセミナー, オンライン研修, 2022.3.30.
- 24) 下平美智代: ところざわ経験専門家養成講座. 所沢市保健センター, 埼玉, 2021.7.8, 15, 29, 8.5, 12, 19, 26, 9.2. (全8回) .
- 25) 下平美智代: 第2期ところざわ経験専門家養成講座. 所沢市保健センター, 埼玉, 2022.1.27, 2.10, 17, 24, 3.3, 10, 17, 24 (全8回) .
- 26) 下平美智代: 対話と協働—所沢市メンタルヘルスにおけるとりくみ. 第10回 ナラティブ・コロキウム, オンライン研修. 2022.3.13.
- 27) 下平美智代: 利用者さんとの出会いにおける関係づくりとアセスメント オープンダイアログからの学び. 円グループ職員研修, オンライン, 2022.3.18.
- 28) 西内絵里沙: アウトリーチにおける関係づくりに大切な視点. アウトリーチ実践者オンライン研修, 一般社団法人コミュニティメンタルヘルスアウトリーチ協会, ファシリテーター, 2021.10.30.
- 29) 小塩靖崇: 学校に必要なメンタルヘルス教育について. 尾北学校保健会, Web 開催, 2021.6.11.
- 30) 小塩靖崇: 精神疾患へのスティグマにどうアプローチするか! エビデンスほかのから教育現場への実践を考える. (一社)サイコロ主催 オンラインワークショップ, Web 開催, 2021.6.26-7.10.
- 31) 小塩靖崇: 学校におけるメンタルヘルス教育について. 児童生徒理解講座 ～子どもたちの発達と心の理解のために～, 岐阜県教育委員会, 2021.7.16.
- 32) 小塩靖崇: 日本スポーツ界に求められる メンタルヘルス支援の現状とこれから. 第7回NCNPメディア塾, 東京, 2021.8.20.
- 33) 小塩靖崇: 「こどものメンタルヘルス教育とサポートシステムの構築～ライフコースアプローチで考える～」日本医療政策機構(HGPI) こどもの健康プロジェクト 「こどもの権利を尊重したメンタルヘルス教育プログラムとサポートシステムの構築」 第1回専門家会合「こどものメンタルヘルスに対するライフコースアプローチを考える」 プログラム, 2021.12.16.
- 34) 小池純子: 「地域移行と地域定着支援～地域共生社会の実現にむけた包括ケアについて～」日光市障がい者自立支援協議会 第3回相談支援実務者会, 日光市役所, 2022.2.16.
- 35) 川口敬之: リカバリーを応援するために作業療法士ができる関わりとは. 第56回精神科作業療法協会全国研修会, オンライン, 2021.11.20.
- 36) 栄 セツコ, 川口敬之: 病いの語りからパートナーシップについて考える～リカバリー志向の実践を目指して～. 一般社団法人しん, 愛知, 2021.11.26.
- 37) 川口敬之: 精神障がいの概説及びスポーツへの取り組み. 令和3年度神奈川県初級障がい者ス

スポーツ指導者養成講習会，神奈川，2021.11.27.

- 38) 栄 セツコ，川口敬之：知ることから始めるピアサポート～援助・支援関係からパートナーシップへ～．名古屋市西区自立支援連絡協議会，愛知，2022.2.14.
- 39) 川口敬之：精神障害作業療法関連のトピックス．一般社団法人神奈川県作業療法士会 現職者研修会(精神障害領域)，オンライン，2021.2.27.
- 40) 早瀬大介，曹 由寛，山田裕貴：オンライン研修プログラム：経験専門家語り聴く会．2021.6.14，7.13，8.16，9.14，10.18．（全5回）．

F. その他

- 1) Ojio Y: 「Naomi Osaka Exposes Sports' Mental-Health Risks With French Open Exit」. Bloomberg, 2021.6.1.
- 2) Ojio Y: 「Beijing Games Shine Light on Athletes' Mental Health」 NHK World Japan, NHK, 2022.2.9.
- 3) 藤井千代：「Report 最近の話題を語る」インタビュー．CONSONANCE81号冬号，大日本住友製薬株式会社 オンライン，2021.10.8.
- 4) 曾雌崇弘：「短期間の運動習慣が高齢期の認知機能や脳の可塑性を促す－高齢期における前頭前野の柔軟な可塑性－」京都大学“最新の研究成果を知る”，2021.12.14.
- 5) 下平美智代，曹 由寛，臼井 香，大迫直樹，真行寺伸江，中西清晃，西内絵里沙，藤井千代：オンライン研修プログラム：弁償法的行動療法（DBT）から学ぶ感情調節困難の理解と支援．講師：遊佐安一郎，山崎さおり，2021.7.25，8.1，15，29，9.19（全5回）.
- 6) 下平美智代，曹 由寛，臼井 香，大迫直樹，真行寺伸江，中西清晃，西内絵里沙，藤井千代：オンライン研修プログラム：経験専門家語り聴く会，ファシリテーター：早瀬大介，曹 由寛，山田裕貴，2021.6.14，7.13，8.16，9.14，10.18．（全5回）．
- 7) 小塩靖崇：「アスリートもひとりの人間！～求む！メンタルヘルスの理解と支援」．ラグビーマガジン4月号，2021.2.26.
- 8) 小塩靖崇：「筋骨隆々でも心に不調4割ラグビー選手，調査で判明」．共同通信，2021.5.19.
- 9) 小塩靖崇：「大坂なおみ全仏棄権，トップアスリートの心の健康リスク浮き彫りに」．Bloomberg, 2021.6.2.
- 10) 小塩靖崇：「大坂なおみが一石を投じる…アスリートと心の問題」．報道ステーション テレビ朝日，2021.6.3 放送
- 11) 小塩靖崇：「2つの大事なポイントとは？ 専門家「メンタルヘルスは“じぶんごと”」大坂なおみ選手が“うつ”告白」．newszero 日本テレビ，2021.6.3 放送
- 12) 小塩靖崇：「アスリート うつの危険 過酷な重圧・疲労 要因に」．日経新聞，2021.7.6 朝刊
- 13) 小塩靖崇：「屈強に見えるラグビー選手も…大坂なおみ問題提起の「メンタルヘルス」誤解と実情」．REAL SPORTS, 2021.7.21.
- 14) 小塩靖崇：「日本スポーツ界，メンタルヘルスのケアは不十分．体操選手の途中棄権が教えてくれること」．HUFFPOST, 2021.7.29.
- 15) 小塩靖崇：「東京オリンピック 相次ぐトップアスリートの発信」．報道ランナー 関西テレビ，2021.8.10 放送
- 16) 小塩靖崇：「Mental health in sport」．J-Arena NHK World Japan, 2021.10.1 放送
- 17) 小塩靖崇：「アスリートの心の不調 調査で明らかに」．メディカルニュースライン，東京 MXTV, 2021.10.19.
- 18) 小塩靖崇：「アスリートと心の不調 孤立させない環境を（論プラス）」．毎日新聞，2021.10.21
- 19) 小塩靖崇：「アスリートのメンタルケア」（視点・論点）．NHK, 2021.11.2 放送
- 20) 小塩靖崇：「メンタルヘルス「大丈夫じゃなくても大丈夫」五輪の枠を超え，大坂選手に救われた人も」．共同通信，2021.10.29.

- 21) 小塩靖崇：「トップアスリートの“弱さ”五郎丸歩さん語る」．ニュースウォッチ 9，NHK，2021.11.12.
- 22) 小塩靖崇：「コロナ禍の五輪で注目 こころの健康考える機会に」．室蘭民報，2021.10.9.
- 23) 小塩靖崇：「大坂選手，バイルス選手で注目 心の健康考える機会に」．東京新聞，2021.10.9.
- 24) 小塩靖崇：「心の健康考える契機—コロナ下の東京五輪」．山形新聞，2021.10.10.
- 25) 小塩靖崇：「コロナ下の五輪で注目 心の病考える契機に」．河北新聞，2021.10.12.
- 26) 小塩靖崇：「アスリート 声上げた東京五輪 心の健康考える機会に」．信濃毎日新聞，2021.10.12.
- 27) 小塩靖崇：「心の健康 考える機会に コロナ禍の五輪で注目」．千葉日報，2021.10.14.
- 28) 小塩靖崇：「川村選手／村上選手と共に，“メンタルヘルス”を学ぼう DAEN Univ. 社会環境学 #2」丸の内15丁目プロジェクト，2021.12.1.
- 29) 小塩靖崇：「心の健康へ感情を描く」．岐阜新聞，2021.11.29.
- 30) 小塩靖崇：「小学生「弱さ大切」学ぶ」．東京新聞，2021.11.24.
- 31) 小塩靖崇：「学校訪問で心のケア」．室蘭民報，2021.11.24.
- 32) 小塩靖崇：「ケアの大切さ 子どもに発信」．中日新聞，2021.11.24.
- 33) 小塩靖崇：「心の健康 ラグーマン啓発 弱さも受け入れるのが本当の強さ」．岩手日報，2021.11.25.
- 34) 小塩靖崇：「心の健康 大切さ児童に」．上毛新聞，2021.12.8.
- 35) 小塩靖崇：「精神疾患は誰もがなり得る，生きるのヘタ会？てんでん×神戸新聞」．神戸新聞，2022.2.13.
- 36) 小塩靖崇：「オリンピックと SNS 選手のメンタルヘルスをどう守るか」．ニュースウォッチ 9，NHK，2022.2.9.

11. ストレス・災害時こころの情報支援センター

Ⅰ. 研究部の概要

平成 23 年東日本大震災の被災者に対する継続的な対応、及び今後発生が予想されるその他の災害の発生に備えた体制づくりのための研究や調査を行うことを目的として、災害時こころの情報支援センターが平成 23 年 12 月に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所に設置され、平成 30 年 4 月に「ストレス・災害時こころの情報支援センター」に改称された。災害及び事故・事件後の精神保健医療に係る助言・技術的支援、情報発信・連携に取り組んでいる。

令和 3 年度の当センターの構成は以下の通りである。センター長（併任）：金 吉晴，併任研究員：関口 敦，小川眞太郎，大沼麻実，成田 瑞，客員研究員：宮本有紀，種市康太郎，前田正治，高橋 晶，秋山 剛，富田博秋，本橋 豊，木津喜雅。

Ⅱ. 研究活動

- 1) WHO 版の心理的応急処置（PFA）の普及活動とアジアへの e-learning 普及研究
- 2) 災害後の心理的リカバリースキルの研究
- 3) 災害時精神保健医療対応に係るガイドライン作成

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- 1) 国立精神・神経医療研究センターHP上の「コロナに負けない心のケア」に「コロナに負けない不安との付き合い方」を掲載 (<https://www.ncnp.go.jp/nimh/behavior/anxiety/index.html>)。感情調整，セルフケア，コミュニケーション，呼吸法スキルを掲示した。令和3年6月から令和4年3月のあいだに76,827のページビューのアクセスがあった。（金，大沼）
- 2) 下記(3)の研修会を通じて研究成果の社会還元を行った。

(2) 専門教育面における貢献

- 1) WHO 版 PFA を日本に導入し，WHO との契約の下で，一般研修を継続した。
- 2) PFA の e-learning を作成し，マレーシア，フィリピン，タイへの普及研究を進めた。
- 3) オーストラリア国立 PTSD センターと共同で災害後の心理的リカバリースキルの研究に着手し，資料の翻訳を行った。
- 4) 各種学術団体で，心のマネジメントや災害時の精神的健康について講演を行った。
- 5) 専門家向けに PTSD や災害精神医療等についての講演を行った。
- 6) メディア取材を通じて専門知識の社会普及を行った。

(3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 2021 年度精神保健に関する技術研修。第 7 回および第 8 回災害時 PFA と心理対応研修を開催した（オンライン）。2021.6.22（57 名受講），2021.10.6（90 名受講）。（金，大沼）
- ・ 令和 3 年度「こころの健康づくり対策事業」補助金による PTSD 対策専門研修事業
災害・事故・犯罪・児童虐待などのトラウマ的体験をされた方々に対して，基本的な精神保健医療対応（こころのケア）を提供する人材を確保するため，精神保健医療福祉業務従事者等に対し，下記 3 コースをオンラインで実施した。
・ 心理的トラウマに関する理解を深め，初期対応，PTSD 等の治療の知識を得，基本的対応スキルを習得する通常コース（587 名受講）
A.通常コース 1 令和 3 年 10 月 29 日
A.通常コース 2 令和 3 年 11 月 19 日

・認知行動療法（持続エクスポージャー療法）による実際の治療事例を呈示し、患者の回復の可能性と経路を学習し、高度な専門支援のあり方を学ぶ専門コース（412名受講）

B.専門コース1 令和3年12月16日～17日

B.専門コース2 令和4年1月13日～14日

・犯罪・性犯罪被害者への適切な対応を行うために必要な専門的知識と心理社会的支援・治療対応について習得する犯罪・性犯罪被害者コース（333名受講）

C.犯罪・性犯罪被害者コース 令和4年2月9日～10日

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

① 公的委員会

- ・ふくしま心のケアセンター 顧問（金）
- ・みやぎ心のケアセンター 顧問（金）

② 研究成果の行政貢献

- ・厚生労働省令和3年度障害者総合福祉推進事業「自治体の災害時の精神保健医療福祉対策にかかる実態把握及び取り組みのあり方の検討」事業参画（金）
- ・厚生労働省「新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスとその影響に関する調査」事業検討会参画（金）

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

- ・WHO 保健救急・災害リスク管理のための研究方法に関するガイダンス共著
Historical developments in Health EDRM policy and research: the case study of Japan.
WHO Guidance on Research Methods for Health Emergency and Disaster Risk Management.（金）

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Kayano R, Lin M, Shinozaki Y, Nomura S, Kim Y: Long-Term Mental Health Support after Natural Hazard Events: A Report from an Online Survey among Experts in Japan. Int J Environ Res Public Health 19(5): 3022, 2022.

(2) 総説

- 1) 関口 敦: 災害ストレスと脳形態変化. 【災害メンタルヘルス】. 医学のあゆみ 278(2): 149-153. 2021.7.

(3) 著書

- 1) Egawa S, Sasaki H, Suppasri A, Tomita H, Imamura F, Nagami F, Kanatani Y, Eto A, Koido Y, Kubo T, Kato H, Kim Y, Mashino S, Kayano R: Historical developments in Health EDRM policy and research: the case study of Japan. WHO Guidance on Research Methods for Health Emergency and Disaster Risk Management, 2021.
- 2) 金 吉晴: 8. こころのケア. 國井 修, 尾島俊之. みんなで取り組む 災害時の保健・医療・福祉活動. 南山堂, 東京, pp146-151, 2022.

- 3) 大沼麻実：第3章 3.サイコロジカル・ファーストエイド～心理的応急処置：PFA～，災害歯科保健医療体制研修会標準テキスト，日本歯科医師会・災害歯科保健医療連絡協議会編，一世出版株式会社，東京，pp94-101，2021.

(4) 研究報告書

(5) 翻訳

(6) その他

- 1) 金 吉晴：特集 災害メンタルヘルス，はじめに．週刊医学のあゆみ 278(2)：127，2021.
- 2) 大沼麻実：e ラーニングコンテンツ「心理的応急処置(サイコロジカル・ファーストエイド; PFA) —危機的出来事に見舞われた人々への支援」．令和3年度厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合研究事業)「市町村保健師の災害時保健活動遂行能力の向上のための教育教材及びその活用マニュアル作成と検証」，2021.7.21.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 金 吉晴：災害後中長期の自治体のあるべき姿．日本医療政策機構メンタルヘルス政策プロジェクト専門家会合～自治体の災害時の精神保健医療福祉対策にかかる実態把握及び取り組みのあり方の検討～，オンライン開催，2022.2.25.

(2) 一般演題

(3) 研究報告会

(4) その他

C. 講演

- 1) 金 吉晴：地域における健康危機管理～災害時の心のケア～．令和3年度専門課程Ⅰ保健福祉行政管理分野分割前期，オンライン，2021.5.27.
- 2) 金 吉晴：災害と精神医療～安心・安眠のために～．Tokyo Mental Disorder Conference，東京，2021.5.28.
- 3) 金 吉晴：災害時におけるこころのケア 総論．令和3年度 災害時のこころのケア・PFA オンライン研修会，オンライン，2022.1.6.
- 4) 大沼麻実：災害時の心理的応急処置 (Psychological First Aid: PFA) について．令和3年度専門課程養成訓練，国立保健医療科学院，埼玉 (オンライン)，2021.5.27.
- 5) 大沼麻実：災害支援の心理的支援～サイコロジカル・ファーストエイドについて～．令和3年度災害・事故時のこころのケア対策事業関係職員研修，北九州市保健福祉局精神保健福祉センター，福岡 (オンライン)，2021.8.17.
- 6) 大沼麻実：心理的応急処置 (WHO 版 PFA) について．令和3年度パワーアップ研修講座「心のケア」，姫路市役所教育委員会 総合教育センター，兵庫 (オンライン)，2021.8.23.
- 7) 大沼麻実：「至誠と愛」の実践学修「Psychological First Aid(1), (2), (3)」．医学教養，東京女子医科大学，東京 (オンライン)，2021.10.7.
- 8) 大沼麻実：心理的応急処置．厚生労働省 医療関係者研修費等補助金 災害医療チーム等養成支援事業「2021年度災害歯科保健医療チーム養成支援事業」災害歯科保健医療体制研修会 東日本ブロック，公益社団法人日本歯科医師会，東京 (オンライン)，2021.11.27.

- 9) 大沼麻実：心理的応急処置. 厚生労働省 医療関係者研修費等補助金 災害医療チーム等養成支援事業「2021 年度災害歯科保健医療チーム養成支援事業」災害歯科保健医療体制研修会 中日本ブロック, 公益社団法人日本歯科医師会, 東京 (オンライン), 2021.12.18.
- 10) 大沼麻実：WHO 版 PFA について. 令和 3 年度災害時こころのケア・PFA オンライン研修会, 長野県精神保健福祉センター, 長野 (オンライン), 2022.1.6.
- 11) 大沼麻実：心理的応急処置. 厚生労働省 医療関係者研修費等補助金 災害医療チーム等養成支援事業「2021 年度災害歯科保健医療チーム養成支援事業」災害歯科保健医療体制研修会 西日本ブロック, 公益社団法人日本歯科医師会, 東京 (オンライン), 2022.1.22.
- 12) 大沼麻実：災害時の不安対応と心理的応急処置. 災害支援勉強会, 奈良県歯科衛生士会, 奈良 (オンライン), 2022.1.23.
- 13) 大沼麻実：心理的応急処置(PFA). 神奈川県立座間高等学校, 神奈川 (オンライン), 2022.1.27.
- 14) 大沼麻実：サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) 研修. 誘拐被害者家族支援研修, 外務省, 東京 (オンライン), 2022.3.4.
- 15) 大沼麻実：サイコロジカル・ファーストエイド (PFA) 研修. 誘拐被害者家族支援研修, 外務省, 東京 (オンライン), 2022.3.11.

D. 学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会 理事
- 2) 金 吉晴：自殺予防学会 理事
- 3) 金 吉晴：日本不安症学会 評議員
- 4) 関口 敦：日本心身医学会 幹事, 代議員
- 5) 関口 敦：日本摂食障害学会 評議員, 学術交流委員会

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board member
- 2) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会 編集委員長

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 金 吉晴, 大沼麻実：2021 年度精神保健に関する技術研修. 第 7 回災害時 PFA と心理対応研修. オンライン, 2021.6.22.
- 2) 金 吉晴, 大沼麻実：2021 年度精神保健に関する技術研修. 第 8 回災害時 PFA と心理対応研修. オンライン, 2021.10.6.
- 3) 金 吉晴：令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1. オンライン, 2021.10.29.
- 4) 金 吉晴：令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 2. オンライン, 2021.11.19.
- 5) 金 吉晴：令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1. オンライン, 2021.12.16-17.
- 6) 金 吉晴：令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2. オンライン, 2022.1.13-14.
- 7) 金 吉晴：令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コース. オンライン, 2022.2.9-10.

(2) 研修会講師

- 1) 金 吉晴：PTSD・PFA を学ぶ. 令和 3 年度精神保健福祉研修（前期），東京／オンライン開催，2021.6.4.
- 2) 金 吉晴：災害時のこころのケア総論. 2021 年度精神保健に関する技術研修 第 7 回災害時 PFA と心理対応研修，オンライン，2021.6.22.
- 3) 金 吉晴：災害時のこころのケア総論. 2021 年度精神保健に関する技術研修 第 8 回災害時 PFA と心理対応研修，オンライン，2021.10.6.
- 4) 金 吉晴：トラウマの概念と PTSD 診断. 令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1，オンライン，2021.10.29.
- 5) 金 吉晴：トラウマの概念と PTSD 診断. 令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1，2，オンライン，2021.11.19.
- 6) 金 吉晴：トラウマ後の心理社会支援. 令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1，オンライン，2021.12.16.
- 7) 伊藤正哉，井野敬子，金 吉晴：PTSD の心理療法各論 1，2. 令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1，オンライン，2021.12.17.
- 8) 丹羽まどか，金 吉晴：複雑性 PTSD. 令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1，オンライン，2021.12.17.
- 9) 金 吉晴：トラウマ後の心理社会支援. 令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1，オンライン，2022.1.13.
- 10) 伊藤正哉，井野敬子，金 吉晴：PTSD の心理療法各論 1，2. 令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2，オンライン，2022.1.14.
- 11) 丹羽まどか，金 吉晴：複雑性 PTSD. 令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2，オンライン，2022.1.14.
- 12) 大沼麻実：WHO 版 PFA ファシリテーターブースター研修. みやぎ心のケアセンター，宮城，2021.6.16.
- 13) 大沼麻実：PFA 概論(1)(2). 2021 年度精神保健に関する技術研修 第 7 回災害時 PFA と心理対応研修，オンライン，2021.6.22.
- 14) 大沼麻実：PFA 概論(1)(2). 2021 年度精神保健に関する技術研修 第 8 回災害時 PFA と心理対応研修，オンライン，2021.10.6.

F. その他

Ⅲ. 研 修 実 績

令和 3 年度研修報告

研究所事務室

精神保健研究所における研修は、国、地方公共団体精神保健福祉法第 19 条の規定による指定病院等において精神保健の業務に従事する医師、保健師、看護師、作業療法士、臨床心理業務に従事する者、精神科ソーシャルワーカー等を対象に、精神保健技術者として必要な資質の向上を図ることを目的として精神保健各般にわたり必要な知識及び技術の研修を行うものである。令和 3 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴い対面形式での研修実施が困難なため、オンライン開催とし摂食障害治療研修、災害時 PFA と心理対応研修（2 回）、薬物依存症臨床医師研修、薬物依存症臨床看護等研修、発達障害者支援研修（4 回）、認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修、PTSD 対策専門研修（5 回）、精神科救急医療体制整備研修の計 16 回の研修を合計 1,969 名に対して実施した。

《摂食障害治療研修》

令和3年6月9日から6月11日まで、第18回摂食障害治療研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、病院、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害に関心を有する医療従事者（精神科、心療内科、一般内科、小児科で臨床に従事している医師、臨床心理業務等に従事する者、看護師および保健師、作業療法士、精神保健福祉士、栄養士等）83名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催とした。

課程主任 関口 敦

6月9日（水）

摂食障害の疫学・病態・治療概論
初期対応と外来診療
入院治療
心理教育

安藤 哲也
高倉 修
竹林 淳和
小原 千郷

6月10日（木）

小児例の初期対応と診療
精神障害・パーソナリティ障害を合併する摂食障害
身体合併症・身体的管理
ガイドド・セルフヘルプ

宇佐美 政英
西園 マーハ文
鈴木 眞理
中里 道子

6月11日（金）

家族支援と家族療法
当事者の話を聞く
症例検討
質疑応答

森野 百合子
武田 綾
佐藤 康弘
佐藤 康弘・小原 千郷・関口 敦

講師名簿

関口 敦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
安藤 哲也	国際医療福祉大学成田病院心療内科教授
高倉 修	九州大学病院心療内科診療講師
竹林 淳和	浜松医科大学附属病院精神科神経科講師
小原 千郷	文教大学人間学部臨床心理学科特任専任講師
宇佐美 政英	国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科診療科長
西園 マーハ文	明治学院大学心理学部心理学科教授
鈴木 眞理	跡見学園女子大学心理学部臨床心理学科特任教授
中里 道子	国際医療福祉大学医学部精神医学主任教授
森野 百合子	医療法人社団翠会成増厚生病院成増子どもの心ケアセンター準備室長

武田 綾	NPO 法人のびの会心理療法士
佐藤 康弘	東北大学病院心療内科講師

《災害時 PFA と心理対応研修》

令和 3 年 6 月 22 日，第 7 回災害時 PFA と心理対応研修を実施し，「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）」に関する基本技能を習得する．また悲嘆，子どもの反応について理解し，不安軽減のためのスキルを習得する．」を主題に，自然災害，甚大事故，犯罪，テロ等のトラウマ的出来事に際して，実際に被災者，被害者へのこころのケア対応にあたる可能性のある，精神保健医療福祉業務に従事する医師，看護師，保健師，精神保健福祉士，臨床心理技術者，行政職員，教育関係者等 57 名に対して研修を行った．

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い，研修期間を 2 日間から 1 日に変更した．研修は演習を実施せず概論のみとなり，リカバリースキル研修は行われなかった．

課程主任 金 吉晴 課程副主任 大沼 麻実

6 月 22 日（火）

災害時のこころのケア・総論	金 吉晴
PFA 概論（1）	大沼 麻実
PFA 概論（2）・リラクゼーション実習	大沼 麻実・大滝 涼子
災害時の子どものトラウマと反応	福地 成

講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部部長
大沼 麻実	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部研究員
大滝 涼子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部研究生
福地 成	東北医科薬科大学精神科学教室病院准教授

《発達障害者支援研修》

令和3年6月30日から7月1日まで、第2回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅠを実施し、「ライフステージごとの発達障害児・者の課題と支援の実践」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師（特に指導につて責任的立場にある者）、自治体（都道府県、政令指定都市）において、行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員40名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 岡田 俊 課程副主任 石井 礼花・魚野 翔太

6月30日（水）

発達障害児・者に対する行政施策	加藤 永歳
発達障害のある子の養育支援	小平 雅基
発達障害のある子の療育	吉川 徹
移行期医療〔トランジション〕をめぐる課題（講義、実習）	奥野 正景

7月1日（木）

成人期の日常生活、就労への支援	本田 秀夫
高齢期の生活実態と支援	日詰 正文
学童期・思春期の課題とその支援	小野 和哉
発達障害とジェンダー	館農 勝

講師名簿

加藤 永歳	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課障害児・発達障害者支援室 発達障害対策専門官
小平 雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長
吉川 徹	愛知県医療療育総合センター中央病院子どものこころ科部長
奥野 正景	医療法人サヂカム会三国丘こころのクリニック院長
本田 秀夫	信州大学医学部子どものこころの発達医学教室教授 信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部部長
日詰 正文	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園総務企画局研究部部長
小野 和哉	聖マリアンナ医科大学神経精神医学教室特任教授
館農 勝	特定医療法人さっぽろ悠心の郷ときわ病院理事長

《薬物依存臨床医師研修》 《薬物依存臨床看護等研修》

令和3年9月8日から9月10日まで、第34回薬物依存臨床医師研修ならびに第22回薬物依存臨床看護等研修を実施し、「薬物依存症概念の理解と薬物依存症に対する臨床的対応の普及」を主題に、精神科病院、精神保健福祉センター等に勤務する医師17名、看護師等44名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 嶋根 卓也・船田 正彦

9月8日(水)

薬物依存症臨床総論	松本 俊彦
行動薬理学からみた薬物依存（精神依存，身体依存）	船田 正彦
覚せい剤精神疾患の生物学的病態	曾良 一郎

9月9日(木)

薬物乱用・依存の疫学	嶋根 卓也
精神保健福祉センターにおける薬物依存への取り組み	源田 圭子
民間回復支援施設の活動と課題	嶋根 卓也・栗坪 千明
大麻によって発現する動物の異常行動	三島 健一

9月10日(金)

薬物依存症女性の理解と支援	森田 展彰
薬物依存症者家族の支援について	吉田 精次
回復と自助活動（当事者による体験談）	当事者・家族
ベンゾジアゼピン系薬物の基礎と臨床	稲田 健

講師名簿

松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
船田 正彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
曾良 一郎	神戸大学大学院医学研究科精神医学分野教授
源田 圭子	東京都福祉保健局都立精神保健福祉センター地域援助医長
栗坪 千明	栃木ダルク代表
三島 健一	福岡大学薬学部生体機能制御学研究室教授
森田 展彰	筑波大学医学医療系社会精神保健学研究室准教授
吉田 精次	藍里病院副院長
	あいざと依存症研究所所長
稲田 健	東京女子医科大学医学部医学科神経精神科准教授

《発達障害者支援研修》

令和3年9月28日から9月29日まで、第2回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅡを実施し、「発達障害者に対する包括的支援およびかかりつけ医研修」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師（特に指導について責任的立場にある者）、自治体（都道府県、政令指定都市）において、行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員65名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 住吉 太幹 課程副主任 熊崎 博一

9月28日（火）

厚生労働省発達障害者支援施策について	加藤 永歳
発達障害の感覚特性	熊崎 博一
思春期・青年期の発達障害	中村 元昭
発達障害の早期支援	原口 英之
神経発達症の早期介入システムにおける母子と家族への支援の意義	山下 洋

9月29日（水）

初心者のための発達障害診療の心得	木下 直俊
発達障害研究における最近のトピックス～脳画像研究とその役割～	山末 英典
かかりつけ医の果たす役割	奥野 正景
神経発達症と睡眠	堀内 史枝
地域連携の在り方（ワークショップ）	田中 尚樹

講師名簿

熊崎 博一	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神医学研究部室長
原口 英之	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神医学研究部 研究生
加藤 永歳	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課障害児・発達障害者支援室 発達障害対策専門官
中村 元昭	昭和大学発達障害医療研究所副所長／准教授
山下 洋	九州大学病院子どものこころの診療部特任准教授
木下 直俊	兵庫県立ひょうごこころの医療センター精神科部長
山末 英典	浜松医科大学医学部精神医学講座教授
奥野 正景	医療法人サザカム会三国丘心のクリニック院長
堀内 史枝	愛媛大学医学部附属病院子どものこころセンター長

田中 尚樹 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課障害児・発達障害者支援室
発達障害施策調整官

《災害時 PFA と心理対応研修》

令和3年10月6日、第8回災害時 PFA と心理対応研修を実施し、「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）」に関する基本技能を習得する。また悲嘆、子どもの反応について理解し、不安軽減のためのスキルを習得する。」を主題に、自然災害、甚大事故、犯罪、テロ等のトラウマ的出来事に際して、実際に被災者、被害者へのこころのケア対応にあたる可能性のある、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、臨床心理技術者、行政職員、教育関係者等 91 名に対して研修を行った。

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、研修期間を2日間から1日に変更した。研修は演習を実施せず概論のみとなり、リカバリースキル研修は行われなかった。

課程主任 金 吉晴 課程副主任 大沼 麻実

10月6日（水）

災害時のこころのケア-総論

金 吉晴

PFA 概論（1）

大沼 麻実

PFA 概論（2）・リラクゼーション実習

大沼 麻実・大滝 涼子

災害時の子どものトラウマと反応

福地 成

講師名簿

金 吉晴

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部部長

大沼 麻実

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部研究員

大滝 涼子

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部研究生

福地 成

東北医科薬科大学精神科学教室病院准教授

《令和 3 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 3 年 10 月 29 日、令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1 を実施し、「災害被災者、犯罪・事故被害者、災害遺族、被虐待児童等、トラウマに対するこころのケアが必要な方に対応できる人材を確保するため、精神保健医療従事者等に対しトラウマに対するこころのケアにおいて必要な知識を系統的に習得する。」を主題に、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士の資格を有する方。または公的機関や教育機関に勤務し、精神保健医療福祉業務に従事する方 238 名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

10 月 29 日（金）

トラウマの基本対応	西 大輔
トラウマの概念と PTSD 診断	金 吉晴
PTSD 治療	井野 敬子
子どものトラウマ	小平 かやの

講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
井野 敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
西 大輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所公共精神健康医療研究部部長
小平 かやの	東京都児童相談センター治療指導課課長

《認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修》

令和3年11月15日から11月16日まで、第13回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修を実施し、「薬物依存症者の臨床的特徴と治療に関するエビデンスを理解し、直面化を避けた動機づけ面接の重要性を理解し、薬物依存症に対する集団認知行動療法のファシリテーションの実際を学ぶとともに、家族支援への理解を深める」を主題に、医療機関、行政機関、司法機関、民間回復施設等で薬物依存症者の援助に従事している者117名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 今村 扶美

11月15日(月)

薬物依存症患者への対応の基本	成瀬 暢也
SMARPP の理念と意義	松本 俊彦
SMARPP の実際	松本 俊彦
SMARPP ビデオ学習	松本 俊彦
グループワーク (1)	今村 扶美

11月16日(火)

薬物乱用・依存の疫学	嶋根 卓也
社会資源 (1) ～精神保健福祉センターにおける支援～	佐々木 祐子
社会資源 (2) ～民間リハビリ施設と自助グループ～	加藤 隆
薬物依存症臨床における司法的問題への対応	松本 俊彦
デモセッション	今村 扶美
グループワーク (2)	今村 扶美
まとめとディスカッション	松本 俊彦

講師名簿

松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
今村 扶美	国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理部臨床心理室室長
成瀬 暢也	埼玉県立精神医療センター副病院長
佐々木 祐子	横浜市健康福祉局こころの健康相談センター依存症等対策担当係長
加藤 隆	NPO 法人八王子ダルク代表理事

《令和 3 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 3 年 11 月 19 日、令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 2 を実施し、「災害被災者、犯罪・事故被害者、災害遺族、被虐待児童等、トラウマに対するこころのケアが必要な方に対応できる人材を確保するため、精神保健医療従事者等に対しトラウマに対するこころのケアにおいて必要な知識を系統的に習得する」を主題に、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士の資格を有する方。または公的機関や教育機関に勤務し、精神保健医療福祉業務に従事する方 349 名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

11 月 19 日（金）

トラウマの基本対応	西 大輔
トラウマの概念と PTSD 診断	金 吉晴
PTSD 治療	井野 敬子
子どものトラウマ	小平 雅基

講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
井野 敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
西 大輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所公共精神健康医療研究部部長
小平 雅基	愛育クリニック小児精神保健科部長

《発達障害者支援研修》

令和3年11月25日から11月26日まで、第2回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅢを実施し、「発達障害児・者に併存する課題とその治療・支援」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師（特に指導について責任的立場にある者）、自治体（都道府県、政令指定都市）において、行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員52名に対して研修を行った。また新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 岡田 俊 課程副主任 石井 礼花・魚野 翔太

11月25日（木）

発達障害と不登校・ひきこもり	宇佐美 政英
発達障害児・者の医療受診の工夫	田中 恭子
発達障害と被虐待	山下 浩
重度心身障害児・者への医療と支援	小沢 浩

11月26日（金）

強度行動障害	會田 千重
発達障害と遺伝	中川 栄二
当事者や家族のネットワークと支援	田中 尚樹
かかりつけ医研修の実際（講義、実習）	岡田 俊・石井 礼花

講師名簿

岡田 俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
石井 礼花	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
中川 栄二	国立精神・神経医療研究センター病院特命副院長／外来部長

宇佐美 政英 国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科診療科長

田中 恭子	国立成育医療研究センターこころの診療部児童・思春期リエゾン診療科診療部長
山下 浩	さいたま市子ども家庭総合センター副理事
小沢 浩	島田療育センターはちおうじ所長
會田 千重	肥前精神医療センター療育指導科長
田中 尚樹	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課障害児・発達障害者支援室 発達障害対策専門官

《令和 3 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 3 年 12 月 16 日から 12 月 17 日まで、令和 3 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1 を実施し、「精神保健福祉センター、病院、保健所等において、PTSD に関する専門家が必要とされていることを踏まえ、精神保健医療従事者等に対し、最先端の専門的知識あるいは技術の習得をさせ、有効かつ安全に治療を行うことができる人材を養成する」を主題に、症例呈示のため、職業上守秘義務を持っている精神保健医療従事者（医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士） 205 名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

12 月 16 日（木）

PTSD の診断と評価	大江 美佐里
トラウマ後の心理社会支援	金 吉晴
PTSD の神経科学と薬物療法	堀 弘明
PTSD のソーシャルワーク	大岡 由佳

12 月 17 日（金）

PTSD の心理療法各論 1	伊藤 正哉・井野 敬子・金 吉晴
PTSD の心理療法各論 2	伊藤 正哉・井野 敬子・金 吉晴
複雑性 PTSD	丹羽 まどか・金 吉晴
複雑性悲嘆の心理療法	中島 聡美

講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
堀 弘明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
井野 敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
丹羽 まどか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部研究員
伊藤 正哉	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研究開発部長
大江 美佐里	久留米大学医学部神経精神医学講座准教授
大岡 由佳	武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科准教授
中島 聡美	武蔵野大学人間科学部教授

《令和3年度 PTSD 対策専門研修》

令和4年1月13日から1月14日まで、令和3年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース2を実施し、「精神保健福祉センター、病院、保健所等において、PTSDに関する専門家が必要とされていることを踏まえ、精神保健医療従事者等に対し、最先端の専門的知識あるいは技術の習得をさせ、有効かつ安全に治療を行うことができる人材を養成する」を主題に、症例呈示のため、職業上守秘義務を持っている精神保健医療従事者（医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士）207名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

1月13日（木）

PTSD の診断と評価

大江 美佐里

トラウマ後の心理社会支援

金 吉晴

PTSD の神経科学と薬物療法

堀 弘明

PTSD のソーシャルワーク

大岡 由佳

1月14日（金）

PTSD の心理療法各論1

伊藤 正哉・井野 敬子・金 吉晴

PTSD の心理療法各論2

伊藤 正哉・井野 敬子・金 吉晴

複雑性 PTSD

丹羽 まどか・金 吉晴

複雑性悲嘆の心理療法

中島 聡美

講師名簿

金 吉晴 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長

堀 弘明 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長

井野 敬子 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長

丹羽 まどか 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部研究員

伊藤 正哉 国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研究開発部長

大江 美佐里 久留米大学医学部神経精神医学講座准教授

大岡 由佳 武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科准教授

中島 聡美 武蔵野大学人間科学部教授

《発達障害者支援研修》

令和4年1月25日から1月26日まで、第2回発達障害者支援研修：行政実務研修を実施し、「自治体における発達障害者支援体制の整備およびかかりつけ医研修」を主題に、行政的な立場で各自治体の「かかりつけ医等発達障害対応力向上研修」の企画・実施に携わる者、もしくは発達障害者支援センター職員25名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 住吉 太幹 課程副主任 熊崎 博一

1月25日（火）

発達障害者支援施策について	加藤 永歳
対応の難しい子ども達のための、各支援施設の役割	
ー各施設の教育の構造化に焦点化してー	松浦 直己
豊田市における早期支援システム	
ー幼児期の自閉スペクトラム症(ASD)を中心にー	若子 理恵
地域支援の実践（新潟県）～児童精神科病棟の役割と多機関連携～	杉本 篤言
地域支援の実践（鹿児島県）～紹介票と聞き取り票による診断前支援～	外岡 資朗
地域支援の実践（横須賀市）	広瀬 宏之
地域連絡会	

1月26日（水）

地域支援の実践（北海道）	
ー札幌市での児童思春期精神科医療の地域支援の実践の現状～	齋藤 卓弥
ペアレント・トレーニングの地域への普及のために	井上 雅彦
地域支援の実践（長崎県）～長崎県における地域支援の実際～	今村 明
神経発達症の最近の話題と研究紹介	小坂 浩隆
地域連携の在り方（ワークショップ）	田中 尚樹

講師名簿

加藤 永歳	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課障害児・発達障害者支援室 発達障害対策専門官
松浦 直己	三重大学教育学部教授 教育学部附属小学校・附属中学校・附属特別支援学校 校長
若子 理恵	豊田市こども発達センター長
杉本 篤言	新潟大学大学院医歯学総合研究科地域精神医療学寄附講座特任講師
外岡 資朗	鹿児島県こども総合療育センター所長
広瀬 宏之	横須賀市療育相談センター所長
齋藤 卓弥	北海道大学病院児童思春期精神医学研究部門特任教授
井上 雅彦	鳥取大学大学院医学系研究科教授

今村 明	長崎大学生命医科学域保健学系作業療法学分野 長崎大学病院地域連携児童思春期精神医学診療部教授
小坂 浩隆	福井大学医学部精神医学教授
田中 尚樹	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課障害児・発達障害者支援室 発達障害施策調整官

《精神科救急医療体制整備研修》

令和4年2月5日、第1回精神科救急医療体制整備研修を実施し、「精神科救急医療体制整備事業の現状と課題について理解したうえで、精神科救急医療体制整備に関連する課題やデータの見方、ReMHRADの見方と使い方等を学び、各自治体の精神科救急体制整備に係る施策の立案やモニタリングのためのスキルを習得する」を主題に、都道府県精神科救急医療体制整備事業担当者および精神医療相談窓口相談担当者46名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 藤井 千代

2月5日（土）

精神科救急医療体制整備事業について	森 恩
精神科救急医療の現状と課題	杉山 直也
「精神科救急医療体制整備に係るワーキンググループ」について	来住 由樹
「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」について	藤井 千代
各自治体の精神科救急医療体制に関するデータの見方と使い方	平田 豊明
各自治体の精神科救急医療体制整備事業の現状と課題等に関するグループワーク	塚本 哲司

講師名簿

藤井 千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神医療研究部 部長
森 恩	厚生労働省精神・障害保健課課長補佐
杉山 直也	公益財団法人復康会沼津中央病院院長
来住 由樹	岡山県精神科医療センター院長
平田 豊明	千葉県精神科医療センター名誉病院長
塚本 哲司	埼玉県立精神医療センター療養援助部部長

《令和3年度 PTSD 対策専門研修》

令和4年2月9日から2月10日まで、令和3年度 PTSD 対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コースを実施し、「犯罪・性犯罪被害者への適切な対応を行うために必要な専門的知識と心理社会的支援・治療対応について習得する」を主題に、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士の資格を有する方。または公的機関や教育機関に勤務し、精神保健医療福祉業務に従事する方 333 名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

2月9日(水)

犯罪被害者のメンタルヘルスと治療・対応	中島 聡美
犯罪被害者支援	大岡 由佳
虐待を受けた子どもの治療	小平 雅基
犯罪被害者に係る司法制度	柑本 美和

2月10日(木)

子どもの性暴力被害者のメンタルヘルス・治療・対応	野坂 祐子
性暴力被害者への治療	齋藤 梓
犯罪被害者遺族の心理・ケア・治療	白井 明美
犯罪被害者支援と司法	小西 聖子

講師名簿

中島 聡美	武蔵野大学人間科学部教授
大岡 由佳	武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科准教授
小平 雅基	愛育クリニック小児精神保健科部長
柑本 美和	東海大学法学部法律学科教授
野坂 祐子	大阪大学大学院人間科学研究科准教授
齋藤 梓	目白大学心理カウンセリング学科専任講師
白井 明美	国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部心理学科教授
小西 聖子	武蔵野大学人間科学部教授

研修の推移

国 立 精 神 衛 生 研 究 所				
	36年6月～		54年度～	61年度
研 修 課 程	・医学科研修 ・心理学科研修 ・社会福祉学科研修 ・精神衛生指導科研修	→	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修

国立精神・神経センター精神保健研究所						
研	61年度		62年度～	18年度～	20年度	21年度
修	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修	→ →	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神保健指導過程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修	・精神保健指導過程研修 ・精神科デイ・ケア課程研修 ・発達障害支援課程研修 ・摂食障害治療課程研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・ACT研修 ・薬物依存臨床課程研修 ・児童思春期精神医学研修 ・司法精神医学課程研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修	・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修	・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修
	課					
程						・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
	22年度	23年度	24年度
研 修 課 程	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・司法精神医学研修 ・PTSD医療研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・発達障害精神医療研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・ACT研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・不眠症の認知行動療法研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・PTSD認知行動療法基本研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
研 修 課 程	25年度	26年度	27年度
	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修 ・ACT・多職種アウトリーチ研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・医療における個別就労支援研修 ・司法精神医学ワンデイセミナー	・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修 ・医療における包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・司法精神医学ワンデイセミナー ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・心理職自殺予防研修 ・メンタルヘルス問題への初期対応指導者研修 ・司法精神医学研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・精神科急性期医療の質を考える研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
研 修 課 程	28年度	29年度	30年度
	・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・地域自殺対策推進企画研修 ・摂食障害治療研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・自殺対策・相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・司法精神医学研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 ・摂食障害看護研修	・発達障害地域包括支援研修: 早期支援 ・発達障害支援医学研修 ・摂食障害治療研修 ・地域精神科モデル医療研修プレセミナー ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・自殺対策・相談支援研修 ・発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療 ・精神保健指導課程研修 ・司法精神医学研修 ・摂食障害看護研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修	・災害時PFAと心理対応研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害地域包括支援研修: 早期支援 ・摂食障害治療研修 ・精神障害者地域包括支援研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・地域におけるリスクアセスメント研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療 ・摂食障害看護研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修
研 修 課 程	31・令和1年度	令和2年度	令和3年度
	・災害時PFAと心理対応研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害地域包括支援研修: 早期支援 ・摂食障害治療研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・地域におけるリスクアセスメント研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修	・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修: 指導者養成研修 ・発達障害者支援研修: 行政実務研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修	・摂食障害治療研修 ・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修: 指導者養成研修 ・発達障害者支援研修: 行政実務研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和3年度PTSD対策専門研修

令和3年度精神保健に関する技術研修課程 実施計画表

研 修 日 程	課 程 名	申込み方法		申込み期間	受講料	会 場	定 員	主 任 副主任	
		WEB	自治体 推薦						
令和3年 6月9日(水)～11日(金)	【オンライン開催】 (第18回)摂食障害治療研修	○*		4月1日(木)～4月20日(火)	¥15,000	オンライン	100	関口 敦	
6月22日(火)	【オンライン開催】 (第7回)災害時PFAと心理対応研修	○*		4月5日(月)～4月26日(月)	¥6,000	オンライン	80	金 吉晴 大沼 麻実	
6月30日(水)～7月1日(木)	【オンライン開催】 (第2回)発達障害者支援研修: 指導者養成研修パートⅠ		○	4月12日(月)～4月30日(金) (5月17日(月))	無料	オンライン	50	岡田 俊 魚野 翔太	
9月8日(水)～10日(金)	【オンライン開催】 (第34回)薬物依存臨床医師研修	○		7月2日(金)～7月16日(金)	¥20,000	オンライン	50	松本 俊彦 松田 正彦 嶋根 卓也	
	(第22回)薬物依存臨床看護等研修						50		
9月28日(火)～29日(水)	【オンライン開催】 (第2回)発達障害者支援研修: 指導者養成研修パートⅡ		○	7月9日(金)～7月30日(金) (8月16日(月))	無料	オンライン	50	住吉 太幹 熊崎 博一	
10月6日(水)	【オンライン開催】 (第8回)災害時PFAと心理対応研修	○*		7月20日(火)～8月9日(月)	¥6,000	オンライン	80	金 吉晴 大沼 麻実	
10月29日(金)	【オンライン開催】 PTSD対策専門研修 A.通常コース1	○*		9月15日(水)～10月10日(日)	無料	オンライン	200	金 吉晴	
11月15日(月)～16日(火)	【オンライン開催】 (第13回)認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修	○		9月6日(月)～9月27日(月)	¥12,000	オンライン	100	松本 俊彦 今村 扶美	
11月19日(金)	【オンライン開催】 PTSD対策専門研修 A.通常コース2	○*		9月15日(水)～10月20日(水)	無料	オンライン	200	金 吉晴	
11月25日(木)～26日(金)	【オンライン開催】 (第2回)発達障害者支援研修: 指導者養成研修パートⅢ		○	9月7日(火)～9月28日(火) (10月12日(火))	無料	オンライン	50	岡田 俊 魚野 翔太	
12月16日(木)～17(金)	【オンライン開催】 PTSD対策専門研修 B.専門コース1	○*		9月15日(水)～11月15日(月)	無料	オンライン	150	金 吉晴	
令和4年 1月13日(木)～14日(金)	【オンライン開催】 PTSD対策専門研修 B.専門コース2	○*		9月15日(水)～12月13日(月)	無料	オンライン	150	金 吉晴	
1月25日(火)～26日(水)	【オンライン開催】 (第2回)発達障害者支援研修:行政実務研修		○	11月1日(月)～11月22日(月) (12月7日(火))	無料	オンライン	67 組	住吉 太幹 熊崎 博一	
2月5日(土)	【オンライン開催】 (第1回)精神科救急医療体制整備研修	○		11月24日(水)～12月13日(月)	無料	オンライン	60	藤井 千代	
2月9日(水)～10日(木)	【オンライン開催】 PTSD対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コース	○*		9月15日(水)～1月7日(金)	無料	オンライン	300	金 吉晴	

※
推薦状
が必要
な研修

IV. ランチョンセミナー実績および研究報告会抄録集

1. 令和3年度 精神保健研究所 ランチョンセミナー

(毎月第1月曜日 12:00～13:00 オンライン開催)

日付	回次	演題	発表研究部	演者	参加人数
2021年7月5日	第40回	精神疾患の克服のための病態解明研究とその障害支援のための社会実装研究	精神疾病病態研究部	部長 橋本 亮太	54名
2021年8月2日	第41回	PTSDの病態と治療	行動医学研究部	金 吉晴 (精神保健研究所所長)	67名
2021年9月6日	第42回	トランスレータブル脳指標を用いた基礎研究から精神疾患の共通病態基盤の解明を目指して	精神薬理研究部	室長 三輪 秀樹	47名
2021年10月4日	第43回	Public Mental Health Research	公共精神健康医療研究部	部長 西 大輔	45名
2021年11月1日	第44回	自己の神経回路基盤とその形成過程の解明	児童・予防精神医学研究部	室長 松元 まどか	55名
2021年12月6日	第45回	新たな睡眠健康の疫学指標と国民健康施策	睡眠・覚醒障害研究部	部長 栗山 健一	46名
2022年1月17日	第46回	精神障害当事者の地域生活にかかわるエビデンス紹介サイトの開発とその意義	地域・司法精神医療研究部	室長 佐藤 さやか	42名
2022年2月7日	第47回	薬物乱用の有害性評価：基礎研究から行政への橋渡し	薬物依存研究部	室長 船田 正彦	56名
2022年3月7日	第48回	神経発達症とメンタルヘルス	知的・発達障害研究部	部長 岡田 俊	68名

令和3年度 精神保健研究所リサーチ委員会
岡田 俊 小川真太朗 曾雌崇弘 羽澄 恵 松元まどか

2. 令和3年度 精神保健研究所 研究報告会 プログラム・抄録集

会 期：令和4年3月28日（月）

会 場：オンライン開催

9:15	開場
9:30	開会の辞（理事長 中込和幸、ご挨拶 金 吉晴）
9:40	精神薬理研究部（座長 山田光彦） 演者 小林桃子 演者 古家宏樹
10:10	児童・予防精神医学研究部（座長 住吉太幹） 演者 飯島和樹 演者 藤里紘子
10:40	休憩
10:50	睡眠・覚醒障害研究部（座長 栗山健一） 演者 北村真吾 演者 河村葵
11:20	知的・発達障害研究部（座長 岡田 俊） 演者 石井礼花 演者 請園正敏
11:50	昼食
12:50	地域・司法精神医療研究部（座長 藤井千代） 演者 山口創生 演者 塩澤拓亮
13:20	行動医学研究部（座長 金 吉晴） 演者 関口 敦 演者 河西ひとみ
13:50	ストレス・災害時こころの情報支援センター（座長 金 吉晴） 演者 成田 瑞
14:05	休憩
14:20	薬物依存研究部（座長 松本俊彦） 演者 嶋根卓也 演者 喜多村真紀
14:50	公共精神健康医療研究部（座長 西 大輔） 演者 西 大輔 演者 羽澄 恵
15:20	精神疾患病態研究部（座長 橋本亮太） 演者 三浦健一郎 演者 松本純弥
15:50	閉会の辞（所長 金 吉晴）
16:00	

令和3年度 精神保健研究所リサーチ委員会
岡田俊 小川眞太郎 曾雌崇弘 羽澄恵 松元まどか

お知らせとお願い

＜発表者の皆様へ＞

1. 発表時間

発表時間は1演題につき14分（発表10分、質疑応答4分）です。発表者の交替を含め演題15分の時間を確保してありますので、時間を厳守して下さい。

2. 発表形式および発表用ファイルの仕様

Power Pointでの発表用ファイル作成をお願いします。

3. 発表用ファイルの提出

Zoomによる開催ではありますが、発表中の不測の事態の回避やバックアップのため、発表用ファイルの提出をお願いします。ファイル名は、研究部名_発表者名.pptxとしてください。

3月22日(火)までにリサーチ委員会（tokada@ncnp.go.jp）までメール添付で送付してください。あわせて緊急連絡先（内線番号など）もお知らせください。

4. 通信状況の確認

当日の通信状況やZoom操作に不安がある場合には、事前に試写等の機会を設けますので、上記アドレスよりご依頼ください。

5. お願い

当日は、少なくともひとつ前の回に行われている発表から参加してお待ちください。発表時間はタイマーを掲示しますので、それを参考に発表時間を遵守してください。

＜座長へのお願い＞

1. 座長は各部長をお願いします。タイトなスケジュールですので、発表時間を厳守して進行をお願いします。

2. 次の座長と発表者は、ひとつ前の回に行われている発表までには参加してお待ちください。

＜すべての参加者の皆様へ＞

1. セッションの参加に当たっては【事前登録】が必要です。QRコード（または以下のURL）より登録してください。リサーチ委員会（tokada@ncnp.go.jp）までメールをいただければ、下記のURLをお送りすることも可能です。

https://zoom.us/meeting/register/tJUpcOqrpj8rE9I80zMBM_xuWe88DBgDEXje



2. すべてのセッションにご参加いただいた先生には、若手発表奨励賞の投票をいただきます。投票方法は当日にご案内を申し上げます。

3. 各部長は、若手奨励賞とともに青申賞の投票をお願い申し上げます。投票方法につきましては別途ご案内を申し上げます。

プログラム

【開会】 9:30 ～ 9:40

開会の辞 国立精神・神経医療研究センター 理事長 中込和幸

ご挨拶 精神保健研究所 所長 金 吉晴

【報告1】 9:40 ～ 10:10 精神薬理研究部 座長 山田 光彦

***統合失調症関連遺伝子WDR3の中枢神経系における発現と機能の検討**

○小林桃子, 古家宏樹, 山田美佐, 山田光彦

NMDA受容体NR2Aサブユニットの新生仔期における機能阻害は空間作業記憶の発達を障害する

○古家宏樹, 山田光彦

【報告2】 10:10 ～ 10:40 児童・予防精神医学研究部 座長 住吉 太幹

***遠心性コピーの皮質ダイナミクス：マーマセツト発声中の大規模皮質脳波**

○飯島和樹, 小松三佐子, 鈴木航, 山森哲雄, 一戸紀孝, 松元まどか

***青年のうつ・不安に対する診断横断的認知行動療法— パイロット試験の経過報告 —**

○藤里紘子, 伊藤正哉, 堀越勝, 金子響介, 竹林由武, 高橋りや, 生田目光, 加藤典子, 久我弘典, 住吉太幹

(休憩)

【報告3】 10:50 ～ 11:20 睡眠・覚醒障害研究部 座長 栗山 健一

学童の年齢と生体リズム・体温調節・睡眠の関連

○北村真吾, 榎本みのり, 中崎恭子, 肥田昌子, 三島和夫

***携帯型1-channel脳波計による睡眠評価システムの有用性検証**

○河村葵, 吉池卓也, 松尾雅博, 角谷寛, 尾池祐輝, 川崎翠, 車井祐一, 長尾賢太郎, 鷹見将規, 山田尚登, 栗山健一

【報告4】 11:20 ～ 11:50 知的・発達障害研究部

座長 岡田 俊

成育環境が注意欠如・多動症児の愛着に関連する神経基盤に与える影響

○石井礼花, 鈴木茜音, 眞神花帆, 金生由紀子, 岡田俊

*バブルプロ酸自閉症モデルマウスにおける新規社会性の検討

○請園正敏, 岡田俊

(昼食)

【報告5】 12:50 ～ 13:20 地域・司法精神医療研究部

座長 藤井 千代

研究における患者・市民参画についての当事者・家族・支援者・行政職員・研究者の見解：テーマ分析

○山口創生, 阿部真貴子, 川口敬之, 五十嵐百花, 塩澤拓亮, 小川亮, 安間尚徳, 佐藤さやか, 宮本有紀, 藤井千代

*精神疾患当事者や多様な関係者が地域精神保健研究において重要と考える評価項目枠組みの開発：デルファイ法による検討

○塩澤拓亮, 小川亮, 川口敬之, 五十嵐百花, 阿部真貴子, 安間尚徳, 山口創生, 藤井千代

【報告6】 13:20 ～ 13:50

行動医学研究部

座長 金 吉

晴

摂食障害脳画像データベースの構築と脳画像診断マーカーの解明

○関口敦, 高村恒人, 菅原彩子, 船場美佐子, 佐藤康弘, 平野好幸, 吉内一浩, 野原伸展, 磯部昌憲, 戸瀬景菜, 兒玉直樹, 吉原一文, 権藤元治, 小原千郷, 井野敬子, 小川眞太郎, 堀弘明, 守口善也, 金吉晴

*PTSD女性患者における自殺リスク：幼少期被虐待体験、炎症マーカー、炎症系遺伝子多型との関連

○河西ひとみ, 堀弘明, 吉田冬子, 伊藤真利子, 林明明, 丹羽まどか, 井野敬子, 今井理紗, 関口敦, 加茂登志子, 功刀浩, 金吉晴

【報告7】 13:50 ～ 14:05

ストレス・災害時こころの情報支援センター 座長 金 吉

晴

*東日本大震災後のメディア曝露が親子のメンタルヘルスに与える長期的な影響：縦断的解析

大沼麻実, ○成田瑞, 立森久照, 住吉太幹, 白間綾, 菅知絵美, 神尾陽子, 金吉晴

(休憩)

【報告8】 14:20 ～ 14:50 薬物依存研究部 座長 松本 俊彦

覚醒剤事犯者の理解とサポート：法務総合研究所との共同研究

○嶋根卓也，高橋哲，小林美智子，高岸百合子，竹下賀子，近藤あゆみ，大宮宗一郎，高野洋一，山木麻由子，服部真人，松本俊彦

*月経前症状が薬物使用のトリガーとなる女性の特徴について—全国の刑務所における「薬物事犯者に関する研究」より

○喜多村真紀，嶋根卓也，近藤あゆみ，服部真人，高橋哲，竹下賀子，小林美智子，松本俊彦

【報告9】 14:50 ～ 15:20 公共精神健康医療研究部 座長 西 大輔

心のサポーター養成事業 NIPPON COCORO ACTION

○西大輔，羽澄恵，臼田謙太郎，岡崎絵美，小倉加奈子，片岡真由美，小塩靖崇，松長麻美，梅本育恵，久我弘典，藤井千代

*COVID-19感染後の精神症状の関連要因の検討

○羽澄恵，臼田謙太郎，岡崎絵美，片岡真由美，西大輔

【報告10】 15:20 ～ 15:50 精神疾患病態研究部 座長 橋本 亮太

統合失調症の客観的診断マーカーの探索と医療機器プログラムの開発

○三浦健一郎，岡崎康輔，松本純弥，長谷川尚美，藤本美智子，山森英長，安田由華，牧之段学，橋本亮太

多施設共同研究による統合失調症・双極性障害・うつ病・自閉スペクトラム症の疾患横断的大脳皮質構造画像解析

○松本純弥，福永雅喜，三浦健一郎，根本清貴，岡田直大，橋本直樹，森田健太郎，越山太輔，大井一高，高橋努，肥田道彦，山森英長，藤本美智子，安田由華，長谷川尚美，成田尚，横山仁史，三嶋亮，河島孝彦，小林祐子，笹林大樹，原田健一郎，山本真江里，平野羊嗣，板橋貴史，中瀧理仁，橋本龍一郎，タ キンキン，小池進介，松原敏郎，岡田剛，吉村玲児，阿部修，鬼塚俊明，渡邊嘉之，松尾幸治，山末英典，岡本泰昌，鈴木道雄，尾崎紀夫，笠井清登，橋本亮太

【閉会】 15:50～ 16:00

閉会の辞 精神保健研究所 所長 金 吉晴

< 凡例 > * 若手奨励賞選考対象演題 ○ 発表者

抄 録

精神薬理研究部

統合失調症関連遺伝子 WDR3 の 中枢神経系における発現と機能の検討

小林桃子, 古家宏樹, 山田美佐, 山田光彦

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 精神薬理研究部

我々は、NMDA 型グルタミン酸受容体遮断薬である phencyclidine およびドーパミン作動薬である methamphetamine の双方に応答して、ラット脳内で WDR3 遺伝子の発現量が増加することを発見した。WDR3 は、多様な機能を持つ WD repeat ファミリーの一つとして細胞周期進行やシグナル伝達、アポトーシス、遺伝子発現制御などへの関与が推測されるものの、中枢神経系における機能は不明である。興味深いことに、日本人統合失調症患者のゲノムを用いて、WDR3 の遺伝子領域および調節領域に座位する一塩基多型 (SNP) の解析を行ったところ、WDR3 遺伝子と女性の統合失調症との関連が示唆された (Kobayashi et al., PLoS One, 2018)。そこで本研究では、WDR3 ノックアウトマウスおよび抗 WDR3 抗体を新たに作成し、分子生物学的・免疫組織化学的・行動学的解析を行うことにより、WDR3 の中枢神経系における役割を検討することを試みた。はじめに、C57BL/6N 系を背景とする雄性 WDR3 ヘテロノックアウト (WDR3-HKO) マウスを作成し、生後 10 週齢の成体期に解析を行った。WDR3-HKO マウスは、同腹仔の野生型マウスと比較して、成体期における体重に遺伝子型間で差はなかった。免疫組織化学的解析において WDR3 は脳に広く発現していることが明らかとなったが、WDR3-HKO マウスにおいて大脳皮質の層構造に異常は認められなかった。行動学的解析では、活動性および不安様行動を評価するためのオープンフィールド試験、作業記憶を評価するための Y 字型迷路試験、長期記憶を評価するための新奇物体認識試験を実施した。その結果、オープンフィールド試験において、WDR3-HKO マウスで有意に自発運動量が亢進していることが明らかになった ($P=0.0402$, Student's t-test)。Y 字型迷路試験および新奇物体認識試験においては、群間で統計的有意差は認められず、記憶の障害は検出されなかった。さらに、統合失調症関連分子 (NR1, NR2A, NR2B, Gria1-4, Parvalbumin, GAD67, Reelin, CNPase, MBP, Calretinin, Calbindin) の発現を real-time PCR 法を用いて解析したが、WDR3-HKO マウスで有意な変化は認められなかった。本研究は、統合失調症関連遺伝子 WDR3 のマウス中枢神経系における発現と機能の検討を世界で初めて行ったものである。WDR3-HKO マウスにおいて顕著な表現系の変化は観察されなかったが、自発運動量の亢進は中枢神経系発達における役割を示唆しているかもしれない。

精神薬理研究部

NMDA 受容体 NR2A サブユニットの新生仔期における 機能障害は空間作業記憶の発達を障害する

○古家宏樹，山田光彦

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 精神薬理研究部

【背景】空間記憶は、空間参照記憶と空間作業記憶に分類される。統合失調症患者では、効率よく目的行動を行うために欠かせない脳機能である空間作業記憶が障害されている。これまでに、空間作業記憶は海馬依存性であり、齧歯類ではイオンチャンネル型グルタミン酸受容体のひとつである NMDA 受容体の関与が報告されている。興味深いことに、NMDA 受容体は脳の発達においても重要な役割を果たしている。そこで、本研究では空間作業記憶の発達における NMDA 受容体の関与について検討した。

【方法】生後 7-20 日の Wistar 系雄性ラットに、非選択的 NMDA 受容体拮抗薬 MK-801、NR2A サブユニット選択的拮抗薬 PEAQX、NR2B サブユニット選択的拮抗薬 ifenprodil を投与し、9 週齢以降に Y 字型迷路試験、プレパルス抑制試験、社会的相互作用試験、MK-801 感受性試験を実施した。また、新生仔期薬物投与の組織学的影響を調べるため、生後 7-13 日に PEAQX あるいは ifenprodil を投与したのち脳を灌流固定し、空間記憶との関係が注目されている海馬の形態学的解析を行った。

【結果】新生仔期に MK-801 あるいは PEAQX を投与されたラットは、Y 字型迷路試験において空間的作業記憶の障害を示した。また、PEAQX を投与されたラットは聴覚刺激に対する反応性の増大と MK-801 投与に対する感受性の亢進を示した。一方、ifenprodil 投与はこれらの行動学的変化を生じなかった。また、組織学的検討の結果、海馬の細胞密度に群間で差は認められなかったが、PEAQX 投与群において CA1 領域の厚さの有意な減少が観察された。Ifenprodil 投与群においては CA1 の形態学的変化は見られなかった。

【考察】本研究の結果、NR2A 含有 NMDA 受容体はラットの適正な脳発達に不可欠であり、このサブユニットの新生仔期における機能障害は成体期に海馬依存性の空間的作業記憶を障害することが明らかとなった。さらに、NR2B ではなく、新生仔期の NR2A の機能障害により、認知機能の低下、感覚ゲーティングの障害、幻覚剤への過感受性及び脳の形態学的異常が生じることが明らかとなったことから、生後初期の脳発達における NR2A サブユニットの機能低下が統合失調症の発症リスクに関与している可能性が示唆された。

児童・予防精神医学研究部

遠心性コピーの皮質ダイナミクス： マーモセット発声中の大規模皮質脳波

○飯島和樹¹⁾²⁾³⁾，小松三佐子²⁾³⁾，鈴木航²⁾，山森哲雄²⁾³⁾，一戸紀孝²⁾
松元まどか¹⁾²⁾³⁾

1)国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部 精神疾患早期支援・予防研究室 2)国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 微細構造研究部
3)理化学研究所 脳科学総合研究センター 高次脳機能分子解析チーム

自らの動きに伴って生じる感覚は、運動指令や結果の予測から得られる遠心性コピーによって抑制される (von Holst and Mittelstaedt 1950, Sperry 1950)。統合失調症における幻聴は、発声の遠心性コピーの異常によって生じる可能性が指摘されてきた。しかし、発声の遠心性コピーの神経動態は十分に解明されていない。本研究では、マーモセット (*Callithrix jacchus*) の一次聴覚野を含む側頭葉、前頭葉、頭頂葉、後頭葉をカバーするように設計された 96 ch の ECoG (皮質脳波) 電極アレイを 2 匹のマーモセットの硬膜上に設置した。各電極の正確な位置は、コンピュータ断層撮影に基づいて特定され、標準脳座標へと変換された。マーモセットの特徴である交互の鳴き交わし行動を利用し、あらかじめ録音しておいた他個体の鳴き声に応答してマーモセットが「フィー」と呼ばれる鳴き声を発声している間 (「発声条件」と、発声条件で録音された自らの音声を聞いている間 (「聴取条件」) に ECoG を記録した。運動指令とその遠心性コピーが存在する場合に、発声に伴う感覚反応がどのように抑制されるかを調べるために、各電極から記録された脳活動を二つの条件で比較した。脳活動の統計検定においては、時空間領域での多重比較補正を行なった。

その結果、発声条件では、側頭葉を中心に頭頂葉・前頭葉にも及ぶ複数の電極でハイガンマ周波数帯 (80-200 Hz) における脳活動の大きな抑制が観察された。発声条件におけるハイガンマ周波数帯の抑制は発声のタイミングのおよそ 500 ms 前から始まっていた。一方で、聴取条件では、声刺激の提示後に、側頭葉を中心とした複数の電極でハイガンマ周波数帯における増大が観察された。両条件を比較すると、側頭葉を中心とした複数の電極で有意な差が得られた。両条件の有意差は聴覚皮質の電極では発声オンセット後の 0-30 ms という早いタイミングから観察された。これらの結果は 2 個体で一貫したものであった。

これらの結果は、マーモセットが自発的に発声する際に運動前野が聴覚野に抑制信号を送り、自らの発声と他個体の発声とを区別しているという仮説と整合的である。統合失調症患者では、陽性症状および重度の幻聴がある場合、発声時の聴覚野の活動抑制が低下していることが知られている (Ford et al. 2002, Ford et al. 2010)。これらのことから、本研究は統合失調症の動物モデルにおいて、神経ダイナミクスの異常をスクリーニングするためのプロトタイプの実験系を提供するものである。今後は、前頭葉と側頭葉の神経活動間の情報の因果的な方向性などについて更なる検討を進める。

児童・予防精神医学研究部

青年のうつ・不安に対する診断横断的認知行動療法 — パイロット試験の経過報告 —

○藤里紘子¹⁾, 伊藤正哉²⁾, 堀越勝²⁾, 金子響介²⁾, 竹林由武²⁾
高橋りや²⁾, 生田目光²⁾, 加藤典子²⁾, 久我弘典²⁾, 住吉太幹¹⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部

2) 国立精神・神経医療研究センター 認知行動療法センター

米国で行われた大規模調査では、青年期（13～18歳）における不安症（心的外傷後ストレス障害および強迫症を含む）の生涯有病率は32.4%、うつ病の生涯有病率は10.6%であると報告されている(Kessler et al., 2012)。不安症やうつ病をはじめとした“感情障害 (Emotional Disorders)”は、対人関係や学業上の問題につながるだけでなく、将来の精神疾患のリスク要因にもなる。そのため、成長過程における一時的な状態として見逃すことなく、適切な治療を提供することが重要である。

青年期の感情障害に対しては、認知行動療法 (Cognitive Behavior Therapies: CBT) の有効性が確立されている(Dorsey et al., 2017; Freeman et al., 2018; Higa-McMillan et al., 2016; Weersing et al., 2017)。しかし、これまで開発・効果検証がなされてきた治療プログラムの多くは、単一の診断あるいは領域（例：不安症のみ）をターゲットとしたものであった。実際には、うつ病を持つ児童青年の不安症の併存率は15～75%、不安症を持つ児童青年のうつ病の併存率は10～15%と報告されており(Cummings et al., 2014)、感情障害は高率で併存する。また、上述のように、青年期の感情障害が後の精神疾患のリスク要因となることから、予防のためにも感情障害を幅広く標的とする治療が必要とされている。

“青年の感情障害の診断横断的治療のための統一プロトコル (Unified Protocol for Transdiagnostic Treatment of Emotional Disorders in adolescents: UP-A)”は、診断横断的 CBT であり、感情障害の根底にある共通のリスク要因である不適応的な感情調整方略（例：回避）を標的とする。UP-A は、その有効性に関する知見が蓄積されつつあるが(Carlucci et al., 2021)、我が国では検討されていない。UP-A は感情障害に幅広く適用可能であるため、ひとつの治療法で複数の疾患に対応でき、青年の学校適応や対人関係上の問題、将来の精神疾患のリスク軽減につながるだけでなく、治療コストや治療者養成コストの軽減に貢献すると考えられ、臨床現場では有用な治療となることが期待される。

本発表では、UP-A の概要と、現在進行中の無作為化多層ベースラインデザインによる予備的研究について報告する。

睡眠・覚醒障害研究部

学童の年齢と生体リズム・体温調節・睡眠の関連

○北村真吾, 榎本みのり, 中崎恭子, 肥田昌子, 三島和夫

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 睡眠・覚醒障害研究部

【背景】近年の研究で児童は成人と比較してメラトニン分泌開始時刻と睡眠との位相角が小さく、また光の非視覚作用をより強く受けることが報告されているが、児童の年齢による影響は明らかでない。また、第二次性徴前後で急速な夜型化がみられるが、睡眠傾向を高める放熱反応と年齢との関連は検討されていない。本研究では、児童における概日リズム位相、睡眠のタイミング、夜間の光曝露（照明環境、メディア使用）、就床前の放熱反応と年齢との関連を実験的に評価した。

【方法】（末梢体幹皮膚温度勾配）

研究協力者は47名（平均年齢 10.1 ± 2.9 歳、範囲 6～15 歳、男女比 53%:47%）及び40名の男女児童である（平均年齢 10.4 ± 2.6 歳、範囲 6～15 歳、男女比 55%:45%）。児童及び養育者は在宅で7日間にわたり児童の活動量計・睡眠日誌の記録を行った。また、子どもの朝型－夜型質問票日本語版（CCTQ-J）と自宅の照明環境及び就寝時のメディア使用に関する質問紙に回答した。在宅での記録ののち、児童は、習慣的な睡眠習慣から決定されたスケジュールに従い、隔離実験施設での低照度環境で唾液採取（2実験共通）・皮膚温測定（第2実験のみ）がなされ、メラトニン分泌開始時刻（DLMO）が決定された。習慣的就床時刻とDLMOとの時間差を位相角差として、末梢皮膚温と体幹皮膚温の差を末梢体幹皮膚温度勾配（DPG）として算出した。

【結果】就床時刻は年齢とともに後退を示したが（ $r=.717, p<.001$ ）、DLMOは相関せず（ $r=-.028, p=.866$ ）、結果的に位相角差は年齢が上がるほど増大する関係を示した（ $r=.631, p<.001$ ）。低年齢の児童（6～11歳）でのみ、DLMOとクロノタイプ（休日の睡眠中央時刻）に相関が認められた（ $r=.411, p=.046$ ）。多変量解析の結果、低年齢群では入眠時刻の決定要因としてDLMO（ $\beta=.538, p<.001$ ）と就寝前のメディア使用時間（ $\beta=.203, p=.036$ ）が抽出されたが、高年齢群では認められなかった。また、放熱の指標であるDPGは就床前100分で年齢との相関がみられ（ $r=-0.359, p=.047$ ）、低年齢ほど放熱が高い関係がみられたが、就床前100分の中央値を超えるDPGの時刻とDLMOに相関が認められ（ $r=0.594, p<0.01$ ）、両者の時間差には年齢との相関がみられなかったことから、放熱反応のリズム性はメラトニンにみられる中枢時計のリズム性と一致していることが示唆された。

【結論】本研究の結果から、低年齢の児童は高年齢の児童と比較して体内時計と睡眠の結びつきが強く就寝時のメディア使用の影響を受けやすいことが示された。児童の適切な睡眠衛生確立には年齢ごとの考慮が重要となる。

睡眠・覚醒障害研究部

携帯型 1-channel 脳波計による睡眠評価システムの有用性検証

○河村 葵¹⁾, 吉池 卓也¹⁾, 松尾 雅博²⁾, 角谷 寛²⁾, 尾池 祐輝²⁾, 川崎 翠²⁾
車井 祐一²⁾, 長尾 賢太郎¹⁾, 鷹見 将規²⁾, 山田 尚登²⁾, 栗山 健一¹⁾²⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 睡眠・覚醒障害研究部

2) 滋賀医科大学精神医学講座

【背景】 臨床評価および科学・疫学調査において、信頼性の高い睡眠の客観的評価には、一夜の入院環境下で施行される終夜睡眠ポリグラフ (PSG) が求められる。しかし、睡眠構造の評価は、専門家による目視判定に頼るため、検査・判定に要する時間的・経済的負担と共に、客観性の担保に限界が存在する。睡眠・覚醒障害診断だけでなく、睡眠研究の効率化と科学的質を担保するために、簡便かつ実用的な睡眠構造評価方法の開発が求められている。

【目的】 携帯用 1-channel 脳波計 (1CH) 専用の睡眠構造自動判定システムによる評価と、従来の PSG を用いた専門家による睡眠構造目視判定結果を比較し、1CH 解析システムの有用性を評価する。

【方法】 26 名の睡眠障害患者および 14 名の健常成人を対象に、PSG と 1CH 計測を同時に実施し、各々の計測データを基に判定された睡眠構造の一致率を検証した。3 名の日本睡眠学会認定検査技師が PSG データの判定を行い、1CH は専用開発された最新の睡眠構造自動判定システムを用い、評価した。睡眠構造を把握する上で指標となる睡眠情報 (total sleep time (TST)、sleep latency (SL)、wake after sleep onset (WASO) 及び sleep efficiency (SE)) で 1CH と PSG における検査上の系統誤差を確認後、5 段階の睡眠段階 (覚醒, レム睡眠, 段階 N1, 段階 N2 及び 段階 N3) に分類された epoch 毎の一致率を評価した。

【結果・考察】 Bland-Altman 分析において、1CH と PSG 間の TST、WASO と SE で明らかな系統誤差は認めず、SL は PSG より 1CH で 3 分程度過剰評価される傾向が示された。epoch 毎の一致率は、検査技師間の κ 係数の範囲が 0.66-0.75 であるのに対し、1CH と PSG 間の一致 κ 係数は 0.62-0.67 の範囲にあり、Landis and Koch による判定基準では高い一致率と評価された。

【結論】 1CH と PSG の高い一致率は、1CH の臨床的・科学的有用性を示唆する。1CH は自宅で簡便に計測可能であるとともに、自動判定システムにより手動誤差が解消できることから、睡眠医療の均質化及び大規模コホート調査に基づく睡眠科学の発展が期待できる。

知的・発達障害研究部

成育環境が注意欠如・多動症児の愛着に関連する 神経基盤に与える影響

○石井礼花¹⁾, 鈴木茜音¹⁾, 眞神花帆¹⁾, 金生由紀子²⁾, 岡田俊¹⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 知的・発達障害研究部

2) 東京大学医学部附属病院 こころの発達診療部

【目的】 成育環境は、社会サポートや養育者の養育行動、また COVID-19 感染拡大等の社会状況などによって形成されるが、中でも児の愛着の質の果たす役割は大きいと考えられる。愛着は、重要な他者との相互作用を通して構築される基本的信頼感であり、他者との社会的関係性を築く基盤となる。本研究は、成育環境として、社会サポート、親の養育行動が、注意欠如・多動症（ADHD）の児の愛着に関連する神経基盤に与える影響を明らかにする目的で行った。

【方法】 ADHD 児: 33 名(男児 23 名、平均年齢 9.24 歳)、定型発達児: 28 名 (男児 10 名、平均年齢 9.57 歳) に対し、コンボイ法を用いた面接法で、児と母への社会サポートネットワークを定量化し、また、児の情動、児による母のネガティブな養育行動、および児の母と父への愛着の安定性を測定した。磁気共鳴画像にて T1 画像を撮像し、脳体積はジョンズホプキンス大学が提供する MRICloud の小児アトラスを用い parcellation を自動で行い、学童期の愛着に関連する脳部位を関連領域として設定し体積を算出した。また、R package の mediation を用いて、媒介解析を行った。

【結果】 母のネガティブな養育行動が多いと左被殻の体積が有意に高くなるという関連が認められ ($P<0.001$)、母のネガティブな養育行動が多いと児の家族以外の情緒的社会サポート人数が多くなるという結果を得た ($p=0.001$)。媒介モデルでは母親のネガティブな養育の程度が、児への情緒的社会サポート人数を介した、左被殻の体積の有意な完全媒介効果が認められた ($B=10.61$, $p=0.032$)。また、母と父への愛着の安定性の児のネガティブ情動への両側脳弓/分界条体積を介した有意な間接効果を認めた (母; 左: $B=-0.11$, $p=0.032$ 、右: $B=-0.17$, $p=0.004$ 、父; 右: $B=-0.16$, $p<0.001$)。また、病気に関する社会サポート人数の、左側脳弓/分界条体積を介し児のネガティブな情動への有意な完全媒介効果を認めた ($B=-0.35$, $p=0.014$)。

【考察】 母のネガティブな養育行動が多いと、ADHD 児は情緒的な社会サポートを多くの他者に求め、被殻体積増加をもたらしている可能性が示唆された。また父と母への愛着の不安定性や病気時の社会サポート人数の少なさは、脳弓/分界条体積の増加を介し、児のネガティブ情動の表出頻度の増加に影響を及ぼすことが示された。社会サポートを ADHD 児に提供し続けていくことの重要性が示唆された。

知的・発達障害研究部

バルプロ酸自閉症モデルマウスにおける新規社会性の検討

○請園正敏，岡田俊

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 知的・発達障害研究部

【背景】バルプロ酸（VPA）は抗てんかん薬および気分安定剤として広く使われており、ヒトおよび齧歯類の妊婦が摂取することで、生まれてくる子が自閉スペクトラム症（以下、ASD）様行動を示すことが知られている。齧歯類における ASD 様行動とは、伝統的に 3 チャンバー社会的アプローチ試験における、健常個体と比較した際の、社会的行動の異常を指す。この試験では、他個体は檻に入れられており、檻への接近行動が主な社会的行動として計測されるが、生態学的妥当性が高いとは言い難い。そのため、本研究では、自然な 2 個体間のインタラクションについてオープンフィールドにて検討した。さらに、リーチング行動を応用した行動試験を実施した。リーチングとは、食べ物を手で掴み、口に運ぶまでの一連の動作のことである。リーチング行動試験にて、健常個体は、他個体の運動に対して注視することなどがすでに示されている。このリーチング課題を用いて、接近行動とは異なる他個体への興味関心の度合いを検討した。

【方法】C57BL6/J マウスに対して、妊娠 12.5 日目に VPA 600mg/kg（実験群：VPA モデル）または生理食塩水（統制群）を皮下投与し、ASD モデルを作製した。3 チャンバー社会的アプローチ試験を実施し先行研究と同様の結果を得た。モデル確立後、社会性を検討するためのパートナー（ナイーヴ）を用意し、実験群および統制群のマウスが 4 週齢時および 8～10 週齢時に、パートナーとのオープンフィールドにおける自由活動をビデオカメラにて記録した（n=18）。オープンフィールドにおける社会性行動の時間をストップウォッチにて計測した。加えて、別コホートの実験群、統制群、同数のナイーヴ個体を用意し、リーチングを学習させた。学習完了後、ナイーヴ個体がリーチング行動を行い、両群はその行動を観察させられた。その際の、ナイーヴ個体への注視行動などを計測した（n=16）。

【結果・考察】オープンフィールドでは、これまでの先行研究と異なり、実験群は統制群と比較して、有意に長く社会行動を行っていた。ナイーヴ個体、実験群、統制群の社会性行動時間を分けて計測したところ、ナイーヴ個体が、実験群のパートナーの時に、統制群のときと比較して、有意に長く社会性行動を実施していた。そのため、VPA モデル動物の社会性が高いわけではなく、ナイーヴ個体がよく接近することが理由であることが示唆された。

リーチング行動試験では、実験群は統制群と比較して、有意に少なく他個体の運動を注視していた。VPA モデル動物は、他個体の行動にあまり注意を払わないことが示唆された。さらに、ナイーヴ個体すら、実験群の行動には、統制群の行動の時と比べ、有意に短く注意を払うことがわかった。今後、ASD のメカニズム解明のために、行動特性をしっかりと検討し、様々な社会性行動を検討していくことが、重要であると思われる。

地域・司法精神医療研究部

研究における患者・市民参画についての当事者・家族・支援者・行政職員・研究者の見解：テーマ分析

○山口創生¹⁾, 阿部真貴子¹⁾, 川口敬之¹⁾, 五十嵐百花¹⁾, 塩澤拓亮¹⁾
小川亮¹⁾, 安間尚徳¹⁾, 佐藤さやか¹⁾, 宮本有紀²⁾, 藤井千代¹⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域・司法精神医療研究部
2) 東京大学大学院医学系研究科 精神看護学分野

【背景】近年、精神保健福祉サービスに関する研究では、当事者と研究者が協働して研究に取り組むことが推奨されている。このような研究活動は、患者・市民参画（Patient and Public Involvement : PPI）として国際的な広がりをみせている。しかし、日本の精神保健福祉サービスに関する研究においては PPI に取り組んだ研究は少ないため、当部は TOGETEHR プロジェクトを立ち上げた。本研究では、当事者・家族・支援者・行政職員・研究者を対象として、①参加者の PPI に対する考え、②PPI の実装に関する課題や工夫について問う、インタビュー調査を実施し、その内容について質的に分析することを目的とした。

【方法】本研究は、関連団体や原著論文などから、当事者・家族・支援者・行政職員・研究者の立場の参加者を募集した。インタビュー調査の参加者は①「当事者と研究者が共同して研究することをどう思うか?」、②「実際に、当事者と研究者が共同して研究するとしたら、課題や工夫はあるか?」のテーマに沿って議論した。分析は、Braun & Clarke (2006)を基にテーマ分析を実施した。録音データの逐語録から①②に合致する語りを抜き出し、コードを作成した。次に、抽象度を上げるため、関連のあるコードを集め、サブテーマを作成した。同じ要領でサブテーマからテーマを、テーマから領域（ドメイン）を作成した。本研究は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会から承認を得て実施された（No. A2019-021）

【結果】最終的に 37 名が参加し、6 つのグループでインタビューが実施された。テーマ分析の結果、124 コードから、43 のサブテーマ、16 のテーマ、4 つの領域が抽出・カテゴリー化された。第 1 領域【肯定的な見解・期待】では、精神科や研究という場面での PPI の容易性や研究の質の向上などに関する意見があった。第 2 領域【全般的な不安】は、PPI が全ての解決策とならないこと、PPI をアリバイ的に使う研究、協働することに対する的負担についての懸念などを含む領域となった。第 3 領域【実施に向けた具体的な課題】では、大学・学会システムや代表性の問題などが語られた。最後に、第 4 領域【実施に向けたアプローチ】では、意見の言いやすい環境の設定、人材マッチング、ガイドラインなどのシステムの構築、当事者・家族団体のネットワークや発信力の強化についての意見が挙げられた。

【結論】研究の結果から、各立場の参加者は、PPI の普及に期待を持っていたと考えられる。他方、PPI の実装には、学術環境・システムなど整備すべき課題も多いことが示唆された。

地域・司法精神医療研究部

精神疾患当事者や多様な関係者が地域精神保健研究において重要と考える評価項目枠組みの開発：デルファイ法による検討

○塩澤拓亮，小川亮，川口敬之，五十嵐百花，阿部真貴子，
安間尚徳，山口創生，藤井千代

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域・司法精神医療研究部

【背景】 研究間のアウトカム選択の不均一性の改善や実臨床において意味のあるアウトカム領域の設定は、近年の臨床研究における大きな国際的な課題となっている。そこで、臨床研究における評価項目の枠組みを作成する動きが活発になっており、そこに精神障害当事者（以下、当事者）を含め様々な関係者の意見を考慮することの重要性が指摘されている。しかし、地域精神保健サービスの評価項目の枠組みは国際的に未だに整備されておらず、未着手である。そこで、重要度の高い評価項目に関するコンセンサスを得ることを目的とし、5 属性（当事者、家族、支援者、行政職員、研究者）を対象とした合意形成研究を実施した。

【方法】 本研究は 3 段階のプロセスで実施された。第一に文献検討、地域精神保健領域の主要な関係者に対するグループインタビュー、アンケート調査から合意形成調査の参加者が判定するための評価項目リストを作成した。第二に予備調査を実施し作成した評価項目リストの文言や調査プロセスの確認・修正を行った。第三に、5 属性の参加者を対象にデルファイ法に基づく 3 回の合意形成調査を実施した。調査において各項目は 1-7 点で評価され、参加者の○○%以上の人が重要と評価した項目（6, 7 点）を合意項目として抽出した。本研究は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会（A2021-005）の承認を得て実施された。

【結果】 第 1 段階の項目抽出作業の結果、94 項目の評価項目案が作成された。第 2 段階の予備調査では、各属性から合計 13 名が参加し、調査用サイトの仕様や各項目の文言や内容について修正・追加を行い、2 項目を追加した 96 項目が本調査に用いる項目として作成された。第 3 段階のデルファイ調査には 297 名が同意し、278 名（93.6%）が 3 回すべての調査に参加した。3 回の調査から、合計 24 項目（例：「居場所がある」、「社会とのつながり」、「生活の満足度」、「自己肯定感」、「家族の精神健康」、「有害事象・副作用」）が地域精神保健研究において重要度の高い評価項目として選出された。

【結論】 デルファイ調査では、3 回すべてへの回答率が 93.6%と非常に高い結果となった。当事者や家族、その他地域精神保健の関係者から合意が得られた項目は、臨床評価的な項目も含まれるものの、これまで用いられてきた病状・治療の評価に関する項目や入院の有無という視点以上に、【地域で当事者自身がどう生活したいか、生活して行く為に必要なスキルはなにか】という視点の評価が重要視された結果となった。

行動医学研究部

摂食障害脳画像データベースの構築と 脳画像診断マーカーの解明

○関口敦¹⁾, 高村恒人¹⁾, 菅原彩子¹⁾, 船場美佐子¹⁾, 佐藤康弘²⁾
平野好幸³⁾, 吉内一浩⁴⁾, 野原伸展⁴⁾, 磯部昌憲⁵⁾, 戸瀬景茉⁵⁾
兒玉直樹⁶⁾, 吉原一文⁷⁾, 権藤元治⁷⁾, 小原千郷¹⁾, 井野敬子¹⁾
小川眞太郎¹⁾, 堀弘明¹⁾, 守口善也¹⁾, 金吉晴¹⁾

- 1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 行動医学研究部
2) 東北大学病院 心療内科 3) 千葉大学 子どものこころの発達教育研究センター
4) 東京大学 医学部附属病院 心療内科 5) 京都大学 医学研究科 精神医学
6) 産業医科大学 医学部 脳神経内科 心療内科 7) 九州大学 大学院医学研究院 心身医学

摂食障害（ED）は、発達期～成人期に好発する精神疾患で、本邦の調査で 16～23 歳女性の有病率は 12.7%と報告されている（Nakai 2014）。特に神経性やせ症（AN）は精神疾患の中で均一性が高い疾患とも考えられており（Kaye 2009）、脳画像などのバイオマーカーの解明への期待が高まっており、これまでの AN 脳画像研究では、報酬系の異常をはじめ（Chen 2016）、帯状回や小脳（King 2018, Zhang 2018）など様々な脳部位の灰白質の減少が報告されている。しかし、単一施設の 20～30 例の小規模な研究ばかりであり、結果の再現性や妥当性に疑問が残っており、多施設共同研究によるデータベース構築が待たれていた。

我々は、2014 年より多施設共同で ED 患者の脳 MR 画像等を収集しており、健常対照（HC）群を含め延べ 411 例のデータを有している。今回報告では、AN102 例の T1 強調画像を用いた解析研究による AN の診断マーカーの特定を試みた。T1 強調画像より脳灰白質量を算出し、施設間要因を Combat で補正したのちに、年齢を統制した HC 群との比較を行った。AN 群では HC 群に比して、視床、小脳、前帯状皮質、眼窩前頭皮質、島皮質、頭頂葉等様々な脳部位での有意な灰白質量の減少が認められた。さらに、AN 群で症状尺度との関連を検証したところ、食事制限の重症度と眼窩前頭皮質との正相関を認めた。

これら脳領域は、先行研究でも AN 群での体積減少が認められている部位であり、低体重、食行動異常、Body image の障害、内受容知覚異常との関連が指摘されている。また眼窩前島皮質は情動抑制機能を担っており、AN の過度な食欲の制御の神経基盤であることが示唆される。今後は、治療前後の縦断研究へと発展させ、これら診断マーカーの治療による変化を検証することにより、治療マーカーや脆弱性マーカー、治療反応性予測マーカーとして臨床での活用の道を開いていく予定である。

行動医学研究部

PTSD 女性患者における自殺リスク： 幼少期被虐待体験、炎症マーカー、炎症系遺伝子多型との関連

○河西ひとみ¹⁾, 堀 弘明¹⁾, 吉田冬子¹⁾, 伊藤真利子¹⁾, 林 明明¹⁾
丹羽まどか¹⁾, 井野敬子^{1,3)}, 今井理紗^{1,3)}, 関口 敦¹⁾, 加茂登志子⁴⁾
功刀 浩²⁾, 金 吉晴¹⁾

- 1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 行動医学研究部
- 2) 国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 疾病研究第三部
- 3) 名古屋市立大学大学院 医学研究科 精神認知行動医学分野
- 4) 若松町こころとひふのクリニック

【背景】 心的外傷後ストレス障害 (PTSD) の患者は自殺リスクが高いことが報告されている。自殺リスクの生物学的指標は未だ存在せず、現状では自殺リスクを客観的に把握することは困難である。一方、うつ病や統合失調症などの患者において自殺と炎症の関連を示唆する知見が増えている。しかしながら、PTSD において自殺と炎症の関連を検討した研究は乏しい。また、PTSD の発症リスク要因である幼少期被虐待体験は、炎症系の変化に関連することや、自殺リスクを高めることが示されている。加えて、PTSD および自殺、さらに炎症には遺伝的基盤が存在する。本研究は、PTSD における自殺リスクについて、炎症に着目した検討を行い、同時に幼少期被虐待体験や炎症系遺伝子の影響についても検討することを目的として行った。

【方法】 ト라우マ体験の判定および精神疾患の診断は DSM-IV に基づき行っている。PTSD 患者 91 名と健常対照者 119 名（すべて女性、平均年齢：30 代後半）を対象に、Beck Depression Inventory-II (BDI-II) の項目 9 により自殺念慮を評価するとともに、患者群において Mini International Neuropsychiatric Interview (MINI) の自殺リスク評価モジュール 6 項目により広範な自殺リスクを評価した。幼少期被虐待体験は Childhood Trauma Questionnaire を用いて評価した。各被験者から採血を行い、血液中炎症マーカー (IL-6, 高感度 TNF α , 高感度 CRP) 濃度を測定し、さらに血液から DNA を抽出し IL6 遺伝子と CRP 遺伝子の多型を解析した。

【結果】 患者群は健常対照群に比べ、自殺念慮 (BDI-II で評価) が有意に強く ($p < 0.001$)、「自殺したい」「機会があれば自殺するだろう」と回答した者は患者群では 33 名 (36.2%) であったのに対し、健常群は 0 名であった。患者における自殺念慮・自殺リスクは被虐待体験と有意に関連していた (すべて $p < 0.05$)。患者群において、自殺念慮は高感度 CRP 濃度 ($p = 0.33$, $p = 0.002$ 、IL-6 濃度 ($p = 0.27$, $p = 0.015$) と、自殺リスクは高感度 CRP 濃度 ($p = 0.29$, $p = 0.016$) とそれぞれ有意な正の相関を示した。一方、過去の自殺企図歴の有無については、炎症マーカーとの有意な関連はみられなかった。IL6 遺伝子と CRP 遺伝子の多型は患者群の自殺リスクに有意に関連していた。

【考察】 PTSD 患者では自殺リスクが高く、幼少期に虐待を受けた患者ではよりハイリスクであることが確認された。炎症マーカー、とくに血中 CRP 濃度は、PTSD における自殺リスクの state marker になりうる可能性が示された。炎症系遺伝子の多型と PTSD の自殺リスクの関連が見出されたことから、自殺の個別化予防へとつながる可能性が考えられる。

ストレス・災害時こころの情報支援センター

東日本大震災後のメディア曝露が親子のメンタルヘルスに 与える長期的な影響：縦断的解析

大沼麻実^{1,2)}, ○成田瑞^{1,2)}, 立森久照³⁾, 住吉太幹⁴⁾, 白間綾⁴⁾
菅知絵美⁵⁾, 神尾陽子⁴⁾, 金吉晴^{1,2)}

- 1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 ストレス・災害時こころの情報支援センター 2) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 行動医学研究部
3) 国立精神・神経医療研究センター 臨床研究・教育研修部門
4) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部
5) 労働安全衛生総合研究所

背景：自然災害のメディア報道はメンタルヘルスの問題に関連するが、長期的な影響は知られていない。加えて、このようなイベントに敏感な小児における影響を調べた研究はない。

目的：2011年の東日本大震災後に報道されたテレビの被災者映像に曝露することが、親子のメンタルヘルスに与える2年後の影響を調べる。

方法：159組の親子を調査した。子どもはSDQ、親はK6でメンタルヘルスを評価した。2011年におけるテレビの被災者映像と2013年のメンタルヘルスの関連を、各種交絡因子を含め多変量解析しブートストラップ95%信頼区間（Bias-corrected and accelerated method）を求めた。曝露直後の反応がDSM-5でPTSDの診断基準から除外されたことを鑑み、曝露直後の症状による交互作用も調べた。

結果：テレビの被災者映像に曝露することは、2年後における子どもの精神病理（ β , 1.51; 95% 信頼区間, 0.07 to 2.96）と大人のストレス（ β , 1.49; 95%信頼区間, 0.28 to 2.70）に影響を与えた。この効果に対して、曝露直後の不眠と聴覚過敏は交互作用を持たなかった。

結論：テレビの被災者映像に曝露することは、急性期症状の有無に関わらず親子のメンタルヘルスに長期的な影響を与える。災害後はこのような映像に曝露する時間を減らすことが臨床的に勧められる。

薬物依存研究部

覚醒剤事犯者の理解とサポート：法務総合研究所との共同研究

○嶋根卓也¹⁾、高橋哲^{1,2)}、小林美智子³⁾、高岸百合子^{1,4)}、竹下賀子⁵⁾
 近藤あゆみ¹⁾、大宮 宗一郎^{1,6)}、高野洋一⁷⁾、山木麻由子⁸⁾
 服部真人⁹⁾、松本俊彦¹⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部

2) お茶の水女子大学 生活科学部 心理学科 3) 法務省名古屋矯正管区

4) 駿河台大学心理学部 5) 川越少年刑務所 6) 上越教育大学大学院臨床・健康教育学系

7) 法務省高松矯正管区 8) 横浜少年鑑別所 9) 法務省法務総合研究所

【背景と目的】覚醒剤等の違法薬物の使用は犯罪行為ではあるが、同時に薬物依存を含む健康問題を引き起こす可能性がある。2016年「再犯防止推進法」が施行され、犯罪をした者が矯正施設に収容されている間のみならず、社会復帰後も途切れることなく必要な指導や支援をシームレスで受けられるようにするなどの基本理念が明記された。この法律に基づき法務省では「再犯防止推進計画」では、「薬物依存症の治療・支援機関の整備など」を重点課題のひとつに位置づけている。薬物依存研究部では、2016年より法務省法務総合研究所との共同研究を進めており、覚醒剤事犯者 699 名（男性 462 名、女性 237 名）を対象とした全国調査を通じて、覚醒剤事犯者の実態把握や課題抽出に資する研究を実施してきた。本報告では、これらの研究で得られた知見の一部を紹介するとともに、研究成果の活用について報告する。

【結果と考察】ここでは主として薬物事犯者の性差に関する結果を示す。女性受刑者は、男性受刑者に比べて、年齢が若い上に（男性 44.5 歳、女性 41.7 歳、 $p<0.001$ ）、覚醒剤の使用頻度が高く（男性 8.0 日/月、女性 9.7 日/月、 $p=0.040$ ）、薬物関連問題の重症度（DAST-20）がより重篤であった（男性 9.3 点、女性 10.3 点、 $p=0.003$ ）。一方、覚醒剤の開始年齢や、使用期間は有意差が認められなかった。これらの結果は、女性がより短期間に集中的に覚醒剤を使い、薬物問題を引き起こしていることを示唆している。また、覚醒剤使用に対する効果にも性差が認められ、男性では「性的な快感や興奮が得られる」「集中力が増す」といった回答が多い一方で、女性においては「現実逃避ができる」「やせられる」といった回答が多かった。これらの結果から、男性は覚醒剤を主としてセックスドラッグとして使用しているのに対し、女性では自ら抱えるネガティブな感情への対処として覚醒剤を使用していると考えられた。

【研究成果の活用】得られた研究成果は、学術論文（Journal of Psychoactive Drugs など）および専門学会（日本アルコール・アディクション医学会など）でのシンポジウムにおいて発表するとともに、国の検討会（法務省：薬物事犯者の再犯防止対策の在り方に関する検討会、厚生労働省：大麻等の薬物対策のあり方検討会）での参考資料として活用されてきた。また、薬物事犯者の処遇・治療・支援に携わる関係者向けに、研究成果を平易な言葉でまとめたパンフレット「覚醒剤事犯者の理解とサポート 2018」を作成し、全国の刑事施設、少年院、少年鑑別所、保護観察所、専門医療機関、民間回復支援施設などに配布するとともに、インターネットで公開している。

薬物依存研究部

月経前症状が薬物使用のトリガーとなる女性の特徴について
—全国の刑務所における「薬物事犯者に関する研究」より○喜多村真紀¹⁾，嶋根卓也¹⁾，近藤あゆみ¹⁾，服部真人²⁾，高橋哲³⁾
竹下賀子⁴⁾，小林美智子⁵⁾，松本俊彦¹⁾

1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部

2) 法務省法務総合研究所 3) お茶の水女子大学 4) 川越少年刑務所

5) 法務省名古屋矯正管区

【背景と目的】女性の約8割が月経前に何らかの心身症状やそれに伴う不調を体験しているという。刑務所内での調査では、約3割の女性の覚醒剤事犯者が月経前症状への対処を目的に薬物を使用した（以下、薬物使用の引き金をトリガーとする）経験を持つことが明らかにされている。月経前症状がトリガーとなる背景要因は未だ不明な点が多く、本研究では、月経前症状がトリガーとなる女性の特徴を明らかにすることを目的とした。

【方法】法務省法務総合研究所は全国78庁の刑事施設を対象に「薬物事犯者に関する研究」を実施した。調査期間は2017年7月から同年11月、期間中に対象となった覚醒剤取締法違反による受刑者（自己使用歴がある者に限る。）は806名であった。このうち同意（回収率86.7%）を得た699名（男性462名，女性237名）のデータを国立精神・神経医療研究センターが譲り受けた。本研究では、女性受刑者のデータを用いて二次分析を行った。「精神症状」、「疲労感」、「食欲」および「睡眠（過眠，不眠）」に関する4つの月経前症状がトリガーとなった経験の有無を従属変数とし、調査時年齢，就労状況，婚姻状況，薬物事犯による刑務所入所度数，覚醒剤の初使用年齢，月間使用日数および使用年数，過去1年間に使用した薬物の種類数，DAST-20スコア，依存症以外の精神障害および慢性疾患の診断の有無を共変量として二項ロジスティック回帰分析を行った。

【結果】「精神症状」では未婚（AOR：4.36，95%CI：1.50-12.66），DAST-20スコア（AOR：1.20，95%CI：1.08-1.34），慢性疾患の診断有り（AOR：0.22，95%CI：0.06-0.81）のオッズ比が有意であった。「疲労感」では未婚（AOR：4.46，95%CI：1.53-13.04），月間使用日数（AOR：1.04，95%CI：1.00-1.08），DAST-20スコア（AOR：1.20，95%CI：1.08-1.35），慢性疾患の診断有り（AOR：0.21，95%CI：0.05-0.86）のオッズ比が有意であった。「食欲」では未婚（AOR：3.32，95%CI：1.00-12.48：），月間使用日数（AOR：1.06，95%CI：1.01-1.12），DAST-20スコア（AOR：1.33，95%CI：1.09-1.61）のオッズ比が有意であった。「睡眠（過眠，不眠）」はオッズ比が有意な変数は認められなかった。

【考察】女性の覚醒剤事犯者では、婚姻状況が未婚であること，薬物使用頻度が多いこと，薬物問題が重症であることは、月経前症状がトリガーとなるリスクを高め、慢性疾患の診断を受けていることは、そのリスクを軽減することが示唆された。今後はこのような特徴を持つ女性の薬物事犯者に有用な治療・回復支援について検証が必要である。

公共精神健康医療研究部

心のサポーター養成事業 NIPPON COCORO ACTION

○西大輔, 羽澄恵, 臼田謙太郎, 岡崎絵美, 小倉加奈子, 片岡真由美
小塩靖崇, 松長麻美, 梅本育恵, 久我弘典, 藤井千代

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 公共精神健康医療研究部

1. 背景と目的

2021年度から、厚生労働省は精神疾患や精神障害に対する普及啓発を推進するために「心のサポーター養成事業（通称：NIPPON COCORO ACTION）」を開始した。心のサポーター（通称：こころサポーター）とは、メンタルヘルスや精神疾患への正しい知識と理解を持ち、地域や職域でメンタルヘルスの問題を抱える人や家族等に対してできる範囲で手助けをする人のことを指し、各地域でこころサポーターが養成されていくことで、メンタルヘルス不調等の予防や早期介入につながることを期待されている。さらに、本事業の最終的な到達点は「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築」のための基盤となる、地域住民のメンタルヘルス不調等への理解促進と、精神疾患に対する差別や偏見、スティグマの低減である。本事業が、精神障害の有無や程度にかかわらず誰もが安心して自分らしく暮らすことができる地域づくりにつながっていくことが期待されている。

本事業は厚生労働省からNCNPに委託され、地域・司法精神医療研究部、認知行動療法センター、および厚生労働省と緊密に連携しつつ、当部が中心となって実施している。今年度は、こころサポーター養成研修および指導者研修の内容を開発し、研修受講がスティグマ軽減に有効かどうかを検討することとした。

2. 方法

2021年7月から9月にかけて、当部、地域・司法精神医療研究部、認知行動療法センター、および外部の有識者で構成される評価委員会、厚生労働省と合議の上、研修内容を確定した。9月に研修講師を養成する指導者研修を実施した後、11月29日から全国8つの自治体で研修を開始した。研修受講者に、研修前後のアンケート調査への協力を依頼し、同意が得られた者から回答を得ることとした。人口統計学的背景に加えて、スティグマやメンタルヘルスリテラシーについて測定する the Reported and Intended Behaviour Scale 日本語版、Mental Health Literacy Scale 日本語版のスティグマに関する下位尺度（Attitudes that promote recognition or appropriate help seeking behaviour (stigma)）の研修前後での変化を検討することとした。また、社会実装について Implementation outcome scale for Digital Mental Health (iOSDMH)を今回の研修に合わせて改変したものを測定することとした。なお、本調査はNCNP倫理委員会の承認を経て行った。

3. 結果

2021年11月から2022年2月にかけて全国8つの自治体で20回程度の研修が予定されており、当日は結果について報告する予定である。

公共精神健康医療研究部

COVID-19 感染後の精神症状の関連要因の検討

○羽澄恵, 臼田謙太郎, 岡崎絵美, 片岡真由美, 西大輔

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 公共精神健康医療研究部

1. 背景と目的

COVID-19 感染後の後遺症 (post/ long COVID) のひとつに抑うつ不安等の精神症状がみられ、他の感染症と比較してもその割合は多い。関連要因としては急性期症状の重症度や入院経験、女性、高齢、感染後経過期間などが指摘されているものの、日本における報告はない。また、感染後経過期間による精神症状の変化については研究ごとに結果が一貫しておらず、さらなる研究が必要と考えられる。

こうした背景を踏まえ、本研究では COVID-19 感染後の後遺症である精神症状に関連する要因、および精神症状の経過に関連する要因について検討することとした。

2. 方法

2021 年 7 月～9 月に、COVID-19 への感染経験があると自己報告した者を調査対象とした横断のオンライン調査を実施した。調査対象のうち、途中で回答を中断した者、および除外基準 (ダミー質問に誤答・未感染であることを明記・COVID-19 感染関連症状の報告内容に矛盾・感染後経過月数が 0～20 か月の範囲外・教育歴で「その他」を選択) に合致した者を除外したデータを、本調査の解析対象とした。

精神症状を測定するアウトカムとして、精神健康度の測定尺度である日本語版 Kessler-6 (K-6)、抑うつ症状重症度の測定尺度である日本語版 Patient Health Questionnaire-9 (PHQ-9)、不安症状重症度の測定尺度である日本語版 Generalized anxiety Disorder-7 (GAD-7)、を用いた。独立変数は、精神科既往有無、感染後経過日数 (感染後 1 か月未満・1～3 か月・3～6 か月・6 か月以上) に加え、COVID-19 の急性期症状、治療や措置、感染経路、感染による対人関係や社会生活の変化、感染に関連する自身の認識、調査時点の症状、などだった。共変量は、性別、年齢層、教育歴、世帯年収、仕事の有無、同居者の有無、身体疾患既往とした。

分析方法に関し、解析対象の特徴を把握するため記述統計をおこなったうえで、精神症状に寄与する要因を検討するため、各種精神症状を従属変数、上記を独立変数とした重回帰分析を行った。さらに、精神科既往歴有無による感染後経過月数ごとの精神症状の相違を検討するため、各種精神症状を従属変数として、感染後経過日数と精神科既往歴有無を独立変数とした二要因分散分析をおこなった。

なお、本調査は当該倫理委員会の承認を経て行った。

3. 結果

9505 人の回答者のうち、途中で回答を中断した 1745 人および除外基準に合致した 1643 人を除外した、6017 人 (男性 57.2%) が解析対象となった。感染後経過期間は平均 4.5 ± 4.4 か月であった。精神症状については、K6 は平均 4.5 ± 5.3 点、PHQ-9 は平均 5.2 ± 5.9 点、GAD-7 は 3.30 ± 4.7 点であった。

解析結果の詳細は当日に報告する予定である。

精神疾患病態研究部

統合失調症の客観的診断マーカーの探索と 医療機器プログラムの開発

○三浦健一郎¹⁾、岡崎康輔²⁾、松本純弥¹⁾、長谷川尚美¹⁾
藤本美智子^{1,3)}、山森英長^{1,4)}、安田由華^{1,5)}、牧之段学²⁾、橋本亮太¹⁾

1)国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 精神疾患病態研究部
2)奈良県立医科大学精神医学講座 3)大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室
4)地域医療機能推進機構大阪病院 5)医療法人フォスター

精神疾患の診断においては医師の問診に基づく主観的評価が主体であり、客観的な計測と分析によって得られる指標が未だ確立しておらず、診断や治療の一致率は必ずしも十分ではない。このため、血液や脳神経画像などの医学的検査から得られるデータや、デジタルフェノタイプと呼ばれる診察や検査の際の発話や音声、身体および視線のデータなどを分析して得られる客観的な情報の利用が検討されている。代表的な精神疾患である統合失調症は早期治療によりその予後が改善することが知られていることから、発症早期における診断は特に重要である。しかし、発症の早期においては症状がはっきりせず、その経過も短いため診断が困難である。当研究部では、統合失調症の客観的かつ科学的なマーカーを探索し、さらに実際の診療現場における測定が可能で、医師の診断を早めることのできる医療機器プログラムの研究開発を推進している。本報告では、そのような取り組みについて現在までの進捗を報告する。

診断マーカーの探索においては、臨床の現場において非侵襲かつ簡便に計測することのできる視線と認知機能に着目している。統合失調症では、古くから視線の制御における異常が指摘されており、その特徴を指標として用いることで、健常者と統合失調症を比較的高い正答率で判別できることが知られている。一方、認知機能の低下も統合失調症の代表的な特徴の一つであり、健常者と統合失調症の判別にも寄与することがこれまでに報告されている。本研究では、スミースパシエート検査やフリービューイング課題などを用いた視線検査のスコア、ウェクスラー成人知能検査、ウェクスラー記憶検査の下位検査スコアのそれぞれについて、健常者と統合失調症の差異における効果量及び判別能を調べ、さらに診断の精度を高めるマーカーになり得る眼球運動と認知機能の特徴量の組み合わせを検討した。その結果、視線検査及び認知機能検査のスコアの中に効果量が比較的大きく、かつ判別能が高い特徴量があること、それらの特徴量は発症早期から既に効果量が高いことがわかった。さらに、例えばフリービューイング課題のスキャンパス長とウェクスラー知能検査の符号検査の評価点の組み合わせなど、高い判別能(Area under the curve > 0.9)を持つ視線と認知機能の特徴量の組み合わせがあることを示す所見を得ている。医療機器プログラムの開発研究においては、視線検査と認知機能検査を利用した医療機器プログラム開発を進めており、フリービューイング検査などのタブレットへの実装が概ね完了しつつある。

精神疾患病態研究部

多施設共同研究による統合失調症・双極性障害・うつ病・
自閉スペクトラム症の疾患横断的大脳皮質構造画像解析

○松本純弥¹，福永雅喜²，三浦健一郎¹，根本清貴³，岡田直大^{4,5}，
橋本直樹⁶，森田健太郎⁷，越山太輔⁴，大井一高^{8,9}，高橋努^{10,11}，
肥田道彦¹²，山森英長^{1,13,14}，藤本美智子^{1,13}，安田由華^{1,15}，長谷川尚美¹，
成田尚⁶，横山仁史¹⁶，三嶋亮¹⁷，河島孝彦¹⁷，小林祐子¹⁷，笹林大樹^{10,11}，
原田健一郎¹⁸，山本真江里¹⁹，平野羊嗣²⁰，板橋貴史²¹，中瀧理仁²²，
橋本龍一郎^{21,23}，タ キンキン²⁴，小池進介^{5,25,26,27}，松原敏郎¹⁸，岡田剛¹⁶，
吉村玲児²⁸，阿部修²⁹，鬼塚俊明³⁰，渡邊嘉之³¹，松尾幸治³²，
山末英典³³，岡本泰昌¹⁶，鈴木道雄^{10,11}，尾崎紀夫¹⁹，笠井清登^{4,5,25,26}，
橋本亮太^{1,13}

¹ 国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所・精神疾患病態研究部，² 生理学研究所
システム脳科学研究領域心理生理学部門，³ 筑波大学医学医療系精神医学，⁴ 東京大学大
学院医学系研究科精神医学分野，⁵ 東京大学国際高等研究所ニューロインテリジェンス国際研
究機構，⁶ 北海道大学大学院医学研究院精神医学教室，⁷ 東京大学医学部附属病院リハビリテ
ーション部，⁸ 岐阜大学医学部附属病院精神科，⁹ 金沢医科大学総合内科，¹⁰ 富山大学学術研究
部医学系神経精神医学講座，¹¹ 富山大学研究推進機構アイドリング脳科学研究センター，¹² 日
本医科大学医学部大学院精神・行動医学分野，¹³ 大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室，
¹⁴ 地域医療機能推進機構大阪病院，¹⁵ 医療法人フオスター，¹⁶ 広島大学大学院医系科学研究科
精神神経医科学，¹⁷ 京都大学大学院医学研究科精神医学教室，¹⁸ 山口大学大学院医学系研究科
高次脳機能病態学講座，¹⁹ 名古屋大学大学院医学系研究科精神医学・親と子どもの心療学分
野，²⁰ 九州大学大学院医学研究院精神病態医学，²¹ 昭和大学発達障害医療研究所，²² 徳島大学
病院精神科神経科，²³ 首都大学東京人文科学研究科言語科学教室，²⁴ 北海道大学大学院医学研
究院放射線科学分野，²⁵ 東京大学心の多様性と適応の連携研究機構，²⁶ 東京大学人間行動科学
研究拠点，²⁷ 東京大学大学院総合文化研究科進化認知科学研究センター，²⁸ 産業医科大学医学
部精神医学，²⁹ 東京大学大学院医学系研究科生体物理医学専攻放射線医学講座，³⁰ 九州大学大
学院医学研究院神経画像解析学講座，³¹ 滋賀医科大学放射線医学講座，³² 埼玉医科大学医学部
精神医学，³³ 浜松医科大学精神医学講座

統合失調症(SC)，双極性障害(BD)，うつ病(MD)，自閉スペクトラム症(ASD)といった主要な精神疾患における大脳皮質の神経解剖学的な異常は、個々の疾患別には様々な脳構造画像研究の報告があるが、統一した手法で疾患横断的な解析がなされた研究はない。我々は日本の多施設共同研究により SC, BD, MD, ASD の大脳皮質厚と大脳皮質面積の大脳皮質構造についてメガ解析を実施し、各疾患の共通性と特異性を検討した。

認知ゲノム共同研究機構(COCORO)から、SC 群は 1450 例対健常(HC)群 2583 例を、BD 群は 235 例対 HC 群 1057 例を、MD 群は 565 例対 HC 群 1671 例を、ASD 群は 195 例対 HC 群 1403 例を症例対照解析に組み込んだ。各被験者の T1 強調核磁気共鳴画像を得て FreeSurfer により大脳皮質厚と大脳皮質面積を算出した。撮像プロトコル別のコホートで各領域の平均値の群間差の効果量 Hedge's *d* を年齢及び性別を共変量として算出してメタ解析した。

SC 群では健常群と比較して大脳皮質厚が全般的な菲薄化を認め全脳平均皮質厚(GT)における $d = -0.48$ であった。同様に大脳皮質面積も全般的に減少しており全脳皮質面積(TS)では $d = -0.35$ であった。BD 群では大脳皮質厚については健常群と比較して 68 領域中 34 領域で有意に菲薄化しており GT における $d = -0.39$ であった。BD 群の大脳皮質面積については健常群と比較して有意な減少は見られず TS で $d = 0.0080$ であった。MD 群では大脳皮質の菲薄化が 68 領域中 28 領域で認められ、大脳皮質面積減少は 3 領域で認められた。ASD 群では大脳皮質厚も大脳皮質面積も有意差がなかった。

各疾患別の研究では国際的なコンソーシアムである ENIGMA の研究報告が参考になる。SC と BD で共に大脳皮質厚菲薄化が認められ、大脳皮質面積減少は SC のみで認められ BD では認められなかった点は ENIGMA の疾患別研究の結果がそれぞれ再現されていた。一方で、MD で大脳皮質厚菲薄化と大脳皮質面積減少を認めた今回の結果は ENIGMA の MD の結果よりも効果量が大きく、国際的なコンソーシアムと日本の多施設共同研究とでは MD の病態や診断が異なっているのかもしれない。ASD においては ENIGMA では大脳皮質厚が前頭葉領域で増加、側頭葉領域で菲薄化していて、今回の結果とは効果量も合わないうえ、統計的有意差もなかったことから、我々の研究では検出力も不足していて違いが再現されなかったと考えられる。国際的なコンソーシアムと日本の多施設共同研究では SC と BD では疾患特徴が共通しているものの、MD については病態が異なるなど、精神疾患の中でも国内外で特徴の違いがあることが示唆された。

V. 令和3年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
公共 精神 健康 医療 研究 部	西 大輔	主担当者	心のサポーター養成に係る調査・分析業務等一式	委託事業	厚生労働省
	臼田謙太郎	主任研究者/ 分担研究者	「精神医療政策への萌芽的取組と行政効果検証に関する研究」内「医療記録を用いた医療観察法病棟入院患者の入院長期化予測に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	堀口寿広	分担研究者	「精神医療政策への萌芽的取組と行政効果検証に関する研究」内「レセプト病名等の情報から臨床診断を推定するアルゴリズムの開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	羽澄 恵	分担研究者	「精神医療政策への萌芽的取組と行政効果検証に関する研究」内「COVID-19陽性後の心身への中長期的影響に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	臼田謙太郎	研究分担者	「精神保健医療福祉施設におけるトラウマ（心的外傷）への対応の実態把握と指針開発のための研究」内「トラウマインフォームドケアの精神科入院患者処遇改善に対する有効性の検討」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	羽澄 恵	研究代表者	「眠気に伴う精神的苦痛が中枢性過眠症の治療経過に与える影響」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））	日本学術振興会
	三宅 美智	研究代表者	「精神障害当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果と検証」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））	日本学術振興会
	三宅 美智	研究分担者	「BPSD緩和を目的とした生活リズムの調整に着目した看護-介護共同介入モデルの作成」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））	日本学術振興会
薬物 依存 研究 部	松本俊彦	研究代表者	再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	研究代表者	「再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究」内「保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	研究開発代表者	物質使用障害を抱える女性に対する治療プログラムの開発と有効性評価に関する研究	日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	松本俊彦	研究開発代表者	薬物使用障害に対する多様な治療法の開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	研究開発分担者	「乱用防止に資する医薬品の開発のための製剤学的アプローチに関する研究」内「日本における医療用麻薬の乱用の状況に関する情報収集と解析およびガイドラインに盛り込むべき事項に関する提言・Q&Aの作成」	日本医療研究開発機構（医薬品等規制調和・評価研究事業）	日本医療研究開発機構
	松本俊彦	研究分担者	「医療用麻薬の乱用リスク要因の分析と適正使用促進のための研究」内「医療用麻薬の乱用リスク要因の分析と適正使用促進のための研究」	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	分担研究者	「アルコール・薬物使用者の行動変容促進アプリと適切なフィードバックAIモデルの開発」内「RCTリクルート、アプリ有用性評価」	文部科学省基盤研究（B）	文部科学省
	松本俊彦	研究代表者	S-812217のうつ病性障害患者を対象とした第2相臨床試験	独立安全性評価委員会委員 塩野義製薬（受-330）	塩野義製薬
	松本俊彦	共同代表	拠点センター（薬物依存症）	厚生労働省依存症対策全国拠点機関設置運営事業	厚生労働省
	船田正彦	分担研究者	「危険ドラッグの有害作用発現機序の解明と評価技術開発に関する研究」内「危険ドラッグの検出技術開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	船田正彦	研究代表者	危険ドラッグと関連代謝産物の有害作用評価と乱用実態把握に関する研究	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	船田正彦	研究分担者	「危険ドラッグと関連代謝産物の有害作用評価と乱用実態把握に関する研究」内「カチノン系化合物の中枢作用とドパミン取り込み阻害作用の関連性」	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省

薬物依存研究部	船田正彦	研究代表者	精神活性物質の迅速検出法ならびに有害作用評価法開発に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	船田正彦	研究分担者	「若年者を対象としたより効果的な薬物乱用予防啓発活動の実施等に関する研究」内「大麻を巡る国際社会の動向：米国及びカナダの規制状況について」	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究代表者	薬物乱用・依存状況等の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「薬物乱用・依存状況等の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」内「薬物使用に関する全国住民調査(2021年)」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「危険ドラッグ及び関連代謝物の有害作用解析と乱用実態把握に関する研究」内「大麻を乱用する少年における新たな大麻関連製品、危険ドラッグの乱用実態に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究」内「民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業 精神障害分野)	厚生労働省
	嶋根卓也	分担研究者	「覚せい剤事犯者の理解とサポートに関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	嶋根卓也	分担研究者	「薬物使用と生活に関する全国高校生調査」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	嶋根卓也	分担研究者	「薬物使用障害に対する多様な治療法の開発」内「HIV陽性者における薬物使用障害罹患脆弱性の要因とその支援に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	近藤あゆみ	研究開発代表者	「様々な依存症に対する個人認知行動療法プログラムの開発と効果検証に関する研究」	日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	近藤あゆみ	分担研究者	「物質使用障害を抱える女性に対する治療プログラムの開発と有効性評価に関する研究」	日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	近藤あゆみ	分担研究者	「女性薬物依存症者の回復支援に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
行動医学研究部	近藤あゆみ	分担研究者	「薬物使用障害の治療転帰に関する個別的要因の影響に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	富山健一	研究代表者	神経筋共培養を利用した合成カンナビノイドの有害性予測モデルの開発	文部科学省基盤研究（C）	文部科学省
	金 吉晴	研究代表者	恐怖記憶消去に関する脳神経回路を基盤としたPTSDの病態と回復経路の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（A）	日本学術振興会
	金 吉晴	研究代表者	ストレス関連疾患の認知行動療法の治療反応性と遺伝子・バイオマーカーの探索	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	金 吉晴	研究代表者	災害・児童虐待等のトラウマ体験を有する人の心のケア支援の充実・改善に関する研究	革新的自殺研究推進プログラム委託研究	厚生労働大臣指定法人いのち支える自殺対策推進センター
	金 吉晴	研究代表者	対話型カウンセリングAIの構築に向けたカウンセラーの効果的なコミュニケーションのパターン解析	共同研究	フロンティアリンク株式会社
	金 吉晴	研究分担者	「実装科学推進のための基盤構築事業」内「精神医学における標準化治療と評価法の実装研究」	国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 横断的研究推進費研究	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「電子化医療情報を活用した疾患横断的コホート研究情報基盤整備事業」内「コホート研究を用いた研究連携と精神・神経疾患医療からみた疾患横断的予防」	国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 横断的研究推進費研究	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「共生社会」をつくるアートコミュニケーション 共創拠点」内「文化的処方」の有効性の検証	共創の場形成支援プログラム 共創分野（育成型）	科学技術振興機構
	堀 弘明	研究代表者	遺伝子発現プロファイリングによるストレス対処方略の個別最適化	武田科学振興財団医学系研究助成（精神・神経・脳領域）	武田科学振興財団
	堀 弘明	研究代表者	日常的な運動によるストレス関連精神疾患の予後改善効果：炎症系に着目した検討	中富健康科学振興財団研究助成	中富健康科学振興財団

IV 令和3年度委託および受託研究課題

行動医学研究部	堀 弘明	研究代表者	うつ病とPTSDにおける視床下部-下垂体-副腎系と炎症系の概日リズム解析	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究代表者	概日リズムのプロファイリングに基づくメンタル不調の早期発見	公益財団法人テルモ生命科学振興財団研究助成 (予防医療研究)	テルモ生命科学振興財団
	堀 弘明	研究分担者	恐怖記憶消去に関する脳神経回路を基盤としたPTSDの病態と回復経路の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (A)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究分担者	「ストレス関連疾患の認知行動療法の治療反応性と遺伝子・バイオマーカーの探索」内「トランスクリプトーム、DNAメチローム、炎症マーカー解析」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	関口 敦	研究代表者	シナプス可塑性の個人差評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	武田科学振興財団医学系研究助成 (精神・神経・脳領域)	武田科学振興財団
	関口 敦	研究分担者	「ストレス関連疾患の認知行動療法の治療反応性と遺伝子・バイオマーカーの探索」内「CBT効果を予測する脳画像バイオマーカーの検証」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	関口 敦	研究代表者	疼痛性障害の新規治療プログラムの脳科学的エビデンスの構築	中富健康科学振興財団研究助成	中富健康科学振興財団
	関口 敦	研究分担者	恐怖記憶消去に関する脳神経回路を基盤としたPTSDの病態と回復経路の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (A)	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出	日本医療研究開発機構 戦略的国际脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究分担者	摂食障害を抱える家族のピアサポート研修プログラムの開発	日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究代表者	摂食障害の治療支援センター設置運営事業 (全国拠点機関分)	精神保健対策費補助金	厚生労働省
	小川真太郎	研究代表者	ブラズマローゲンを新たな軸とした精神疾患の前臨床研究—治療・病態・バイオマーカー	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	小川真太郎	研究代表者	逆境的小児期体験とうつ症状の発現に関連するバイオマーカーの開発—リン脂質を軸に—	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	難治性パニック障害の予後予測因子解明と発達特性にマッチした修正型心理療法の開発	文部科学省科学研究費補助金若手研究	日本学術振興会
	大沼麻実	研究代表者	心理的応急処置 (PFA) e-ラーニング開発と効果検証及び有効な普及方法の考察	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	河西ひとみ	研究代表者	自己臭恐怖の病態と神経基盤の解明：精神症状と消化器症状の相互作用に焦点を当てて	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	河西ひとみ	研究分担者	過敏性腸症候群に対する認知行動療法のランダム化比較試験と治療効果の神経基盤の解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	上田奈津貴	研究代表者	時間感覚障害に着目した統合失調症の学習デザインの構築	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	上田奈津貴	研究代表者	PTSD患者における概日リズム障害の認知・神経モデルの検討	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	船場美佐子	研究代表者	過敏性腸症候群に対する認知行動療法のランダム化比較試験と治療効果の神経基盤の解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	菅原彩子	研究代表者	医療機関を受診していない摂食障害患者と家族の支援ニーズに関する調査研究	やずや食と健康研究所助成研究	やずや食と健康研究所
	菅原彩子	研究代表者	医療機関を受診していない摂食障害患者と家族の支援ニーズの解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	林 明明	研究代表者	オンライン調査・実験の信頼性に関する研究：同一回答者のデータ比較を通して	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	中島実徳	研究代表者	児童期トラウマがもたらす心理的影響メカニズムの解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	伊藤(丹羽)まどか	研究代表者	複雑性心的外傷後ストレス障害に対する介入法の検証	文部科学省科学研究費補助金 特別研究員奨励費	日本学術振興会
	安藤哲也	研究分担者	過敏性腸症候群に対する認知行動療法のランダム化比較試験と治療効果の神経基盤の解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会

児童・ 予 防 精 神 医 学 研 究 部	住吉太幹	研究代表者	経頭蓋直流刺激による統合失調症治療効果のモノアミン神経活動に基づく生体指標の開発	科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(基盤研究(B))	日本学術振興会
	住吉太幹	分担研究者	「バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築」内「各種認知機能障害に関連する生物学的評価指標と新規治療法についての検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	分担研究者	「双方向性のニューロモデュレーション機構の解明と臨床応用の基盤整備」内「経頭蓋直流刺激の精神疾患治療における有用性に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	3つの神経伝達系の非侵襲的同時測定法を用いた統合失調症の認知機能障害の解明	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	事象関連電位と瞳孔経変化から解明する発達障害におけるパニックの神経基盤	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	気分障害における認知機能評価バッテリー日本語版の信頼性・妥当性に関する研究	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	医療前のライフログデータおよび健診結果を活用する予測先制医療のための研究	医療研究連携推進本部横断的研究推進事業費	国立高度専門医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	身体活動低下によるフレイルの包括的病態解明とフレイルバイオマーカー探索および予防医療への展開(JH-Frailty Biomarker Study: JH-FBI Study)	医療研究連携推進本部横断的研究推進事業費	国立高度専門医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	ICT・AIを活用した自閉スペクトラム症(ASD)児の悉皆的早期発見・診断システムと患者レジストリをもとにした「誰一人取り残さない」当事者支援及びオールジャパン体制によるASD研究コンソーシアムの構築	日本医療研究開発機構 医療機器等における先進的研究開発・開発体制強化事業	日本医療研究開発機構
	住吉太幹	研究分担者	COVID-19等による社会変動下に即した応急的遠隔対応型メンタルヘルスケアの基盤システム構築と実用化促進にむけた効果検証	日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)	日本医療研究開発機構
	住吉太幹	研究代表者	大うつ病性障害患者を対象とした中央評価の妥当性に関する予備研究 ～対面評価と情報通信機器を介した遠隔評価との一斉性の検討～	共同研究	大日本住友製薬株式会社／武田薬品工業株式会社／Meiji Seikaファルマ株式会社／塩野義製薬株式会社／大塚製薬株式会社／ヤンセンファーマ株式会社
	住吉太幹	研究分担者	超ハイリスク基準群における生体情報評価及びサイトカイン測定による統合失調症の発現予測因子の探索研究	共同研究	ヤンセンファーマ株式会社
	住吉太幹	研究分担者	気分状態の安定した双極性障害患者の認知機能改善に対するLurasidone併用療法(ELICE-BD)の有効性評価のための6週間ランダム化二重盲検プラセボ対照多施設試験	共同研究	British Columbia大学
	住吉太幹	研究分担者	統合失調症患者及び統合失調感情障害患者を対象としたデジタル服薬管理システム(プロデウス 服薬管理システム、大塚メディカルソフトウェア)の使用研究、探索的研究	共同研究	大塚製薬株式会社／武田薬品工業
	住吉太幹	研究分担者	統合失調症の社会認知機能障害に対する経頭蓋直流電気刺激の効果に対するパイロット研究	若手臨床研究グループ活動奨励研究費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	前治療抗精神病薬からプレクスビプラゾールの切り替えを実施する統合失調症患者及び統合失調感情障害患者を対象とした服薬継続率に関する多施設共同単群非盲検介入研究	共同研究	大塚製薬株式会社
	松元まどか	研究代表者	自己の神経回路基盤とその形成過程の解明	新学術領域研究(研究領域提案型)「マルチスケール精神病態の構成的理解」	日本学術振興会
	熊崎博一	研究代表者	発達障害学生のオンライン授業における複数ロボットによる支援システムの開発	科学研究費助成事業(学術研究助成補助金)(基盤研究(A))	日本学術振興会
	熊崎博一	研究代表者	自閉スペクトラム症児の感覚処理特性評価研究から探る深奥質感認識個人差の解明	科学研究費助成事業(学術研究助成補助金) 学術変革領域(A)	日本学術振興会
	熊崎博一	研究代表者	精神科外来のための対人恐怖症患者への診察支援ロボットの開発	科学研究費助成事業(学術研究助成補助金)	日本学術振興会
	熊崎博一	研究代表者	自閉スペクトラム症者の自己開示を促す多数体ロボットシステムの開発	科学研究費助成事業(学術研究助成補助金) 挑戦的研究(萌芽)	日本学術振興会
	熊崎博一	研究分担者	発達障害者の交流を支援する半自律対話ロボットに関する研究	科学研究費助成事業(学術研究助成補助金)(基盤研究(A))	日本学術振興会

IV 令和3年度委託および受託研究課題

児童・予防精神医学研究部	熊崎博一	研究分担者	納得感のある人間-AI協調意思決定を目指す信頼インタラクションデザインの基盤構築と社会浸透	戦略的創造研究推進事業（JST・CREST）	国立研究開発法人科学技術振興機構
	熊崎博一	研究分担者	2050年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現 「誰もが自在に活躍できるアバター共生社会の実現」	ムーンショット型研究開発事業（JST）	国立研究開発法人科学技術振興機構
	藤里紘子	研究代表者	子どもの感情障害に対する認知行動療法の統一プロトコルの有効性	科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(基盤研究(B))	日本学術振興会
	藤里紘子	研究分担者	児童青年のインターネットゲーム障害の病態および心理社会的リスク要因の解明	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
	白間 綾	代表	3つの神経伝達系の非侵襲的同時測定法を用いた統合失調症の認知機能障害の解明	基盤研究(C)	日本学術振興会
	白間 綾	分担	経頭蓋直流刺激による統合失調症治療効果のモノアミン神経活動に基づく生体指標の開発	基盤研究(B)	日本学術振興会
	白間 綾	分担	事象関連電位と瞳孔径変化から解明する発達障害におけるパニックの神経基盤	基盤研究(C)	日本学術振興会
	末吉一貴	研究代表者	精神疾患における認知的効率が社会機能へ及ぼす影響ならびにその機序の解明	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(若手研究)	日本学術振興会
	末吉一貴	研究分担者	気分障害における認知機能評価バッテリー日本語版の信頼性・妥当性に関する研究	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
精神薬理研究部	長谷川由美	研究代表者	気分障害における認知機能評価バッテリー日本語版の信頼性・妥当性に関する研究	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
	山田光彦	主任研究者	バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	分担研究者	「ゲノム編集技術を用いたモデル動物作出による精神神経疾患の病態解明」内「ストレス性精神疾患モデル動物の作成と評価」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	研究代表者	統合失調症のグルタミン酸神経伝達異常におけるリゾホスファチジン酸の役割	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	山田光彦	研究分担者	「うつ病の病態におけるアストロサイトの機能異常へのリゾホスファチジン酸受容体の関与」内「高速液体クロマトグラフィーによるアミノ酸分析」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	山田光彦	研究分担者	「統合失調症モデルマウスを用いた「幻覚・妄想」の神経基盤の解明」内「計画の実施（行動実験）」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	山田光彦	研究分担者	「ヒストン修飾異常がげっ歯類の統合失調症様行動異常を生じるメカニズムの解明」内「遺伝子およびタンパク発現の解析」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	山田光彦	研究協力者	「実装科学推進のための基盤構築事業」内「精神医学における標準化治療と評価法の実装研究」	医療研究連携推進本部横断的研究推進費	国立高度専門医療研究センター
	三輪秀樹	研究代表者	統合失調症における注意機構異常の神経基盤	科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金	日本学術振興会
	三輪秀樹	研究代表者	統合失調症モデルマウスを用いた「幻覚・妄想」の神経基盤の解明	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	三輪秀樹	研究代表者	トランスレータブル脳指標による精神疾患横断的機能解析	第11回第一三共TaNeDS	第一三共(株)
	三輪秀樹	研究代表者	睡眠による脳機能回復	リバネス研究費ウェルネス・エイジングケア賞	(株)リバネス
	三輪秀樹	分担研究者	「バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築」内「トランスレータブル脳指標による異なる精神・神経疾患間に共通の病態基盤の解明」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三輪秀樹	分担研究者	「危険ドラッグによる有害作用の新規評価法開発に関する研究」内「合成カナビノイドおよびPCP系薬物の中枢神経系への影響に関する脳波による評価」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三輪秀樹	分担研究者	「統合失調症のグルタミン酸神経伝達異常におけるリゾホスファチジン酸の役割」内「電気生理学的解析」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「うつ病の病態におけるアストロサイトの機能異常へのリゾホスファチジン酸受容体の関与」内「脳スライスをを用いた電気生理学的解析」	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「脳高次機能の発達と老化の制御に共通する分子機構の解明」内「電気生理学的解析」	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会

精神薬理研究部	三輪秀樹	分担研究者	「ヒストン修飾異常がげっ歯類の統合失調症様行動異常を生じるメカニズムの解明」内「電気生理学的解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「神経同期活動を軸とした統合失調症の橋渡し研究：病態解明と新規治療法開発にむけて」内「疾患モデル動物基礎研究の遂行」	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	古家宏樹	研究代表者	ヒストン修飾異常がげっ歯類の統合失調症様行動異常を生じるメカニズムの解明	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	古家宏樹	研究分担者	「統合失調症のグルタミン酸神経伝達異常におけるリゾホスファチジン酸の役割」内「行動薬理学的解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	古家宏樹	研究分担者	「うつ病の病態におけるアストロサイトの機能異常へのリゾホスファチジン酸受容体の関与」内「in vivoマイクロダイアリシスを用いた行動薬理学的解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	小林桃子	研究代表者	統合失調症関連遺伝子WDR3欠損による認知機能および疾患感受性への影響	科学研究費助成事業 (若手研究)	日本学術振興会
	上條諭志	研究代表者	視床-皮質回路形成における発達期小脳活動の意義解明	研究活動スタート支援	日本学術振興会
	山田美佐	研究代表者	うつ病の病態におけるアストロサイトの機能異常へのリゾホスファチジン酸受容体の関与	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	山田美佐	研究分担者	「統合失調症のグルタミン酸神経伝達異常におけるリゾホスファチジン酸の役割」内「生化学的解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	山田美佐	研究分担者	「難治性うつ病に対する新規治療戦略：報酬系・免疫系クロストークから探る疾患制御」内「関連分子変動解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	國石 洋	研究代表者	社会性を制御する前頭葉-扁桃体シナプスの発達の臨界期とその神経基盤の解明	特別研究員奨励費	日本学術振興会
	國石 洋	研究分担者	「ヒストン修飾異常がげっ歯類の統合失調症様行動異常を生じるメカニズムの解明」内「動物の作製」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	國石 洋	研究代表者	幼少期ストレスマウスが示すうつ様行動に対する耳介迷走神経刺激の改善効果の検討	調査研究助成金	公益財団法人神経研究所
	中武優子	研究代表者	共感とストレス緩和を担うオキシトシン神経回路の解明	特別研究員奨励費 (東京理科大学)	日本学術振興会
精神疾患病態研究部	米本直裕	研究代表者	自殺予防対策の普及と適応に関するプロセス・アウトカム指標の開発	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	米本直裕	研究分担者	「子育て世代包括支援センターへのユニバーサルアプローチ導入検証のためのコホート研究」内「研究デザインの監督・解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	米本直裕	研究分担者	国際レジストリ連携 (iCRN) の臨床的意義と医療機関における課題に関する研究	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	橋本亮太	研究代表者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究代表者	「iPS細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究」内「疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究の統括発」	脳とこころの研究推進プログラム (精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト)	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究代表者	「精神医療分野における治療の質を評価するQIとその向上をもたらす介入技法の開発と実用性の検証」内「EGUIDEプロジェクトの運営とデータ解析及びQI等の開発」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究代表者	多次元脳神経画像とゲノムによる精神疾患の脳病態に基づく新たな診断体系の構築	科学研究費助成事業 基盤研究 (B)	日本学術振興会
	橋本亮太	研究分担者	「発達障害に関わる神経生物学的機構の霊長類的基盤の解明」内「発達障害のリスク遺伝子の同定」	科学研究費助成事業 特別推進研究	日本学術振興会
精神疾患病態研究部	橋本亮太	研究分担者	「治療抵抗性統合失調症薬の安全性の検証による望ましい普及と体制構築に向けた研究」内「クロザピンモニタリングシステムの国際比較調査」	厚生労働科学研究費 障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)	厚生労働省
	橋本亮太	研究分担者	「縦断的MRIデータに基づく成人期気分障害と関連疾患の神経回路の解明」内「気分障害と統合失調症の疾患連続性に関する脳画像等の総合的解析研究」	戦略的国際脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構

IV 令和3年度委託および受託研究課題

精神 疾 患 病 態 研 究 部	橋本亮太	研究分担者	「精神疾患レジストリの利活用による治療効果、転帰予測、新たな層別化に関する研究」内「脳神経画像の解析と縦断データに基づく、精神疾患の治療効果及び予後に関する層別化」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究代表者	多次元ビッグデータのデータ駆動型解析による精神疾患の脳病態メカニズムの解明	2020年度 研究助成 精神薬療分野 一般研究助成	先進医薬研究振興財団
	橋本亮太	分担研究者	「バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築」内「精神病症状に関連する生物学的評価指標の検討と患者層別化研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	橋本亮太	研究代表者	症状や病態仮説ではなく生物学的なデータに基づく精神神経疾患の新たな診断分類と病態解明に関する研究	共同研究	大塚製薬株式会社/武田薬品工業株式会社/日本たばこ産業株式会社
	三浦健一郎	研究代表者	精神疾患の視覚認知行動異常のシステム神経科学的研究	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	三浦健一郎	研究分担者	「双方向トランスレーショナルアプローチによる精神疾患の脳予測性障害機序に関する研究開発」内「眼球運動の状況予測性解析法の研究開発と疾患横断的理解」	革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト	日本医療研究開発機構
	三浦健一郎	研究分担者	「精神医療分野における治療の質を評価するQIとその向上をもたらす介入技法の開発と実用性の検証」内「EGUIDEプロジェクトのデータベース構築」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	三浦健一郎	研究分担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断のエビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
	三浦健一郎	研究分担者	「iPS細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究」内「中間表現型とゲノムの特徴量抽出とデータ駆動型解析」	脳とこころの研究推進プログラム(精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト)	日本医療研究開発機構
	三浦健一郎	研究分担者	眼球運動と脳波計測を用いたアスリートの視覚認知能力の評価表の開発	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	三浦健一郎	研究分担者	多次元脳神経画像とゲノムによる精神疾患の脳病態に基づく新たな診断体系の構築	科学研究費助成事業 基盤研究（B）	日本学術振興会
	三浦健一郎	研究分担者	クロザピン抵抗性統合失調症のバイオマーカーの開発	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	松本純弥	研究代表者	心因性疼痛の治療と認知機能障害の関連	科学研究費助成事業 若手研究	日本学術振興会
	松本純弥	研究分担者	「精神医療分野における治療の質を評価するQIとその向上をもたらす介入技法の開発と実用性の検証」内「EGUIDEプロジェクトのデータベース構築」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	松本純弥	研究分担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断のエビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
	松本純弥	研究分担者	「iPS細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究」内「中間表現型情報と生体試料の収集とバイオマーカーの測定」	脳とこころの研究推進プログラム(精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト)	日本医療研究開発機構
	松本純弥	研究分担者	多次元脳神経画像とゲノムによる精神疾患の脳病態に基づく新たな診断体系の構築	科学研究費助成事業 基盤研究（B）	日本学術振興会
	松本純弥	研究分担者	クロザピン抵抗性統合失調症のバイオマーカーの開発	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	松本純弥	研究分担者	精神疾患の視覚認知行動異常のシステム神経科学的研究	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	長谷川尚美	研究代表者	精神疾患の処方行動における治療ガイドラインの普及と教育の効果検証	科学研究費助成事業 若手研究	日本学術振興会
	長谷川尚美	研究分担者	多次元脳神経画像とゲノムによる精神疾患の脳病態に基づく新たな診断体系の構築	科学研究費助成事業 基盤研究（B）	日本学術振興会
	長谷川尚美	研究分担者	精神疾患の視覚認知行動異常のシステム神経科学的研究	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	安田由華	研究分担者	「精神医療分野における治療の質を評価するQIとその向上をもたらす介入技法の開発と実用性の検証」内「患者QOLを反映するQIの開発」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構

睡眠・覚醒障害研究部	栗山健一	主任研究者	睡眠障害・睡眠ポリグラフデータベース構築研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	栗山健一	主任研究者	睡眠障害センター	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	栗山健一	代表研究者	適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備	厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）	厚生労働省
	栗山健一	研究開発分担者	オンライン診療を介したリアルワールドデータを活用した「睡眠脳波と問診デジタルデータによるうつ病の検査-問診-診断支援システム」の開発・事業化	日本医療研究開発機構研究費	日本医療研究開発機構
	栗山健一	研究代表者	大脳深部皮質下白質病変が不眠症病態に及ぼす影響の検討	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	栗山健一	研究分担者	「恐怖記憶消去に関する脳神経回路を基盤としたPTSDの病態と回復経路の解明」内「PTSD治療の生理的指標研究」	科学研究費助成事業（基盤研究A）	日本学術振興会
	栗山健一	研究分担者	アルツハイマー病の病理と睡眠障害アミロイドPET・タウPETと睡眠指標との関連	科学研究費助成事業（基盤研究B）	日本学術振興会
	栗山健一	研究代表者	遠赤外線加工繊維ベッドパッドが体温および睡眠へ及ぼす影響	受託・共同研究	株式会社PMC
	栗山健一	研究代表者	アルツハイマー型認知症に伴う不規則睡眠覚醒リズム障害（ISWRD）を対象としたE2006の国際共同第3相試験	受託研究	エーザイ株式会社
	北村真吾	研究代表者	子どもの睡眠調節に対する睡眠恒常性機能と概日リズム機能の寄与	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	北村真吾	研究代表者	個人の概日リズム特性の決定に対する出生後環境の寄与	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	睡眠の自然免疫機能への寄与と解明のための実態調査および発展的介入試験	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	北村真吾	研究代表者	ガンマ帯域フリッカーバイオレット光曝露による睡眠および認知機能への影響	受託・共同研究	株式会社坪田ラボ
	吉池卓也	研究代表者	脳構造の可塑性ダイナミクスと気分障害病態の関連探索	科学研究費助成事業（若手研究）	日本学術振興会
	吉池卓也	研究分担者	遷延性悲嘆障害の多層的治療技法の開発と効果検証および生物学的基盤の解明	科学研究費助成事業（基盤研究B）	日本学術振興会
知的・発達障害研究部	吉池卓也	研究分担者	概日可塑性に着目した気分障害病態指標の開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	河村 葵	研究代表者	月経前症候群・月経前不快気分障害の症状再燃と患者家族の感情表出の関連	ロート女性健康科学研究助成	ロート株式会社
	篠崎 末生	研究代表者	急性期治療後の高齢患者のリハビリテーション効果促進のための心理的支援に関する研究	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	肥田昌子	研究代表者	概日リズム睡眠覚醒障害の遺伝要因とその発症分子メカニズム	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	岡田 俊	研究代表者	表情認知障害を起点とする自閉スペクトラム症の二次障害の成立過程の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	岡田 俊	研究分担者	疾患コホートをを用いた22q11.21欠失症候群の表現型の追跡とゲノムバリエーション探索	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	岡田 俊	研究分担者	子どものための診断アセスメントとサービス改善プロジェクト	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	岡田 俊	研究分担者	自閉症スペクトラム障害をもつ人のための「未来語りのダイアログ」実践モデルの開発	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	岡田 俊	分担研究者	「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」内「発達障害の認知神経科学的アプローチに基づく病態解明」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	石井礼花	研究代表者	ADHDまたは慢性疾患を持つ児への育成環境の影響を測定するマルチモーダルMRI神経ネットワーク指標の開発-Child Attachment Interviewによる愛着分類を用いて	AMED 成育疾患克服等総合研究事業	日本医療研究開発機構
	石井礼花	研究代表者	注意欠如他動性障害の神経基盤の男女差の解明-マルチモデルMRIを用いて	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省

IV 令和3年度委託および受託研究課題

知的・発達障害研究部	魚野翔太	研究代表者	「社会認知機能の個人差を生み出す基礎的な心的機能の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C)	文部科学省
	江頭優佳	研究代表者	「脳活動と行動に基づく注意欠如・多動症児の時間認知系機能検査バッテリーと治療法開発」	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) (若手研究)	文部科学省
	江頭優佳	研究分担者	漢字書字障害特異的脳内機能ネットワークの解明と治療法開発	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C)	文部科学省
	江頭優佳	研究代表者	発達障害の二次障害発症リスクを形成する心理社会的要因と認知神経機能の解明	横断的研究推進費 若手研究助成	国立高度専門医療研究センター
	林 小百合	研究代表者	自閉スペクトラム症における共同注視障害の心理学的基盤と促進要因の解明	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) (若手研究)	文部科学省
	林 小百合	研究代表者	注意欠如・多動症児における社会的報酬の報酬頻度が実行機能に与える影響に関する検討	明治安田こころの健康財団 研究助成	明治安田こころの健康財団
	請園正敏	研究代表者	社会的促進の観察効果と共行動効果の発生機序解明に向けて	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) (若手研究)	文部科学省
	請園正敏	研究分担者	母体免疫活性化による胎児発達と生後予後に関する生理学的特徴の抽出	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C)	文部科学省
	高田美希	研究代表者	親子相互交流療法 (PCIT) の治療プロセスと中断要因の解明	ファイザーヘルスリサーチ研究助成	ファイザーヘルスリサーチ振興財団
	稲垣真澄	研究分担者	適応的歩行障害における神経性制御メカニズムの解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C)	文部科学省
地域・司法精神医療研究部	藤井千代	研究代表者	地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究代表者	市町村及び保健所保健師等の精神保健福祉業務に係る業務量の把握及び地域包括ケアシステムの構築に向けた必要な業務量の算定に資する研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「地域特性に対応した精神保健医療サービスにおける早期相談・介入の方法と実施システム開発についての研究」内「都市近郊アウトリーチモデル」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「精神保健・福祉に関するエビデンスのプラットフォーム構築及び精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関する検討のための研究」内「地域精神保健システムのステークホルダーに対するインタビュー、ニーズの集積研究全体への助言」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	「地域で暮らす障害者の地域生活支援の実態把握及び効果的な支援方法、その評価方法についての研究」内「調査設計・分析に関する助言」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	主任研究者	「重症精神障害者とその家族の効果的な地域生活支援体制に関する基盤的研究」内「アウトリーチによる家族支援の効果に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
	藤井千代	研究分担者	重症精神障害者を対象としたアウトリーチ支援における認知行動療法の効果検討と普及	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	藤井千代	研究分担者	重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	藤井千代	研究分担者	処遇の難しい精神障害者に対する医療支援体制の整備に向けた当事者参画研究	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	藤井千代	研究分担者	ドメスティック・バイオレンス加害者の暴力重症化リスクアセスメントの開発	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	山口創生	研究分担者	「精神保健・福祉に関するエビデンスのプラットフォーム構築及び精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関する検討のための研究」内「プラットフォーム構築および運用への助言」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に向けた障害福祉サービス等の推進に資する研究」内「評価尺度及び障害福祉サービス利用状況に関する分析」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	「地域共生社会の実現に資する障害福祉人材の確保、養成のための研究」内「大学生を中心とする人材確保が困難な原因及び福祉サービスにおける離職理由に関する調査研究」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省

地域・司法精神医療研究部	山口創生	分担研究者	「重症精神障害者とその家族の効果的な地域生活支援体制に関する基盤的研究」内「地域精神科医療・精神保健福祉実践におけるアウトカムについてのコンセンサスの模索」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
	山口創生	研究代表者	精神障害者就労支援における当事者視点の評価とサービス品質の自己管理システムの開発	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	山口創生	研究分担者	重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	佐藤さやか	研究代表者	精神保健・福祉に関するエビデンスのプラットフォーム構築及び精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関する検討のための研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	佐藤さやか	研究代表者	重症精神障害者を対象としたアウトリーチ支援における認知行動療法の効果検討と普及	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	佐藤さやか	研究代表者	重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	菊池安希子	分担研究者	「重症精神障害者とその家族の効果的な地域生活支援体制に関する基盤的研究」内「医療観察法通院処遇者における暴力および自傷・自殺の予測因子に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
	菊池安希子	研究代表者	ドメスティック・バイオレンス被害者の暴力重症化リスクアセスメントの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	菊池安希子	研究分担者	重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	菊池安希子	研究分担者	処遇の難しい精神障害者に対する医療支援体制の整備に向けた当事者参画研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	曾雌崇弘	研究分担者	ライフスタイルと脳の働き－超高齢社会を生き抜くための心理科学－	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（S）	日本学術振興会
	曾雌崇弘	研究分担者	特殊詐欺状況下における中高年者の意思決定過程の解明と詐欺防止策の提言	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）挑戦（萌芽）	日本学術振興会
	曾雌崇弘	研究分担者	加齢による意思決定過程の変容に影響を及ぼす心理的・環境的要因の解明	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	曾雌崇弘	研究分担者	間接的発話を材料とした言語コミュニケーションにおける意図理解メカニズムの研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	小塩靖崇	研究代表者	アスリートへのメンタルヘルス支援アプリの実装による効果検証：対人サービスへの先端技術導入の利点と課題の抽出	2019 年度「先端技術と共創する新たな人間社会」	公益財団法人トヨタ財団
	小塩靖崇	研究代表者	運動競技選手におけるメンタルヘルス疫学調査とスクリーニング法に関する研究	科学研究費助成事業 若手研究	日本学術振興会
	松長麻美	研究分担者	精神障害者就労支援における当事者視点の評価とサービス品質の自己管理システムの開発	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	松長麻美	研究代表者	授乳に伴う心理的苦痛測定尺度の開発および標準化	調査研究助成	公益財団法人神経研究所
	小池純子	研究代表者	精神障害者による他害行為の予防に対する精神保健医療福祉体制の整備に関する研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	小池純子	研究代表者	処遇の難しい精神障害者に対する医療支援体制の整備に向けた当事者参画研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	小池純子	研究分担者	精神障害者就労支援における当事者視点の評価とサービス品質の自己管理システムの開発	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	川口敬之	研究代表者	精神障害者におけるリカバリーと生活の困難さの関連に基づく生活支援システムの構築	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究	日本学術振興会
	川口敬之	研究代表者	精神障害当事者と支援者との共創によるリカバリー促進に向けた協働意思決定モデルの構築	三菱財団助成 社会福祉事業・研究助成	三菱財団
	阿部真貴子	研究分担者	音楽が誘発する身体運動の生起機序：その認知神経過程の解明および音楽療法への応用	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	杉山直也	研究代表者	精神科救急医療体制整備の均てん化に資する研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省

IV 令和3年度委託および受託研究課題

地域・司法精神医療研究部	杉山直也	研究分担者	「持続可能で良質かつ適切な精神医療とモニタリング体制の確保に関する研究」内「精神科領域における実効的な行動制限最小化の普及に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	河野稔明	研究分担者	「医療観察法における専門的医療の向上と普及に資する研究」内「医療観察法対象者の類型化に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	河野稔明	研究分担者	「市町村及び保健所保健師等の精神保健福祉業務に係る業務量の把握及び地域包括ケアシステムの構築に向けた必要な業務量の算定に資する研究」内「既存データの2次分析」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	河野稔明	研究代表者	自治体における精神保健福祉法の通報等事例と支援をモニタリングする基盤の構築	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
ストレス・災害時こころの情報支援センター	金 吉晴	研究代表者	恐怖記憶消去に関する脳神経回路を基盤としたPTSDの病態と回復経路の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（A）	日本学術振興会
	金 吉晴	研究代表者	ストレス関連疾患の認知行動療法の治療反応性と遺伝子・バイオマーカーの探索	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	金 吉晴	研究代表者	災害・児童虐待等のトラウマ体験を有する人の心のケア支援の充実・改善に関する研究	革新的自殺研究推進プログラム委託研究	厚生労働大臣指定法人いのちを支える自殺対策推進センター
	金 吉晴	研究代表者	対話型カウンセリングAIの構築に向けたカウンセラーの効果的なコミュニケーションのパターン解析	共同研究	フロンティアリンク株式会社
	金 吉晴	研究分担者	「実装科学推進のための基盤構築事業」内「精神医学における標準化治療と評価法の実装研究」	国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 横断的研究推進費研究	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「電子化医療情報を活用した疾患横断的コホート研究情報基盤整備事業」内「コホート研究を用いた研究連携と精神・神経疾患医療からみた疾患横断的予防」	国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 横断的研究推進費研究	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	「共生社会」をつくるアートコミュニケーション 共創拠点」内「文化的処方の有効性の検証」	共創の場形成支援プログラム 共創分野（育成型）	科学技術振興機構
	金 吉晴	実務担当者	令和3年度こころの健康づくり対策事業 PTSD対策専門研修事業	国庫補助金	厚生労働省
	関口 敦	研究代表者	シナプス可塑性の個人差評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	武田科学振興財団医学系研究助成（精神・神経・脳領域）	武田科学振興財団
	関口 敦	研究分担者	「ストレス関連疾患の認知行動療法の治療反応性と遺伝子・バイオマーカーの探索」内「CBT効果を予測する脳画像バイオマーカーの検証」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	関口 敦	研究代表者	疼痛性障害の新規治療プログラムの脳科学的エビデンスの構築	中富健康科学振興財団研究助成	中富健康科学振興財団
	関口 敦	研究分担者	恐怖記憶消去に関する脳神経回路を基盤としたPTSDの病態と回復経路の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（A）	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出	日本医療研究開発機構 戦略的国际脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究分担者	摂食障害を抱える家族のピアサポート研修プログラムの開発	日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究代表者	摂食障害の治療支援センター設置運営事業（全国拠点機関分）	精神保健対策費補助金	厚生労働省
	小川眞太郎	研究代表者	プラズマローゲンを新たな軸とした精神疾患の前臨床研究—治療・病態・バイオマーカー	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	小川眞太郎	研究代表者	逆境的小児期体験とうつ症状の発現に関連するバイオマーカーの開発—リン脂質を軸に—	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）	日本学術振興会
	大沼麻実	研究代表者	心理的応急処置（PFA）e-ラーニング開発と効果検証及び有効な普及方法の考察	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会

精神保健研究所年報No.35（通号No.68）2022

令和4年6月30日発行

編集責任者 金 吉晴

発行所 国立研究開発法人

国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所

〒187-8553

東京都小平市小川東町4-1-1

（非売品） 電話 042（341）2711

印刷：有限会社 太平印刷

©2022, All rights reserved, Printed in Japan